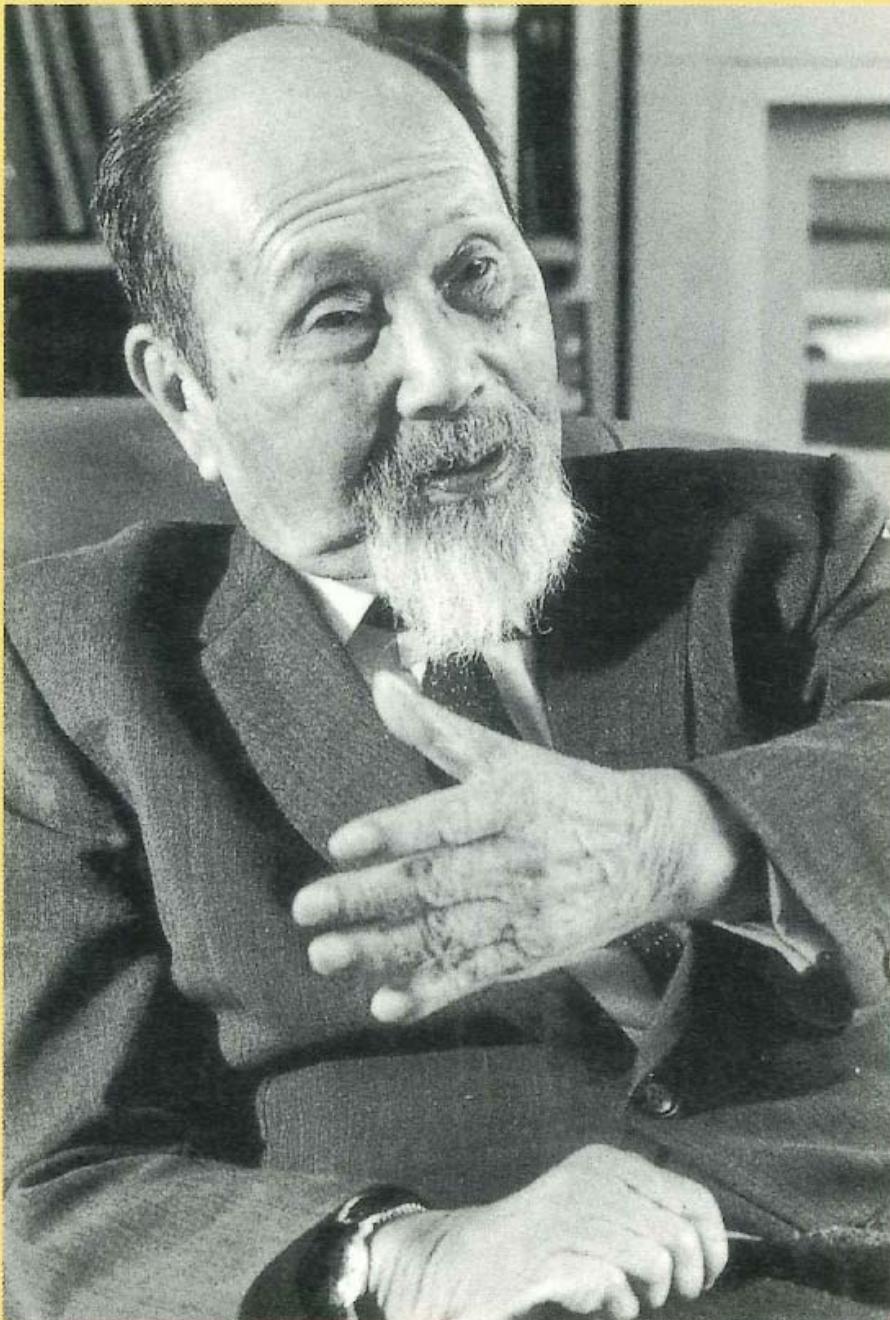
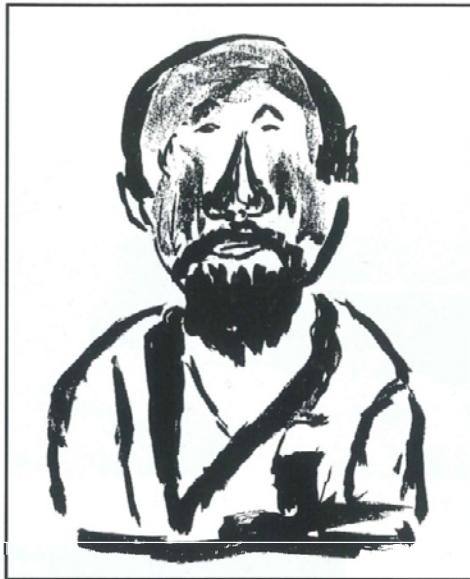


桜美林学園創立者
清水安三

石ころの生涯

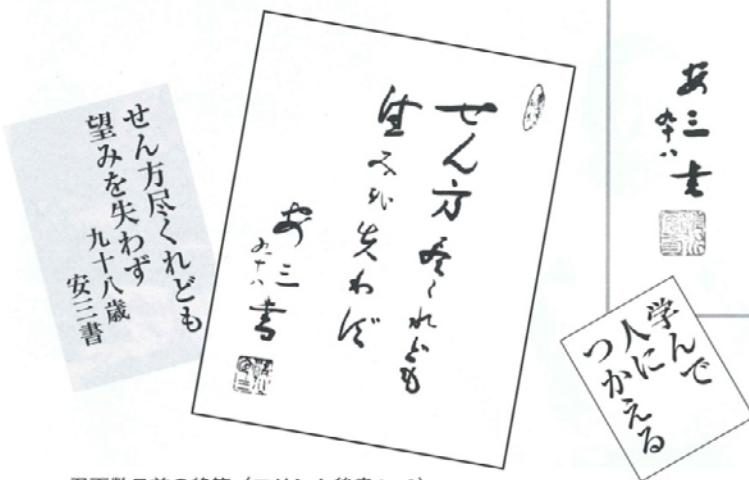




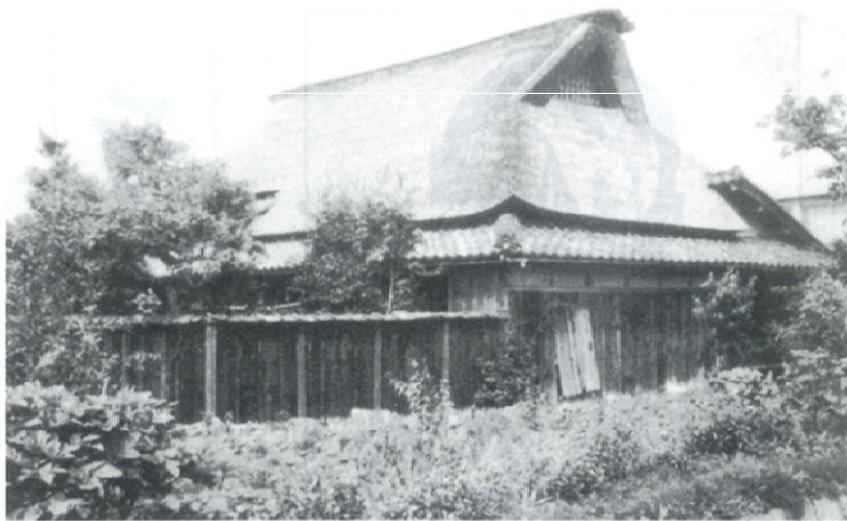
清水安三先生、88歳当時の自画像

手
て
事
じ
く

安
三
士
吉



召天数日前の絶筆（コリント後書4・8）



滋賀県高島郡（新旭町）の生家 ●1891年（明治24年）6月1日誕生



同志社大学1年



生家にて。9歳当時の安三先生（手前）。
後方に父と兄



同志社学生時代（最後列の角帽姿）、ウォーリズ先生（中央と枠内）と共に。



美穂夫人との家族 ●長男 泰 長女 星子誕生



中国に渡って瀋陽で伝道を始めた。
日本人宣教師第1号



1920年（大正9年）5月28日 朝陽門外に崇貞学園を設立 ●写真は朝陽門（北京市）



オベリン大学にて。安三先生（3列右端）、郁子先生（2列右から4人目）



北京朝陽門外の崇貞学園（1930年ごろ、最後列右から2人目・安三先生）



崇貞学園校庭内、美穂先生の墓碑と共に。



崇貞女学校初代校長・美穂先生



1946年（昭和21年）3月、安三・郁子両先生はいわば裸一貫で帰国、同年5月桜美林学園を設立した。●写真は当時の引揚げ姿そのまま。（背景は当時の木造校舎）。



学園創業時代、寄附募集のため日本各地・米国・ブラジルを長期巡遊。●写真左は販売用著書を背負った国内行脚姿、右はハワイにて寄附要望手紙を発送中。



江の島竜口寺を宿舎にして臨海学校、開校以来1962年まで続いた行事。
●写真は1950年



1976年夏の甲子園大会で桜美林高校野球部が優勝。
●写真は左から浜田監督、安三先生、橋本校長、
佐藤野球部長



宿願達成の歌碑
「大学の設立こそは少しき日
に新島裏に享けし夢かも」



第2代理事長
小崎道雄牧師



初代理事長
賀川豊彦牧師



創立者
清水郁子

（純情からくる捨身の奉仕を動機としない限り神は嘉したまわぬ）



桜美林学園の恩人たちを祀る《校恩人社》
(本文362ページ参照)

卷頭言

わたしといえども、折に触れて腰折を詠じるが、今はただ、ここに三首を選んで載せさせて頂く。

粗衣粗食われ六十年を生きにけり

わが生涯は面白ろかりき

もつとも北京時代、宅のせがれが友人の家でご馳走になつて帰宅し、「パパの子に生れて損した」とこぼしたことを思い出す。

今一度生れ来らば今一度

同じ生涯生きむとぞ思ふ

歌人・故水町京子女史は、この歌を大いにほめて下された。

わが靈よ天に帰えらず永えに

止まるべきぞ桜の園に

これは今年元旦の作。私はすでに八十六歳。遠からず死ぬであろうが、私の骨灰は復活の丘の上に立つ白玉塔はくぎょくとうに安置してもらいたいものだ。眼下に学園を眺めることができるであろうから。だが泌々しみじみと思う。やつぱり私は北京朝陽門外わきょうもんがいで、教え子の姑娘クーニヤンたちに取り巻かれて、

「我拾不得珍、曖呀あいや々々」

の哀号あいごうでも耳にしながら、死ぬべきであつたのにと。

終りに、私のこれまでの人生行路において、大きなご援助、ご協力を賜わつた多くの方々に、心からの感謝の意を表したい。自らの妻子にも苦労をかけた。しかしそれなくしては、なにもできなかつたのである。

一九七七年四月
清 水 安 三
桜美林大学学長室にて

第三版刊行によせて

我輩は本年とつて九十歳、愈々召される日の近きを覚える。かのマシュー・アーノルドの父は、自らの死骸をラグビースクールのチャペルの床の下に葬つてもらつたそうだが、我輩の骨はやっぱり復活の丘の白玉塔に安置してもらおうか。ただし白玉塔の三階の南西の窓際に置いて頂こう。

我輩はその窓から学園を朝夕眼下に眺めたいからである。

一九八一年六月一日

清 水 安 三

目 次

卷頭言	清水安三	i
第三版刊行によせて	清水安三	iii
第一部 わが生いたち	15	
起きろ石ころ	16	
うてやいらせや	16	
父の死	17	
藤樹祭の思い出	18	
安井川小学校	20	
膳所中学校	22	
W・ヴァーリズ先生との出会い	23	
洗礼を受ける	27	
料理屋からの通学	29	
起きろ石ころ	32	
同志社入学を決意	34	
貧しい学生生活	36	
鑑真和尚に感激	38	
中国に行く決心	40	
模範兵	42	

反逆者	43
キリストの兵士として	45
奉天での第一声	47
児童館を開設	49
第二部 崇貞学園物語	51
朝陽門外にて	52
北京生活の始まり	52
支那研究に没頭	53
災童を餓死より救う	54
創立資金は五百余円	57
崇貞女学校の創立当初	58
化物屋敷の校舎	61
“崇貞”的由来	62
避暑地で露店をひらく	66
米国留学—オベルン大学にて—	68
米人への反感	68
車中の人種差別	72
わが米人観に転機	75
北京をしばし去るに臨んで	79
北京に在ること七年	79

生活は貧しくとも……	81
神のガイダンス	83
講師稼ぎ	83
八方ふさがりの厄年	85
捨てる神、拾う神	87
妻・美穂の死	94
三分の一ずつの生涯	102
清水美穂の略歴	104
崇貞学園の精神	106
「工且読書」	106
「学而事人」	109
崇貞学園が目指すもの	111
崇貞の子供たちと共に	115
崇貞学園の理想と特徴	117
胡適君の主戦論	119
郁子、宋美齡を訪問	122
北京を戦禍から救う	126
日中戦争突発—廬溝橋事件体験だより—	130
北京を戦場化しない説得工作	130

大使館避難を拒否	132
日本人虐殺兵士らと折衝	134
天橋愛隣館—貧民窟にて奉仕事業—	136
ハワイで舌禍・筆禍	138
敗戦・崇貞学園の後始末	140
韓国行	142
崇貞の韓国人少女たち	144
最高の理想教育	144
民族精神を注入	146
生きている聖者	149
第三部 中国論	151
中国論者としての清水安三先生	152
なぜ日本人は嫌われるか—支那人の多数者を友にしよう—	154
排日運動—日本人は毛虫か—	158
支那に亡国の兆ありや—日本軍閥への批判—	161
支那は赤化するか	166
南方の国民革命軍を援助しよう	168
キリスト教伝道者は国家を超せよ	172
悪魔の宗教	172

拳匪（義和團）と賠償	173
新時代の到来	174
金よりも人	175
治外法権・租界を放棄せよ	177
北伐途上の蒋介石総司令を訪ねて	180
蒋介石氏と単独会見	184
支那人は更生するか—国民革命の前途を占う—	186
李大釗の死—彼の思想と人物—	187
南京事件と日本出兵	194
國賊と國際精神	198
蒋介石は対日長期抗戦の構え	201
その後の西安事件	210
支那事変はどうなるか	213
支那事変問答—日本軍の南京入城—	217
回憶魯迅	220
李大釗先生の思い出	227
周恩来の師、張伯苓先生—	234
第四部 桜美林物語	237
桜美林学園の略史	238

桜美林学園設立	239
焼原に祈る	239
賀川先生に会う	243
片倉組の寄宿舎を校舎に	244
生徒募集のポスター	248
桜美林と命名	249
五月五日の開校式	251
レコード破りの認可	255
希望を失わず	258
男女共学論	260
七十七歳までに大学建設	261
学園の特長	262
今だから言うが	263
修繕と改築—校舎の歴史—	266
内外講演旅行	267
寄付金の使途	269
祈りし甲斐もあらやればこそ	270
ドルの援助がもらえたらい	273
その答えはノー	274

校地五千坪	276
チヤプレン・サレンバーガー	278
校舎建築費募集	280
^{ゆきよへあらわす} 行乞への出立	281
「復活の丘」にくわ入れ	283
校債募集趣意書	284
勧進の記	287
着々進む我らの計画	290
新しい校歌	291
火事の経過	294
再建へのゲキ	297
賀川先生の思い出	300
白話詩	304
清水郁子の死	306
清水郁子先生略歴	309
郁子と私	311
私の香典頂戴	323
四年制大学設立趣意書	325

桜美林大学誕生—生涯最良の日—	329
甲子園初出場に思う	333
野球の思い出話	336
楠時代	336
宗像時代	338
菅野、丸山時代	338
佐藤保時代	340
再々逸機	341
町田時代	344
部長の任務	346
経済学部の誕生	348
オベリン大学名誉神学博士	350
敬弔小崎道雄先生	354
われほまれを郷党に得たり	357
同志社大学名誉学位	360
甲子園で見事優勝	362
三十周年記念日を迎えて	363
校恩人社—桜美林恩人録—	364
清水郁子研究	372

第五部 牧師・教育者として	375
黙々として祈れ	376
寂しき處	378
人生は冒険	383
「聖者」と「戦う使徒」	385
ヘブル書第十一章	386
中国の教会	388
歐州動乱に思う	390
熱の人ペテロ	394
復活の信仰	397
男の花道、ヴィア・ドロローサ	400
イエス先生の習性	402
マリア崇拜—わが子を追え—	404
胎教	405
宗教教育	405
わが子を追え	406
ゴルゴタまでも	407
理想の国	409

小さいもの	412
キリストへの成長	417
プロビデンス	419
ミッショナースクールとクリスチヤン・スクール	420
桜美林学園の特徴	423
学園はどうしたら発展するか	426
学園の宗教教育	427
キリスト教主義の学校	428
汝等今知らず、後知るべし—大学の入学式で—	430
よその嫁は美しく見える	431
本学園の特徴	433
地の塩・味の素・石けん—短大卒業式で—	435
クリスチヤンスクールのあり方	439
愛の学園をめざして—中高の入学式で—	443
賢い親—新入生を迎えて—	448
巣立ちゆく皆様へ	451
清水安三先生略歴	452
あとがき	456

第一
部

わが生い立ち

起きろ石ころ

おまえたちに言つておく、神はこれらの石ころからでも、アブラ（ムの子を起すことができるのだ。

（マタイ三・九）

明治二十四年六月一日、その日は私の呱々の声をあげた日である。何でも私は、田圃の畔道で生まれ出たそうである。母は水田の除草をしていると、産気づいたので、急いで家路についたのであつたが、途中で生まれてしまつたのであるそうな。まことにあわただしい生まれ方であるが、それは私の責任でも何でもない。

うてやこらせや

幼い日の記憶はよほど大事件でなければ、思いだせないものである。

私は日清戦争の時に村から出征して行つた二人の若者を見送つたことをおぼえている。姉の背

におんぶされて、小さい日の丸の旗をふりながら見送つた。そのときに歌つた軍歌もおぼろげに

おぼえている。「うてや こらせや 清国を…」というのだつたが、残念なことにこれだけしかおぼえていない。私の四つのときのことで、私が生まれて三年半たらずのときの記憶である。その後になつておぼえた中に、しりとり歌がある。

ちやんちやんぼうずの首きつて

帝国ばんざい大勝利

李鴻章の鼻べつちや

ちやんちやんぼうずの首きつて：

いかに国民の教養がひくい時代だからといつても、この歌詞はひどく下品でお話にならない。これが私が生まれて隣国の中中国人とかかわりをもつた最初のことであつた。私が生涯、すぐ中国ビイキになつてしまつたのは、あるいはこの歌の反動的影響であつたかも知れぬ。

父 の 死

そのつぎにおぼえているのは、父の死である。父は明治二十九年一月二十七日に死んでいるから、私の六歳のときのことである。二人の兄と三人の姉が父の枕もとに座っていた。木の葉に水をうるおして、父の唇を浸した。私はその後にまねして、兄や姉のとおりにした。父はもう目を

とじて、すこしも口をあけようとはしなかつた。

私がまつごの水を与えると、姉たちは声を出して泣きだした。私はそれだけのことを、いまでもはつきりとおぼえている。しかし父が腸チフスで死んだからだろう、家中を大消毒したことをはつきりおぼえている。その消毒がとてもふるつていた。刀やほうちょうや斧、鎌を、兄や姉や下男下女が、家の中の部屋中を振りまわし、空をきつてきつてきりまくつて歩くのであつた。私もきりだし小刀か何かをもつて、家のなかをあばれまわつたことをおぼえている。

藤樹祭の思い出

幼いころの記憶の中で、伯父につれられて、藤樹祭とうじゅさいに行つたことを、はつきりおぼえている。

ある日、私は庭でぶらぶら遊んでいた。村長おーじをしている伯父とうじゅがきて、

「わしはこれから藤樹さんの祭りとうじゅさいに行くが、お前おのもこんか」といった。

中江藤樹の村と私の村は、安曇川あどがわをへだててとなりあつてゐる。三百メートルほど歩いて安曇川の橋まで行つたとき、伯父とうじゅが、

「お前おの、いこうなつたら（大きくなつたらの意）何になるのか」と問うた。私は即座わたしに、

「わしは陸軍大将になるんや」

と答えたそうである。

西江州には饗庭野あいばのという大草原があるので、夏ともなると京都、大阪から実弾演習のために兵隊がやって来る。

そのころ連隊長は、黒地に金モールの蛇腹じやぱらの上衣に、赤いズボン、頭髪はまんなかから分け、あごひげをしごきながら、馬にまたがっていた。それは実に威風堂々たるものであつた。私が陸軍大将を夢みたのも、まことにむりもないことであつた。

安曇川橋から上小川の藤樹書院までは四キロあるが、藤樹書院に着くと玄関の真正面に伯父の座わるべき椅子が用意してあつた。

村長の席の後方には、白い夏の制服をきた師範学校の生徒が整列していた。まもなく「かしら左」の号令がかかると、郡長の案内で県知事が入場してきた。知事も郡長もたたみに額をすりつけて、床の間に高く飾つてある位牌に向かっていともうやうやしく拝礼した。

帰り道に安曇川橋までくると、伯父はまた聞いた。

「お前はやっぱり陸軍大将になりたいのけ」

私はこんどは首をふつて、

「おんさん、わしはなあ、藤樹さんになつてこまそーか」

「…………」

「おんさん、藤樹さんになるのにや、どうしたらよいんけ？」

と私は伯父にたたみかけて問うたそうである。

「そらお前、親孝行せにや、藤樹さんみたいな人にはなれんわい」と伯父は教えたそうである。今調べて見ると、明治三十年九月二十五日に藤樹先生二百五十周忌の大祭が開かれているから、たぶんその時におまいりしたのであろう。そうすると私の満六歳のときのことである。

安井川小学校

私は七歳の春四月に、小学校に入った。安井川尋常小学校の校舎は、醤油倉を改造したもので、南向きの長い土蔵であった。生徒が六十名ばかりいたが、教師は校長さんと助教とただ二人きりだった。学級は二組に分かれて尋常一年と補習科は一緒に勉強し、二年と三年と四年の生徒が一緒に勉強した。補習科には十二、三人、大きいお兄さんお姉さんたちがいた。

校長さんは野呂先生といった。この方は実に人格者であった。実に優しい、しかしこわい先生だった。私が二年生のとき、村から初めて隣村の饗庭高等小学卒業生が出た。菅沼という方だつ

た。野呂校長は大いに喜んで、彼を助教に採用された。菅沼先生は器用な人で、オルガンがひけるので、安井川小学校はオルガンを一台買うことになった。醤油倉から、「ちらちらほらほら雪がふる」だの、「池の鯉ひごいよ」だのという唱歌が流れるようになつた。菅沼先生は体操もおできになつたから、安井川小学校は唱歌、体操二つの新課目が増設された。

安井川小学校にはプールの設備はなかつたが、すぐそばに安曇川という大きい川が流れていて、そこへ泳ぎに行くことは、夏の最も楽しい学校行事であつた。

春の花のころは、日向ぼっこをしながらその花園を教室として授業をうけた。夏は安曇川の土堤や、校庭の柳の木蔭で、学問するのであつたから実に楽しかつた。氏神の鎮守の森までは十五町あつたが、そこへ散歩するのが、体操の代わりであつた。

よく氏神さんへお詣りした。体操の代わりだと言うことだつたが、ことによると野呂校長は運動以上のことを考えていたのかも知れぬ。氏神の鎮守の森は、原始林のように、うつそうと茂つていた。私たちが三、四人、手をつないでも抱ききれない椎の大木があり、老松がうんとこさと茂つていた。時には一日この鎮守の森で勉強したこともあつた。なるほど設備はないし、教員は手不足ではあつたが、生徒たちは皆すくすくと伸び、学問もよくできた。卒業生は上の学校へ行つても首席を占める。なぜ安井川小学校出身者は体が丈夫で、よみ書きがよくできたのであろう。

不思議なことである。

私は尋常四年まで安井川小学校に学び、それから隣村の安曇高等小学校の高等科に入り、その次は膳所中学^{せぜ}、それから同志社大学、ついには米国オ（イオ州オベリン大学にまで学んだが、私はかの安井川小学校ほどよい学校はなかつたと思われてならぬ。

私は幼年時代に、こうした教育を受けたのである。それであるから、先生らしい先生は校長一個人きりであつても、何一つ設備がなくとも、広い校庭をもち、近所に天然の美しい林があれば、それでまず、学校としては十分であること幼年時代に体験しているのである。

膳所中学校

私は十五の歳に滋賀県立膳所中学に入った。中学校の入学試験をうけに行く私のために、母は柳^{やなぎ}ごうりに着物をふたとおり詰めてくれた。こうりの身^みの方には、久留米絣^{くるめがすり}の筒袖^{つつそで}と着物、白地にくろじまのはかま、豆しづぼりの三尺帯^{しま}、ふたの方には縞^{しま}のおりの着物、黒の角帯、それからまだれなどもつめてくれた。その時母は私に、

「お前が試験にとおつたら、こうりの身にはいつている着物を着よ。落第して大阪へ丁稚^{でつち}に行つたら、こうりのふたにはいつている着物を着るのじやよ」

と言われた。私は落第した場合は、ちゃんと大阪の紙屋へでつちに行くことになつていて。私はあの時こそ人生の分かれ道にたたされていたわけである。

私はこうして滋賀県立膳所中学校の入学試験をうけた。受験者は三百四十八人だつたが、このうち合格者は百十人、私もそのうちの一人だつた。かなりきびしい競争だつた。

W・ヴォーリズ先生との出会い

膳所中学にはいつて数日あとのことであつた。

「きょうは毛唐けとう」の教師のくる日や。おめいなんか、異人見たことなんかあらへんやろ」と言つて留年になつた級友のひとりにからかわれた。その級友は落第生らくだいであつた。

私はいまだかつて外国人を見たことがなかつた。その落第生のあざけりもまことにずばりだつた。

私は六时限目の授業がはねると、いそいで教室をでて校門で待ちぶせた。一目でよいから異人の先生を見ようという一念からだつた。

「きた！　きた！」

まもなく二十五、六歳の異人の紳士が山高帽やまたかぼうをかぶつて小さな柳行李やなぎこうりのバスケットをさげてで

てきた。

「ほんとに白い肌やなあ、金色の髪やなあ、眼玉があおいや」
とつぶやきながら先生の顔をじろじろと見ていると、

「カマワン、ボーアイ」

とさけぶや、私の肩に手をかけて、ぐいぐいとひっぱるではないか。私は逃げる気はしなかつた。先生におされるままつれて行かれた。そこは中学校の東どなりの一軒の土族屋敷だつた。玄関をあがると、お座敷には、すでに四年、五年の上級生たちが十数人あぐらをかいて先生の帰るのを待つていた。

その異人の先生こそは、ウイリアム・メレル・ヴォーリズ先生その人であつた。後年日本人に帰化して一柳米來留と改名した。私たちは当時「ボリツさん、ボリツさん」とよんで、ヴォーリズ先生と呼ぶものはひとりもいなかつた。

先生は明治三十八年一月二十九日に横浜に着き、こえて二月二日には近江八幡町（現在は市）にきて、県立八幡商業学校の英語の教師となつたのである。私がはじめて出会つたのは、先生が八幡町にきて二カ月余り、七十日たつたばかりであつた。毎週一回木曜日には八幡町から膳所中学へ会話を教えにこられた。

私はその後、毎週かならずそのバイブル・クラスに出席した。バイブル・クラスの終わつた後

には、ボリツさんは例の小さいバスケットからホーム・メイドのクッキーをとりだして、甘い紅茶やコーヒーでわれらをもてなした。そのリフレッシュメントが生徒たちにはとてもチャーミングだった。いなかもの私のとつては特にそうであった。

今になつてつらつら思うに、私の生涯において、自分にもつとも偉大な影響を与えた人物は誰であろうか。それはやつぱりボリツさんだつたと思われてならない。もし私がボリツさんを知らなかつたならば、私はあるいはイエス・キリストにも出会わなかつた。

ボリツさんはあまりにも熱心にバイブル・クラスを通じて、生徒たちに伝道したので、ついには県当局から首にされ、もはや膳所中学にも教えにこられなくなつた。

ボリツさんは夢見る人である。後年、彼が食うに困り、京都のY M C A の新築現場監督をしながら八幡で聖書を講義されたときに、私は一日、京都の柳馬場の現場監督事務所へ行つて見た。すると、ボリツさんは、蒸汽船の設計をしておられた。そしてその船の名をガリラヤ丸と称して琵琶湖に浮かべ、湖畔伝道をやるのだと言われた。

「先生、この船を買うお金はどこにあるのですか」

と言ふと、与えられることを祈つてゐるのだと言われた。また一日、私はボリツさんと共に、近江八幡の北郊を散策した。ボリツさんは、北の庄の山を全部、山も谷もひつくるめて買いとつて、サナトリウムを建てるんだと言う。ボリツさんは、当時、免職になつてこの方、教え子の一人を、

同志社の教授ダンニング氏の日本語教師に推薦して、若干の月謝をとらせ、その収入でうどんを食つて暮らされた。つまり教え子の許に食客になつて生計しょっかくを立てるという境遇にあつた。しかも、一山買たくい入れる計画たくを企らんでいる。そして本氣で山角の巖やまかどによりつゝ、祈り求めるのであるから驚いた人である。彼は偉大なる空想家である。

ボリツさんは教派が大嫌いである。であるから彦根にあつた同胞教会を解消して、一地方一教会主義をとり、多くの教師、伝道師に憎まれながらも断然主張を貫かれた。

ボリツさんは信州野尻に土地を持つていながら、あそこへは避暑に行かれない。なぜならば野尻の外人村の委員たちが、日本人との雑居を絶対的に避けていたからである。そして年一度の外人村総会には、必ずボリツさんは、日本人を入り込ませる議案を提出して、いつも少数否決を食つておられる。そして一年として、その議案がボリツさんから提出されぬこともない代りに、また多数可決される見込みもないのであつた。

平和を好み、安息日を重んじ、しろうとでありながら事業に手を出す人であつた。ヴォーリズ門下からは村田幸一郎、吉田悦藏、その他多士齊々出たが、そのヴォーリズ精神を最も多く体得して、衣鉢いはづを継げるものは、はばかりながら不肖私であろうと思う。

洗礼を受ける

大津は琵琶の湖と逢坂の山脈とのはざまに長く横たわる町である。私の魂の誕生の地は湖畔の浜どおりの白玉町である。

その白玉町の教会は組合派だった。私がせつせと教会にかよつたころの牧師は、白石矢一郎先生だつた。説教も雄弁で祈祷もどうどうと流れるようになつてのけた。私はそのころ批判がましい文句はつけなかつたが、いま考えると説教は、大声叱咤しつたで雄弁でもよいが、お祈りはむしろ低い声で口ごもるのが、よくはないかと思うのである。

これはまたどうしたことか、白石先生はあれほど雄弁であり、毎週毎週、二回三回と聞いたにかかるらず、ほとんど説教の内容については記憶していない。とても不思議である。ただひとつおぼえていることは「貧乏牧師」という語を連発されたことである。この語句は教会の執事たちには、おそらく耳ざわりな言葉であつたろう。しかし私には、「おれはその貧乏牧師になつてくれよう！」という、貴いインスピレーションをうけたのであつた。もしも先生が、

「牧師ぐらいのいい職業は、（ほんとうはそうなんだが）世にまたあるまい」と言われたならば、おそらく私は神学校へはいかなかつただろう。

明治四十一年、私が中学四年のとき、組合派は大津を中心に集中伝道を催した。一月には京都四条教会の牧野虎次牧師、二月には同志社の日野真澄教授、三月には平安教会の西尾幸太郎牧師、そして四月には洛陽教会の木村清松牧師が講演にこられた。

五月には番町の綱島佳吉牧師、六月には前橋の堀貞一牧師、七月には靈南坂の小崎弘道牧師、八月には本郷の海老名彈正牧師、そして九月には大阪の宮川経輝牧師がこられた。海老名先生の講演の時は会場に人があふれた。私は最前列にすわっていたので、先生の足が動くたびにこつんこつんと私の膝がしらにふれたことをおぼえている。

まさしく組合教会の一騎当千の牧師総動員の大伝道だった。はたしてこの果実として二十七人の男女の受洗者がでた。私もその中の一人であった。

なおこれらの弁士たちは、それぞれの特長をもち、いずれおとらぬ熱弁をふるつたが、私を決起させたものは、木村清松先生の説教であった。木村先生が満場の会衆の中から私をにらみつけて、悔い改めをせまったく言葉こそは、私を罪のふちからだんぜんはいあがる決意をさせたのであつた。

料理屋からの通学

私の長兄の弥太郎は私よりも十六歳年上だった。酒は一合はおろか、ひとくちだつていけなかつたが、世にもまれなおんな極道ごくどうだつた。男ぶりもよければ、おしだしも悪くなく、幼年のころ漢学者富岡鉄斎のもとに学んだというから、いなかでは教養もなかなかのものだつた。

そのころ大津には柴屋町しばやまちという遊廓くるわがあつた。兄の弥太郎はその柴屋町で一番大きいかまえの吉房楼じきぶろうのお大尽だいじんだつた。その大房楼には平岡貞太郎ひらおか さだたろうという息子がいて、その腹ちがいの妹に琴路ことじゆという女性がいた。彼女は兄の愛人あいかただつた。

琴路の腹ちがいの兄の貞太はやくざで、ばくちうちだつた。私の兄は貞太が高利貸しのために競売のはめにおちいった大房楼をごつそりいぬきのままで買いとつて、琴路の財産にしてくれた。

そうするためには、私のうちの田舎の山林の樹々はだいぶ伐採され、山々がみな坊主になつたといつて、祖母や母はたいそう悲しんだが、まあそれはそれでよしとしても、またまたものの一年もたたないのに、貞太は琴路の実印を盗み、高利貸しから大金を借りて、どこかへどろんして姿を消してしまつた。

兄は弁護士に頼み控訴までしたが、なにしろ相手が姿をかくしていたこととて、裁判はやつぱ

り敗けた。ついに大房楼は人手に渡ってしまった。そこで兄は大津の四宮町に、琴路の従兄の早藤庄吉にすすめられて、彼の持つていた大きい家屋を借り受けて、平岡家という旅館を開業して琴路に経営させた。これがあたつて開業まもなく政友会系の県会議員の常宿にされ、たまたま全国遊説にきた総裁原敬が立ちよつたというので、たちまちにして全県に知れわたる旅館となつた。琴路の従兄、它吉は、ただ一年しか営業しないのに、家屋を買いとつてくれ、買いとらねば他へ売つてしまふと無理なんだいを言いだした。兄はそれまでに多額の資金を投資しているし、買いたるのには、さらに多くの金がいるのだが、すごく繁盛したので欲をだして買収することにした。

兄が私の名義になつていた田地を人手に渡したのはその時だつた。今日の県立今津高校の校地は、その地面だつたということである。

私が中学へ入つたころ、兄は本妻を田舎から呼び寄せて、四宮町から近い距離にある鍛冶屋町に一軒借りて住まわせていた。そうして私はその兄の本妻の宅から中学校へ通学した。兄嫁は本妻であるにもかかわらず、かえつて第二夫人でもあるような取りあつかいをうけていた。兄の本妻は、私が中学三年になつたとき、とうとうがまんができなくなり、兄と別れて京都へ女中奉公に出た。

そこで私はしかたなく兄の妾の経営する旅館平岡家に引越し、そこから通学しなければならな

くなつた。私の部屋は旅館の玄関わきの三畳の間だつた。格子戸であつたから昼なおうす暗かつた。そのうえ街路に面していたので、荷車のきしる音、物売りのよび声などが聞こえてまことにそうぞうしかつた。しかも玄関わきであつたから、店に客がくると

「お客さんどつせ」

と、いちいち大きな声で伝達せねばならなかつた。全のこと、ベル代わりをやらされたのであつた。これでは中学生の勉強部屋としてはぜんぜん不適当であつた。

私の居室がただに、勉強するのにはふさわしいものでなかつたばかりではなく、旅館兼料理屋の平岡家そのものが、中学生のおるべきところではなかつた。

なにしろ遊女屋のおかみだつた琴路が経営主だつたから、実に風紀の悪いこと話にならなかつた。

しかし私はこんな環境の中でも、せつせと教会にかようことを休まなかつた。日曜日の朝夕の礼拝はもちろん、金曜日の夜の祈祷会、それから一週おきの家庭集会のどれにもかかさず出席し

起きろ石ころ

中学生時代の私がどの学年でも落第すれすれの劣等生だったのにくらべて、私の親友たちは、だれもかもみな優等生だった。しかもその親友は毎年変わった。

中学一年生の時の親友は山内正文君だった。彼は毎朝、私の下宿の前に立つて、

「清水君、お待ちどうさん」

と声をかけた。山内君はめったに首席をほかの生徒にゆずらなかつた。卒業すると陸軍士官学校にはいり、後年師団長として、イン・パール作戦に参加、不幸にして戦病死してしまつた。二年の時の親友は中村応君だつた。彼もまた毎朝、私をさそつてくれた。同君は剣道部、私は柔道部だつたから、時としては同じ時間にけいこが終わらなかつたが、ふたりはおたがいに待ちあわせて、いつしょに帰宅するのだつた。中村君は三高から東大法科に進んだが、彼は四番で卒業して大蔵省にはいった。そのときの一番は賀屋興宣氏で、二番は矢内原忠雄先生だつたそうである。

三年生の時の親友は山路秀男君だつた。彼の父君は師範学校長で、母君は、「元日や一系の天子富士の山」の名句をよんだ内藤鳴雪の娘で、古い女子学院の卒業生だつた。大津教会の女執事でもあつた。山路君は、後年の河南作戦で「虎部隊長」のあだ名で勇名をとどろかした陸軍中将

である。

四年生の時の親友は伊夫伎直一君だつた。彼は代議士の息子だつたが、三高から京大を出て、現在は横浜の倉庫会社の会長をしている。こうしたいずれも優秀な友達を親友にもつていたといふことは、私にとつては実はよしあしで、彼らと親しくしているうちに、いくじなくもいつのまにか、自分に劣等感を持つようになつた。これがそのころの私のいつわらぬ深刻な悩みであつた。

私は明治四十一年九月二十八日に、大津教会で白石牧師から洗礼をうけた。その日の礼拝説教者は、京都四条教会の牧野虎次牧師だつた。その牧野先生の説教こそは、私の生涯にもつとも大きな影響をあたえた。「新島先生は、よくこうおおせられた。すなわち神は同志社のキヤン・パスにころがつている石ころさえも、なおよく新島襄とはなしうるのである」と。

これはバプテスマのヨハネが、「神はよく、これらの石ころからでも、アブラハムの子を起すことができる」と教えたもうたことを応用したのであつたと思う。私はこの牧野先生の話を聞いて、「神はこの石ころのような劣等生清水安三をすらも、なお同志社の創立者新島襄となしうる」と自分にアプライして考えたのである。

「そうだ！　おれはたしかに石ころなのだ。けれども、神もし用いたもうものならば、おれ」とき者でも新島襄になりうるのだ。こらあ、なんたる福音だ」。私はさつそく自分の雅号を「如石」をつけた。私はそのときから、大いなる自覚にはいったのである。

このときから私の劣等感は跡かたもなく、消しとんでもしまつた。しかも「われは一個の石ころだ」という自覚が内面に展開して、ついに白石牧師の口ぐせだつた「貧乏牧師」に自らを献げようという決心をするようになつたのである。

同志社入学を決意

中学時代、私は地道にこつこつ勉学する境遇に生きえなかつた。第一に私には中学校を卒えて後、上級の学校へ進学する目当てがなかつた。父の死後といふもの、わが家は山林を売り、田畠を手離し、兄の妾の經營する旅館は執達吏に襲われて、時には私の机にまで、差押えの封印の紙札が貼られたりしていた。その兄の妾の家にいた私のことゆえ、「おトツツアンが生きていたら、わしも大学まで行けるんじやが」との一言のみが、実をいうと私の繰り言であつたのである。しかし学資金の要しない学校もわずかではあるけれども存在していることを知つていたから、一縷の希望を抱きつつ中学中退だけはする気にはなれなかつた。

しかしありていに言うと、どうしても進学できる見込みがはつきりしていなかつたので、どうしても勉学には身が入らなかつた。

当時は士官学校、兵学校、東京と広島の高等師範学校、高工と高商の教員養成科、電信専門学

校、計七校しか、学資不要の学校はなかつた。今日の「」とき育英奨学金などという結構な制度もなかつた。

もう一つ私にとつて悲しかつたことは、私の頭ではそうした給費校の入試を受験しても、到底パスできぬという厳肅な事実をいかんともすることができなかつた。

中学生の私に、最も大きい光明を与えたものは、当時同志社のチャプレンであった牧師武田猪平先生だつた。私の中学四、五年生の頃、武田先生はよく大津の教会へ講演に来られた。ある日先生がその講演の中で、山室軍平先生が吉田清太郎先生に飢えを救われた物語をされた。その物語は、私に実に新しい希望を与えたものだ。

同志社には今もなお毎朝牛乳や新聞を配達しながら、苦学している学生がたくさんいると聞いて、私の心は躍らざるを得なかつた。

働くことなら、なんぼでもするが、同志社の入学試験はむずかしいかどうか、私にとつて次の大問題はそれであつた。ところがなんと幸いなことには、無試験ではいれるとのことだつた。私の心は天にも昇らんばかりに躍らざるを得なかつた。こうして私の前に開かれていたただ一筋の道が同志社大学だつた。

明治四十三年三月二十三日に私は膳所中学校を卒業した。その時の卒業生は五十四人であつた。私はたぶん尻から四、五番目であつただろう。

貧しい学生生活

同志社入学当時は今にして考えるならば、本当にかわいそうな貧しい学生だつた。私は三名の中一の生徒に、英、数、国 の三科目の予習復習をしてさし上げて一人から月額一円五十銭をもらい受け、計四円五十銭の収入を得た。

当時同志社の食堂は一日十八銭の食費であつたから、五円はどうしても必要で、週に一日は欠食せねばならなかつた。最初は欠食で我慢していたが、だんだん京都の町に住み慣れるにしたがつて、いろんなアルバイトを見つけることに成功した。

ある時は人力車ひきをやつたものだ・後年私は軍隊に入つたが、早駆け競争はいつも中隊三番を取つた。人力車夫をして働いたことが、私の脚力を作つたのかも知れない。

その当時同志社の寮はランプであつた。そこで私は早寝して十一時頃起きて、今出川の電車の待合所で、アカアカと輝く電燈の下で読書するのを常としたものだ。

第三学期になると中一の生徒の中には、英、数、国 の科目を、九十点近く取らないと落第せねばならぬものが沢山でた。即ち一学期と二学期に、三十点や二十点しか取つておらぬ生徒は、どうしても九十点近い点数を三学期に取らなければ落第する。そこで私に教えてくれという生徒が

十名、時には十五名も集まつて来たのである。

私はかつて別に教育学というものを学んだことも研究したこともないが、同志社大学の一年生の頃、頭のどちらかというと弱い生徒たちを親しく教えたこと、あれがどれほど一生役に立つているか知れん。私は実のところ名教育家であると自負しているのである。なぜならば私が手塩にかけると、いかなる低能な頭の悪い生徒も、たちまちにして優等生にまで向上する。私はその点一種の名人なのである。私自身は実に頭の悪い男である。しかし私が教えると、皆優等生になるのだから面白い。

さてこうした貧しい学生生活は二年生の夏休みまでで終わりを告げることになった。二年生の夏休み以後はヴォーリズさんの支持を受けることになったからである。

三、四年時代、私は毎金曜、学校がはねると、三里の山科街道を徒步で大津に出て、紺屋ヶ関から汽船で向かい地へ渡り、吉川港に上陸して野田に行つて、夜の集会を司り、翌朝はまた徒步で安土に至り、夜の集会を司り、夜遅く八幡まで歩いて行き、八幡教会の日曜朝夕の集りを司り、日曜の夜遅く京都に帰るのであつた。それがヴォーリズさんが私に課したフィールドワークだったが、それは今から考えてみると働かせ過ぎだつた。これでは勉学ができるはずがないではないか。

（以上昭和40年7月10日から一五二回『キリスト新聞』掲載「起きろ石ころ」より）

鑑真和尚に感激

同志社大学神学部五年生のある日、図書館の新刊書を一覧していたら、徳富蘇峰氏の『支那漫遊記』を見つけた。

その頃の私は西洋のことのみに気を取られていて、支那のものなどんで興味がなかつたのであるが、なんといつても蘇峰氏の著であるから、その文章にひきつけられ、ぐんぐん読んでいった。そして彼が山東の宣教師を訪問するところまで読んだ時、次のような文章があつた。私は永い間それをそらんじていたものである。

「おもふに、我邦の宗教家にして、果して一生の歳月を支那伝道のために投没する決心あるものあるか。予は、英米その他の宣教師の隨喜者にあらざるも、彼等の中にかくの如き獻身的努力あるの事実は、たとえ、曉天の星の如く少くも、猶曉天の星としてその光を認めざるを得ざる也」。

私は読後、「なあに、わが国の青年宗教家だつて、やれんことはあるまい」と思つた。

筆というものは、氣をつけて運ばねばならぬもので、どこの誰にその一筆の文章が大いなる影響を及ぼして、その生涯の方向を転換せしめ、その人をもう一生取り加えしのつかぬことにしてしまうかも分らぬのである。

私が中国に捉われるに至ったきっかけはもう一つある。それはある土曜日のことであった。私は級友の誰かと共に奈良に一日の清遊を試みた。その頃の同志社は日曜ばかりでなく、土曜も休みであつた。

どういう導きであつたか、私たちは薬師寺、唐招提寺にお参りした。寺僧の説明によると、唐招提寺は鑑真和尚の建立にかかるものであつて、鑑真和尚は唐代切つての名僧であつた。その頃わが朝では戒律を受け得る高僧が欲しかつたので鑑真和尚を招いたのであつた。唐の皇帝は彼を惜んで、なかなかその渡日をお許しにならなかつた。そこで彼は脱走を試みること五度、ようやく日本に渡られたのであつた。しかしその時は多年の困苦と潮風のため盲目となつておられた。この鑑真の物語こそは私を奮發せしめた。私はそれから図書館に行つて、高僧伝をひもといてみると、あるあるたくさん、いずれの時代にも實にたくさんの学者、僧侶が、海を渡つて来て、日本文化建設のために貢献しているのに驚いた。

ハルナック教授は、「世界文化史上の曲り角には、十字架が立つてゐる」と言つた。その意味は誰かが大いなる犠牲となつて、文化を高め導いたという意味であろう。しかば、日本の文化史の辻々には中国人が立つていることを知らねばならぬ。私は心から鑑真和尚に感激せざるを得なかつた。

中国に行く決心

徳富さんの『支那漫遊記』や鑑真和尚の事績ぐらいでは、まだまだ私は中国に行く決心はつかなかつたかと思う。

それは同志社生活の最後の年の正月、京都の各派のキリスト教会が連合して初週祈祷会を開いた時だつた。そして一月三日の夜には確か国際愛という題の下に、烏丸通りの平安教会で祈祷会があつた。

その夜に限つて私は出席した。その夜のスピーカーは、のちの同志社総長牧野虎次牧師だつた。牧野氏はエール大学の卒業生であるが、やはりエール大学を出て、中国で殺されたホレス・ペトキンという宣教師の物語をされた。

ペトキンはアメリカン・ボードの宣教師であつて、保定の東関外に、学校と小さい施療所とを經營していた。その時かの北清事変が起つた。団匪は山東の一角から起つたところの排外裏夷の乱であつて、外国人とそれに関係あるものをことごとく殺戮しようとした。彼らは一種の信仰をもつていて、決して鉄砲の弾丸が当らぬと思つていた。

団匪が保定に近づいたというので、ペトキンは彼の妻女と赤ん坊を伴つて天津に至り、米国義

勇艦隊に避難した。米国公使は誰も軍艦にとどまつて去つてはならぬと命じたが、羊飼いが羊の群れを野に置いて逃げるならば、それは卑怯者であるといつて、断然、彼は保定に帰つて行つた。彼が帰つて幾日もたたないうちに保定では何人かのキリスト教徒が惨殺された。ペトキンは彼の住む家の壁越しに、団匪が撃つた一弾によつてたおれた。そうして、彼が重く用いていた孟という支那人牧師も殺されたのである。

彼の召使いの阿媽は、ペトキンが生前、「自分が殺されたら、ここに遺言が隠してあるから、それをおくさんにお見せするように」と言つていたことを思い出して、そこを掘つたら一通の手紙が出て來た。その手紙は母校エール大学にあてたものであつて、「エールよ、エールよ、エールはわが子ジョンが二十五歳になるまで、彼を育ててくれ、二十五歳になつたならば、彼をして保定に来らしめ、我が後を継がしめよ」としたためてあつた。

エール大学の教職員と学生たちは、この手紙に感激し、これが動機となつて今日に至るまで毎年二度、全校の学生、教員が、シルバー・コレクションを行ない、支那にお金を送り、エール・チャイナ・ミッショニングというのを支持している。こういう卒業生を出し、こういう学校の空気に育つた牧野氏のことであるから、國際愛を説くには最も適していた。そしてその夜、氏はかつ語りかつ泣くという有様であつた。

私はこの奨励を聞いて、もうどうしてもじつとしていられなかつた。そしてついに支那に行く

ことに心を決めたのである。

（以上昭和14年4月発行『朝陽門外』より）

模範兵

大正四年十二月一日、私は大津市の西郊、琵琶湖畔の歩兵第九連隊に一年志願兵として入隊した。

私は軍隊では八貫目（三〇キログラム）もある背嚢はいのうや鉄砲をかついで一日に五十六キロ、六十キロの長距離を強行軍させられたこともあったが、一度として落伍したことはなかつた。

また、早駆けも中隊第一番であった。町々村々のよりすぐりの壮丁ばかりであるのに、走つて私に及ぶ者がなかつたのはどういうわけだつたのだろう。教練が終わると、前方の築山一周「用意ドン」でもつて早駆けをやらされたが、私はいつも一着だつた。

こうした勤務振りだつたから、私は上等兵に任官する時にも、伍長に昇進する時にも、志願兵を代表して、

「連隊長殿、清水志願兵以下五十二名、本日伍長に任せられました」とやつてのけたものである。

大正六年の五月には、少尉任官の終末試験があつた。私は師団最高位で及第して、予備役時代

には歩兵一一七連隊旗手、後備役時代は大隊副官であった。

叛逆者

大正六年の五月、私は除隊を前に二泊の外出の許しを得た。そして一泊を近江八幡のヴォーリズ先生のもとで、もう一泊は生村の母のもとで楽しんだ。

ヴォーリズ先生とは、夕食をいただいた後、ゆっくりとお話しすることができた。

「キミは近江ミッショーンの伝道師たるべきじや」

「先生、ボクは同志社の四年の終わり頃、近江ミッショーンからデイスミス（解職）されたんですよ。その証拠に五年生の一年間は、一銭だつてスカラシップを受けておらんですよ」

「それは知らなかつた。しかし、ボクはキミを手ばなすことは絶対にでけんわ」

「ボリツさん、先生が米国から日本へ来られた同じ動機で、ボクはチャイナへ行くのですよ」

この時の会話を私は今でもまざまざと記憶している。このように私たち二人はどうとう夜が明けるまで、日本語半分、英語半分の押し問答をした。

そして最後にボリツさんのいい放たれた文句は、

「キミは叛逆者だ！」

であつた。

私はもう一泊を高島の母のもとで過ごした。長いサーベルをさげた見習士官姿の私を見ると、母はものすごく喜んで親類や隣家へ私をつれて歩いた。

「この村が出した初めての将校どすな」

というおかみもあれば、

「村が開闢以来初めて生んだ将校じやわな」

という人もあつた。

その晩、村の人々が招きもせぬのにやつてきたので、母は鶏を一羽屠り、生簀ほふの鯉も一尾あげて御馳走した。まだ除隊もしないのに祝宴がはられたというわけである。

来客がみな帰った後に、私は母に向かって、「実は……」と切りだした。

「おつかあ、わしはなあ、こんどシナへ行くことになつたんや」

こういつて、母にことの一部始終を物語り、「しかしやで」と言葉を切つて、

「おつかあが、淋いいから行かんとけ、近江にいてくれと、たつていうんやつたら、わしはボリツさんの近江ミッショソで働かしてもらうてよいのやで……」

母の顔をじつと見つめつつおそるおそる聞いてみた。すると母はつと立ちあかつて、私をふりかえつて言うことには、

「おまえはなんと、このクソババのわしのことが心配で、シナにも行けんのか。そんならわしは首を吊つて死のうわいの。わしのことなんか考えんと、アメリカなとシナなと、どこへなつと行け」

たてつづけに言う母の言葉を聞いて、私は思わずこう言つた。

「おつかあ、おまえはなんと、藤樹のおかあさまより偉い女じやなあ……」

キリストの兵士として

大正六年五月二十八日、私は大津歩兵九連隊を除隊した。

翌二十九日、大阪中の島ホテルで組合教会本部は特に私のために歓送の宴をはつてくれた。出席者は宮川経輝、原田助、高木貞衛、小泉澄、船橋福松、大賀寿吉、荒木和市、吉田金太郎、青木庄蔵の諸氏であった。この顔ぶれは、当時の組合教会のベスト・メンバーであった。

デザート・コースに入ると、宮川先生がやおら立つて挨拶を述べられた。

「清水君を用いて、シナへ送るまでには、種々イキサツがあつたのであります。またシナへ行きたいと願い出る者は他にもありました。この席であるから、あえて言つてもさしつかえあるまいが、例えば渡瀬圭一郎君、松原大八君ごときも、熱心な志願者であつたのです。実をいうと、清

水君を起用するについては、少なからぬ人々が不賛成でありました。そこでわが輩は、たまたま大津地方へ講演に行きましたので、自ら歩兵第九連隊を訪れて、連隊長に会い、清水君の行状についてたずねてみたのであります。連隊長は言下に『その兵は第一中隊に勤務しておりますが、まれにみる精勤な兵であると聞いております』と答えられました。このようなソルジャーとして忠誠を尽くされた清水君はキリストのソルジャーとしても、かならずや忠誠を尽くす人であろうと私は考えたのであります。この結果、雑音を排して、わが組合教会が隣国シナに遣わす最初の宣教師として、清水君を起用することにいたしました。云々……』

ちなみに、その夜居あわせたレーマンの方々が、月額十円を献金して、今後私を支えてくださると約束してくれました。

宴がはねた後、私は人力車に乗せていただき、高木貞衛氏にみちびかれて、堂ヶ芝の高木邸へ向かつた。途中ちょっと下車して、有田と称する洋服店に立ち寄り、オーバーコートをあつらえていただいたことをおぼえている。高木氏はもつとも高価な英國製の玉羅紗たまらしやを選び、型はダブルにしてくれた。

六月一日、私は高木氏にともなわれて、大阪朝日と大阪毎日とを訪れた。高木氏は広告業の万年社の社長だったので、新聞社とは深い関係があり、大毎は高石真五郎氏、大朝は社会部長長谷川如是閑氏が引見した。

翌日の大阪毎日は人事往来の欄に『二行書いただけだったが、大朝はその翌日の社会面に二段ヌキででかでかと記事を掲載してくれた。記事の内容は、私が誘導的に試問されてしやべつた通りであった。

「ボクはシナへ行つて二十歳代には小学校を、三十歳代には中学校を、四十歳代には高等学校を、五十歳代には大学を建てるつもりです」

私の吹いたホラを、吹いたとおりに書いてくれた。

奉天での第一声

私は神戸港を船出して大連港に向かつた。

私は六月五日奉天（注・現在の瀋陽）に着いて、先に来ておられた牧野虎次先生にお会いした。その夜、奉天の小学校の講堂で海老名弾正、渡瀬常吉の両先生をも迎え、大講演会が開催されることになつていた。

講演会の会場は聴衆で満堂あふれんばかりであつた。三番目の海老名先生の番になつたとき、先生は立ちあがつて私の手を取り、壇上にあがつてこう切りだされた。

「諸君に花嫁をご紹介申しあげる。日本組合教会が満州に送る花嫁です」

私の紹介であつた。—ウフツ！ とんだ花嫁だー。私は心中でささやいた。海老名先生からバトンを渡されると、序言もなく、私は自分の所信をのべ始めた。

「満州には漢人、満人、朝鮮人、ロシア人、それから日本人が住んでおります。北米にはイギリス人、フランス人、ドイツ人、それからアメリカン・インディアンなどが住んでいます。満州を北米合衆国のような国にしなければなりません。そして、さしづめ日本人は、北米合衆国の建国時代における清教徒の役目を受けもつべきであります。在満日本人は祖国日本よりも、満州を愛すべきであります。そしてもし必要ならば、祖国日本と一戦交えるべきであります。皆さん、大和民族は一体どこからきて、日本を建国したのであります。南洋説、シナ説など種々ありますて、今日ではどれが真実であるか不明であります。ちょうどそのように、私たちの子孫が、おいらの祖先は一体どこからきたのであろうかと研究してさっぱり不明であつても、少しもさしつかえないとと思うのです。いかがでしようか……」

思い切つてのべたところ、後で渡瀬先生からは、「ああいうことを言うと誤解されるよ」とたしなめられた。しかし海老名先生は大いにほめちぎつてくださいました。

児童館を開設

私は奉天の小西辺門外にあつた元ロシア武官の公館を貸借した。とても大きな洋館で、半ばを教会、半ばを牧師館に用いるに十分であった。

私は教会の庭にブランコ、円木、すべり台などをこしらえ、児童館という看板をかかげた。毎日大ぜいの子供が、この遊園地に集まつてくるようになつた。中国人の子供が三分の一で、朝鮮人の子供が三分の一、それから日本人の子供が三分の一であつた。

この児童館の門前には池があつた。冬ともなるとこれに氷が張るので、私は池の中央に電柱を建てて、それに大きい電燈をつけた。スケート場である。白昼は子供たち、夜になると大大たちがきてすべつっていた。さすがにスケートにくる子供はロシア大が多かった。

私の最初の事業は、子供遊園地のお守り役だつた。ポケットにくしやぢり紙をいれておいて、女の子の髪をすいてやつたり、鼻汁をぬぐつてやるのが日課であつた。私は子供が負傷すると、ヨーチンをぬつてやつたり、メンソレータムをつけてやつたりした。そしてそれを延長して、六神丸を飲ませたり、ホメオバシーを施薬したりして、ちょっとした治療をするようにもなつていた。

第一部 わが生い立ち

私は集まつてくる子供に、日本語を教えたり、スウェーデン式の体操をやらせた。それは軍隊で教わつたもので、その頃では斬新な徒手体操であつた。

組合教会が、私をずっと長く奉天に駐在させてくれたら、この児童館はりっぱな社会事業として育ち、幼稚園、学校にまで発展し、また教会も成立したことであろうと思う。

（以上「起きろ石ころ」）

第二部

崇貞學園物語

朝陽門外にて

北京生活の始まり

私は民国八年五月北京に来た。民国八年は大正八年である。

汽車が正陽門のプラットホームに着いたとき、ことによると一人の友だちが迎えに来ているであろうと思つて、しばしの間プラットホームにじつとたたずんで、人の群れの中に見覚えのある顔を見つけて、眼を皿にして忙しく左右に心を配つていた。しかしそれは徒労に終わつた。友だちは来てはいなかつた。

友だちというのは同志社時代の学友で、安藤という男だつた。東京の新聞社の特派員として、北京に駐在している人であつた。

やむなく自分の荷物を運び行く脚行（赤帽）の後について東交民巷に出て、いくつかの荷物を車に乗せて、霞公府の小紗帽胡同に至り、大日本同学会に落ち着いたのである。

支那研究に没頭

大日本支那語同学会に入れてもらうや、その翌日から支那語と支那事情の研究に没頭した。當時同学会には武内義雄氏がおられた。同氏は後年、東北大学で諸子学講座を担当された文学博士で、おそらくその博学にして実力のあること、日本第一の学者であろう。

武内博士ばかりではなく、同学会の小さい狭い部屋に宿れる青年たちは一人残らず勉強家であつて、今日軍人としては支那通の少将、中将、学者としては大学教授、そうでなければ高等学校の教師、銀行の留学生は支店長、外務省の留学生は書記官、領事等になつておられる。同学会の空氣は今思い出しても息づまるほど、勉強熱に燃えていた。そこへ入れてもらつたのであるから、私も勉強せざるを得なかつたが、漢学の素養に乏しい私はいづれの時代の研究に手をつけても、スキやクワをもたずく畑を耕すほど至難であつた。

そこでやむなく手をつけたのが、現代支那思潮の研究であつた。そして陳獨秀を研究し、胡適の書くものを読み、周作人の隨筆に親しみ、魯迅の小説を読みふけり、さては錢玄洞の文字革命などを調べた。そして一冊を書き上げたのが『支那新人と黎明運動』である。それには康有為や孫文の思想までも取り扱つた。別に誇るわけではないが、魯迅の小説を初めて日本文に訳したの

も私であつた。もつともその訳は、だいぶ魯迅自らにやつてもらつたけれども。

災童を餓死より救う

支那語と支那事情の勉強に没頭しているときに、北支の旱災が起こつた。雨が一滴も降らぬ。
麦も米も、コーリヤンも稗も、芋も落花生も、トウモロコシも、春作も秋作もなんにもそれなかつたので、北支五省の百姓たちは大飢饉のため死ぬよりほかにしようがなくなつた。

順徳に三十年いるという英国内地会の宣教師グリフィス牧師がまず第一に動き出した。米人宣教師がこれに呼応したものであるから、世界中が北支の旱災をやかましくいうようになり、食物が世界各国から送り届けられ始めた。

日本国民もそれを黙つて見てはいなかつた。そうして全国の小学生は三銭ずつお金を集めて支那に送り、各地の商業会議所が主催して何十万円のお金を集めた。

ところが、日本のやり方はそのお金を張作霖の手を経たり、曹錕の手を通して寄付するのであるから、果たしてそのお金が目をくぼませている農民の手に入るかどうか疑問である。わけても張作霖のごときにくれたら、大きな東方君子国といったような扁額をこしらえて贈つてくるかも知れぬが、その扁額の製作費を除いたお金は彼のアヘン料になつてしまふかも知れぬ。そう思つ

たので私は宣教師たちと同様に、直接救済運動をやりたいと考えた。

東京の渋沢子爵に一書を呈上すると共に、北京の居留民会委員長の中山龍次氏を訪れて、私の願いを申し上げた。中山龍次氏は先日まで東京で長らく放送協会の理事をしておられた方であるが、当時の交通部顧問であつて北京社交界に活躍しておられた。

私はいまだ二十八歳の弱輩であったが、中山龍次氏自らが二十七、八歳の頃にすでに遞信省で大きな仕事をされた人物であるので、「飢餓救済のようなものは、拙速を顧みる暇がないのであるから、君一つやつてみよ」と即座に、私の災童収容所案を採用された。災童収容所というのは、餓死にひんしている農民の子女を狩り集めてそれを麦の収穫期まで養うという案であった。話はとんとんと進んで、ついに北京朝陽門外祿米倉において、災童収容所を建設する運びになつた。

私は自ら、飢餓地に行つて災童を狩り集めた。馬やろばの引く大車を連ねて村々を訪れたのであるが、榆や柳の新芽や根を食うどころか、農民たちは私共の大車を引く馬やろばの糞をすら拾い集めるではないか。彼らはそれを肥料にするのではなく、それを水に浸し、こしてその糟を食うのである。

私は大車に鈴なりに子供を積んで停車場に至り、貨車に乗せて北京に向かうのであつた。災童の親たちの中には、自分の子供の乗つている大車を追つて一里二里とついて来る者もいた。

一人の子供の母親はついに駅までついて來た。そして駅で別れるときに銀の髪飾りをその子供

に手渡した。彼女が嫁入りするときに、母親即ちその子供の祖母からもらつたものだとのことだつた。私はその銀の髪飾りを収容所の中の金庫の中へ預つておいた。その子供が収容所から出るまで大切に保管してやつた。

その狩り集め旅行を一週間ほど、毎日繰り返すうちに八百名に達したから、収容所の設備の整頓に取りかかつた。もつとも八百名いると思つたのは、一名数え違いで七百九十九名という半端な数になつたけれども、まあ約八百名を救うこととした。

看護婦一名、医師一名、教員五名、書記一名、經理一名というふうに、多数の職員をおくのであつたから、なかなか容易なことではなかつた。その他に阿嬢あま すいじょ、炊事夫ら大勢のものを使つたが、幸いに一年志願兵を勤めたことがあつた私は、案外人を指揮する手腕をもつていた。

災童たちには粟の粥かゆ、トウモロコシの窩々頭うおう おとうを食べさせた。トウモロコシの窩々頭というのは、トウモロコシの団子であつて、笠のような形をしている食物である。

一ヶ月一人分二円そこそこで食物は足りた。

災童収容所が臨時的事業であるにもかかわらず、私は机だの黒板だのを少々作つた。それはこの収容所が解散されるときに、親たちの中には行方不明になつたり死んだりして、子供を受け取りに来ないものがきっとあるだろうと予想したからだ。そういう者のために引き続いて孤児院を経営せねばなるまいと思つたから、一時的設備としてはどうかと思うようなものをこしらえたの

であつた。

災童収容所の経営はなかなか面倒であつた。けれど幸いにその年の春は雨量も十分あつて、麦がよく実つたものであるから、農夫たちは愁眉しゅうびをひらいた。私たちは麦の収穫を待たずして、麦粉一袋ずつをもたせて親たちのもとに帰らせた。私自らも再び大車にのつて子供たち村々におくり届けた。村々では親たちが道ばたにひざまづいて、私に感謝の意をあらわしてくれたので、私も収容所経営中になめた苦労を自ら慰めることができた。

創立資金は五百余円

災童収容所を解散したら、私に三百円のお礼が贈られた。私が口ハで働いていたから、下さつたのである。その他に二百何十円か、綿衣の製作費の剩余を頂いた。綿衣の製作費剩余というのは次のようなわけであつた。帝國教育会が、災民子女に二千着の綿衣をこしらえて与えた。その製作を誰かと二人で引き受けたが、私の方が二百何十円安くできた。それに朝陽門外の災民をして作らせたのであるから、その二百何十円を頂いたわけだ。その一種のお金五百何十円を資金として、私は学校を設立した。それが崇貞学園なのである。（創立当時は「崇貞工讀女学校」と呼んでいた。）

わざか五百何十円で学校をこしらえると聞いて、何人も笑つたが、私はお金の上に学校を建てるのではない。実になくてならぬものは与えられるという信念の上に学校を建てたのであつた。
大正十年五月二十八日、私は崇貞学園を創立した。

（「朝陽門外」より）

崇貞女学校の創立当初

去年五月にスタートを切った私たちの支那人小学校は、かれこれ一年を過ぎました。五十二名の子供が、一年間雪の日も雨の日もよく出席しました。最初、六十名きましたが、借りた家が余りにも小さいので、やむなく二名を断わりました。なんという可哀想な仕業をしたことか。でもそうせねば机が邪魔になつて、ドアが閉まらないのです。

正月、子供が毎日三々五々、私たちの住居に年始に来ました。「先生、叩頭叩頭しようか、鞠躬しようか」と、どれもの子供が聞きます。私たちが鞠躬でよいというので、彼らも鞠躬で済ませました。けれど中には叩頭叩頭をやつた念者もありました。叩頭叩頭はひざまずき、頭で地面を叩くのです。鞠躬は日本式の最敬礼です。一人前二銭の菓子を食べさせて帰しました。

確か二日目、「先生はどこの人ですか。南方でしょう」と聞かれました。生徒が私共を日本人だと感じていなことを知つて不思議でした。私共の仕事が、日本の国家政策めいた臭味を感じ

えせていいからでしようか。

去年十月、私は日本に帰り、一生懸命に募金しました。我が校の基礎を築くためです。校舎建築資金として、神戸の田村新吉氏と東京の森村開作氏から、それぞれ金五千円の寄付を頂きました。

(大正 11 年 4 月 6 日号『基督教世界』)

大正十年五月二十八日の創立以来すでに満三年。ただ今は生徒七十五名、教員四名であります。
二千坪の敷地（高木貞衛氏の寄付）、一万数千円の寄付金を得るに至りました。

幸い地元の信望もすこぶる厚く、開校当时、生徒募集の広告を出したきり、その後は一度も募集しません。一人でも退学者があろうものなら、数名入学を希望してくるという状況です。地元のお偉い役人が、令嬢三人を他校から本校に転学させました。別に金持や大官の子女がきたからではありませんが、ようやく地元で認められたことを喜んでいます。

当初は満足な教員が得られませんでしたが、今日では学力、人物ともに小学校教員として相応しい者のみそろいました。今回、京都の同志社を卒業した侯玉香女士が、教鞭をとることになりました。永く本校のために尽力してくれるはずです。

私共は近い将来において、なんとかして女子中学校を建設したいと思います。三年前にわずか数百円で学校を建てたことから考えますと、必ずしもこの夢は空想ではないと存じます。

(大正 13 年 8 月 14 日号『基督教世界』)

崇貞女学校創立当初、私は朝陽門外に「招生」の広告をだした。招生とは生徒募集のことである。生を招くとは簡単にうまく表現したものである。私はこの生徒募集の広告を自ら露いた。紅の紙に墨で書いた。そして誰にも書かせなかつた。赤地黒字の招生広告を自ら携えて、朝陽門外の電信柱や、町角の壁に貼り歩いた。そして誰にもやらせず自らやつた。私はこの排日の叫びが盛んな北京において、果たして生徒が集まつてくるかどうかを疑つたから、広告を祈りつつ貼り、真心こめてやつた。何しろその年にかの五・四運動が起つたのであるから、排日の空気は全市の隅々にまでだなびいている。私は十分な注意を払つて事業をスタートしたのである。

生徒は二十四名集まつて來た。私は非常に嬉しかつたが、その中に八つ九つの者もあれば、一二、三の者もあり、十六、七の者もあり、はなはだしきに至つては二十二、三の姑娘もいるといふ次第で、これはえらいことになつたと思つた。というわけはまず小学一年生だけで一クラス作つて、来年はもう一クラス、再来年はさらに一クラスというふうに増級してゆこう、今年は支那人の女教員を一人だけ雇い、あとは私たち自らが教えよう、そうすれば五百円もあれば一年は続くであろうと予測していたからだ。

しかしに生徒たちは字をよく読む者、目に一丁字なき二十娘らさまざまあるから、やむを得ず、二十四名を三つのクラスに分けて教員を三名用いることにした。そしてもう一度招生広告をやつたら、またぞろぞろ毎日四、五名ずつ来て六十名ばかりの生徒数に達した。

化物屋敷の校舎

これで生徒はできたが、肝心の校舎がない。災童収容所には禄米倉を借り受けたが、口ハで借りることは面白くない。そこで、何とかして家を借りたいと思ったが、空家はあっても貸してくれる者がない。困り切つていると、一軒化物屋敷があるがどうだ、と言うのである。しかも大通りから入り込んだ小さな胡同アートンにある。それでも貸してくれればと思って行ってみると、四棟あるが、一棟はもう雨は漏るし、使用に耐えない。まあ物置ぐらいのところである。しかし三棟あれば三つ教室ができるわけである。当たってみると月十四円だと言うのである。いい値どおりに借りることにした。

噂によると、数年前にこの家で六名の者が殺された。殺した男は朝陽門外の石頭橋の川原で、青龍刀で首をバツサリ切られたというのである。石頭橋は現在の崇貞学園のわきにある石の橋であつて、通州街道はそこから始まつている。

私は何だか気味悪く思つたが、妻の美穂は幽靈くらい何とも思わぬ女であつたから、この家にしましよう、と言つてさっさと借り受けてしまつた。

われわれはその家屋を借りて、十年間崇貞学園を経営したのであつた。支那家屋を教室に変更

することは容易であるが、その造作の模様替えに小三百円いつてしまつた。黒板、机、椅子、教壇は災童収容所のものをもらい受けて事足つたが、校舎のためにうんと金を費やして、残るは二百円余りとなつてしまつた。はなはだ心細いわけである。

しかし家賃十四円とは安い。われわれは朝陽門外に化物屋敷の存在したことに感謝せねばならぬ。家賃に五十円も六十円も取られたら、とうてい崇貞学園は設立されなかつたであろう。よしんば設立されても、とうの昔に途中で断絶したであろう。

”崇貞” の由来

北京朝陽門外は当時北京で最も貧しいどん底のスラムであつた。運河が用いられなくなつて二十年、清朝が倒れて八旗兵がなくなつて十年、朝陽門外の人々はことごとく失業者となり、売れるものは一つ残らず売り放し、もうその上、売ろうと思えば娘か女房より他に手元に残されていなかつた。

ゆえに朝陽門外はその頃”了頭”^{やあとう}の産地であつた。了頭というのは十歳前後の姑娘を十円ばかりのお金で買い求め一生奴隸にするのである。小さい時は子供のお守役、大きくなれば妾である。それから朝陽門外には野鷄、租妻、暗門子なるものが沢山いた。野鷄というのは英語のストリー

トーガールである。租妻というのは女房を賃貸したこと、暗門子というのは、夜、門前に立て落魄の身をうつたえる良家の子女の意味である。

朝陽門外の禄米倉で災童収容所を経営した頃、一日私は美穂と貧民街を探検し、十銭、二十銭という安価で、やたら人間の貞操が取り引きされているのを見て驚いた。

一方私はわずかに十銭や二十銭で貞操が売買されていることを知つて非常に喜んだ。それは、私たちが彼らに十銭、二十銭のお金を儲けさせることができれば、彼らをどん底生活から救い上げることができるからである。

私たちが朝陽門外の女性教育に目をつけた最初の動機は実にこれであつた。わずか十銭という安っぽい貞操を思い、高い貞操、不二の貞操という意味で「崇貞」の二字を用いたのである。

私は朝陽門外の女性に自活の道を教えるならば、貞操の切り売りをするような者がきっと跡を絶つに相違ないと考えた。

開校最初の日からハンカチーフを作らせたのはよかつたが、何しろ風呂に入ったことのない姑娘であるから、提供する白布を手垢だらけにしてしまう。石けんをつけて洗つたくらいでは落ちない。それには困った。

そこでハンカチーフ製作を中止し、一台四十円も支払つて靴下編みの機械を買った。これならば黒や茶色の糸などで編むのであるから、いくら風呂嫌いの国民でもやれないことはない。

一ヶ月ばかりして、靴下を編める者が二十二、三名できた。ところが靴下編みなど到底やれないことがわかつた。一週に二百足も三百足もできるので、その資金がたいへんである。またそれを売ることがむずかしい。当時北京では、よほどハイカラな人々でないと男も女も靴下をはいていない。つまり、われわれの靴下編みは数年早すぎたのであつた。

そこで靴下編みは一週に一日と限り、次はタオル織りを始めた。タオル織りの小さな機はたを五台創らせ、五名の生徒に練習させた。少々形の大きいのを作つて、西洋人の家々を訪問して売りさばいたら、なかなかよく売れた。当時北京の市場に出ているものは上海から来た品物でなければ日本品であつた。

しかし半年もたたぬうちに、タオル織りの工場が北京に数十カ所できた。そのため織れば織るだけ損するという結果になつた。

ある日の夕方、テーブル・クロースだの、ビュロー・ランナーを買わないかと言つて、私の家の門前に女性行商人が立つた。客間に迎え入れて、亡妻美穂はその刺しゅうを親しく手に取つて見た。

「なかなか美しいじゃないの」

「これが西洋人の言うチャイニーズ・リネンのことですね」

と言つて、彼女はそのいくつかを買つた。

「私、これをうちの生徒にさせて見るわ」

私が聞きもせぬのに、彼女はそう言つて、その婦人のためにお茶をいれた。婦人はとても喜んだ。そして押し売りに来てこんなにしてもらつたことはないと言つた。

茶を飲みながらだんだん聞いてみると、彼女には二人の娘があるが、夫はすでに数年前に亡くなつて、今は寡婦の境遇である。彼女の父母はクリスチヤンであつたために、義和団事件の折りに通州で殺害された。孤児になつた彼女はまだ十歳に足らぬ少女であつて、どうすることもできない。世話する人があつて天主教の孤児院に入つた。そこでこの手工をならつたのであると言う。姓は黄と言つた。

「おまえさんは字が読めるかね」

「天主教の中学部を卒業しました」

と言う。私はさつそく、その婦人を二十五円で雇う約束をして明日から来てくれと頼んだ。

同女を迎えて女教員にしてから後はもう順調にいつた。そのやるのを見ていると、まず生徒たちに石けんで手を洗わせる。そのために教室には、いくつも洗面器と石けんが備え付けられた。ただこれだけのことであるが、私にはちよつと思いつけなかつた。

刺しゅうは手のこむ仕事であるから時間がかかる。しかし材料の麻布や糸はわずかで済む。タオル織りや靴下編みのように、教室いっぱいに買い込まなくてもよい。錠のおろせる箱が一つあれ

ば一ヶ月分ぐらいの材料で十分である。刺しゅうは工賃を売るのであつて材料を売るのではないから、非常にやりやすいことがわかつた。

このようにして、訓練して、作り上げたものを北京、天津、北戴河に住む外人たちに売り出したところが、いくらでも売れるので相当な工賃を支払つてやることができた。

刺しゅうのテーブル・クロース、ビュローランナー、ゲスト・タオルを作つて初めて内地へ持つて帰つたのは、創立の翌年の十月だつたが、それを近江八幡へ持つて行つてヴォーリズ氏にお見せしたら、持つて行つただけ鞠ぐるみ買つて下さつた。それで私たちは大いに自信を得たのであつた。

避暑邊で露店をひらく

私はそういう製品を携えて毎夏、野尻湖や軽井沢のような避暑地で売り歩いた。軽井沢ではメイン・ストリートのヴォーリズ建築事務所をロハでお借りして売つたが、最も地の利を得ているので、毎日二、三百円の売り上げで、一夏たいてい五千五、六百円は売れた。野尻の方は水泳場のほとりにあるくるみの木陰にむしろを敷いて売つたが、二千二、三百円ぐらいは売り上げた。なかなかよい儲けをしたものであつた。

かくして学園は七千五百円の利益をあげて校舎四棟を建て、生徒たちは生活の自信を得、朝陽門外ではどんな女性でも刺しゅうができるようになった。そして月八、九円の夫の収入でかゆをすすつていた女房も娘もおの月十五円、二十円を儲けるようになった。中にはもう、夫が糸やリネンをもらい受けに行つたり、製品を納めに行く使い歩きをするだけで、女房や娘に養つてもらうようになった者さえ現われた。

欧米の大百貨店ではこの刺しゅうをセレクトするために北京に店員を派遣し、輸出商は競つて朝陽門外の女性たちを捕えようとした。

今日では、朝陽門外といえば、美術手工艺品の産地のようになり、一年に四百万円ぐらい生産して南米、北米、英、仏の諸国に輸出している。この細民街女性は北京に珍しく風儀のよい女たちとなり、野鶲だの暗門子だの租妻などは全く跡を絶つに至つた。五十銭や一円くらいはちょっと働けばすぐ儲かるのであるから、いやな恥かしいことなどする者はいなくなつたのである。

（以上『朝陽門外』）

米国留学——オベリン大学にて——

大正十二年三月、倉敷紡績社長・大原孫三郎氏が北京を訪れたさい、ガイド役を務めた清水安三先生を高く評価された。その縁で、大原氏は清水先生が米国留学できる二年分費用を供与された。(昭和五八年発行『大原孫三郎傳』に詳述されている)

オベリン大学に留学するために、大正十三年七月末日北京を離れた。八月四日妻と共に横浜からハワイ経由アメリカへ向かった。まる二年間滞米。

米人への反感

かつて玄海灘を乗り越えて支那大陸に渡来した時、私は初めて日本を客観視することができた。私は日本を思う心が忽然として胸いっぱいに湧くの感あつて、大層な愛國者になつた。日本に在つた時には、日本に不平を抱き、時には呪咀することすらあつた。しかし朝鮮に至り、満州に行き北京に来るに及んで、憂国の至情勃然として、全身の血を沸かせ、私はいつしか一人前の愛国

者となつた。日本を客観視できたことは、私にとつて莫大な興味と利益とを与えた。私はその経験に基づき、今度は米国に渡り、東洋全体をはるか太平洋の彼方から展望し、観察してみたくなつた。米国より支那を見、米国より東洋を見ることは、今より後、およそ支那を論ずるものの一 度はなすべきことなのである。

支那は現代における世界的な最大問題の一つなのである。今日米国人は日本に関する興味から ようやく冷えて、猫も杓子も支那を論ずるようになつてゐる。日本はただ支那旅行のついでとして、立ち寄るぐらいのところに考えている。日本物貨よりも支那産物を好む流行が多い。支那に 関する講演とあれば、ほとんど驚くばかりの聴講者が集まるというのである。従つてちよつとし た支那に関する著書でも羽の生えるように売れるのである。

その米国に行つてみようと思い立つたのは、今年の春のことだつた。排日移民法の問題がやか ましく伝えられるに及んで、いよいよますます、私は米国に行く心に燃えた。かつての日、私は 排日運動の真最中の北京に來た。今度また排日の米国に行く、何という興味であろう。

私は支那に行つてから、恐ろしく米人が嫌いになつた。私は「米人」という文字を書く時には、 いつも「かの傲慢なる米人」と形容詞を冠して書くのを常としていたものである。自分は幼少の 頃より米人と子弟の関係を結び、支那に至るまでは、はなはだ多く米人を畏敬していたものであ る。であるのに在支八年にわたるに及んで、米国人に対してもない悪感を抱くに至つたも

のらしい。どうしてここまで米人が嫌いになつたかというと、それはただちよつとした心持ちからである。

かつて北京の前門停車場の月台で、米国人のレディーが、支那の苦力を足げにかけてさんざんにいじめているのを目のあたりに見たことがある。その時に私かその婦人をキツとにらみつけてやつたら、婦人は真赤な顔をしてその場を去つた。あれ以来私の反感は芽生えたのである。

また、かつて米国人の泥酔兵士いだてんが交民巷の夜の街道で車に乗つて、車の上から太い革帶で車夫クーリーを打ち、車夫は悲鳴をあげて韋駄天走りに疾走するのを目撃して、生来のリファインド・ジエントルマンにあらざる自分は、思慮をめぐらす暇もあらばこそ、大道に飛び出して、兵士をぐんと足蹴にして、天に代つて汝を罰すとかいう偉い気持ちになつて、やつつけてやつた。車夫は大いに感激し、兵士はどうなつたか、自分は後難を避けて横町に入つた。自分が柔道を学んで応用したことは、それが最初で恐らくは最後であつたのである。かくて米人は私の心に極めて悪い印象として残されているのである。

大体米国人の支那人に対する態度はいつもこのように、セカンダリー・ピープルに対する態度であつて、第一それが私にとつてシャクである。彼らに優越性を感じられてたまるものかと思うのが私の欺かぬ心持ちであつた。

忘れもない九月二日の朝、サンフランシスコの金門海峡を過ぎる頃、私は眼前にかつてから

聞く米国大陸を眺めながら、胸いっぱいにこみ上げてくる感情をぐつと呑み殺して全身緊張し、「なに、米国が何のその」とうそぶいたのである。米国に上陸して私の第一になした仕事は、靴を磨かせたことである。サンフランシスコ港からオークランドに渡る渡船、関門海峡の船とほとんど同じような船の中で、米人に靴を磨いてもらつた。小高い床屋風の椅子に腰をかける。そして鉄の靴型をした台の上に足を乗せた。そうすると黒人の米国人が私の靴を磨こうとしている。私はぐるりを見まわすことによつて、そこにいま一人の白人の米人が靴墨を手にして立つているのを発見した。

「オイ、その白い人に頼むぜ」

読者諸君、よく考えてみられよ。日の出づる国から旅立てる大和男子がいま米人に靴を磨かせているのである。まず彼は私の靴からほこりを落とし、次に靴墨を塗る。そして力いっぱいに靴を磨く。その時の私の心持ちといつたら実になんとも言えぬ。さわやかな風は海の彼方から短髪を静かになでる。見る見るうちに靴は輝く。私の心は得意であった。

こうしたチャイルディッシュな行為が、私にとつてどのくらい大きい態度をなさしめたであろう。私は他の日本人学生のように、米人の前につべこべとお追従はせぬ。私は堂々として大和男子然として米人間に伍しておる。未だ一度たりとも米人を喜ばせるようなからお世辞を言つたこともない。しばしば日米の問題を友人や教授に問われる。けれども私は未だ一度たりとも米人を

攻撃せずしてその場のお茶をにぎしたことはない。日本人はいつも面白くもないのに破顔一笑ニタニタして米人に接し、ペコペコとしている。私は決して笑わぬ。ジョークを聞いた時のみ笑つてやる。私は彼に靴を磨かせている時のような気持ちを忘れない。もうあわれみによつて、人間のブラザーフッドを保つてもらうような日本人ではないのである。しかしこの私の態度の方が、ペコペコ頭を下げる日本人よりもかえつて米人に歓迎されることも付記せねばならない。この間も米人のある者が、

「それなら、そういう人道にかなわぬ米人でも君は友とし得ることができるか」「オー、イエス、僕は泥棒でも狂人でも、これを愛すべきであることを教えられているから」と言つたら、からから笑つっていた。

米国大陸に渡つて、第一に靴を磨いてもらつた経験、それは私にとつて忘れることのできない印象であつた。

車中の人種差別

米国の汽車には一等もなければ二等もない。三等もない。あれば一等だけである。私はこれが何よりも気に入つた。

「米国の汽車には階級がない」と私は幾度も独語したのである。

それなのに汽車の中に入つて見るとちゃんと區別されている。日本の汽車が一等は白札、二等は青札、三等は赤札という具合に階級づけであるよう、米国の汽車の中には白、黄、黒というふうになつてゐる。別に仕切りはしてないが、黒人たちは女便所の近いカーの前方に集められてゐる。私は四人の支那人と共に、男便所の近いカーの後方の隅に集められて乗つてゐた。中央のよい所には白人がかたまつて乗つてゐた。私はものは試しだと思つて、中央の白人の群れている空席に行つてみた。そうしたら案の定苦情を言われたので、黒人のトランプ遊びの仲間に入つてみた。すると車掌は、「ジエントルマン、君は日本人ではないか」と注意してくれた。そこで私はその車掌に、

「この汽車は神様が人間を創造した順序に人間を並べてゐるね」

と言つたら、車掌はどうもわからぬという風だつた。私かもう一度繰り返したら、車掌は、「どうして」

「いやねえ、神はうんと昔、人間を作るために大きい爐を設けて、土と塵とをこねて人形を作り、爐の中へ入れたのですよ、そうしてね、随分長い間たつて、もう焼けたかと思つて出してみたら、何のことはない、黒焦げになつて人間が出来上がつてゐた。それが黒人、ニグロなんですよ」

「じゃ、白人は」

「そこで神様は第一回の失敗を考えて、次には人形を入れるなり直ぐに出したら、まだ焼き足らぬ人間が出て来た。それが白人ですよ」

「では黄色人種は」

「そこで神は二度の失敗を考えて、注意の上にも注意して人間を焼いた。それが黄色人さ」

「ハアハア……」

「だから言わぬことはない。この汽車は神が人間を創造した順序に我々を陳列している」

白人の太つた車掌は、大きい手を出して私の手を握り、につこりと笑つて去つた。車掌が次の日にまわつて来た時に、

「黄色人種の鼻はなぜひくいか、日本人の足はなぜ短いか」

と奇問を発した。多分誰かに私の創世記を話したら、今度は鼻と足の問題を出せと教わつたものであろう。そこで私はすかさず答えた。

「鼻が高いと人間は傲慢になる。足が長い者は手も長いにきまつてゐる。日本では鼻の高いものを天狗だといつて、傲慢な人間の象徴としている。それから手の長いものは泥棒だ。見たまえ、白人はインドを盗み、フイリピンに手を伸ばし、ハワイをつぶしたではないか」

(大正13年12月4日号『北京週報』)

わが米人観に転機

私は米人の学生たちに、破れかぶれの英語ながら、大いに米国の欠点を指摘して、論鋒を鋭くするのが常であった。ある時は米国と戦うならば俺は鉄砲を持つぞ、とまで言つてやつたことがあつた。これらの米人観は、多く支那において体験したものと、米国の文化に対する嫉妬^{しつと}、また黄色人を愛する心から湧いたものであつて、自分が渡米依頼接触した米人より得た概念ではなかつた。米国をぼろクソに言うことそれ自体が、自分の溜飲^{りゅういん}を下げるのことだつたのである。

しかるについにわが米人観に対する一転機が来た。それは去年の三月のことであつた。ある夜私は在米二十三年という日本人学生と共に米国について論じた。彼は中学を日本で学んで渡米し、米国ではかなり有名なレクチュアラーとなつてゐる人である。米大を妻にめとり、ほとんど米人、否、それ以上の完全な英語を語ることにおいて有名である。この人が今オベリンに学んでいるのである。この人は大のブロ・アメリカンである。私はこの人と談じてこの人の日本罵倒論に抗し出し、日本のために弁護し、大いに議論をなした。

「古い日本のことと言うな。古いことを担ぎ出すなら米国の二百年前は荒れ野原であつたではないか。日本の二百年前の文明と比較にならぬ」などと大いにやつたものである。そして鋒先を変

えて米国を罵倒し、米人を厭よりも劣るがごとくに攻撃した。彼は憤慨して、

「それならなぜ米国に来たか」という。私も負けてはおらぬ。

「一片の赤心、東洋男児の意氣を示しに來たのだ。米人から何ら受けようとして來てはおらぬ」と出る。彼も私も口から泡を飛ばし、ついには涙を流し、鼻汁を垂れつつ大いにやつた。

友は捨てゼリフを残して去つた。私は興奮するままにベッドの上に横臥しながら、静まり行く感情と共に、一種の忘れ得ぬ転機に直面した。かくも罵倒したほどに米人は下等なのだろうか、自分がオベリンで接した教授、学生、商人さらにレストランのウェイター、靴屋の番頭、散髪屋、一人一人考えて見ると、自分は忽然、ドエライ・ショツクを感じた。穴があれば穴にでも入るのに、と思うほどに恥かしく感じた。汽車の車掌は自分のストレンジャーなるを思つて、乗合自動車まで自ら手荷物を運んでくれたではないか。自分は東京駅の車夫が支那人学生にするごとく、不当な賃金を取りはせぬかと思つて憂えたが、彼は帰るついでだというので無料で送つてくれた。妻と自分はすでに數度無料で見も知らぬ人々に乗せてもらつた。散歩していると、道を通り合わせた自動車が頼みもしないのに止まって、自分の行く方向と同じであると言つて運んでいつてくれたのである。私は教授から日本人であるが故にどのくらい特別な親切を受けたかわからないのである。

ある時ニューヨークのある教会に行つたことがある。日曜日の朝十一時からの集会であつたが、

何しろ電車を乗り越したり、乗り損ねたりしたので、案外途中手間取つて、十分ばかり遅刻した。その日遅刻した者は私一人であつた。二千人ばかりの会衆であつたが、会堂が大きいので何程のこととも感じなかつた。私が入口に立つて、どこか空席はないかと見まわしていると、一名の老紳士が黙つて私の腕を取つて案内してくれた。案内された席は中央の實に良い位置にあつた。その紳士は私の右傍に座を占め、私の左はその老紳士の夫人らしかつた。その日は外国伝道に獻ぐべき獻金日であつて、教会の報告には五千ドルがその教会の負担で、日本へはその五千ドルから八百ドルばかりまわり、支那には一千ドル余りの割り当てで、ギリシャ、アルメニヤ、アフリカ、ペルシヤ、インド、支那等の金額が細かく出ていた。獻金の盆が私の前に来たとき、十セント銀貨を奮発してそれに投じた。しかるに今の老紳士は百ドルを指先でつまんで投げ、老婦人もまた百ドルを入れ、その老婦人の向こうにいる嫁しづいでいる娘らしい人は二十ドル札を一枚入れた。思うに私の座つた席はその娘の婿の来なかつたためにあいだ席らしかつた。

私は友人と談論して米国を攻撃した。しかし友人が帰つてから後、自ら接觸した米人を思い当たつてみると、私はもう攻撃できなくなり罵倒できぬようになつてしまつた。米人は外人に親切だという心持ちを抱いて、もう卒倒せんばかりに心の苦しみを感じたのである。今までに抱いた概念が倒れ、私は空虚な心持ちを抱くに至つた。そしてその夜を転機として、私は米国の明るい方面をことごとく見るようになつた。およそその國民を理解しようとするならば、その美しい点

を見よとはその後の私の態度となつた。以来私は米人と心置きなくしゃべれるようになり、米国の持つ長所には心から讃嘆し得るに至り、その短所には同情の念を抱くに至つた。今まで米国の長所はシャクに触り、米国の欠けたる点には攻撃の焦点を向けたものである。しかるに今日は幸いに米人が持つ短所を彼らと共に憂え、美点を嘆賞して、心の平和を乱すことがなくなつた。

白人といえども我らが同胞である。私は人種的偏見を心底より一掃するようになった。米人は親切な、極めて単純な、正直な国民であるという概念をつかむことができた。そしてこの言葉に反対する人々に会えば、これに同情し、憐れに思うことができるようになった。こう思えるようになつてから、私は自分が一段偉くなつたような心持ちがするのである。白人をシャクに思つていた頃は、なんとなく白人に自分の頭を大きな掌でつかまえられているような気がしたが、今日では米人を兄弟と思えて嬉しい。彼の成功を喜ぶことができるような心持ちがする。シャクに思つていた頃は心の底に「恐れと劣り」を潜在意識として持つていたが、今日ではもう平たい心で手が握れるような気持ちがする。

(大正15年2月21日号『北京週報』)

北京をしばし去るに臨んで

北京に在ること七年

北京に来て私は、一意専心、支那語研究に熱中することにした。大日本支那語同学会に寄宿して、狂的研究をなしたのである。学校の課業四時間の他に、午後も夜も支那語の教師を招いて勉強した。学ぶこと二カ月目にテーブル・スピーチをやり、一年目には燈市口の教会で短い演説をした。

支那語が自由に話せ出した頃、北支旱災救護の事業に参加した。そして私は何かやり場のないお金、二百何十円かの処分を依頼された。そのお金は確かに北京で災民子女に与える綿衣を造る仕事を受けた時、予算よりも少額でできあがつたために残ったお金であった。その処分の一方法として朝陽門外に一貧民学校を建立することになった。それが私の学校（崇貞学園）の創始である。二百五十円ばかりのお金で、学校を建てると言えば、人は皆笑うであろうが、しかし私は本氣でやり出したのである。五月三十日に設立したのであるから、夏休みまでこれを継続し、二百五

十円を全部費やし尽くして、私は募金のために日本に向かうこととしたのである。

神戸のメリケン波止場を上がれば、栄町通りはきわめて近い。私はかの田村新吉氏を思い出したのである。田村氏が神戸の商業会議所の会頭として、支那漫遊団を引率して北京に乗り込まれたのは、その年の春のことであった。私は田村商会を訪れて約二時間にわたつて私一流の支那論を談じて訴えたのである。すると即座に五千円を寄付してくださつた。

私はその夏の募金運動において約一万円余りを集めた。年齢二十九歳といえば、まだ青二才である。よくもこの未知の青年に、大金を委ねられたものである。

支那で学校を作るには、少なくとも大学ならば五十万円、中等ならば二十万円の基本金をもつてからねば駄目である。私はそれを集めてみようとえたのであるが、過去十年間の経験によると、ほとんど不可能であることがわかつた。

私は今や新しい道に進もうとしている。いくら気張つても、基金が不足しては学校は発展しない。今のような設備で現状の教育をしていては、日本人の体面にもつかわると思う。それなのに、私が過去十年間維持してくれたわが党のお金持ちが貧乏してしまつたり、不景氣のために、もうお金を出してくれなくなつたりした。

生活は貧しくとも

私は過去十年間、貧しいながらもしつぽを出さずに今日まできた。日本から金でもらった収入は、銀に換えるとともにない貧しいものであった。時には月に四十ドルで一家を支えた。この間も妻と二人で計算してみると、平均七十四ドルくらいでやつたものである。あの東総布胡同の化物屋敷にいた時で、金が下がるとたちまち転宅したのである。こういう貧しい生活であるから、ある時は一家族率いて食客に入つたり、ある時は夫婦別居したり、日語学校を作つて小遣い錢を得たものである。私が文章をもつて支那論を発表したのは、全く小遣い錢取りにほかならなかつたのである。

貧しい生活であつたが、雑貨店に一銭の借金をしたこともなく、不義理というものを何人にもかけたことがない。ただ私が残念に思うことは、在支十年、ただ一枚の外套も妻のために買ってやれなかつたことである。彼女は奉天で、外套なしで一冬を過ごした。北京では、私が天橋で五ドルで買い取つた男用の外套を直して、これを着て恥じなかつた。しかしこれも彼女の奮闘史を飾る笑い草となつた。

さて私は米国から、私の仕事はこれからだと思って帰朝してみると、私を維持した人で財を全

く失つて赤貧洗うがごとくなつた人もあり、今なお栄えている人でも、心が変わつてか、もうお金を出さないから一人立ちで行けとのことである。

私は今まで、この学校のためには、小心翼々やつてきたのであるが、自分の生活費に関してはなんら頓着せずに、きわめて樂觀していた。いわば人をあてにし過ぎたのである。

私はいかにして北京に乗り込むべきかについて考えた。妻は言つた。

「私どもの学校には、一人のボーアイとアーマ（女中）が置いてあります。彼らとても、おののおの二、三の子供をもち、おののおの七、八円の給料を取っています。私はアーマになりますから、あなたはボーアイ兼任の校長をやつたらどうでしょう」

しかし、彼女は、こう言う裏にも嗚咽しながら語つていた。私はさすがに彼女は武士の子であると思つた。

私の友人は、この私たちの悲境を知つて、方々から就職口をさがしてくれた。私が支那を棄てれば、仕事が見つかることもわかつた。

私は何も天下の大牧師になろうとは欲せぬ。私は何も大学の教授になりたいとも思はない。私はあの朝陽門外の小さい学校の経営者でもつて足りるのである。このやりたい支那人教育をするためには僅かのお金もない。やりたくもない、より世間的に幸福な地位ならば、いくらでもあるとは、何という皮肉であろう。私はかかる皮肉な人生を悲しむ。私はこうしたなりゆきで北京を

去り、支那人教育者として使命を終え、学んだ支那語を忘れ、きわめし支那事情の知識を台無しにして、北京を離去すべきであろうか。

有島武郎は、秋を見てから死にたいと遺言した。私は北京の秋を見てから北京を去りたく思つてやつて來た。秋の北京の自然はまた格別である。

北京の人も自然も、私を引き止めてくれるようだ。しかし、機にあらざればいかんともしがたい。私は日本に帰つて確実な歩調をもつて前進し、他日、再び北京に来るであろう。今度来る時は、一生北京で生きられるだけの用意をしてくる。読者よ、諸君は私が熱心な支那研究者でありしことを記憶していくほしい。

（大正15年11月7日号『北京週報』）

神のガイダンス

講師稼ぎ

内地に引き揚げて、おもむろに捲土重来を期す決心であつたから、崇貞学園は家具も売らず、そ

のままに残して支那を引き払つた。ときおり妻を北京に遣わして学校の計画を立て、妻のいないときは、三菱の矢野春隆氏に万事崇貞学園の面倒を見てもらうこととした。矢野氏は崇貞学園の忘れてはならない恩人であつて、あの方をおられなかつたら、その頃崇貞学園はへこたれてしまうところだつた。

内地に帰つて最もうれしかつたことは、畳の上の生活ができたことである。素足で畳の上をさつさつと歩くとき、足の裏に感ずる日本は何ともいえなかつた。しかし私の内地における四年間は実に忙しかつた。初め一年間は基督教世界社の編集主任もやらせてもらつて百二十円いただいた。それを一文も残さず北京に送つて崇貞学園を支えねばならなかつた。そこで同志社神学校の講師をするやら九條教会で日曜の夕に講演をさせてもらうやら、あるいは崇貞学園の製品を夙川の外人住宅に売りに行つたり、石山のレオン会社に働いている外人技師に買つてもらつたりして、どうにか自家と崇貞学園をかつかつながら支えた。

『基督教世界』の編集主任の田中君は渡米中だつたが、帰られることになつたので、同社を辞して京都に移り住み、同志社の講師になつた。講師は一時間教えて幾らという制度であるから、私はユダヤ人のような心持ちで、何時間でも教えさせてもらえるだけ受け持つた。馬車馬のごとくに働いていながらも、内地に帰つたら必ずやろうと願つっていた日本史のリサーチ・ワークを、大阪や京都のライブラリーでやつた。そして支那大におもしろく読ませる日本史概説の草稿を書

き上げることができた。

八方ふさがりの厄年

日本においては、河童が陸へ上がつたようなものだと思いながらも、四年間同志社に勤めた。海老名総長がおやめになつて、大工原総長が来られ、予科長も変わり私の厄年は近づいた。四十一の前厄は辛うじて過ぎたが、四十二の厄年はもう八方塞りであつた。

その年の夏のある日、私は野尻の湖辺にあるクルミの木陰に筵むしろを敷いて、例年のように崇貞学園の製品、テーブル・クロース、ベッド・カバーをずらりと並べて店を張つていた。ズボンとワイシャツだけになり、シャツを腕までまくり上げて売つていた。西洋人がひやかし半分に集まつて来るのをつかまえて、

「オール・プロフィット・ゴウ・ツウ・チャイニーズ・スクール・ファンド」（全ての利益は支那の学校の資金になるんです）

と叫びながら呼びかけていた。ところがふと目を上げると大工原総長がお立ちになつてゐる。総長は信州の人であるから遊びに来られたのであろう。

「弱つたなあ」

と思つたが、続けて傍らの香具師と共に西洋人に呼びかけた。

そういうことが影響を及ぼしたか、それとも野球部長としてのやり方が、同志社の幹部の意志に沿わなかつたのであるか、間もなく同志社を去ることになった。

私は同志社の野球部長をやつていたが、野球部は何千円か、運動具店に支払いがたまつっていた。その運動具店主がたまたまチフスだつたか赤痢だつたかで入院したので、店員が困つて三百円だつたか、なんでも三分の一か四分の一のお金で帳消しにするから、キヤツシユをくれと言つてきたので、私は腹を決めてそれを承認し決済してやつた。するとそれは縁日商人がやることだと言つて、ついに私の部長時代にできた借りでもないのに、法廷にまで立たねばならぬことになり、裁判の費用だけでもずつとそれよりもよけいに要り、新聞に書かれるなど恥を世にさらしたのだった。

何がたたつたか知らぬ。ことによると私が試験のカンニングを堪忍してやつたことが、同志社幹部のお気にさわつたのであつたろうか。

私の司級するクラスに放送事件というのが起つた。試験中、一人の学生が英語を大きな声で訳讀し、その周辺十一名のものが聞き取つたというのである。その試験の監督が老齢で耳が遠かつたから、そういういたずらをやつたのである。

試験場のカンニングは退校と決められていたが、私はその親たちを呼び寄せて、それを伝えて

卒業まで再びこのようなことはせぬといいう一札を書かせた。そして事を穩便にすませたのであつたが、そのクラスに同志社の幹部の子弟がいたとかで、問題になつたのであつた。私は愛の教育者であつて、鞭の教育家ではない。それだから、彼らを退校に処するに忍びなかつたのであつた。ともかくも私は三月二十四日、同志社総長に呼びつけられて首になつたのであつた。

捨てる神、拾う神

私は神のガイダンスというものを信じている。神のお導きと訳すべきか。

私が同志社をやめたのではなくやめさせられた昭和七年三月二十四日その日の午後、私は同志社の予科の教授会に列席していた。列席していたというものの、末席を汚していくにすぎないのだった。そこへ少年給仕がそばに来て、

「大工原総長のお呼び出しです」

と言つたので、教授諸君と会釈をかわして、私はすぐ席を立つた。それが彼らと永久に別れ、再び席を同じくせぬことにならうとは……。

私は総長対に入つて行つた。

「君は失礼だが、幾つだね」

「四十二でござります」

「四十二だつたら、もう遅いくらいだ」

と言われる。だんだん承つてみると、商売替えをするならば今のうちの方がよいという御意見である。

「君は商売人であつて教育家に適していない」

「私が中学を卒業する時に、母も伯父もそれから学校の先生も、高商に入つて商売せよと勧めてくれました。しかし私は同志社の神学校を選んだのです。もし私に商才というものがあるならば、その商才をさしがて、私は宜教師になればよいのであります。私が商売人になるべきかどうか、それは目下の問題ではなくて、中学校の五年生の時の問題であります。今となつてはどうするともできません」

「とにかく同志社の幹部は君にやめてもらうことにしているのだ」

「そんなに私一人が、同志社にいることがめざわりになりますか」

「みんな、君を商売人にしたがつてているのだよ」

「それでは、下の事務所に行つて辞表を書いて来ます」

「いや、別にすぐやめるというのではないのですよ。半年とか、一年とかのうちにやめることのできるように、方針を立ててもらいたいのだ」

「私の考えでは、いつそのこと、失業してあぶれてしまわぬと仕事など見つかるものではないと思いますから、はなはだ勝手であります。今日すぐ辞表を書かせてもらいます。印も持参しておりますから」

「それはなかなか手まわしがよい」

私は辞表を書き上げて、再び総長室に行き、同志社を去つたのであった。同志社は私に、「教育家にあらず、商売人なり」という極印を捺して首にしたのである。

総長室を出た私は、同志社の鉄門を出て今出川御門おから御苑内に入つた。私はその鉄門を叩き、同志社が私を育て上げたことを名誉とするときが来るであろう。それまでは決してこの門を再びくぐるまいと、心中堅く誓つたのであった。

御苑を通り抜けて、新京極に行き活動写真を見た。そして日が暮れてから、四条通を東へ行き、橋畔の八百政でランチを食べ、それから電車に乗らないで加茂川畔べりをさか上つて植物園まで行き、そこから金閣寺に近いわが家に帰つた。私はどうしても家に入れなかつたので、再び西大文字山の麓にさまよい、金閣寺に出てわが家を見ると、豊公の土壙どひの上に建つてゐるわが家は、金閣寺からまる見えである。

「まだ起きている」

私は家族が眠つてから家に帰ろうと思つた。ようやく明かりが消えたので、家に帰つたら、い

つも先に寝て、私が帰ったからとて起きて来ない家内がその夜に限って、「お帰りなさい、どうしたんですか、顔色が真青よ」と言う。

「どうとうその日が来たのだよ」

「首になつたの」

「失業者だ、明日からは」

今日の教授会に給仕が呼びに来たときからのことを、詳しく話して聞かせた。

ほぼ話し終わつた頃、美穂は二階から讃美歌を持って来て歌い出した。

「おいおい、失業式というものは、宗教的でない方がいいよ。やめてくれ、抹香臭いことは」

彼女はかまわざ独唱を続けた。あたかもその讃美歌はこうした場合に歌うべきものと、かねがね考えていたかのように彼女は五〇六番を選んだ。

一、わがゆくみち いついかに
なるべきかは つゆ知らねど
主はみこころ なしたまわん
そなえたもう 主のみちを

ふみてゆかん ひとすじに

二、 こころたけく たゆまざれ

ひとはかわり 世はうつれど

主はみこころ なしたまわん

三、 あらうみをも うちひらき

すなはらにも マナをふらせ

主はみこころ なしたまわん

讃美歌五〇六番

彼女は声高らかに独唱した。私も三節目と一緒に歌つたが、その時初めて涙が頬を流れるのを覚えた。すると彼女は歌い終わって、「私が祈ります」と叫んで、

「神様、私どもは家庭を持つてより、今日一日、食物が与えられないということはどうございませんでした。あなたは私どもを必らずお助け下さいますことと存じます。同志社は私どもを棄てても、神様は私どもをお棄てにならぬようにならぬよ……」

といつて、短いお祈りをした。

「さあ、休みましょう」

「中学校の入学試験に一生懸命になつてゐる子供を持つていながら、失業するなんて本当に僕は、家族に対するすまなく思つてゐるよ

「大丈夫よ、何とかなるにきまつてある。今夜はぐつすり眠れるようでなくつては駄目」
私は二階に上つて眠つた。しかし美穂の期待するような眠りには陥れなかつた。そして夜半に床を抜け出し、スーツ・ケースを持ち出して旅仕度にとりかかつた。「そこそやつていううちに、美穂が目をさました。

「何をしていらつしやるの」

「明朝立つて、東京に行つて来ようと思うんだ。少々心当たりがあるんだ」

「では、私が用意してあげますから、あなたはおやすみなさい」

それから私はうとうとと一眠りした。朝起きたらあたたかい御飯が炊いてあつた。美穂はあれからずつと起きていたらしい。

私がその熱い飯にお茶をかけたら、

「あなたは御飯が喉を通らないのですか。失業した翌日から、御飯が喉を通らぬようでは困つたものですね」

「なに言つてるんだい。起きる早々朝っぱらから、熱い飯が食べられるものかい」

家を出てから五、六十歩も行つたころ、美穂が後ろから呼びとめた。

「仕事が見つかったら、私に相談しなくてもよいから、即座に引き受けるといいですよ。そうすれば感激がありますからね」

「よし、そうしよう」

タクシーを拾つて京都駅に行つた。やつと「桜」号の急行券を買うことができたが、改札口でもう危いから駄目ですといつて、入れてくれなかつた。汽車はまだ動いてはいなかつたけれども。もしその急行に乗れていたならば、多分、私は東京のある大学の予科の支那語の先生になつていたであらう。

ところが、急行に乗り遅れたために、どんな小さい駅にも停車する鈍行に乗つて東海道を行くことになつた。そして近江八幡駅に汽車が着いたとき、にわかの思いつきで私は下車した。

スーツ・ケースを携えて、私は近江兄弟社、メンソレータム会社を訪ねた。そこには私の竹馬の友、吉田悦蔵君がいる。

私を見るなり、同君は、

「よう来た。君をなア、いよいよ北京に行つてもらうことにきのう決めたところじや」

「へえ」

「同志社は承知しよるだらうか。一つ電話をかけて聞いてみよか」

「いや聞かんでも、承知するにきまつてる」

本当に偶然の一致とはこのことである。人間は自分の日記の次の頁に何が書いてあるか、それが分らぬために心配もし、また悩むものであることを知つた。

私はこうして勇んで北京へ帰つたのであつた。

妻・美穂の死

私の厄年はまだもう一年残つていた。四十二歳の厄年はこれだけですんだが、四十三歳は後厄である。北京に帰つてせつせと働いている時に、京都に残して来た美穂から、手紙ごとに体の具合が悪いといつて来るのだつた。大したことはあるまいと思つていると、今度は十一歳の娘、星子から、「ママはもう、この頃はさつぱり御飯を頂かなくなりました。もう手紙も書けぬと言つていらっしやいます」という代筆の手紙が來た。

ついに電報が來て、「ミホ ヤマイ アツシ イソギ カエレ」である。もう取るものも取りあえず、朝鮮経由、汽車で京都に向かつた。

十一月十七日、京都に着いた。美穂はもう骨と皮になつっていた。口にゲロゲロと痰を出して、その口を拭うために一晩にちり紙が何十枚もいるというほどであつた。私は一夜看護してやりながら、
「これはいけない、あすは入院させる」と言つたら、

「入院するのはよいが、お金はありますか」

と言う。お金はどうにでもなるよと言つて笑つた。なるほど、私どもはお金を少しも貯えないので、みな崇貞学園に入れ込んでいるが、神様は必ずなくてならぬものは与え給うことを信じていた。朝になるのを待つて、府立病院に入院することにした。

死ぬ二年前、彼女が北京へ行つて校舎を建てた頃、崇貞学園に呉という小使いがいた。夫婦で学校の面倒を見ていたが、その妻が胸を病んで苦しんでいた。そこで美穂は努めて世話をやってやつた。アルコールで体を拭つてやつたり、その蒲団を太陽にあてたり、白菜のスープを作つたり、栄養のある食べ物をこしらえてやつたり、病人に日光浴をさせたりしたものだつた。

そして彼女が刺しゅうをどつさりこしらえて帰つて来た時に、私は、

「あなたの体にはどうも微熱があるぞ」

と言つて、彼女に一度計つて見よ、微熱は悪いぞと、一再ならず言つたことがあるのを私は覚えている。

府立病院に入院するため、彼女を乗せた自動車が家を出るとき、「もう一度、わが家を見せてちようだい」と言つて、タクシーの窓から眺めたのであった。思えばあれが彼女にとつてわが家の見納めであつた。

府立病院に入るなり、重病だというので酸素吸入をさせたり、看護婦を二人頼んだりしなけれ

ばならなかつた。私はその支払いが一日八円も九円も、多い日には十二円も要るので、どうしたものかと心配した。しかし週末の支払いのときには、不思議にもお金が降つて來た。

今日は支払わねばと思つていると、メンソレータムの吉田悦蔵君が来て、「お金がいるだらうから、持つて来てやつた」

と言つて持参してくれた。

病気は進むのみで少しもよくならぬ。ある時、賀川豊彦氏が京都に来ておられると聞いて美穂は、

「賀川先生にぜひ祈つてもらつてほしい」

と言うのだつた。美穂は賀川ファンであった。

「どうか再び立てるよう祈つて下さい」

と言つて、お願いするのであつた。

ちょうど入院一ヶ月目の十二月十八日だつた。彼女の瞳が非常に大きくなつた。私はもうこれはむずかしいと思ったので、泰と星子の二人の子供を病院の中に泊らせて、臨終に経ち合させた。十八日の朝から幾度も彼女の恩師ミス・デントンに会わせて欲しいと願い出たが、私はいい加減に扱つて、電話もろくろくかけずにいたが、

「ミス・デントンはまだですか」

とあまり熱心に尋ねるので、私もついにほだされてミス・デントンに電話をかけたら、お風邪で寝ていらっしやることのこと、やむを得ずその旨をいい聞かせると、

「ミス・デントンにお目にかかりぬとは口惜しいが、それでは星名先生にお目にかかりたい」と言い出した。星名先生はミス・デントンを助ける同志社女専の教授であつて、美穂の愛慕する先生である。十九日の朝になつて星名先生がお見えになつた。

「ミス・デントンは一言お礼を申さねば私は死ぬに死ねません。ミス・デントンには学生の頃、月々学資を出していただきました。そして私はまだ一文もお返していません。しかし私は支那の貧乏な学生にいつも学資をくれてやりました。どうかそれで帳消しにしてくださいませ。」

それだけの伝言を頼んでいると、院長の回診があつた。院長は診察して後、

「ご主人、ちょっと廊下まで」

と言つて、私を呼ばれた。私は院長から、

「もう、きょう中ぐらいの寿命とおあきらめ願いたい」という宣告を受けた。

しばらく廊下にたたずんでいた私は、どうしても病室に入れなかつたが、顔色を沈め、心をぐつと落ち着けて敷居をまたいだ。

「パパ、院長様は何とおつしやつた?」

何を問うのか、何を遺言するのかと思つたら、それが彼女の質問であつた。私はぐつと唾液を

呑んだ。

「お前の心臓が持つのと、肋膜の水がひくのとかけくらべで、心臓が弱り行くので心配だとのことだつた。しかし最後まで頑張つてくれよ、苦しいだらうけれども」

「いや、パパ、もう私は覚悟を決めたわ」

「そんなことではいかぬ。小さい子供があるのだから」

「私も、どうかもう十年、神さま、生かせて下さいと言つて、お祈りしたの…そうすると…神さま…は…もう、お前はわしのところへ…おいでなさい…子供はわしが育ててやるから…」

「おききなさい、今も神さまが、もう来なさいと、および…です。パパには…聞こえない…あのみこえ聖声が…」

私はこれを聞いて、本当にもう一言の言葉も喉から出なかつた。

「ついぶん、僕はお前に苦労をかけたね、すまなかつた」

「自分が求めました苦労でしたもの、何の不服もありません。あの刺しゅうを作つて校舎を建てる時は嬉しかつた」

「もう皆様に入つて頂こうか」

「ええ」

皆様がお入り下さつたら、今度は、

「看護婦さん、どうかそのお茶碗やお箸を整頓して下さいませ。お部屋をきちんとして下さい」
看護婦やら、お見舞いのお友だちが、部屋をすっかり整頓した。すると、

「あの花をおろしてちょうだい」

と言つたので、寝ていて見られるように鴨居の棚にあつた二鉢の花を下した。

「まだ、赤い色がぼうと見えるだけ」

「看護婦さん、着物を変えて頂きます。洗いたてのはありませんか」

そこで着物を変えてやつた。「皆様、ごめんなさい」と言つて、着物を変えてもらつた。

メンソレータム会社の重役佐藤安太郎氏が来られたら、

「どうか、清水の特長をお用い下さいますように。欠点の多い人ですけれども、どうぞよろしく
お願ひ致します」

と言つた。

「北京の学校は決してつぶれはしませんから安心なさいね」

と誰かが言つたら、

「我を忘れてした仕事ですから決してつぶれませぬ。パパ、しつかりおやりなさい。泰と星とに
あわせて下さい」

「ここにいるのだよ」

「泰坊はよく勉強しなさい。偉い人にならなくてもよいから、正しい人になつて支那の人々のため尼くしなさい」

「星ちゃんは、ママに代つて支那のためによく尼くしてちようだい」

「畏三はどうしたの」

「風邪で熱があるから家に寝かしているのだが、呼んでやろうか。会いたいかい？」

「呼ぶには及びませぬ」

ここまで語つて、二十分ぐらい黙つて、あぶあぶと口で深い息をついていた。

「私の骨は、どうか、高島の田舎に埋めないでね、支那に持つて帰つて下さい。そして学校の土にして下さい」

「よし、そうしてやる」

「讃美歌を歌つてあげましよう、何番がいいでしようか」

と南石先生の奥様が讃美歌を探しておられたら、

「讃美歌五〇六番」

と美穂自らが言つた。そしてみんなで静かな声で、

わが行くみち いついかに
なるべきかは つゆ知らねど
主はみこころ なしたまわん
そなえたもう 主のみちを
ふみてゆかん ひとすじに

と歌い終わると、

「今度はパパ一人でお歌いなさい」

と言つたので、私一人歌つてやつたら、その歌の終わった頃、筆と紙を乞うたのでノートと鉛筆を手に持たせると、

ミナサマ オサキヘ

ヨロシク タノミマス

パパ シツカリ オヤリヨ

と片仮名で書いて、首をことりと垂れた。それが彼女の最期であつた。
医師にすぐ注射をされたが、もう戻つては来なかつた。

三分の一ずつの生涯

まだ死なねばならぬような年齢ではない三十八歳の女盛り。崇貞学園はこれからというときに彼女はこの世を去つたのである。何一つうまいものを食べず、何一つ美しいものをもまとわづ、そして崇貞学園の庭の木々が、まだ花も咲かせず、実も結ばないうちに彼女はこの世を去つたのであつた。

私は彼女の遺言によつて、白骨を携えて北京に帰つた。多くの人々は北京で死ぬと白骨を郷里に持ち帰るのに、彼女は全く逆を行くのであつた。崇貞学園では盛大な葬儀が行なわれた。臨時の支那らしい大きな屋形を建てたが、立錐の余地なく支那の人々が参列してくれた。日本人も少數来て下さつた。それらの人々のうちで参列された大使館の原田書記官が、「排日のまだしづまらない北京において、日本人の葬式が支那人の手で、かくも盛大に行なわれようとは……」と人々に言われたとのことである。式後、白布に包まれた箱のまま校庭の一角にうやうやしく埋葬された。その上に小さな大理石の碑が建てられた。その墓碑には次のように彫られている。

清水美穂一生不求自己之安逸供其全身三分之一於学校三分之一為丈夫三分之一為兒女其一生未着珍貴衣履所用之物皆係友朋所贈之奮者不幸早歿臨終時囑日將我白骨帶往中國葬埋此為我對於中國最後之供獻

これは彼女の学生馬淑秀の撰した文字である。その意味は故清水美穂はその生涯の三分の一を崇貞学園のために、三分の一を夫のために、残る三分の一を子女のために献げ、一生人々から古着をもらつて着て、身に美服をまとわなかつた。そして、臨終のさい、「私の白骨は中国へ持つて行つて埋めて下さい。それが私の中国に獻げる最後のものですから」と遺言したという意味である。

清水美穂の略歴

明治二十九年七月二十三日滋賀県彦根市生まれ。彦根藩士横田耕太郎の長女。幼少のころ、実母が横田家を去つたため、祖母から大きな感化を受けて育つた。祖母は家老・脇家に生まれ、藩主・井伊直弼の奥方に仕えたこともある豪胆女傑の人であった。一夜、強盗が押し入つた時、「しからば不束ながら相手仕らむ」と一言して、薙刀で立ち向かい退散させた、というエピソードさえある。

彦根高女在学中に受洗。同志社女学校普通部を経て大正七年三月同校専門部家政科を卒業。在学中の四年間、西陣教会で日曜学校教師を勤め、生徒数を増やす才能を示した。（死後、同教会で葬儀挙行。）

同年五月、大連基督教会にて清水安三と結婚。奉天で南満医大病院看護婦学校講師。北京で夫を助けて飢饉被災児の救済に従事し、自ら率先して匪賊が跳梁する地方に赴いた。崇貞女学校では、恩師ミス・デントンを理想としながら、図面、手工、裁縫、体操など教えた。大正十三年、夫の留学に同道して渡米、桑港で働きながらもマクドウエル・カレッジで洋裁を学び卒業したほか、孤児院で実地研修した。

昭和二年、財政事情の悪化で夫がやむなく帰国、同志社に奉職してからは、排日時代の危険を冒してしばしば中国に渡航し、崇貞の経営に当つた。米国で習つたフランス刺繡を応用した各種製品を生徒に作らせ、それを日本に持ち帰り、自らも行商して経営資金を得た。昭和七年、夫が同志社

を辞職し、北京にもどつてからは、京都で二男一女の教育に専念、その傍ら梅花女子専門学校の講師を勤めた。積年の無理がたたり、病状が悪化、昭和八年十二月十九日召天。三十八歳。

（昭和9年1月1日号『基督教世界』）

参考文献（清水美穂の伝記）
松本恵子著『大陸の聖女』（昭和15年3月 隣友社）

崇貞学園の精神

昭和十一年五月、清水安三先生は小泉郁子先生と再婚、以来夫婦協力で崇貞学園の經營に当ることになった。以下は昭和十一年十月発行の「宗貞学園一覧」『支那の友』特別号に掲載されたもの。この一覧によると、当時の崇貞学園は、小学校（六年制）と初級中学校（三年制）からなり、専任教員数は清水夫妻を入れて七名（ほかに講師が三名）。学費は授業料免除、ただし毎学期の雜費として小学校が二十銭、中学校が一元。創立以来の十七年間で、卒業生数が五百余名（中途退学者も入れると千名以上）、うち日本への留学生四名、東京で各種技術を習得した者十数名。

（編集者）

「工且読書」

崇貞学園の精神の一つは、かつ工し、かつ読む、労働は祈祷なり、“愛做工”（勤労を愛す）の精神である。私は十歳の幼年の頃から働くことを教えられた。母は私に鶏を飼うことを教えた。

田は見渡す限りわが家のものであつたから、鶏の食する粄（しいな）^{みよち}は、うだるほどあつた。私は鶏に餌と水をやつてそれから学校に行かねばならなかつた。つらいこともあつたが、あの少年の頃の養鶏を思い出すと今もなお、ニッと笑みを浮べる。

大事な鶏が十四羽もイタチにやられ、枕を並べて倒れたこともあつたが、とつさのウイットで、その鶏の死骸を肉にして、伯父や親戚方に持ち行き飼料を貰つたお礼としたこともある。もつとも私らは自分の飼つている鶏の肉は一度も食わなかつた。少年養鶏業者ながらも、菜っぱを食わせたり、魚のあらなどを煮て飼料をつくり、牡を皆無にしたり、農業学校出身の先生に聞くこと学ぶことをいちいち実験した。特に愉快だったのは、卵を料理屋へ売るのことだった。かくして高等小学校を卒業する頃には何十円かの貯金ができた。

養鶏をやり出して以来、私は親に教科書代だの紙や鉛筆のお金を貰つたことは一度もなかつた。少年時代の養鶏業は私に労することを教え、自発的な研究心を持たしめ、空論よりもより実際的な判断力を有せしめ、独立自営の精神を与え、私を計画肌となさしめ、動物を愛することを教え、夢見つつ働くようにした等々、随分いろんなことを教えられた。

一体世の中のことは合理的にのみ動くものではない。無軌道的に超形式的に動くことが多いのである。その非合理性、益軌道の軌道、超形式の形式は、概念の教育、抽象的研究では十分に会得できない。やはり理論より実際へでなく、実際より理論へと考えるように、もつとならねばな

らない。

孔子は学んで時にこれを習うといわれたが、そればかりでは駄目。習つて時に学ぶことが必要である。作つてみ、働いてみる時に、自ら会得されるものは、穩健にして進歩的かつ実現性ある真理である。さればこそかのペスタロツチも耕読に教育の精神を置き、中江藤樹も商売やら百姓をしながら自らも口を糊し、門弟にも勞し、かつ学ばしめたのである

H H H（スリーエイチ）はわが校の紋章である。Heart Head Hand 三つを並び訓練するのでなければならない。崇貞学園は三H主義であるから、今後といえど刺繡をしたり、葡萄をちぎったり、林檎の栽培をしたり、ピーナッツバターを作つたり、鶏を飼つたりして、いろいろ働かねばならぬ。

崇貞学園が労教を重んずるからといって、別に職業教育をするためにやつてているのでも何でもない。あたかも私が一生養鶏業に従事しないにもかかわらず、その少年時代、鶏飼いが私を大いに教育してくれたように、崇貞学園の生徒が刺繡をしたり畑で働くことが、生徒たちをいろいろな意味において教えるのである。刺繡を一生の仕事としないでも、働いた経験は一生を指導するのである。

であるから崇貞学園は生徒の手工作品には一つ一つ工賃を与えるのである。東京に近頃設けられたある学校では、生徒にただで作らせその材料すらも出させ、そしてそれを売つて学校の基金と

するのである。そういうことでは労教も半ば減ずる。

自ら働いて自らその賃金をとり、その利益を費やすことが一つの体験となるのである。そうでないと、「学校のためなら働くが、自分の家のものならば編糸一筋いじるのも面倒だ」という娘が出て来るではないか。よしんば学校のためにそのお金を費やすとしても、一旦は自分のガマロに入れ、それから献げられるべきものである。故に「愛倣工」の精神はやがて奉仕にまでのばされねばならぬ。

「学而事人」

崇貞学園の精神の第二は、学んで大に事^{つか}えるにある。学問のために学問するのでもなければ、自己の教養のために学問するのでもない。大に事えたために学問するのである。このことははつきりしておくのである。

学問のために学問する人々もあつてよいかも知れぬ。自分の教養のために学ぶものもあつてよいだろう。別に反対はせぬ。けれども特に支那人に向つて提唱するのは「学而事人」だ。

清朝の学問は、学問のために学問することにおいて極つた。自己の教養のために学ぶのも、支那従来のやり方である。しかし支那において学んで大に事えたとするものは少ない。故に崇貞学

園は人に事えるために学ぶことを提唱せんことを欲する。

学問のみではない。労工耕地も自分の利益ばかりのためではなく、大に奉仕するためになすよう努力せねばならぬ。共済組合のために働いたり、文盲の人々のため手紙を書いたり、幼小から学んで人に事えるところの習性を養わねばならぬ。

この「学而事人」の精神は、やがて朝陽門外の地区を改造する社会運動となるべきだ。

今日女性がこんなに働いているところは、北支では朝陽門外だけである。近來はその弊が出て男性が皆ごろごろして、女が刺繡に熱している有様だ。弊は弊として、女性も働くという小社会を作り出したことは愉快なことである。

この如くに今後とも、あらゆる方面に学而事人で行けば社会は改造し得るのである。香山県の一郷村を改造せんとて、村の川に橋を架け、夜の村街道にランプを掛けた少年孫文はやがて長じて支那全体の改造案を立てたではないか。

今崇貞学園の少女が、この朝陽門外のあらゆる社会悪を眺めて、これを改造せんと欲して、手の及ぶところから手出しして行くことは、決して小さい事業ではないのである。崇貞学園は実に「学而事人」の精神をもつて社会改造の源泉となさねばならぬ。及ばずながら今日まで学園はいろいろの刺戟を学校周囲に与えてきた。今後はますます発らつたる感化影響を与えねばならぬ。

砂漠を飛行機の上から眺めるときに、所々に緑の地域がやや円形になつてゐるのが見える。そ

の縁の地域の真中には必ず泉が湧いているのである。崇貞学園はその泉であらねばならぬ。

(以上清水安三記)

崇貞学園が目指すもの

(清水郁子記)

崇貞工読学校という名は何だか古くさい感がするので、この度作った校門には崇貞学園と金字を彫り出したが、創立当時には、学堂というのが普通で、その崇貞工読学校という名さえが、尖端的で最新式の呼び名であったということである。古くさい校名にもそこに存在意義の深重なるものを見出して私は心から満足し、感謝している。

今日までにわが校が何物か記録に値する成果を挙げ得たとすれば、恐らくは北平朝陽門外の女性をその暗黒生活から救い出したことにあると私は思う。暗い街の灯影にさまよう女性に高壇から婦徳を叫び、貞操を呼ぶことは至難である。よし千万言を費やすも、恐らく蛙の面に水であろう。何となれば彼女らには解決さるべき重要問題がもう一つその奥に頑張っているからである。外ならぬ生活問題である。彼女らの求めるものはまずパンである。生きんがための喘ぎを解決す

ることが、彼女ら救済の第一着手であらねばならぬ。

その余の問題の解決は自らその裡に含まれてゐる。崇貞女学校が生徒に課するに工讀教育をもつてし、工即ち手工を経済問題解決の方途として採用したのは、創立者その人の胸中にそうした社会問題に対する一種の洞察があつたからだと断言して私は憚らない。事実予想は的中した。多年哀しき境遇に喘ぎつつあつた彼女たちは、かくして自らを救うと同時に、親を救い、兄弟姉妹を救い、やがては社会そのものを救いつつあるのである。

彼女らの貞操が僅かに十銭二十銭の銅貨と交換されつつあつた昔を偲ぶ時、けだし彼女らの感慨は無量であろう。こうした實際問題に立脚しつつ、漸次に啓蒙を企図し、そのままに崇貞を謳い入れたわが校の名が、創立當時尖端的最新式の呼名であつたと聞くことは、まことに所以あるかなとうなづかれる。

私はここに来て、毎日、幼い子ら、若い乙女らの赤い唇から洩れる校歌を聞く。最近その歌詞の意味を了解し得て、更に一驚を喫し、かつこれを愛唱してやまない。これをわが読者の前に紹介することの徒勞ならざると思うので、今ここに掲げて全女性のために高唱したいと思う。

崇貞学園の校歌

(一)

崇貞女校美如花
禮義廉恥張四維
中華一統萬古垂

(折返し)

教育平等是平權
富強責任男女均
空説解放亦徒然
慶祝崇貞万万春

(二)

我愛崇貞重知育
光茫万丈吞四海
學有淵源文郁郁
照耀東亞放異彩

(三)

女兒身體更宜強
強國根基在少年
体操唱歌樂洋洋
不讓男子著先鞭

読者諸君！ 何んぞその壯なるや！ 私はこの歌を聞くと覚えず心が躍る。第一節は美育、
さか

德育を奨励し、支那古来の道徳を力説している。第二節は知育を提倡して、世界に光被し東亞の

異彩を放てと。第三節は体育を高調し、強國の根本は少年にあつてしまふも男子に先鞭をつけさせぬと。折返しは男女平等、男女連帶の国民的義務に及んでる。

この校歌の作られたのは創立後一、二年あるから、今から十四、五年前の作である。歌詞は清水ともう一人賈和光ショウホウカンという、今は南京で家庭の人となつた女教師との合作である。今から十四、五年前といえば、ちょうど一九二十一、二年頃で、世界大戦後到る所でデモクラシーが高唱され、婦人界では女権主張のラッパが亮々りょうりょうと鳴りわたつた頃であつた。支那でも男女平等を高唱する婦人運動に油が乗り、しかも着々その成果を收めつた時であるから、こうした歌が生れ出るものも当然であつたであらう。とは言え、今日、どこの女学校においても、恐らくこれほど歯切れのよい校歌をもつてゐる所は稀れであろうと思う。スラムの町から、こうした声が挙げられたことは全く驚異に値する。

『世界日報』という新聞の婦人欄に最近の学生運動に關連して、國難下の婦人の覺悟といつた題目の下におかれてあつた内容には、左の三つのポイントが指示されてあつた。

- (1) 身体を強健にし艱難に耐えること。
- (2) 経済觀念を養い家庭生活を改善せよ。
- (3) 知識を広め物事の是非を明らかにすること。

支那の婦人界は、婦人の家庭還元と社会奉仕とをモットーとしている。支那の若い女性らの求

めているものは日本のそれと全く同じである。その意味でわが校の校歌は若人らにアピールするに足るものであると思う。私はこの学園から将来支那婦人界をリードする女性を送り出したいものと切に希つている。

（『崇貞学園一覧』）

崇貞の子供たちと共に

（清水郁子記）

それは或る日の朝のことであった。私が崇貞学園の門前で人力車を乗り捨てると、校庭で遊んでいた子供らが、待ち構えていたように走り寄ってきた。小学校部は七つ八つから、中学部は十六、七歳までの女の子らである。私かまだ支那語が話せないので、英語や日本語をチャンポンに用いて話すと、可愛い目を白黒させている。

この学校が孤児院から始まつたというと、まだ見ぬ人は、子供らがどんなに見すばらしい格好をしているかと思われるであろうが、事実は全く相違している。彼らの身なりは皆こぎつぱりしている。このあたりの貧民がほとんど、急激な運命の転換で地位財産をなくした政治的貧民という理由からか、子供ら一人一人は、なかなか整つた眉目形をしている。日本人にもまれな愛くる

しい顔つきをしたのもいる。

その日、二時間目の休みに私が太陽のあたっている外に出ると、小学部一年生の子供が、自分の習っている読本を持ってきて拡げ、その中の猫や犬の絵を指でつきながら、マオ、ゴウと読みだした。私はニッコリ笑って、あとからマオ、ゴウと口まねすると、子供は嬉しそうにページをめくる。いつの間にか全校の生徒が黒山のように集ってきて、私の発音の指導を始めた。始業のペルが鳴つてもなかなか立ち去ろうとしない。私は涙ぐましい気持で、やつと皆を教室に送り返した。

全く感激的かつ印象的、私はこの学校が家庭主義に立っているということを、初めて明瞭に感得しえた。それ以来私は、毎日の登校を楽しみにしている。同じような光景が来る日も来る日も繰り返される。親しみは増すばかり、私が早く帰るときには、子供らは門の外まで送つてきて、サヨナラを連呼する。

私は今日、支那にきたことを感謝している。私が日本にいて、少しづつ学説の受け売りをしているのであつたら、生涯こうした甘い心境を味わうことはできなかつたであろう。私はつい先だってまで、自ら教育者たることを志し、しかもこれを放てきしたかの如き悲哀さえ感じていた。しかし今日では、むしろ教育者としての完成を期すため、ここに遣わされたのではあるまいか、と感謝している。

(昭和 10 年 12 月 15 日号『教育女性』全国小学校連合女教員会機関誌)

崇貞学園の理想と特徴

崇貞学園はいろいろな理想を持っているが、その一つは藤樹書院のような学園にしたいことだ。

藤樹が、もしも江戸表に打つて出たならば、必ずや林羅山を向こうに回し得たであろう。それなのに藤樹は田舎に帰つて、無知蒙昧もうまいの百姓の若者を門弟とされた。藤樹は刀を売つて元手を作り、酒屋を開いて酒を売り、自ら生計を立てつつ書を講ぜられた。彼の門弟もまた、野良で働いたり、書院で机に向かつたり、耕讀主義で勉強した。馬子をやっていた者もあつた。晩年、九州や奥州からも学生が送られてきたが、先生はそれらの色の青白い、細い脛の青年を百姓の家に預けて、半月は野良で働かせられた。働くということは、読み書き同様、学問であったのである。

私は藤樹を慕うこと實に久しい。そもそも物心ついて以来のことである。私は同志社で、大工原総長に、

「君は商売人になるがよからう」

と言われた。それが私をする文句だった。しかし藤樹を見よ。武士の魂として、当時の人々の最も尊んだ刀を売つて酒屋を開いたではないか。彼が商売したことによつて、彼の聖人たり得

る資格の一点一画も欠けるものではない。

私は次にペスタロツチを尊敬する。彼の教育施設は、孤児院みたいにまとまらない学校であった。それのみか、長続きのしないものであつた。けれども私は彼の精神が好きで好きでたまらない。特にその素人教育学がいい。

その次に私はトルストイのヤスナヤポリヤナの学校を顧みる。トルストイは学校になかなか興味を抱いていた。私は彼の学校を参考としている。

その他ブーカー・ワシントンやフレドリッヒ・オベリン、それからインドのタゴールの学園、皆好きである。崇貞学園は、それらのものを精神的伝統とするけれども、また崇貞学園独自のものがなくてはならない。

崇貞学園の持つてている特徴を語るならば次のとおりである。

(一) 崇貞学園は社会的活動の中心として学園を考えている。朝陽門外の貧民街のソーシャルセンターとして、学園とその校友を考えている。であるから「学而事人」というのが学校の一つのモットーである。学んで人に事える^{つか}という意味である。

(二) 崇貞学園は三H主義を看板に掲げてある。三Hとはハンド、ヘッド、ハートの三Hである。手を働かせることによつて心を養う。すなわち手から頭へ光を注ぎ込まんと欲するのである。それだから、「工而読書」という扁額が校舎に掲げられてある。

(三) 「微笑々々教而学、不損天賦是教育」という言葉が、崇貞学園の寄宿舎、芝蘭寮の入口の扉に書いてある。「にこにこ笑いながら教え、しかして学べ、天賦を損わないように気をつけろ」という意味である。

(以上『朝陽門外』)

胡適君の主戦論

昭和十一年春、私は大阪の実業家、秋守常太郎氏の鞄を持って支那内地を一巡した。

鞄持ちといつたところで、鞄は脚行——赤帽の持たせるのであるから、辛いことも何もなかつた。

旅行は非常に愉快だつた。愉快であるばかりでなく、實に有益だつた。その道順は、張家口、包頭、大同、太原、西安、洛陽、開封、漢口、武昌、長沙、重慶、南京、曲阜、濟南、青島であつた。

支那内地一巡から帰る早々、胡適博士を米糧庫の邸に訪れた。博士の家は朱門が美しい堂々たる門構えであつた。私と胡適君とは同じ歳で、二十年来の朋友である。彼の血液もO型であり、私の血液もO型である。彼は二十年前すでに中国第一の名士となり、十年前すでに雷名を世界に

馳せた。しかるに私は二十年前にあつては、彼の門を叩き、その引見してくれるこことをひたすら喜び、十年前には北京在留邦人にすら知られない軽輩であつた。

「胡博士、この度、私はお国をずっと一巡遊歴してきましたが、得た最も大切な感想は、日支の間に戦争がいつ何時爆発するかわからぬようになつてゐるということです。蒋介石の抗日作戦は発火点近くまで熟していると考へます。であるから、今のうちに工作しておかぬとどうすることもできなくなりますよ」

「……」

「私は戦争を予言したいのではなくつて、予防したいと思うのです」

私の最初の考へは胡適君を動かして、なんとかして戦争を未然に防ぐ運動を引き起こしたいと思つたのである。しかしに胡適君は、

「ナチュラリイ・ウイ・シユツド・ファイト・アグーンスト・ジャパン」と叫んで私の心持ちなど毛頭理解しようとしている。

「満州事変当時よりも、ずっと今日のほうが中国に有利である」とも言つた。

「日本はちょうど、歐州大戦直前におけるドイツと全然同様の国際的孤立に陥つてゐる」博士は、私が日本国民の一人であることに対するすら、憐れみを感じていてくれている口ぶりだ

つた。私が喉を痛めていたので、がらがらする咳をひつきりなしにするのをいたわって、自ら奥のプライベート・ルームからあめ玉を持つて来て私に二つ三つくれた。

そうした態度であるにもかかわらず、私はひるまず、中国としてはこの時代において、あたうる限り日本との摩擦を避けるのが聰明であることを説き、中国はまだまだ忍耐せねばいけぬと、じゅんじゅん提唱して聞かせたが、同君の耳にはからきし入らなかつた。

私は鋒先を変えて、平和なことがいかに愛好すべきものであるかを、口がすっぱくなるほど説いた。時々座を立ち上がり、卓をたたいて論じたけれども、彼は右脚を左の膝の上に重ね、煙草をすぱりすぱり吸いながら、

「自分は、以前は自国人から嘲笑ちようしょうを浴びながらも、日支は決して戦つてはならぬと主張した。けれども、もう今日ではどうしても一度は日本と戦わねばならぬことを、つくづく感ずる」とまで言い放つて、きわめて落ち着いた態度を見せ、私に耳を貸してはくれなかつた。

私は今もなお、あの時、私に蘇秦の口才のないことを惜しまざるを得ない。

今次の支那事変は胡適博士と大いに関係がある。なぜならば事変の突発した時、あたかも牯嶺において大学教員会議が開かれていた。全支の大学校長、有力教授学者が廬山に集まっていた。そして蒋介石は学者教育家の意見を徵して、戦うべきや否やを決したのであって、蒋介石は胡適に諮詢するところが最も多かつた。彼は教育会議が終了しても、引き続いて蒋介石のブレイン・

トラストの重要な一員となつて、蔣介石の帷帳の中などにどまつたのであつた。（注・その後、胡 2
適は駐米大使に起用され、抗日戦争の推進に活躍した。）

あまりにも私か悄然として、魂の抜けた人間のようになつて胡適君の邸を辞して帰ろうとする
のを見るに見かねてか、

「忘也忘不了放也放不了剛忘了昨兒的夢又想起夢中的一笑」

と書いた一幅の書を私にくれたのだつた。その白話詩がどういう意味であるか、よくはわからぬ
が、繰り返し繰り返し読んでいると、何だかわかつたような気がしないでもない。

今日、私が予言したのとほとんど寸分変わらぬ結果になつてゐる。それ見たことかと言いたく
て、今この文章を綴つてゐるのではない。何故にもっと热烈に、一度ならず二度も三度も、胡適
君が動くまで日参しなかつたかと考へて、ひたすら熱が足りなかつたことを懺悔するのみである。

郁子・宋美齡を訪問

胡適君を訪問してから數十日ほど経つて、妻の郁子は蔣介石夫人宋美齡女史を訪問する計画を

立てた。

その頃私たちの家庭では、夕べに捧げる祈りは、必ず日支の間に垂れこめている暗雲の一日も早く晴れんことに言葉が及んだものだ。

ある日、妻の郁子が、

「私、一度宋美齡夫人を訪問してみようかしら」と頭の中に閃光のきらめくがまま叫んだ。

「そりや良い考えだが、まず旅費からして工面せねばならんね」

と言つてはいるが、実に不思議なことに、それから幾日も経たないのに、東京の婦人公論社から、宋美齡会見記事依頼の書状が舞いこんだものである、さっそく、すなわち昭和十二年正月、雪の降る頃だった。彼女は南京に向け旅立つ決意をした。彼女は米国留学時代の旧友を片つ端から訪れて、蔣夫人に見え得るよう尽力を請うてやまなかつたすると中山大学の総長、羅家倫君のミセスが、蔣夫人の友だちであることがわかつた。彼女が小泉郁子時代にハワイで開かれた太平洋婦女会議へ、日本全国女教員会を代表、デレゲートの一人として出席した際、羅家倫君のミセスも、支那婦女会の代表となつて来ていた人なので、非常に都合がよかつた。かくて加えて、羅家倫君とは私自らも一面識あつたので頼み込み、羅夫人は一肌脱いでくれることになつた。羅家倫君は、北京大学の学生時代、五・四運動における学生側の中心人物、リーダーであつた。

清水郁子は羅夫人に伴われて蒋介石夫人、宋美齡女史をその私邸に訪れた。邸宅には渋い趣味の硬木の椅子や机が道具だったそうな。入口のホールの正面には、蒋介石のお母様の大きい写真が飾られていた。宋美齡は、飾り気の少ない黒のワンピースだったが、実に上品な容姿だったそうである。

そしてその流暢な英語は、いかに多くの支那の婦人が語学に長じているとはいえ、おそらく夫人以上に完全な英語をしやべれる者は、そう多くはあるまいと思われるほどにうまかつたそうである。

ミセス清水の旅費の出所は婦人公論社であつたから、インタビューを書かねばならないという責任を持つていた。しかしそんなことはすっかり忘れて、なんとかして日支の間にたなびく暗雲を一掃するために、両国の婦人会がいつせいに立ち上ろうではありますかと、ぐんぐん迫ったそうである。

「私の夫、ミスター・シミズはもう先に、支那内地を一巡して帰り、ジエネラリッシモ蒋介石は日本と一戦交えるために、おきおき怠りないことを、見届けたと言いました。全天、暗雲がたれこめているが、しかし、まだ天の片隅にわずかではあるが、望みの光が輝いているのではありますか。我らは国家のため、民族のためを思い、考える以上に、母性愛から出発して、日支問題解決の鍵を見出そうではありませんか。焦土外交とは一口に言い得るもの、それは母の涙を

予想せずして、軽々しく言うことを許されぬ言葉です」

私は今ここに彼女が叫んだ言葉を、一語残らず書き綴ることを差し控える。なぜならば戦争はまだ進行中だからである。

ミセス清水としては、心を尽くし、心ばせを尽くしてアピールしたのであつたが、なにしろその頃の支那の人々は、戦つたら防げるかもしけぬ、防いでいるうちに、世界中の国々が、イギリスもフランスも、アメリカもドイツも、イタリアもむろんロシアも、ことごとく支那に味方して、日本を打ちのめしてくれるであろうと、ほとんど盲信的に考えていたのであつたから、宋美齡女史のようなお方でも、もう一つ「それでは」というところの意気を見せてはくれなかつた。

明治時代、日本が各国の横暴に対していくに隠忍したか、そしてまず内を固めるために、こくわ國恥を忍んだかを、るる述べた。

その時の感想として、

「宋女史が、日本留学出身だつたらなあ」とつくづく思つたと、彼女は三歎したものである。南京から帰つたミセス清水は、しみじみ感じたと見え、私に、

「もうこの上は、お祈りするより他に方法はありませんね」と言つて跪座瞑目するのみであつた。

(以上『朝陽門外』)

北京を戦禍から救う

昭和十二年七月七日、北京郊外で蘆溝橋事件が突発、ついに日中間の本格的な戦争が始まった、そのため清水安三先生は、古都北京を戦火から守る工作に奔走した。以下は当時の思い出である。

編集者

昭和十二年七月七日、朝十時頃だったかと思う。いつものように学校で教えていると、

「朝陽門が閉まりました。昨夜、蘆溝橋で日支軍の衝突があつたそうです」

とのこと、これを聞いた女学生の一人がサッと顔色を蒼白にした。

「いよいよ戦争だ。二、三年も前から日支は相戦うに至るであろうと予言していたが、どうどうその時が来たんだ」

昼食の時、遠雷のような砲声を聞いた。十日には北京、天津間の汽車が不通になつた。毎日砲声が西郊、南郊から聞こえるが、私はいつもと少しも生活様式を変えず、宅に預つていた東京の青年と共に、町を歩き回つた。

ある日私は、ふと思いついて、東交民巷の特務機関長の公館を訪れた。機関長の松井大佐は折悪しくご不在であった。そこで私は秘書の武田熙氏に面会して、

「昔ナポレオンがモスクワを攻めた時に、クレムリン宮殿を壊すまいと欲して、ロシア軍に協力を申し込んだということです。すなわち、ロシア軍にクレムリン宮殿から程遠い地点に行くようにな要請したのでした。また日本では西郷隆盛が日光に立て籠つた幕府軍に、一寺の僧を使いとして遣わし、名蹟を戦火より救うために、賊軍の山門より出て、何処へなりと他へ移動するよう要請したと伝えられています。なんとかして北京を戦場にしないでほしい」

と詢々と申し上げて家に帰った。ところが帰宅して、恰もひざまずいて神にお祈りをささげていると、その武田氏が、しかもフォードに乗つて拙宅へフウフウ言つてやつて来られたではないか。「松井大佐にアナタの来訪を告げたところが、『清水氏は一体どういう運動で、北京城をして戦禍から免れしめ得ると思つているのだろう。キミ行って、清水氏を呼んで來い』と命ぜられたのでやつてきました」と言う。私は「そうですね」と言つて、かねがね考えていた事を逐一申し上げた。

まず、日本文と中国文とそれから英文で、北京城を戦場にすべきではないことを詢々と書き綴ること。すなわち、大学やジムナジアムや公園の如きは、今後といえども建設されるであろう。けれども宮殿だの城壁だの天壇だのは、一度破壊したなら最後もう再び建設されはせぬであろう

それ故に北京を戦場としてはならない。

それから北京を戦禍から免れしむるためには、北京城にいる中国軍が北京城から立ち去るべきであるが、それと同時に日本軍はその中国軍の出城を邪魔することなく、また出て行く中国軍を決して追撃してはならぬ。そして日本軍は、中国軍が出城して、最も戦術上有利な地点にまで出て行つて、散兵、壕を掘り、完全に陣地を布くまでは決して発砲追撃せぬこと。よろしく中国の発砲を待つて、おもむろに迎撃なり追撃をすること。

そしてこの歎願書には、北京在留の知名な日本人、それから北京在住の英米人宣教師の署名を乞い、その上に北京大学や北京大学の有名な教授たちの署名をずらり並べておくこと。そしてこの歎願書を、宋哲元、川辺正三両将軍宛に認めて、西将軍のところに持つて行くこと。

「いかがでありますようか。こうした運動をこの際やつてみてはと思うのですが……」

とるる申し上げた。武田氏は、「よろしい。帰つて松井特務機関長に申し上げましょう」と言つて、お帰りになつた。その翌日再びおいしくださつて、

「自動車を貸してあげるから、急いでやつてみてください」

と言つて、運転手をつけてフォードを一台私に貸与されたではないか。そこで私は早速、例の日本文、中文、英文の歎願書を作成し、北京大学の董教授に手伝つてもらつて、大学教授の署名を集めた。教授の夫人は日本人だつたから、第一言葉がよく通ずるので實に有難かつた。

当時北京の北小街には、英米宣教師の中国語学校があつた。その校長はペタス氏であつた。ペタス夫人は日本生れで、父君は仙台で一生伝道したデフォレス師で、ペタス夫人の妹は神戸学院の院長であつた。このペタス氏は私のこの北京を戦禍から免れしむる運動に大いに共鳴して、北京美以美会の劉牧師が昔、宋哲元將軍の若い頃、軍曹の頃に、洗礼を受けたというので、私に劉牧師を紹介してくれた。言うまでもなく、その劉牧師を介して宋哲元將軍に歎願書を届け得たことは、まことに幸いで、極めて有効であつたと考えている。

思えばそれは昭和十二年七月二十九日のことだつた。その日は一天コバルト色の快晴であつた。朝起きて驚いたことには、街には兵も巡捕も誰もいない。きのうに変るきょうの姿である。ついに宋哲元は全て兵士七千を率いて北京城から去つて行つたのである。

そしてさしもの日本軍は、出城する中国軍に一発の砲撃も加えなかつた。実を言うと私はそうと言つて、出城したら直ぐ砲撃を加えて、宋哲元軍をせん滅するのではないかと、心ひそかに心配していたが、そのことは全くなく、まことに堂々たる態度であつた。かくして古都北京は廃墟とならず、今もなお昔の如くに存在しているのである。

（以上『朝陽門外』）

日中戦争突発 ——盧溝橋事件体験だより—

昭和十二年七月七日、北京郊外盧溝橋で日中両軍の武力衝突が突発、徐々に『日中戦争』に拡大してしまった。以下の文章は、清水安三先生が『基督教世界』（日本組合基督教会機関誌）に連続五回寄稿した事件突発当初の体験記。

原題は「北平（北京）だより」。

編集者

北京を戦場化しない説得工作

事変突発以来、私は北京を戦場にしないよう、天壇や宮殿を壊さないよう、日本および支那の要人、軍閥、学者を説き廻りました。敵方と協力、クレムリン宮殿を保存したナポレオン、日光に拠る幕府勢に、日光では戦うまいぞと通告した西郷隆盛^{かいじん}：、そのような史実に基づき、どうかこの世界第一の都を灰燼しないようにと、この舌三寸で説得したわけです。

すると多くの支那人は「中国が亡んだら、北京の都が保存されて何になるか」とも言いました。そこで私は「そんなら、中国が亡ぶ前の日、すなわち戦争最後の日にブチ壊すとも、最初の日に

壊すな」と言つて説きました。幸い偉い学者や軍閥は賛成してくれました。

日本人居留民たちは枕元に鞆をおいて、サア避難、直ぐ日本大使館に行けるよう、枕を実に低くして寝ていますが、私は事件が日支大戦まで拡大されても、ここを動かぬ決心です。米や薪炭をどつさり買い入れました。

私の家族、畏三（三男、小学五年生）と家内は七月十三日旅順へ。旅順の中学校と女学校に長男長女がいます。夏休みになつたら、帰省せねばならぬ。そこでこちらから避暑がてら、避難させることにしたわけです。

家族が行つて以来、私は砲声を郊外に聞きながら、ひとり泰然、一日として外に散歩や、訪問に出ない日はありません。来客もなかなか、生徒や卒業生が見舞いに来る。昨日は芝居、魯迅の阿Q正伝を見に行きました。事変のためか、七分の入りでした。

万一、私が流弾にでも当り死んだら……、

「国境越えて流るゝ真清水を、掬みて土培へ芳草の園」という碑を建てて下さい。崇貞学園の前に。因みに崇貞学園は北京朝陽門外芳草地にあるのです。

（昭和12年8月5日号）

大使館避難を拒否

七月二十七日、深夜二時頃、騒々しく電話のベルが鳴る。二十七日正午までに、日本人居留民は大使館に避難せよという。いよいよ日本軍が宋哲元指揮下の第一十九軍に対し最後通牒、北平退去を要求した。その期限が二十八日正午である。

しかし私は大使館に行かなかつた。今や大使館外にはみ出でている日本人は、私一人だけであろうか。生徒たちに「お前たちは危険にさらされていよ。俺は逃げるから」という態度で、教育や説教ができるものではない。インインとする砲声を聞きながら、讃美歌一一四番（ガリラヤの風…）を歌つて祈る。

二十八日未明から、爆弾投下がしきり、窓ガラスがビンビンする。爆撃機が飛び来たりまた飛び行く。

午後三時、支那の号外が来た。「豊台の日本軍全滅、日本軍タンク四台捕獲」という。近隣の支那人は大喜び。間もなく別の号外。「廊坊の日軍壊滅、通州克復」、通州の保安隊が反乱、殷汝耕が死んだという。また号外、号外、来る度に支那軍の全勝である。日本軍は宋哲元軍の不意打ちで、大いにやられたらしい。訛傳ならよいが。

夕暮れ近くなつて、直ぐ近くに砲声、重砲でないとあれだけの音はせぬ。

いよいよ北平をぶっこわすでないかと思つて、洋服を支那服に着かえた。自動車に乗つて三人の人物を訪れる。北平を戦場にしないよう説くためである。二時間ほどかけずり廻つて、家に着いたときはホットした。

なかなか眠れぬ。贊美歌五〇六番を歌う。亡妻が臨終にうたいしものだ。また爆弾だ。今度はよほど近い。

二十九日朝、今日は満天晴、日本晴れである。号外が来た。

「宋哲元軍、ことごとく保定に去つた」という。もう戦争は終わつたらしい。昨日の号外はウソであつたのか……。

大使館から電話、「日本軍はことごとく敵を掃蕩した」との報。これで北支事変はもう峠を越したようだ。私はこれから大いに働くぞと自ら宣言した。

(8月19日号)

日本人虐殺兵士らと折衝

私が行方不明になつたという記事が大毎（大阪毎日新聞）に出たり、大朝（大阪朝日新聞）に消息なしと書かれたとかにて、多くの人々が安否を心配して下さりし由承り、小生の如きものでも、いよいよ死ぬ①聞けば、やつぱり惜しい男だつたと思つてくれるものらしい。

北京の居留民は十三日間、大使館に籠城した。しかしその間、私は自宅に止まつて、あくまで自分の子弟と行動を共にした。そのため行方不明といわれたのである。

この居留民籠城中において、私のしたことは次の四つ。

①七月二十八日、最も爆撃の音がけたたましい日、街道に猫の子一匹通らず、街角には土嚢の積める中を、なおも念のため、宋哲元氏に洗礼を受けたという劉老牧師を訪れ、電話を以て、北平百五十万の市民のためと、七百年の世界に誇る宮殿を戦火より免れしむるために、市街戦を戦わずして、出城するように勧告を願つた。それがあらぬか、ついに宋哲元は二十九日の夜半に、戦わずして軍兵を率いて出城した。（編集者注：七月二十九日、北京東方十二キロの通州で、日本の傀儡政権＝冀東防共自治政府に所属する保安隊が反乱、日本軍守備隊および日本人居留民を大量虐殺した。いわゆる通州事件、そのため日本の好戦的世論が硬化した）。

②七月三十日から八月二日にかけて、通州から保安隊兵士が逃げてきた。千数百人、うちの崇貞学園校舎を宿営所にしたいという。彼らは日本人を、鬼畜なみむごたらしいやり方で殺した連中である。血煙を浴びて、どす黒く汚れた制服のものもいる。

私が談判して、やつと校舎を貸さないで、付近のお寺に案内したが、交渉中、私といえども、同志社で首を切られた日の夕の如くに、舌がどうしてもひつつき、口がからからにならざるを得なかつた。

③一段落したところ、通州から同盟通信の安藤利男氏が逃げてきた。半死半生で、うちの学園のボーキを救いにやると、逃げ回るので驚いた。恐怖症に陥つていたのである。その安藤氏が崇貞学園の小使いの衣服を着て、朝陽門外から縄で吊り上げられ、北京城内に脱出したことは、すでに詳しく述べられている。⁽²⁾存じであろう。(編集首尾通州事件で九死に一生を得た安藤記者。彼のスクープ記事が大々的に報道された)。

④今度は通州から腹をへらし尽くせる難民が、二千五百名ぐらい、ぞろぞろやつてきた。北京の親戚を訪ねて逃げてきたものの、城内に入れないので、そこで城門があくまで、学園に保護し、粥を食させて救済した。そのため学園は非常に貧乏したが、よいことをしたと思っている。

日支の争闘はこれからであろう。いよいよ支那も長期抗戦の腹を定めた。私はこの嵐の中で、かねてより持てる愛の一燈を消すまいと、守り行くつもりである。八月十七日記。(8月26日号)

天橋愛隣館—貧民窟にて奉仕事業—

昭和十四年一月、北京の觀光名所・天壇にほど近い天橋にて、清水安三先生が主導する愛隣館が開館した。極貧病苦の人々に奉仕する社会事業、その建築費を日本基督教連盟時局奉仕委員婦人部が募金（委員長・久布白落実）した。

当初の日本人職員は、館長＝清水安三、医師＝池永英子、主事＝鳥海道子、看護婦＝金井さわ。昭和十六年十二月、崇貞学園と共に、天皇ご下賜金を拝受した。

編集者

ようやく天橋セツツルメントが落成した。立派な洋館、一月より社会事業を始める。

〈Social Settlement by Japanese Women〉と書かれている看板、いわば日本の女性たちが、支那の貧しい人々の足を洗う、バケツや雑巾みたいな施設である。凡そ天壇に行く人々は、必らずやこの美しい洋館の前を通るであろう。

我輩は館長として万事委ねられし限り、最もこの国に適切なるプランを立てなければならぬ。主なる事業のひとつは医療である。この付近の児童は、半数以上トラホーム。それに対応、献

身される女医・池永英子女史は、大阪住友病院にて十年間勤務せし眼科医だ。

この付近の女性たちは、ほとんど終日ブラブラしている。さもなければ恥ずべき賤業。従つて授産事業として、手工を女性たちに教える。小規模家内工業を普及させたい。

その次は教育。本館にはひとつ教室が用意されている。いわゆる読み・書き・算盤を教える学校を開き、老若、だれかの差別なし、一千文字を教える。“千字認字”運動をやりたい。覚えた者には、三円お金をやるという風にして、民衆教育をやる。

それ以外の社会事業としては、深い二百尺の井戸を掘りたい。一百尺掘ると、飲用に適した軟水が湧いてくる。なにしろ天橋ラムの貧民は、桶一杯の飲用水に銅貨一枚を支払うのであるから、水は貴重品である。水さえ十分にあれば、洗濯できるし、皮膚も拭える。従つて衛生状態が向上するに違いない。

（昭和18年発行「支那人の魂を掴む」）

ハワイで舌禍・筆禍

昭和十四年十月五日、私は北京の我が家を立つて、渡米の途に上った。目的は崇貞学園のファンドを作る募金キャンペーンにあった。南京、上海を経て、台湾へ渡り、各地で講演した。いざこでも大入りだった。東京に出て渡米の手続きをし、横浜に至りY M C Aで講演した。私といえども、えらい人気があった時代で、満堂立錐の余地なし、拡声器で地下室や館外で聞く人も少なくなかった。

大晦日の十二月三十一日、横浜港を船出して、米国に向かつた。ホノルルでは、ハワイ日布時事の社長相賀安太郎氏の邸を根城とした。まず中国事情講演会を開催して頂いたところ、日布時事とは事毎に対立する日字新聞が、私を國賊呼ばわりして、こつびどく批評し出した。

そのころホノルルの映画館に、南京入城の折、日本兵がなせし暴行のニュースが上映されていたし、本屋の店頭には、中国人や白人記者が書いた詳しい報告がいく冊も並べられていた。「南京事件、あれは事実ですか」という質問があつたので、私は日布時事の紙上で回答（注：217ページ参照）した。

どうせ南京事件の如きを隠さんと欲しても、到底隠しおせるものではない。しからば少しでも弁解を試みるのが、国民の義務であると思つたからこそだが、私はつきりNOと答えなかつたことは、大きいセンセーションを巻き起こしたらしい。在留同胞は「日本の兵隊に限つて、そういう乱暴は決してせぬ」と信じている。再びYESかNOか、どちらかひとつで返答せよと迫られた。NOと答えると欲しても、良心が許さない。私は沈黙して答えなかつた。

領事館に出頭を命じられた。領事は送還を命ずる、米大陸へ渡航を許さぬといいだした。私は夜な夜なワイキキの浜の椰子の木にもたれて、泣いて神に祈り、ついに決心した。

「ここは米国、領事といえども、私を捕らえることはできまい。横浜に帰りつくと同時に捕らわれ、獄にぶちこまれようと、構うことはない。よし行こう」。

こつそり米船でハワイを脱出し、何喰わぬ顔してロサンゼルスに上陸した。

(編集者注・…その後、北米各地を広く募金旅行、翌昭和十五年七月一日、横浜に帰着。北京にもどつてから、日本憲兵隊本部に出頭を命じられた。取調べの名目は、米貨で得た寄付金を北京に送金するさい、横浜正金銀行を経由せず、為替レートが有利な米国系銀行を経由したからであるという。連続三十日間にわたる出頭、その間、母危篤の報せを受けたが、帰国を許されなかつた。ついに米国で得た寄付金の大半を恤兵金として献金、落言。(昭和23年「希望を失わず」)

敗戦・崇貞学園の後始末

終戦の日（昭和二十年八月十五日）、私は十一時ごろから崇貞学園の日本人生徒全部を集めて、天皇の玉音放送を待った。そのころの学園には、五百名の中国人学生、二百名足らずの日本人女学生がいた“日本人”と言つてもそのうち三分の二は朝鮮人であつた。

玉声をしばらく聞いて、私は子供のように泣いた。女学生たちも皆泣いた。

漸く泣きじやくる声が静まつたころを見計らつて、私は日本がポツダム宣言を受諾したことを短く説明したのち、

「朝鮮は独立国になりました。長い間、私たちはあなた方と共に、同一国民としてお交わりしてきました。しかし今日よりあなた方は朝鮮国民です。今後とも互いに愛し相助けましょう。朝鮮が立派な国となるよう、しつかりやつて下さい。お祈りしています」。

これだけいって、「朝鮮國万歳、万歳、万々歳」を叫んだ。皆が応唱して、私が「今日はこれにて散会」というと、一人の朝鮮人生徒がつと一步前に出でて、「日本万歳」を唱えたから、それに和して再び万歳三唱した。

終戦五日後の昭和二十年八月二十日は、崇貞学園の前学期の始業式であった。司会者が「清水先生、講話」と呼んで私の登壇を求めた。私は敗戦した以上、遠慮すべきであると考えて、いつもだったら、講壇の上に座を占めているのであるが、この日は生徒席の後方に小さくなつて坐っていたのであつた。にもかかわらず司会者が、「清水先生、講話」と再度呼んだので、やおら立ち上つて講壇に登つた。生徒たちは歓声をあげて拍手してくれた。

「諸位^{みなさん}、どうとう中国は勝ち、日本は負けました。どうして中国は日本に勝つたのでしょうか。

およそ三十年ほど前のこと、英國から来たバー・トランド・ラッセル博士が北京大学で講演されたことがあります。その時一人の大学生が、『先生！どうしたら中国は滅亡を免れましょうか』という質問をいたしました。列強の間でその当時は“中國國際管理論”さえ提唱されていたのです。すると、ラッセル博士はやや考えて、『もしも中国に百人のGood menがいたならば、中国は亡びないでしよう』と答えました。それに感動した胡適博士らは中国一百好人党という組織の結成に乗り出しました。

日支事変が勃発する時北京大学の教授や学生の主な人々は、あるいは重慶へ、あるいは延安へ脱出して、日本を打倒するまでは野に伏し、山に眠つて、穴の中にもぐつたりし、文字通りに臥薪嘗胆して屈しませんでした。もしも今、日本人が私に『どうしたら、日本は亡びないでしようか？』と問うたならば、私は答えるであります。『日本に百人の好人 Good men がいたならば、

日本は必ずこのままくたばりはせぬ。必ず復興するであろう』と。

私が崇貞を去りましても、私の愛の教育精神が染み込んでいるはずですから、この学園の愛の校風は、この学園が続く限り永久に変わらないでしょう」。

これが私の崇貞学園における最後の演説となつた。

十一月八日朝、ついに崇貞学園は北京市政府教育局によつて接收され、門の扉に封印がべたべた貼られた。翌朝、学園に行くと、校舎の中へ入ることが許されなかつた。十時過ぎ、「今日は住宅の接收をする。午後四時までに立ち退くように」という命令を受けた。上を下への大騒動である。仕方がない。日本人の教員と女学生は、各々両の手に持てるだけ、背に負えるだけを持ち出した。かくて、私共は全てのものを一朝にして失い、本当に着のみ着のままで、三十年住み慣れた朝陽門外から追わられてしまつた。

（昭和23年9月12日発行『希望を失わず』）

韓国行

さる八月、私ははからずもソウルに行く機会を得た。金浦空港に到着。ロビーに入ると、三十

名の崇貞卒業生が我輩の首を抱え、手を取り、後ろから抱くやら、慟哭するのには驚いた。

崇貞学園を経営していたころ、朝鮮の人々から入学させてくれ、とせがまれ困りはてた。天津にも北京にも日本人高女があつた。それらは、在留内地人の子女には広い門ではあつたが、朝鮮人の子女には実に狭い門であつた。そこで日本人対象の崇貞高等女学校を併設して、積極的に朝鮮人の子女をも収容することにしたのである。そのため今日、崇貞高女の卒業生が、北朝鮮に三、四十名、韓国に三、四十名おる。北朝鮮では婦女解放副委員長の要職にある卒業生もいるそうだ。

ソウル王宮の芝生で崇貞同窓会を持つことができた。同窓生は崇貞高女の校歌「うるわしき哉勤労の朝……」を昔をしのびながら歌つた。彼女らが、私をまるで赤ちゃんのように取扱つてくれるのには、少々てれざるを得なかつた。手を曳き、肩をかかえ……、これじや我輩はおいぼれじいさんになつてしまふぞなもし、と心中ひそかに歎じざるを得なかつた。帰国の途につく日、空港ロビーで彼女らと共に「また逢う日まで」を泣きながら合唱した。

(昭和45年10月20日号『復活の丘』)

崇貞の韓国人少女たち

崇貞学園は昭和十四年四月、〈日本人部〉として、日本人対象の三年制女子中学を併設、多数の韓国人少女を入学させた。この中学は昭和十八年、日本の懲罰制度に基づく高等女学校として認可され、彼女らのうち相当数が卒業後、東京女子大、同志社女專、東洋英和師範科などに進学した。以下、韓国人卒業生の思い出文集から抜粋。

編集者

最高の理想教育

- ▽当時、韓国人は差別扱い、公立の日本人女学校に進学することが、とても難しかった。小学校の成績がクラスで一、二番、よほど優秀でなければ入れない。家族の素性やら思想の善し悪しも、合否にかかわります。私の場合、祖父が独立運動家、投獄されたこともありますので、全く見込みなしでした。
- ▽安三先生は私たちを温かく迎えて下さいました。崇貞学園こそ、愛の教育が行われた学校で

した。それこそ最高の理想教育だったのではないでしょうか。

▽私たち韓国人生徒にとつては、自由の楽園でした。寮生活が一番記憶に残っています。日本部の生徒のうち80%が寮生でした。キムチを自由につくつて食べられる、中国服や朝鮮服も制約なし、自國の言葉を大きい声で話せる……。

▽思い出と言えば、民族の差別なく、中国人、日本人、韓国人が仲良く勉強できる学園だったことです。「国籍や民族に関係なく、人間はみな同じ神の子である」「労働は尊い。人間は働いて生きて行くのが本分である」と教えられました。

▽郁子先生は理知的で教養美、黒く輝く潤んだ眼差し、中国服をきれいに着こなし、小股でチヨコチヨコお歩きなさる後ろ姿がとても印象的でした。学業には厳しい。でも授業料を出せない生徒が涙ながら事情を訴えたりすると、もらい泣き、「わかった、わかった、心配しなくても良いのよ」と慰め、肩身が狭くならないように励まして下さる。心暖かい内柔外剛の先生でした。私たちの学芸会で、悲しい台詞に涙をポロポロ流される。最高の学歴、気品、威厳……、先生の前に行くと自然と頭が下がり厳肅になりました。

▽雪の日、“おやじ”（安三先生、私たちの呼び方）が教室に入つてこられて、「寒いか。みんな運動場に出なさい」。雪合戦……、「みんな私にかかって来い」、おやじにつかまると、雪玉を背中に入れられてしまう。とびはねながら、どんなにはしゃいだことか。

▽郁子先生は頭が良くて成練の良い子を可愛がる傾向がありましたが、安三先生は劣等生に気を使つて可愛がりました。「わしは同志社をビリで卒業した。神様は公平な方、だれにもそれぞれの才能をお与えなさつとるから、自分でそれを見つけて努力すればよい」。

▽安三先生らしいユーモアを思い出します。寮生活、安三先生が厳しい怒りの声で「みな集まれ」。食堂で掃除点検。窓の桟や電灯傘にたまつた埃^{ホコリ}、安三先生はそれを指先で拭いてなめながら、「これはおいしい」。次は水をやらないから枯れてしまつた花瓶や植木鉢の花^{カス}、安三先生は「これは美しい」といわれて、私たちの胸や頭髪に一本一本折つて挿して下さつた。私たちは可笑しいやら怖いやら、でも深い反省を促されました。あとで先生は笑いながら種あかし、人さし指でこすつて中指をなめたそうです。

民族精神を注入

▽安三先生は私たちに、「あんたたちの祖国は朝鮮だ。朝鮮人は優秀民族だよ。勉強して祖国のために貢献しなさい」と励まして下さいました。

▽私の場合、〈木村〉に改姓させられましたが、先生は一度も「木村さん」とは呼ばない。卒業まで「朴さん」でした。

▽安三先生は亡国民であつた私たちに、憐憫の情をいつも抱いておられた。日本史に関連、韓国史と一緒に教えていただきました。終戦後、同年配の本国高校出身者よりも、私の方が韓国史をたくさん知っていることに驚きました。

▽立ち葵の花が咲き乱れる校庭。安三先生は私たちに、「この葵の花に似ている花を知っていますかね」と問われました。誰も答えられない。先生は真顔で、「本当に知らんのか。この葵に似ている花は〈むくげ〉（木槿）という薄紫色の花で、朝鮮の国花だよ」「この葵の花の茎には虫がよくつくけれども、虫に負けずきれいな花を咲かせる。〈むくげ〉も葵の仲間、強い花だよ」と教えて下さいました。

▽チャペルの時間がありました。中国語講話を日本人部の生徒が通訳、日本語講話を中国人部の生徒が通訳、語学訓練の場でもありました。来賓の韓国人が日本語講話をされた時、安三先生は私に韓国語に通訳するよう命じられました。当時は、日本語が強要され、韓国語を学習することはできない時代でしたから、私の韓国語は、家で日常語をしやべる程度、通訳なんかしたことがありません。やむなく壇上に上がりましたが、しどろもどろ、中止を命じられてしましました。あとで安三先生から呼びつけられ、叱られました。「お前はほんとに朝鮮語をそんなにしらないのか。そんなことでは、お前たちの国のために働けるのか。これからは朝鮮語を勉強しなさい」。

▽日曜日、安三先生は私たちを朝鮮入キリスト教会に連れて行つて下さった。先生の下心は、

私たちに韓国語を習わせるためでした。韓国語で聖書を読み、賛美歌を唄い、お説教を聞く。

老いた白髪の信者が平伏、痛哭しながら祈りました。「全能なる神様、我らさまよう白衣の民族を哀れみ下さい。モーゼのような指導者を我らにお与え下さい」。その姿と言葉、いまなお私の心に焼きついています。「三・一」（1919年）など、朝鮮の独立運動において、宗教家が中心的役割をはたしました。亡国の悲しみを神にすがって訴えることができる場所は、教会の中だけだつたのです。教会の帰り、朝鮮料理の冷麺をご御馳走になりました。

▽安三先生が郁子先生とお二人で、朝鮮服姿で写真を撮られました。（その朝鮮服はソウルの有名女学校からの贈り物）。その際、私に「玄さん、わしと一緒に朝鮮服で撮ろう」といわれました。「持つていません」と答えたら、「それじゃ仕方がないなあ。チヨゴリ一枚ぐらい持つていいなさい」。先生は朝鮮服の縫い方を知らないと、嫁に行つて困るだろう、そんな心配もして下さる人でした。

▽李王殿下（旧朝鮮王朝の末裔。日韓併合後、日本皇族）が来訪された時のこと。私たち韓国人生徒五、六人が応接間でお目にかかりました。安三先生が軍服姿の殿下に、「この女学生たちは朝鮮人であります。一生懸命勉強しております」と紹介。私たちは恭しく最敬礼。でも殿下は無言でうなずかれただけでした。あとで私は密かに涙ぐみました。安三先生は何時も私たちをいたわり励まし、民族精神を注入して下さる。しかるに同じ民族の血を分けた殿下、なぜ一言激

励して下さらないのか……。

生きている聖者

▽終戦前、卒業後、久し振り学園を訪れ、安三先生にお目にかかりました。先生は未だかつて見えたことがない悲愴なお顔、深い溜息をつきながら、「日本は戦争に敗けるよ。朝鮮は独立する。祖国のために尽くすんだよ」と言われました。先生のお目には涙、私も思いがけないお話にもらい泣きしました。

▽終戦の日、先生はお別れの言葉を告げられました。「朝鮮は独立します。もつと勉強して、お国のために、民族のため、尽くしなさい」。最後のお祈りの言葉……朝鮮独立を感謝し、日朝両国の将来を祝福されたこと、その感激、未だ忘れることができません。

▽安三先生が九十二歳になられた時、渡日、お会いしました。ありきたりの挨拶では積り積もつている感謝の表示にならないし、今生のお別れになると思い、四拝のご挨拶を致しました。四拝はわが國の大礼（人の一生の中で最も重要な礼式）です。嫁に行く娘が両親に、妻が出征する夫に対して行うお辞儀です。両手と両足を揃えて四拝しながら、心の中で「貴方様は生きている聖者です。韓国人を愛された教育理想、永遠に輝くでしょう」と叫んでおりました。

（「木槿の花が咲く頃..宗貞学園の清水安三先生」）

第二部 崇貞學園物語

第三部

中國論

中国論者としての清水安三先生

一九一九年（大正八年）五月四日、北京で突発した「五・四運動」は、中国における現代革命史の起点となつた。この「五・四運動」のころから、「国民革命」の北伐が次第に日本と対立をきたす昭和初めにかけて、清水安三先生は中国問題の新進ライターとして健筆を揮つた。『北京週報』『我等』『日本及日本人』『読売新聞』など新聞・雑誌に精力的に寄稿し、一九二四年（大正十三年）には『支那当代新人物』『支那新人と黎明運動』と題する二冊の著書を同時出版した。大正デモクラシーのチャンピオンともいふべき吉野作造博士は、その共通序文の中で、およそ次のようない紹介の労を取られた。

「人の書いたものに序文などを書かないという年来の方針を破つて、清水安三君の新著を紹介すべくここに筆をとる。清水君の本は非常にいい本だ。清水君は支那の事物に対して、極めて公平な見識をもつてゐる。今日は親友の交わりを為しているが、予が氏を知るに至つたのは、実は大正九年の春、同氏が某新聞に寄せた論文に感激して、われから教を乞うたのに始る。同氏はいろいろの雑誌新聞に意見を公にされているが、ひとつとして吾人を啓發せぬものはない。今日の支那通の中で、けだし君の右に出るものはあるまいと信ずる。

清水君の論説する所は、ことごとく種を第一の源泉から汲んでいる。書いたものによつてその人の思想を説くのではない。直接に氏の書中に描かれた人、と永年親しくつき合つてゐるのである。このときは清水君でなくてはできぬ芸當だ。何となれば支那の新人と接触してよくその腹心をひらくままでに信頼を博するは、ことに今日において我が同胞にほとんど不可能だからである。清水君はこの不可能をよくし得た唯一の人である。

清水君はまたその好む所に偏していい加減の事を言う人ではない。悪い事は悪いとはばかりなく言うだけの勇気と聰明とを持つてゐる。従来同氏の言説をあてにしてきて、私がしまつたと後悔したことはない」。

清水安三先生の中國論は、いま読んでみても歯に衣を着せない、なかなかのラディカルーリベラリスト振りである。そのため日本の対中國侵略政策が次第に露骨化するにつれて、彼の「先見の明」は日本軍部の反感を買うところとなつた。彼がとりわけ記者として活躍した「北京週報」は、昭和五年軍部の圧力でついに廃刊させられたが、同誌社主の末亡人（藤原つた氏）が書かれた回想記によると、その有力原因のひとつは清水安三先生の批判的論陣にあつたといふ。

なぜ日本人は嫌われるか

——支那人の多数者を友にしよう——

この論文は、排日の五・四運動が突発した日、北京で書かれたもの。

編集者

人は自らの顔を見ることができぬ。その意味で支那人の眼球はよき一つの鏡でありはしまいか。
私たちは支那人の素振りを見てまざまざと自らの醜さみにくさを悟るのである。よしや多くの日本からの旅人が支那に来遊して、今さらのように強国の有難味やら、自尊心を感じて帰ろうとも、心ある者はいよいよ日本人自らの、ちっぽけさと情無さとに思い当たつて、自負自大どころか、恥ずかしさを感じるのみだ。

青島がドイツのものであつた間は、それが支那自らの支配であつた昔よりも、より山東省にとって便利な地であり、多くの人、が恩恵を受け、感謝していた。それが日本の手に移つてから以来、汽車に乗つても「こらニーヤ」式に取り扱われ、いろいろな点において不快であり、苦悶となつた。それが北京遊街会の焼打ちデモンストレーションになつたのではあるまいか。本国の利益を本位にする植民地政策は、もうとうの昔に時代遅れとなつたはずだ。少なくとも功利共益の

植民地政策を採用しなければ、朝鮮騒擾は跡を絶たぬであろう。

日本人の移住は、支那人の良風を破壊することはあつても、感化を与えることはきわめて稀である。例えば支那で窑子ヤオズ（日本の遊廓）を開くには、重税を納めて城外（郊外）に家屋を持たねばならない。それなのに日本人は、奉天新市街發展策と称して、無税に近くして、宅地まで貸与して容子を建設した。しかも支那世論から、良習破壊という汚名までつけられながら建設したのである。また日本人は城内や人通りであつても、頓着なく支那街に女郎屋を開業している。その名目が日本人相手にあるにしても、二十名の邦人が住むところに、十五人の酌婦しゃくふがいるということは、その内実は言うを要しない。日本人の来住は、支那商業道德の誘惑であつても、向上的感化を貢献するものではない。

日本人は毛嫌いされ、白人は慕われる。彼は排日主義だと聞けば、官民から信頼される要素を備えている者と言われる。反して彼は西洋に信頼している者と知れば、進歩的な人物だとみなされているようだ。日本人を嫌つて、白人を慕うからには、日本人の器量が白人のそれよりも劣つているのではないか。

日本人はもつとおめかしを要する。心からめかしてからねば、支那人を手なづけることは困難である。こちらからも魂を打ち込んでかがらねば、恋は燃えはせぬ。現に寒村として到らざるなく、僻地へきちとして在らざるなきは、白人の医者、牧師と、その学校病院である。白人は支那人か

ら慕われる前に自ら金も心も投げ出しているのだ。それは小金を蓄えて他に職を転ずる日本の支那人教育者では、思いもよらぬ仕事である。日本から来た医者は、どうせ一生いるのでもなく、支那人を愛そうとするのでもないから、支那語すら研究しない。故に支那人を教育する小学校に、「世界皇室長短比較一覽図」などをつるして、図に最も高く突出している赤い色を書いて、お国自慢をさせている者さえある。たまたま学堂を興せば、かえつて排日養成所と化すのである。病院を建築すれば、患者たる支那人をして白人病院に比較せしめ、支那語に通じない医師と看護婦に取り扱われて、寂莫^{じやくばく}と不安とを感じるのみだ。どうせ設立の動機が、「支那人を愛する」というにあらずして、むしろ国威を争うため」というところにあるのだから、やればやるほど、疎んじられるのも無理ないことである。^{きつすい}

日本留学の支那人は、生粹^{きつすい}の排日者として帰つて来るのが多い。尽力してやればやるほど嫌われるという有様である。こうなると日本内地の教育者から、下宿屋の女将までが、世界の人間として立たねばならなくなる。おおいにしかりである。日支親善は在支日本人と在内日本人の総掛りの問題であらねばならぬ。国民教育者が事實を事實とした歴史を講じ、世界の人間としての教育を開始しなければ、意を安んじて支那青年を留学させられないではないか。

もはや段駢瑞を取り込んだり、張作霖に見込みをつけているようでは、日本人も駄目だ。ホルワットにも秋波を寄せ、セミヨノフにも未練を持ち、変てこな仕事をもぐろんだ筆法で、支那の

權門に取り込むことは、もういい加減によきねば後悔する時が来よう。

時代は移る。一人の人物英雄で仕事ができる時代は去りつつある。多数と共に動き得る人物のみが指導者になりつつあるのは、支那でも同じ傾向である。白人がプロパガンダとして新聞雑誌で多数に訴える時に、その日暮らしの日本人は、術数權謀によつて、少数の權門を動かしている。眼の前の将来はいずれに勝利があるか、論ずるまでもあるまい。

少數は陰険な賄賂をもつて取り込み得ても、多数は開放的な正義真理をもつてせすば、動かし得ない。けれども、あせらず日時をかけて多数多衆を教化すれば、少數をもつて抑圧できぬ勢力となるであろう。段祺瑞や曹汝霖らはどうでもよい。日本も支那の多数を友として、親善にすすむべきではあるまい。

五月四日北京焼打ちの日稿

大正8年口12月1日号『我等』

排日運動——日本人は毛虫か——

一九一九年（大正八年）、北京で点火された排日「五四運動」は、後日の日本戦争につながる歴史的ターニング・ポイントになった。清水安三先生はその目撃者。

編集者

支那において群衆運動か、あゝまで成功しようとは、誰しも思い到らなかつた。

首都北京の真中で、排日に熱する学生青年が、勝手次第に商店を襲つて日貨（日本製品）を街路に吐き出させて、破壊し焼棄する、商家の小僧も番頭も応戦拮抗するどころか、協力加勢していくつ壞している。出資者も経営者も、そうすることが一種の廣告であり、信用の増進である限り、黙許し尻押ししている。巡査と兵士は、この光景をきよろりと黙視して制止もせず、声もかけず手も出さぬ。

日本の軍閥連中は、猶も支那官憲の威嚇に信頼して排日運動を制止しようと考へてゐる。しかし番頭や巡査兵士連中に、排日感情が胸いっぱいである限り、どうすることもできまい。排日運動の青年学生が捕縛されても、裁判官に排日感情がある間、なんの効果もあるまい。排日者を全

て収容するには、四億の国民を幽閉するだけの留置場または牢獄が必要になるかもしだれぬ。

北京の遊街会と称するデモンストレーションを一度でも見たものは、民衆の力を今さらのように感じるであろう。それはよしや支那政府がもつと力強いものであるとも、彼の運動をどうすることもできまい。

どんなに示威しつつ街を行くか。彼らは罵らず怒らず、ただ白布の大旗を押し立てて二千三千、何事もなく道を行く。そのため自動車は動かぬ。

ともかく北京においてしばしば行われる遊街会は、あくまで整然とせるもので、饅頭売りや湯茶売りまで列に加わっている。もし私たちに塵埃じん あいを蒙るだけの勇気さえあれば、何の心配もなく遊街仲間になれるだろう。靴音がするのみで、一種の静けさ、この光景、暴動とは全く種類を異にしている。

東洋において、無抵抗主義の戦闘が日本に向かつて行われている。朝鮮における万歳運動、支那における排日運動がそれである。彼らは兵器を持たぬ。彼らは人殺しをしようとは考えぬ。

朝鮮人と支那人は今や無手勝流剣道の奥義を体得し出した。拳銃で脅かす者に対して、いわゆる（ンドアップ）で無抵抗、両手を上げたらどうなるか。朝鮮人支那人はその（ンドアップ）を以て、殺伐なる日本軍人に対抗せんとしている。

強敵の前に無限に強い日本軍人といえども、莞爾として空手で手向かうものを打つことも殺す

こともできまい。日本刀は目に見えぬ真理を断つには、あまりに切れ味が悪いという事である。今にして日本人が考え方直さねば、日本人は世界の人間から仲間はじきになるに相違ない。孤立の國家が亡ぶか亡びぬかは、具現者が一寸考えれば解ることである。

毛虫、私は大嫌いである。その理由はわからない。ただ祖母から母へ、母から私へ、嫌うべき毛虫の概念を与えたからに過ぎぬ。日本人はもうすぐ、人間界の毛虫になろうとしている。

親から子へ、子から孫へと、日本人を排斥すべく、支那人は教え伝える。五月七日を中心にして、年、続、排日が徹底的に宣伝せられる。封筒の紋様から財布の装飾に至るまで、「国恥忘るなれ、排日は怠るべからず」と書きつけてある。少年支那人の頭脳にも、消し得ぬ文字が書き込まれていて。日刊新聞には「三百六十五日、毎日、五月七日を忘るなれ」と、一号活字で必ず大書してある。どうしたらこれに対応することができようか。

排日を今日に導くまでに、日本はこの十年間、悪い努力をやつてきた。これから善い努力を少なくとも二十年間、続けねば親善は決して来ぬであろう。

もつと日本人が國家を忘れ得ねば、支那人と手を握ることができない。支那人と共に排日運動を起こすぐらいの、大きい度胸を持ち合わせていなければ、どうすることもできぬ。合併事業も、支那人を益して、日本人には損ある如き事業をどんどん興すがよい。

日本の教育をもつと世界的なものに解放して、愛国者をつくるよりも、世界の人間を育てるこ

とに改めるがよい。日本を愛するものは、もちつと日本の国家を忘れるべきではないか。日本人の世界主義が育たぬうちは、到底対支問題は解決せぬであろう。(大正9年3月18日『基督教世界』)

支那に亡国の兆ありや——^{きさし}日本軍閥への批判——

支那を樂觀する者と悲觀する者と、二種の支那觀がある。支那を悲觀するか、それとも樂觀するか、そのいかんは、対支政策を論ずるに当たつて自ら相反する結論に達する。支那は広大であるだけに、亡国の兆とも見え、また興國の徵^{ひのい}とも感ぜられる雑多の資料が、そこここに転んでいる。これを拾う者の思想的傾向によつて、どうにでも解釈が出来る。

我らはあえて支那を樂觀せんと欲する。無論、それは軽薄なおつちよこちよい的な樂觀をすると言うのではなくて、たとえば彼の教徒が抱いているような祈りの心持ちにおいて、支那の前途を樂觀するのである。現状のあらゆる実際に面しながらも、なつかつ若き支那の新青年たちと共に、支那の将来を展望して一抹^{いぢまつ}の光明を発見したいと思う。

支那を悲觀する者の言い草を聞くと、つまりそれは支那の国民性の悪口に過ぎない。「支那政

治家のうちに信を置くに足るものありや。あらば I ダースを名指せよ」と問えば、何人といえども I ダースはおろか、半ダース、否一人もあげ得まい。これを亡国の兆といわすして、また何をか亡国の兆と言はず。「支那兵の文弱を見よ、白兵戦まで進軍し得る軍隊はほとんど無いではないか。かかる軍隊に信頼して列国相手の独立をばかり得るか。恐らく自國の統一すら永久に困難であろう」。亡国の兆候として指摘される所は極めて多い。けれども結局は人の問題に帰する。亡国の兆候も興国の機運も、支那人その大に現われていると言うにほかならない。

我らとしても、支那の国民性に愛想をつかしたことがたびたびあつた。しかし未だかつて絶望しないのである。愛想をつかせて溜息を吐くのは、支那と支那人を想う時に限らない。日本と日本人を顧みる時には、やはり同種同様の嘆息をもらすのが常である。もしも支那を老いた大木にたとえるならば、馬鹿に成長の速かつた青竹に日本を比せねばなるまい。老木が何時ぽきつと倒れるかわからぬように、青竹もまた一陣の嵐にへし折られぬとも限らぬ。枯木の腐るのは案外手間どるけれども、青竹はいざ倒れるとなると、恐ろしくもろいものである。

そうかといつて我らは日本を悲観して、自暴自棄に陥るを欲しない。あくまでも若きは幻を見、老いたるは夢み、我が日本の前途を祝福せざるを得ない。あたかもそのように、支那にサジ投げるためにそう取り急がなくともよい。虫の息でも余喘ある限り薬を盛るだけの親切がなくてはならぬ。対支政策を明るい支那觀の上に樹立することを望むものは、独り我らのみに限らず、米国

はすでに着、その方針に進みつつあると思う。

民衆を味方にして対支政策を編み出すことが、我らは日本のために最も怜憫なことだと思う。
支那の前途に明るい頼もしい兆候トボクが、極めてかすかにでも現われているとすれば、それは民衆運動の芽生えである。賭博アヘンと阿片に夜も日もない大人の支那人を見ては、さすがに反吐カイジュウを催すけれども、青年中国人に接してみると、あれでなかなか取柄がある。日本が大人を懷柔カイジュウしている間に、米国は少年を指導しようとしている。

この間も支那人の誰かが言っていた。「留学生時代には、日本人から随分チャンコロ扱いを受けましたが、今度紳士として日本に行きますと、誰も彼もがちやほや言って歓迎してくれました。けれども留学生時代に受けた印象が余りに根強かつたものですから、歓迎されればされるほど、クソ食らえというような心持ちになりました」。また「日本人は少し地位を得ると驚いたかのように、同窓会だの旧知だのといって、つべこべ言い寄つて来る。嫌な国民ですよ」と言つているのもいた。寺内内閣か支那と交渉するには、やはりともかくも政権を握っている北京政府を相手取るよりほかに道がないと言つたが、日本人は個人としては未だ地位に取り着かぬ者とは交際往来を好まず、外交方針としては民衆を眼中に置かない。これではらちがあく道理がない。王正廷ひらきがパリの檜舞台（注・ベルサイユ講和会議）で排日の舞いを踊る前に、彼は米国と因縁浅くなかった。彼は上海のキリスト教青年会主事の時からして、米人にもてていたのではなかつたか。断

じて心友は追従^{ついしゅう}によつて得るのではない。

大人の支那人を籠絡^{ろうらく}するためには、我らの想像出来ない苦労をなめている。賭博で負けてやつたり、解りもしない芝居を見たり、日本芸妓を提供したり、雑多な苦労をして取り入ろうとしている。賭博と聴戯は交際に欠くべからざるものですよと言うのが、彼らの支那通ぶる口実である。そしてかかる支那通ぐらい支那人に軽蔑される者はない。

剣を持つて立てる者は、剣のために亡ぶというが、支那における栄枯盛衰はまた、格別にはなはだしくて、見物者はあくびをする暇さえない。

援段政策の結果は果たしていかんと詰問したい。数年前『太陽』に、ある軍人が段起用論を掲載した。我らはあれを読んで、ふふんと鼻先であしらうほかには、感心のしようがなかつたものだ。段斜瑞の人物、才能、手腕が、薬の効能書のように書き並べてあつたと記憶している。「モウロクせる徐世昌」と日本の新聞は伝えたにもかかわらず、大總統徐世昌は、用意周到にして陰険辛辣なる怪腕を振つて、さしもの慢心し切つていた段斜瑞を土俵の外に投げ出して、血まで吐かせたのではないか。少し片意地なところがあれば、日本軍閥は直ぐ惚れ込んでしまう。惚れた男と泥沼の中へ落ちて、まごまごするのが日本軍閥の道楽である。段起用論を書いた男は、定めし開いた口がふさがるまい。

シベリアではセミヨノフと道連れになつて、さんざん援けたり尻押ししたりして、ついついや

り切れなくなつてしまつて突き放した。北京でも援段政策のゆきがかり上、公使館を段派元兇の座敷牢として、大和魂の意氣を天下に発揚している。窮鳥も懷に迷い込めば、獵夫もこれを傷つけずとあるそだから、まあそれを正当としよう。けれども支那に対する政策として、果たして推賞するに足るかどうかは極めて疑問であろう。民衆の糾弾きゅうだんに触れてまで保護する必要は毛頭ない。人道とか正義とか言いながら、全体としての対支政策に、今なお侵略主義の爪牙そくがを現わして平然としているのに驚くのである。

各国の対支政策が、利権獲得・侵略・分割主義から、門戸開放・機会均等の貿易主義に移りつたある今日において、權門に取り入つて何の役に立つか。むしろ民衆を味方として対支政策を編み出すべきである。それがまた利権を食い物にする山師日商を驅逐くちくして、眞面目な日本人商人を応援する唯一の策である。

いざれにせよ支那人が、自國に最も適當な政治を行なうのに、他国がかれこれ干渉する理由は毛頭ないはずである。支那にいかなる革命が起ころうと、日本が差し出口をたたく必要はあるまい。袁の帝政に反対した時には、排日は赴こらなかつたが、軍閥と提携した時には猛烈な排日運動が起こつた。いかなる時にも日本は民論に好意を表示するのが、最も怜俐れいりではあるまい。孫逸仙、黃興と共に、革命に奔走した日本浪人があつたように、孫洪伊、陳獨秀と共に、来るべきどえらい革命に奔走する特志者が、一人や二人あつてもよからうではないか。

支那は赤化するか

この間、周作人君を訪れて帰京の挨拶を述べた。その折、周君が尋ねられた言葉に、「どうです、北京は少しは変わっていますか」とあつた。私は周氏のこの問い合わせに関連していろいろと考えてみる気になった。

なるほど、北京はそう変わっていないかもしけぬ。わずか二ヵ年の留守である。しかし支那を眺めてことごとに変な印象を受けるので、「こら、だいぶん調子が違うぞ」といったような感をしてならぬ。

今から七、八年前に北京に何某とかいう役人が住んでいた。その大がかつて、「支那が赤化するか、へえ、あはは……」と言つて、支那が赤化することがあるものか、それは支那事情に通じぬ者の言葉である、といったような物言いをして、私をからかった。

私はその当時から、ロシア人の頭の中に絡みついている東漸要求から考えても、またその他、情勢から考えても、支那がいざれかの時には赤化しはせぬかと論述したものである。

その第一の理由。支那はすでにロシアによる東洋への侵入に負けた。もしも日本がロシアの東

漸を食い止めなかつたならば、どうの昔に支那の過半が一大シベリアになつてゐたであらう。

第一の理由。支那がこれから新しく國家を組織しようとするとき、当然のことながら最も新味のある國家組織をモデルにしようと欲するだらう。

第三の理由。支那には康有為や孫文によつて創案された一種の共産國家の思想がある。

故に私は支那は赤化すると考えたのである。赤化するといつても、日本人の考えるようカツキリと秩序立つた共産生活が創造されると思つたのではない。ただ外国の資本主義的帝国主義に対する反抗が断行され、ロシア式に極めて乱暴な國際的關係を押し通す国家ができるかもしけぬと考えたのである。そして少なくとも土地の國家所有にまで進むであろうと予想したのである。

この予想は、今はすでに支那の大衆が抱くところの予想となつた。

日本もこの際よほど氣をつけて支那に対せぬといかんと思う。支那を知つたふりをして、支那の行方が見えもせずに、「あはは……」などと笑つて威張つていると、馬鹿を見ること必定である。今までの支那通は、腹さえできていれば支那にゴロついておれた。これからの支那通は、綿密な頭を要する。腹がいくらできっていても、頭でもつて、ぐいと突かれてみろ、すぐたじたじと土俵を割つてしまふわ。

（大正15年2月21日号『北京週報』）

南方の国民革命軍を援助しよう

支那が帝国から民主国に変わるとき、日本の朝野にはいくたの人、が危機感を抱いたものである。

「日本は帝国である。民主国ではない。しかるにお隣りの支那が帝政を棄てて民政に変わるならば、その気風は必ず日本にまで及ぶに相違ない。これはゆゆしき大事である」などと考えたものである。

そのため肅親王家を大切にしたり、宗社党と氣脈を通ずる日本人もないではなかつた。しかるに日本民間の有志の中には、南方に同情を寄せ、孫文を助け、叛清を手伝わんと欲する、いわゆる浪人たちが輩出した。しかもその人たちは支那の皇室は倒すが、日本の皇室はいよいよますます尊敬するという極めてメスの使いわけの上手な人、であつた。大ざっぱに物事を考える人たちであればこそ、そう言うホコトン（矛盾）が何の苦もなくできたのである。この点から考えると、大ざっぱな頭の持ち主も時には便宜であると言うべきであろう。

けれどもこの度のやや赤色を帶びた蒋介石の率いる南方軍中には、ほとんど日本人は混じつて

いないようである。聞くところによると、今回はロシア人がいるそうだ。

帝国日本人が清帝国に抗する革命に参加しても、忠君愛國の大義にもとらないならば、白色日本人民が白色中華民国に反抗する革命党に投じても、なんら支障はないはずではないか。支那の赤化運動には参加するが、それと同時に日本の白色維持に奮闘することを明らかにすれば、満天下の誤解はないわけである。

どうして右のような新支那浪人というものが出現しないのであろう。そういう新支那浪人が出現してくれると、日本も非常に好都合であるかも知れぬ。なぜかというと、もしかして北伐軍が大成功をやらかした時に、南方にも取りつく手づるができるようからである。

かつて頭山満が機関銃の五、六丁も持つて革命軍に参加したように、だれか機関銃を二、三丁も持つて武昌にでも行く篤志家はないか。共産主義者と生を共にすることが世の誤解を招くようだったら、そのうちにまた尊皇の至誠を表わす機会をつかめばよい。

こういうような新支那浪人が現われて来ないのはどういう訳であるか。それは一体に支那通なるものが眞面目になつたからである。矛盾を感じないような大ざっぱな頭の支那通が亡びたからである。支那そのものが浪人ふうのずさんな頭の人間には、不向きな舞台になつて來たのである。支那人自らがシャープな觀察と徹底した思想を抱こうとする今日、昔の支那浪人が仕事を仕出かせないのは当然すぎるほど当然なのである。

故に支那の赤色革命軍に投ぜんと欲するならば、自ら赤色になつてかがらぬとやれぬのである。以前のように日本では尊皇主義、支那にきては叛皇主義という具合に、矛盾の淵をうまく乗り越えるわけにはいかない。支那で共産主義の運動に参加するなら、嫌でも日本でもやるという人でないと人が相手にしない。浪人のようなタイプではいけない。ちゃんと定職を有し、労働せねば食わぬというタイプの人でないと駄目なのである。

それならば日本にも共産主義者がいるはずだから、その共産主義者を引っぱり出し、南軍に参加させたらどうであろう。そうすれば万一南方が天下を取つても、日本人の顧問も出来るであろうし、何かと好都合ではあるまい。あたかも片山潛がロシアの顧問格であるように、蒋介石の顧問として堺枯川でも一つ派遣したらよいであろう。奴ならば面白い。今、確かに牢屋の中に呻吟しているはずである。あれほどの男を牢屋に幽閉して置くよりも、ひとつ武昌なり廣東に遣わしたらどうか。機関銃の十丁も持参させて派遣する頭山における安川のような篤志金持ちはいないのか。

しかし共産主義者はそういうところには行くまい。彼らはそれほどに支那の戦争に興味を持つまい。一体に日本から出かけた革命参加の篤志支那浪人は、革命に参加するとはいうものの、その心の底を叩いてみると、支那のためにやつたのではなくて、日本のためにやつたのである。日本が革命後に発言権を得るように、あるいは新支那が日本に好意を寄せるようにと、まるで捨石

を投げ込むような心持ちでやつたのである。洗つてみれば何のことではない。浅ましい考えである。いわば帝国主義の変態だ。あたかも今日でも張作霖の尻につきまわつている連中が、そうすることが日本のために何か役立つと考えたり、段祺瑞の門番をしている者が、日本に対する大きい仕事をしていると考えているのと同じなのである。

そういう馬鹿なことは、日本の共産主義者には出来まい。彼らには彼らの仕事がある。彼らは支那のことよりも日本のことを考えている。うつかりすると支那の方がお先にご免こうむつて、一步も二歩も進歩しそうなくらいのことに気づいている。こういう具合であるから日本の共産主義者の仲間から新支那浪人は現われそうもない。

それでは仕方がない。白色も白色国粹主義のこりかたまりの我、の中から、ひとつ南方ビイキを出すことにするか。そして北方にうごめいている軍事顧問が作霖や宗昌に馬鹿にされながらもついて歩いているように、蒋介石の尻から走り歩くことにするか。支那の霸王に馬鹿にされても、日本人方面には大きな顔をして顧問ぶることにするか。それもよからうというものである。

(大正15年11月28日号『北京週報』)

キリスト教伝道者は国家を超越せよ

悪魔の宗教

「まず説教せよ、それで行かずば剣を抜け」。これがポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどの対支政策だった。そうではないといつても事実が証明している。バイブルを抱いて来支した者と、剣を帶びて来た者とは何の関係もなく別、にやつて来たのだと弁解しても、支那人にとつては詮索するよりも想像することによって、同じ国人である限り、一味同腹と見る。また見られても仕方がない。

キリスト教の名においてどんなに多くの罪惡が行なわれたか。いかに支那を苦しめつゝあるか。私たちは日本史をひもといて天草の乱を思う時に、キリスト教徒に同情する余り、はりつけや虐殺をした日本人を呪詛する。しかるに支那伝道史を読むと、むしろやつづけてしまつてよかつたとさえ思うのである。当時のキリスト教は悪魔の使者であったかもしれないからだ。一体キリスト教の宣教者は、強国文化の国に入る時ははなはだよろしい。貴い事業のみをする。けれども弱

國文化の國に入ると、かえつて無茶をする傾向がある。そのところをよほど氣をつけないと、知らず知らずのうちに惡魔の使者ぶりを發揮してしまう。

拳匪（義和団）と賠償

ところで一八九九年〔一九〇〇年の拳匪運動は、山東から起こつた迷信運動にすぎなかつたが、この拳匪のために天主教四十四名、新教百八十六名の宣教師、支那教民多数が殺害されたのである。教堂、学校は焼かれ、一時は見るもいたましいものがあつた。恐らく殺された人たちの中には善良なる宣教師もあつたろう。

拳匪のために各国の取り得た賠償金は四億五千万両で四朱の利付であるから、九億八千二百万両である。教会の取つた賠償は千五百二十五万一千二百八十一両三仙七分であつた。各国の宣教師はこの賠償でもつて、学校、教会を建設したのである。今日、支那各地にある目ぼしい教堂、校舎はその時建設したもので、いわば賠償成金になつたわけだ。當時、各地に入り込んでいた日本人商店でも、賠償成金になつた者が沢山いる。一枚のガラス戸を破られて五万円をせしめた者もある。

今日の支那はなぜ混乱するのか、他にも理由は多、ある。が、經濟的枯渴こかつが支那を二進につちも三進さつちもある。

も動かなくしてしまったのである。しかば拳匪賠償金支払いによる支那の財政難は、その最大なる理由であらねばならぬ。支那の混乱は財政難で、財政難は拳匪賠償のため、拳匪は教民の横暴、教民の横暴は宣牧師に責任があり、つまり支那を混乱に導いた者は宣教師なのである。まあ、それほどには言わなくとも、若干はそうしたところがある。

過ぎ去つたことはどうしようもない。今からでもよい。宣教師たちは悪魔の手から離れて、國家の権利を振りまわすことなく、ひたすら神の保護だけを信頼して伝道にいそしむがよい。さもなければ必らずや第二次ボクサー・ムーブメントが起ころう。そして今度はそう沢山の償金にありつけぬはずである。もう支那はとても貧乏しているから。

新時代の到来

一九一九年、五・四運動が起つてこの方、支那に偶像破壊・思想革命の時代が到来した。自由追求の思想が支那青年を燃え上らせた。そして民衆運動の烽火はあちこちに上り、合理的な排外運動から社会運動に進み、ついには教会を置き去りにして左傾する勢いになった。

もう教權などを振りまわす時代は過ぎた。国家の威力を笠にきて支那人にとつづける時代ではない。ただ神のみを後援として支那伝道をなすべきである。ゆえに河南省で宣教師が二人や三人

土匪に殺されたからといって、そう賠償だの抗議だのといきり立つべきではない。アフリカに伝道して毒蛇にかまれたと同然に考えるがよい。どうせ宣教師は身も魂も神と支那人とに獻げて来支しているのである。いまさら抗争すべきではない。せつかく一命を獻げたのに支那国家から償わせるならば、すでに報いられてしまうから、上帝は貴き犠牲として嘉賞せぬであろう。「仇を報いるは我にあり」とバイブルは教えていたのではないか。死んだ宣教師の仇討ちをしないでもよい。断じて後援を大洋隔てる自国に待つてはならぬ。

そういうえば支那の土匪に見くびられて、殺される恐れがあるという。しかし、それはかえつて愚論である。今日ではその逆なのである。外人宣教師を捕虜にしたり危険に遇すると、支那国家が非常に心配にするから、従つて幾らかの金になる。というので、人質としてとつつかまる外人宣教師が多いのである。この点から考へても、商人その他はともかくも、宣教師だけは賠償つきの首を携えて支那内地に入り込んではならぬ。ありがたそうでないと宣教師が入つてくるために、支那は大層な国費を準備せねばならぬから、しょせん有難迷惑である。

金よりも人

日本人は金の方を先に集める。金さえあれば何でもできると考える。けれども金だけでは何も

できない。

支那各地を見て歩いて、大学病院、教会、学校の広壯な建築を見て帰る。ちょっと見て彼らは金があると言う。けれどもそれらの事業ができあがるまでに粉骨碎身した人物のことは、よほどの人でないと見通すことができぬ。見よ、いずれの大学、病院にも目に見えぬ血みどろなる人柱が立つてゐるではないか。

燕京大学はローリー博士の双肩の上に建てられてゐる。今から四十年前、二十名の生徒を集め開校したローリー夫妻の生産を抜きにして、大学の今日あるを想像できない。武昌のブーン、上海のスベア、奉天のクリスチ、ああ、金ばかりで建つたのではない。貴い人柱をなくして支那伝道は成功するものではない。

私たちは国家を超越して、支那のために支那に伝道することを望む。それはもちろん祖国を念頭から駆逐することはできまいけれども、いずれの国にあっても十人や百人ぐらい、自國のことを忘れてしまつて外国のために身を献げる者があつてよいと思う。

そういうような超国家的な人間が、他国のために働いているということが、民族と民族とを親善ならしめるのだ。

(大正13年1月13日号「北京週報」)

治外法権・租界を放棄せよ

日支通商条約のことを、支那では「中日通商行船章程」と称している。この条約は日清戦役直後、明治二十九年七月二十一日締結された。戦勝国日本と戦敗国支那が通商条約を結ぶのであるから、条約の内容に不平等的ムードがみなぎることは無理のないことである。

ところで去年の十月二十日に外交部は芳沢公使に書面を発して、日支通商条約改訂の提議をなした。同条約の第二十六条によると、民国十五年（一九二六年）十月二十日は批准当日から計算してちょうど三十年目に当たる。そこでこれを改訂しようど言うのである。

明けて本年一月二十一日から外交部において、顧維鈞部長と芳沢公使との間で、日支通商条約改訂会議が開会された。顧維鈞は開会演説で、平等互恵を基礎とする新条約の締結を希望し、領事裁判権や租界の問題に触れた「条約基礎案」を提出したそうである。会議は決して楽観を許さぬものがあると報じられている。日本側の切望する互恵条約が締結されるまでには、幾多の難関が経過されるべきであろうと予想される。

吾人はこの場合において、日本の対支政策なるものについて言及する必要を感じる。

多くの日本人は領事裁判権の放棄に關して今なお執着心を有するようである。持つてゐるもの
を一つでも半分でも放しがたいのは無理ない感情である。また實際あの支那人が死刑に処せられ
るところを見ると、支那の法律でもつて死刑に処せられたくはない。あの荷馬車に乗せられて
「好（イオ）」と罵る群衆の中をねり歩いて、天橋で撃たれ、犬に血を嘗められるのは嫌であ
る。同じ死刑でもやつぱり日本の絞首台に上がる方がずつとよいではないか。辭世の一匁、例え
ば、「天橋で撃たれて死ぬる身とならですめら御国で死ぬ心地よさ」とでも声高らかに歌つてさ
“では皆様一足お先へ御免”てな調子で、悠、と死刑に処せられたいものではないか。

記者は、柔道を学んだ時に、一再ならず首を絞められて仮死した経験があるが、絞首というも
のはきして苦しい死に方ではない。それだからいよいよますます支那のごとき、惨酷な時代遅れ
の死刑はまつびらご免である。その点、領事裁判権というものがあることは大いに安心である。
けれども果たして領事裁判というものが、有難いことばかりを在支日本人にもたらすのである
うか。これまたはなはだ疑問とせねばならぬ。領事は本当の法律家ではない。いわば外交の法律
家である。法律といふものは恐ろしいもので、いろんなことを言って未決囚にでもなるうものな
ら、それが長崎まで行つて内地の裁判官から無罪を宣告されたとしても、未決囚として捕われて
いた月日の日給も手当も、それから賠償も何ももらえないことになつてゐる。

領事が行政と司法の両権を握つてゐるから、領事のちよつとした心持ち次第で有無を言わせず、

退去命令というのを食わねばならぬ。して考えてみると、領事裁判権もいい加減なものである。現に今日ドイツ、オーストリア、ロシア等の国民は、治外法権を持つておらぬのであるが、未だ天橋でサラシ首になつた者が出ないようだ。治外法権は在留民を素足で市街を横行させないところに効果が現われているくらいのものである。日本の国家がしつかりしておれば、日本国民たるもののが、治外法権が撤廃されたからといって、不合理な判決を受けることはあるまい。

次は租界である。租界の放棄もまた未練ある問題の一つである。けれども早い話が天津の租界を見るがよい。日本人は目抜きの大街を支那人に売つてしているではないか。東拓といつても背に腹は代えられず、支那人に売つてしまつた土地である。支那人は国家が失つた租界を、国民の力量で買い戻している。これもなんら国家的見地からでなく、ただ経済的発展をもつてやつてのけている。この調子で行くと租界というのは名義のみで、実は支那人の商業地となり、亡命地となつてある。

支那人を安心して居住させ、安心して商売させるために、帝国義務兵をもつて警護する租界を持つっている必要も義務もない。そうしたものをことごとく放棄して、内地雜居土地所有権を得て、あべこべに満州ぐらい片っぱしから一畝ずつ買い取りに行くくらいの国民的勢力を涵養せねばダメである。

在支日本人が日の丸の威光を背負つて対支發展をしているようでは、日本人ももうダメである。

日露戦争以後の国威が在支日本人をスパイ専門としてしまった。日本国民も男一匹の勇を持つて、獨立不羈の精神に立たねばならぬ。今時国家に依頼しているようでは、今後の發展ははなはだ悲觀すべきではないか。互恵条約が幸いにして締結されるとしても、恐らく十五年後、長くて二十年後にはその互恵条約も失う時が来るであろう。日本国民たるもの十分の用意をもつて、将来に向かわねばならぬと考える。我らはこの対支政策の更改期において、日本国民の覺醒を促してやまぬ。

（昭和2年2月20日号『北京週報』）

北伐途上の蒋介石総司令を訪ねて

国共合作下の国民革命軍は、蒋介石を総司令として一九二六年（大正一五年）七月北伐を開始、廣東から破竹の勢いで北上した。しかし内部対立が激化したため、一九二七年（昭和二年）四月、蒋介石は上海で四・二クとアターを決行し、共産党との関係を絶縁した。この蒋介石会見は、その直前に行なわれたもの。

編集者

きのう、即ち一九二七年（昭和二年）三月十九日、私は水の都九江で、國民軍總司令部行營に蔣介石を訪ねた。私たちは行營を訪れるために、九江の市街に洋車を走らせたのであるが、洋車も古く貧しく、市街もいたつて小さく醜いけれども、久し振りに支那の田舎へ来たような心持ちになつた。町は革命のポスターによつて埋められている。電柱も人家もベタペタである。

行營に至るとさすがに空氣は引き締つてゐる。序門には「提唱三民主義」「擁護五權憲法」という大文字が紫地に白く書かれている。中に入ると、「革命未尚成功 同志仍須努力」とか「打倒帝国主義撤廃不平等條約」と書いてあるポスターが目立つ。

總司令の部屋は最も奥の院子にある。蔣介石の部屋には藤椅子があつて、壁間写真など飾つてあつた。蔣介石はカーキ色の中山服を着て、いかにも軍人らしく見えた。

顔は浙江人だけに極めて長い。つやつや輝いて少しも疲れていない。背も高く風彩は堂、としれている。日本語は流暢ではないがよく解る。人品は決して卑しくない。カルチャアーヴィングのある顔をしている。左右両派間の争いを苦に病んで神経を尖がらせてゐるかと思いきや、なかなかどうして余裕もあれば元氣もある。蔣介石としては、功ようやく半ばに達したつもりであるから、今からくたばつてはとてもやり切れぬわけであろう。二年計画で北伐したのであるから、この六月至つてまる一年、したがつてもう一年の年数があるはずである。

蔣介石とは彼の部屋において会見したが、二十五、六歳の小柄で美しい夫人らしい女性が、私

たちの来るのを見て奥の間に入つて行くのをちらつと見た。

蒋介石の印象は極めてよかつた。私が筆跡を乞うと、「天下為公」と礼記の一句を書いてくれた。この文字は孫文の好んで書いた言葉である。「太平天国の洪秀全を好むや」と問うたが、彼は首を振つて、「我孫文を崇敬するのみ」と答えた。

蒋介石の部屋を去つて、側近の人たちと会見したが、蒋介石はほとんど全部自分で処理決定を行なつて、朝の五時六時から夜中の一時二時まで執務するそうである。人に委せざるところはナポレオンを学んでいるらしい。

ありていに言えば、私は蒋介石などにあまり会いたいと思つてはいなかつた。彼のごときは私の眼中にないものである。と言うとなんだか偉そうなことを言うようだが、私は威張つてかく言うのではなく、別に考えるところあつてかく言うのである。

大体支那にあつても、近代においては一人や二人の、英雄豪傑がいたところで、なにほどのことも出来ないことを知つている。英傑を中心にして考えることは、支那にあつても、もう古いのである。故にむしろ私は蒋介石のリードする支那群衆なるものが、どのくらいまで真摯に、^{しんし}真剣に躍動しているかを知ろうと欲する。今次、国民革命軍をして成功せしむると否とは、一つに支那群衆が国民革命を理解し覚醒したかどうか、その程度いかんにかかっている。故に私は蒋介石のごときに会見するよりも、むしろ国民革命軍に参加している学生隊の一兵卒、もしくは黄埔軍

官学校出身の一小尉により関心を持つ。その方がよほど面白くもあり参考にもなる。とはいゝえ国民革命軍を今日のごとく成功させるためには、蒋介石その人の功績も大いにありと見てさしつかえない。つまり群衆がリーダーたるべく彼を祀り上げる思想なり人格なりが、彼に倨わつてゐるに相違ない。そうでなければ彼は一人の吳佩孚二
はい
ふになり得ても、とうていレーニンもしくはワシントンにはなり得ないわけである。

いやしくも近代支那を建て直そと欲するからには、必ず民衆の欲求、左右新旧ことごとくを展望して、その最大公約数を自己一身に結晶せしめたような人物でなければ、とてもこの広い大きい支那を動かすことはできまい。私は彼がどのくらいまで近代支那の民衆に触れているか、現代支那の欲求をどのくらいまで自覺しているかを知ろうと欲して、わざわざ彼を訪ねたのであつた。

（昭和2年4月17日号『北京週報』）

蒋介石氏と单独会見

蒋介石の名が内外にとどろいて以来、世界の有象無象が我も我もと、蔣の手を握つてみたくて南昌を訪れたが、蔣は婉曲に来訪者を片つ端から拒んで、かつて引見したことがない。しかるに三月十九日、それも明日、南京攻撃の途上に上の繁忙を極める日に、寸暇を盗んで私と会見してくれた。

蒋介石は私を総司令部行営にて引見してくれた。けだし内外の新聞記者にして、蒋介石に会見し得たるものは、私をもつて嚆矢とするであろう。

総司令部に行くと、参謀や副官の将軍たちが飯を喰つている。多忙なるが故に椅子にかける暇がない。立食でやっている。兵士なみの粗食だ。

ややありて参謀長朱紹良が出てきた。小柄な青年将校で三十一歳、日本の士官学校出身だから、日本語はお手のものである。にこにこしていて、表情もまるで日本人である。

国民革命軍は将卒ごとく若い。若い者でなくしてどうして革命ができるよう。私は維新当時の日本を想起した。私はもう蒋介石などに会見せんでも、この人に会つただけでよいと思うた。蔣

介石が暗殺でもされたらだ、あれくらいの男がいくらでも居ることを知つた。北方の軍閥と違つて、國民革命軍は一英雄、一豪傑のものではない。これは民衆のもので、蒋介石はただその民衆に推され、また民衆をリードするIカイライに過ぎない。一人や二人の傑物が仕事をしてると思つたら、見当違いだ。

ラツパがりゆうりようと響いた。午後九時半の点呼である。夜更けて、十時に近いころ、蒋介石の居室に案内された。私の手を握つて、旧知に会うが如く語つた。今年三十九歳、五尺七寸か八寸の偉丈夫である。洒、落、実にリファインされたゼントルマンである。明るい男、白い歯をみせてにこにこ笑う。聰明な顔、その風容卑しくない。頭は少し薄くてオールバック、額が大きい。輝いたひとみは瑞、しく、その声に熱がある。

彼の日本語は充分に用足せる。よく日本を知り、國民新聞、徳富蘇峰の名も知つていた。

まず聞きたいことは、彼の一身に浴びせかけられている南方極左派（注：武漢政府）の悪口に対する答弁である。極左派はこのごろ蒋介石が急変して新軍閥化し、親日疎露の態度を採り居るもののがく宣伝している。

私はそこそこに、字を書いてもらつて辞去することにした。彼は「天下為公」と書いてくれた。私は彼に國民革命の成功を祈る旨、いく度も繰り返し、再び握手して帰つた。翌日、蒋介石は兵卒二万を率いて、安慶に下つて行つた。一举に南京城を屠らんとしている。

（昭和2年4月4日から3回連載『國民新聞』）

支那人は更生するか――国民革命の前途を占う――

今次国民革命をソビエト革命に比較して考えるものがある。けれども両者はおおいに趣きを異にする。

第一、革命の役者が違う。ロシア人は田舎者の歐州人ではあるが、何といつても文化を将来に有する国民で、今や全盛を誇るアングローサクソンの次に現われて来るべく囑望しょくぼうされている民族である。これに反して支那人は文化をすでに過去に有する民族で、国家生活のドン底に陥つてしまり、いかに買いかぶりされてもそこここに極めて僅少な更生の兆候が、それもやつと認められるくらいの程度の国民である。

支那のそこここにぽつりぽつり見える、いわゆる新人なるものも、あまりに無知な民衆とあまりに腐敗した周囲のうちにある間に、知らず知らずのうちによみがえりの力を失つて、もとの木阿弥になつてしまふ。ことに現代のごとき、二人や三人の人傑によつて、一国を動かすというようなことが困難である時代にあつては、そこここに光つているわずかの新人の力で、この国民が容易に更生するわけにはゆかぬ。

やはりこの國民が若、しい力量に満ちるまでには、三十年、五十年を要する。ラテン民族が下り坂になればなるほど、アングローサクソンが台頭して来たごとく、アングローサクソンが下り坂になれば、スラブ民族が上り坂となり、スラブが絶頂に到達する頃に至つて、初めて支那民族がようやく新興國民として更生するであろうと觀測される。この觀測は当たるも八卦、当たらぬも八卦であるが、ともかくも今のところでは、支那人はまだまだ新興國民たるの氣性をもたぬ。實にデケーライニング―ネーションである。

（昭和2年5月8日号「北京週報」）

李大釗の死 —— 彼の思想と人物 ——

李大釗は中國共產黨創立者の一人である大立物。北京時代の青年・毛澤東は、この人に師事していた。

編集者

一九二七年（昭和二年）四月二十八日、李大釗君は十九名の同志と共に、絞首台上に慘死をとげた。

彼は直隸省樂亭県の人である。樂亭県は天津・山海關の間にあつて、唐山、開灘等の炭鉱に近いので、幼少から労働者の悲惨な生活、世の資本家なるものの、飽くところを知らざる食欲を見聞きした。わけてもその資本家が外人であるのを見て憤慨せざるを得なかつた。たまたま鉱夫が死ぬと見舞金四十元を遺族に贈る。牛馬でも一匹は数十元する。人命は馬よりも安価なるか。幼少にしてかかる問題に触れて育つた以上、彼が無産者の味方として立ち上がつたのには、またいわれありと言ふべきであろう。

もう一つ彼を過激に奔らせた原因がある。彼の生父は彼がこの世に生まれる前に死に、彼の生母は彼を産んでその産褥に逝つた。かくて彼は生まれながらにして人生の荒波にもまれた。世に父母の愛を知らない者ほど、不幸な者があろうか。聞くところによると、社会主義者の過半は幼少にして父母のいずれかを失つたものであるというが、孤児はえてして心理的にバランスの感覚に欠けるようである。バランスが欠ければ、常軌を逸しても、それを自らは感覺し得ず、自ら矯激に奔るものである。李大釗君もその例に洩れず、彼が平凡な往生を遂げ得ざるに至りしは、また同情するに値するものがある。

彼を見る父母がなく、祖父母もすでに老いたので、十歳の時に子守を兼ねた十六歳の妻を当てがわれた。この李夫人周氏は、ついに獄屋においてすらその夫を看守るべく運命づけられたのである。

李大釗君もよく自己を知っていると見えて、自分の号を「守常」と称して、なるべく常識に生きんと志していた。あたかもおしゃべりの人が「沈黙」と称したり、柔軟な者が「剛頑」などと号を作るのに似ている。けれどもいくら号や名を「守常」と呼んでみても、行くところまで行かないと思がすまないのが彼の性質であつた。

百姓の子は百姓をすべきであるというので、彼を野良に追いやつても、彼は農夫として生活を送ることを望まず、書見にふけつて働くとしない。ついに彼の欲するがままに、田畠を売り飛ばし、家屋敷も売り払つて、彼を学校に入れることにした、まず永平中学を卒えて、それから天津に出て、北洋大学に入学した。当時、北洋学堂には今井嘉幸、吉野作造氏の両博士が講師として教鞭を取つていた。両博士とも当時は大学を出たばかりの青年学者であつたから、定めし今頃よりも矯激な思想の持ち主であつたろう。

これらの学者のもとにはなかなか人才が集まつた。張作霖氏の顧問趙欣伯、共産主義に殉じた李大釗いづれもその頃の学生であつた。

李君は北洋大学の学友中に、白堅武を見出し、刎頸の友となつた。今次彼が囚われるや、趙君も白氏もあるいは表門よりあるいは裏門から、いろいろ命乞いの運動をしたのであるが、李君があまりに知名となつたために、どうにも仕様がなかつた。

北洋大学にいた頃、李大釗君は孫洪伊に私淑する機会を得た。孫洪伊という人物はまた決して

凡なる政客ではなく、刃上を渡り歩くたちの人である。刺客に襲われることがあまりにたびたびなので、神經衰弱に陥つたというが、かかる人物を先輩とし、さらに矯激なる性質が、平凡に常を守り得るはずがなかつた。

北洋大学を卒えてから、孫洪伊の尽力で、日本に留学し早稻田大学に入り、經濟、社會の両学を聽講することになった。當時、早稻田には陳獨秀がいて、群益社というものを組織し、革命青年を糾合していた。李大釗君が陳氏に知られたのはその頃であった。

民国五年、早稻田大学を出て北京に帰り、白堅武氏と共に『晨鐘報』というちっぽけな新聞を出し、自ら編集主任となつていた。のちに当時の北京大学文科学長陳獨秀の斡旋で図書館主任となつた。

その頃、私は丸山昏迷君や、鈴木長次郎兄と共によく彼を訪れたのであるが、北京に訪れて、一番愉快な家の一つであった。鈴木兄はまもなく東京に去つたが、兄のごときは李君の思想を行せしめるに預つて貢献のある方だから、遠く東京にいっても、李大君の幽靈に会见したつて、まんざら不足は言えまい。図書館主任をしながら、『新青年』によく馬克思（マルクス）を紹介していたが、ついに北大で馬克思の唯物史觀を教授することになつた。

彼が女高師の方でも教えることになつてから、女学生間に婦人參政權運動が起つた。彼は群衆運動を起こすことのコツを覚えていたものと見え、北大にあれば北大で学生運動が始まり、女

子大へ行くと婦人運動が起こり、労工会に關係すると唐山礎夫のストライキがはじまる。

彼のマルクス觀は雑誌『新青年』の第六卷の五号と六号とに出ているはずである。今、私の手許にその雑誌がないけれども、記憶によると、李大釗君は人道主義をもつて人類の精神を改造し、同時に社会主義をもつて経済組織を改造すべきである、單に人類の精神だけを改造しても効果が少ないから、同時に経済組織を改造して初めて、社会の改造が完成される、というようなことが書いてあつた。早稲田の安部磯雄氏でも言いそうな、しかしマルクスの唯物論には、一擊を加えた心算であつた。故に李君は靈肉一致論者であつて、唯物一点ばかりではなかつた。彼はまたマルクスの剩余価値論に対しても批評を加えて、それが根本的に間違つていてることを述べていた。

雑誌『新青年』時代は右のように、割合いにマルクスを批評的に見ていたのであるが、『少年中国』を出版しだしてからは、よほど、意見も変わつて、唯物史觀に對して漸次同意するようになった。

私は李大釗君がよく書物を讀んでいるのに時おり驚かされた。パートランド・フッセルの來た頃に、私はラツセルの『自由への道』と『形而上学』『哲学とは何ぞや』と、たつた三冊讀んでいたのみだつたが、彼はラツセルの書物は皆讀んでいた。その頃はまだ日本にもラツセルの翻訳が出てなかつたが、彼は英文でもつてゾオルシエビズムの実際と理論をも讀んでいた。彼は讀書家ではあつたが、やはり学者としてよりも、どちらかというと活動家の人物であつた。青年を

して生命を投げ出さしむるまでに、魅力を有する人格者であつた。

ソビエト・ロシアの革命を一番早く詳しく支那に紹介したのは、李大釗君であつて、雑誌『新青年』の第九卷第三号に、『オロスの革命の過去および現在』という論文を寄せ、レーニンを詳細に紹介している。

「我要殺人所以人必殺我」。これはレーニンの長兄アレクサンドルが言つた言葉として、李君はしばしば自分の文章に書いている。その言葉どおりに彼は殺害された。

三月の初め、私は李君に一書を送つて、交民巷にいることの危険を説いた。それは英國公使館がロシア公使館のすぐ裏にあって、これを包囲しているから、どのようなことが起こらぬとも限らぬと思つたからである。「南支へ一緒に行こうではないか」と言つてやつたが、何しろ私はこの二年間逢わないのであるから、いかんともすることができぬ。米国から帰つてすぐ訪問しようとしたところ、ロシアの公使館にいるとの噂であつたから、手紙を一度出したきりで南支に行つてしまつた。はたせるかな四月六日、襲われ、逮捕された。聞けば、探偵がボーアになつて入り込み、様子をすっかり探つていたとのこと。

四月六日の襲撃の際には、ロシアの通訳官が、

「後で必ず、君らを奪回するから、行きたまえ」

と言うから、おとなしく捕えられたのであつた。何でも李君は土壠の隅にしやがんでいたところ

を見つけられて捕われたそうだ。

四月二十八日、同志十九人と共に何豊林を主席とする特別法廷で午後一時、死刑を宣告され、それからすぐに絞首台に上るよう命じられた。李大釗君はただ黙、として顔色を変えず、落ち着いて絞首台に上った。

絞首台はレンガの階段を上れば板の台がある。その板の上に乗ると、天井から一つの綱が下がっている。その綱で首を巻かれた後に、板の台がベツタリと落ちて、李君はついに惨死したのである。その眼玉はえぐられ、首は伸び、目も当てられぬ惨死をとげた。

かの革命を志して以来、このことを常に期してはいたが、革命がようやく成らんとする前に、この世を去るのは彼としても残念であつたろう。

私はあの夜どうしても眠られず、幾度か会見したその一三つを思い出して、思わず号泣せざるを得なかつた。（ルナツクが言つたように、歴史を見れば文化の町角には必ず鮮血淋漓たる殉教者の碑が立つてゐる。時代が変わるために、どうしてもそこに犠牲の血潮が流されねばならぬ。李大釗君も今は喜んで死ぬがよい。そして烈士の一人とされるがよからう。人の死は悲しいけれども、平、凡、病魔に負けて死ぬことを思えば、どのくらい死に栄えがあるかわからない。ただ私がここに書き添えたいことは、彼が日本人に対して、実に優しい感情を持っていたことである。日本人のだれが訪れても親切に遇した。日本から逃亡して來た一社会主義者（注・佐野

学氏をさす）のごときも、彼の尽力によつてロシアに逃れたものである。彼は日本にある同志をも、ひつくるめて排日の的とするほどに偏狭な人間ではなかつた。

ただ私たちの遺憾とすることは、彼の妻が革命の何たるか、犠牲の何たるかを知らずして、「守常迷信共産」と称して、泣いてばかりいることだ。何香凝夫人のように、夫の死を礼賛するだけの頭のないことがとても氣の毒である。ともあれ、彼の遺族に幸多かれ。

（昭和2年5月8日号「北京週報」）

南京事件と日本出兵

一九二七年三月二十四日、北伐途上の国民革命軍が南京を占領した際、いわゆる「南京事件」を引き起こした。その背後事情はともかく、日、米、仏の外人在留民らが襲撃、略奪され、死傷者も出た。その直後の四月二十日、日本では対中国強硬論者の田中義一内閣が成立し、五月に入つて第一次山東出兵に踏み切つた。その後の日本は満州事変、日支事変へと、まっしぐらに侵略路線を突つ走ることになる。

編集者

田中内閣成立と聞いて、吾人はいよいよ日本も出兵するぞと思つた。思つていたように、やつぱり出兵した。天津への出兵は团匪事件の最終議定書とかによつて理由づくのであるが、山東への出兵は明らかに支那に対する国権侵略である。「しかし南京事件あり、漢口事件あり、もはや出兵もやみ難いところと言える」そうな。

国民革命軍が南京事件を起こしたことには、国民革命軍のために惜しむべきことで、それがたたつて、今日のような日本の強硬政策となつてみれば、今さらながら国民革命軍も南京事件を悔いているであろう。

我らの古老たちの思い出によれば、伏見鳥羽の合戦でも彰義隊のいくさでも、いくさとあれば強姦や略奪はつきもので、ただ単に国民革命軍の支那兵士ばかりがブルータルであるわけではない。歐州大戦の時に、ドイツの兵士の獣的な行動を詳細に書いた書物を読んだことがある。戦争が済んでから、またしてもドイツ語で書かれた似たような書物を手に入れることができた。それによつていかに歐州の戦場において、英米その他の兵士どもが醜態を演じたかがわかつた。

台湾にマコーという英人宣教師がいた。この人は台湾人を妻にまでして台湾のためにその生涯を献げた人である。このマコーが領台の折、日本人のために余りに多くの台湾人が殺戮され、また凌辱されるので、見るに見かねて乃木大将の所に行つた。マコー氏は会うなり直ちに、

「あなたはなぜ台湾人を殺しますか」と言い放つた。

すると乃木大将は直ちに跪いて、「もしも一人でも善良な台湾人が殺されたとすれば、實に申しわけない」と答えて暗然としておられた。この壯嚴な光景を見てマコ―氏は、多くの台湾人に帰順を説いたそうである。このくらい正義に強い乃木大将の率いる兵士でも、あの時には随分なことが行なわれたと言われている。

南京において、國民革命軍兵士諸君が、世界のあらゆる兵士と同様に戦争という慘たる、生きるか死ぬかの場合に狂的になり、南京事件のごとき大事件を起こしたことは、私の理解できるところである。しかしそうした行動に出ることは、人間の通弊であることも私はよく知っている。けれどもかかる人間並みの通弊を暴露すべく、支那の国家的位置は余りに低いのである。

出兵の理由は居留民の保護とされている。我らのような不甲斐ない者のために、出兵とは實に恐れ入る。

かつてカールーマルクスは、すべての戦争は資本家が起こしたものであると言った。私はそれを信じなかつた。なぜならば日清日露の両戦のごときは、幼年の頃唱歌でもつて学んだごとくに、実に破邪顕正の戦いであるから。けれどももうける時にさんざんもうけた工場主がその工場維持のために出兵など言い出すと、カールーマルクスの言葉が自然と裏書きされてくる。

紡績工場のごときは資本家がこれを日本に設けずに、ことさらに支那に設けたのは、一つには

日本の工賃が高価なためである。彼らは国家のためを思つて支那に工場を建てたものでは断じてないのである。單なるソロバン勘定を本位として建てたものではないか。日本の労働者の仕事を増やすことをあえてせず、支那人の労働者の仕事をこしらえてやつたにすぎぬ。かかる者の事業を國家が保護する必要はないのである。

また、居留民の生命の保護というのも、これまた出兵によつて保護されるものではないのである。出兵によつてやがて、濟南の邦人は商売が出来なくなり、留守を兵隊さんに頼んで、居留民は引揚げる時が来るに相違ない。出兵に要する金銭を、居留民に与えた方がどのくらい利益であるかわかるまいと言われている。居留民なるものは、いざれも商売があつて居留するものである。出兵せねばならぬような場合になれば、商売は出来ないのである。商賣が出来なければ居留する必要はない。故にかかる場合には、店舗に留守番をおいて、留守中に略奪されたら賠償金を取つてもらえばそれで完了である。出兵してもらつてももらわなくても、結果は同じことになるのである。

もし、濟南だの京津に日本軍隊を備え置いて、南軍の流れ弾が落ちて負傷者でも出した場合、それを口実に南軍に火ぶたを切るようなことがあれば、それこそ再び世界大戦を巻き起こすようになるかも知れぬ。

最後に言つておく。今度の出兵によつて、もう一度頭の鈍い連中に實物教育をなすのであるが、

そのかわり今度こそ出兵の結果をよく見て、もしそれが出し損に終わつたならば、その時こそ頭の鈍い自称支那通は剃髪ていはつでもしてわびるがよかろう。

（昭和2年6月5日号『北京週報』）

国賊と國際精神

私は過去十年の間、北京においていつも、身を左端に置き、常に叫び続けて来たのである。あらゆる時は国賊視され、ある時は過激派と罵られもし、馬鹿と言われ、狂人と扱われた。しかも私はかつてかく言わることを悔いたことがないのである。

私が国賊視された理由はどこにあるのか。非国民として罵られた理由はどこにあるか。それは言うまでもない。私に一つの國際精神があるからである。私には日本民族を愛する心は十分にある。けれども同時に隣国支那の憂を、わが憂となすだけの気持ちを持っている。故に人が支那を悪様に言うと、実に腹が立つのである。この精神があるために、私はいつも支那を責めるよりも日本をなじることが多い。他に対しては寛、己に対しても厳たらんと欲する。

それは五・四運動の時であった。日本人の子供が支那人に石を投げられた。邦人は激昂した。しかし、その折りにも私は、「日本人の子供が、支那人のデモンストレーションに罵人的話など

をあびせないように望む」と言つた。それだけで私は國賊旦言われた。また日本人の誰かが、自動車で支那学生のデモンストレーションを横切つたために、ぶん殴られた時、私は、「排口デモの行列を横切るなんて無茶だ。在支邦人は事件を起こすと横であるから、なるべくことを構えないように注意すべきである」と新聞に寄書きしたら、脅迫状が来た。ぶん殴るぞ、という手紙である。

支那の兵隊が乱暴して略奪をやつたと聞けば、人、は皆憤慨するが、私は賠償成金の出ないよう祈るのである。私はもう殴られても殺されてもよいから、「我呼ばずんば石叫ぶべし」というところを叫んでみたいのである。今後略奪が行なわれたとしても、日本の警察は正直な損害高を計算して、決して他国人損害高などとのつり合いなど顧慮せずにやつてもらいたいと考えている。

内地にいる同胞と違つて、外国にいる者は国家的・精神だけではどうしてもいけない。愛国心だけではその愛国心をすら満たすことができぬ。眞に日本民族の発展を願う者は国際的精神を所有せねばならぬ時代が来ているのである。

ある種の在支日本人は、白色人種、わけてもアングローサクソン民族に対抗する意味で、支那を憂える者があるごそれも狭い考え方であるひ日支親善は国際的精神の上に立脚させなければ駄目

である。英米を向こう側に置いて支那人をこちらに引き着けることは、やがて英米が日本に対抗して、支那人を煽動する危険をもたらすつだから日支親善は国際的精神を基調とするものでなければならない。

次に私は人間平等を目指す社会精神を信奉している。私はお金持ちのみならず、貧しき者にも友人を見出す。私は自らがクリスチヤンであるからには、共産主義者でもなければ、ヴォルシェヴィキでもない。けれども現代において、社会精神すなわち階級融合を望まない者は、いうなれば社会の寄生物である。いかに自分が得た私有物だからとて、富む者が勝手に贅沢してよいわけではない。

さて私がこの社会精神を所有し、西洋大にまで忘れられた支那の貧民階級に貢献しようとすることに何の差し支えがあろう。大厦高楼の校舎を用いて、ブルジョア階級の学生を招く西洋人の真似はできないから、忘れられた貧しき群れに入り込んで、その子弟を教えることに興味を抱くのである。実に結構なことではないか。しかも私は大通りの街道から入り込み、特に目立たぬ片隅に小さい家屋を用いて貧民子弟を教育するのである。私は大なる宴会に列して、支那のブルジョア階級に触れる機会よりも、この一日銅錢一文で部屋を借り、銅三十文で腹を満たして行く人たちを友として生きているのである。社会的・精神なくして、これができるようか。このような国際精神と社会精神とを持つて北京村の左端に生きている者が、一人くらいいても差し支えないであ

ろう。それが時折すさまじい議論をなし、出兵に反対し、祖国を攻撃しても、それはいささか支那人の排日感情を緩和するとも、決して悪い結果をもたらすものではあるまい。

私はしばらく北京を去るが、病氣が良くなつたらまたやつて来る。私は北京が好きで支那人を愛するから、馬鹿者と罵られながら自分の使命を果たすであろう。賢人は沢山いる。馬鹿者も一人や二人はいてもよいと思う。

（昭和2年7月31日号「北京週報」）

蔣介石は対日長期抗戦の構え

昭和七年春、清水安三先生は五年間にわたる日本内地生活に終止符、ようやく北京にもどることができた。すでに満州事変（昭和六年九月）が突発、いわゆる（日中十五年戦争）が進展中、日本国内においては、治安維持法施行実正十四年）以来、言論自由の大正デモクラシー時代が過ぎ去っている。編集者

●十一月六日、山西の太原を去つて石家莊へ。そこで平漢鉄路に乗り換え、鄭州に向かいました。平漢鉄路はフランスから借金して敷いた鉄道ですから、汽車の切符にも駅の掲示にも、フラン

ンス語が書いてあります。七日の夜明けに黄河を渡りました。

鄭州は瀧海鉄路と平漢鉄路面との十字点ですから、十八年前の飢饉の折り、ここに来たことがあります。かゆや衣服を与えて来たわけですが、当時はただの村にすぎなかつた。それがいまやかなりモダンな町になつてゐます。それから開封に行きました。宋の都ですから、北京によく似ています。しかし規模が小さい。

●北支で日本の陸軍がいろいろ刺激するので、支那は黄河の線に約六十万の兵力を集結しています。町という町は兵隊だらけ、憲兵にうるさく名刺をよこせとか、パスポートを見せるとが、うるさく調べられます。しかしどの宿でも泊めてくれる。五四運動以来、排日運動が激しくなると、日本人だと泊めてくれませんでしたが、いま日本が対支強硬政策を取つてゐるため、支那の人、はかえつて遠慮するのです。これがもし日本人だったら、恐らく逆でしょう。

●十一月八日、昔の長安、今の西安に着きました。蒋介石は西安を陪都として重視しています。いざ緩急のさい、直ちに都を西安に移すつもりでしよう。南京はすぐ軍艦に襲われますからね。ここに本陣を置き日本と戦う。黄河の線で戦つて、押されたら四川省の成都に移り、できるだけ長く戦えるようにする。

だから西安は田舎であるのに十六間道路がつけられ、恐らく北支那切つてのピチピチ繁栄している町なのです。共産軍を征服できたら、次の蒋介石の仕事はなにか。それは日本もこれだけ刺

激するかぎり、覚悟すべきでしようよ。私はパシフィストですから、軍事を語ることを好みませんがね。日本もよい加減に、騎虎の勢いを騎牛の勢いにしなければいけない、と思います。

● 西安はなにしろ唐の都があつたところですから、本当に（ワイの皆様、長安の史跡訪問ぐらいい愉快なものはございません。

秦の始皇帝の阿房宮の跡に、礎石が転んでいました。英雄の跡方がこんなものだと思うと、本当に哀れですわね。一千年といわず、五百年の後に、果たして日本の英雄的軍将が古北口に屯されたという跡は遺されるのでしょうか。富士の裾野を往来した義家や頼朝の跡は、どこにも残つていませんね。けれども内村鑑三の萩安録にあるように、その裾野で開拓に従事せし無名の百姓の事業は、今も秋がくれば実るものね。

● 十一月十日、私は咸陽に行きました。秦の古都です。自動車で滑水を渡り咸陽で昼食。支那の田舎で飯を食うときは、両眼をほとんどつぶつて飯館に入り、両眼をつぶつて食うに隕ります。そうしないで、蠅が群がる不潔きわまるキツチンを見ると、とてもよう食べられぬ。しかれども眼をつぶつていれば、宛然、周公の宴会に列せるがごとき心持ちで、愉快に箸が持てるというものです。

● 西安をそこそこに切り上げて、洛陽へきました。いまや田舎町ですが、洛水は昔の如くに流れ、京都と相似かよえるところがあります。昔、洛水に天津橋という橋がかけられていました。

今でも川原のどまん中に、ちょこなんと昔のはしくれが遺っています。嬉しくなつてその遺物に腰掛け、まわりの風景を見ていて、けんけんとホトトギスの鳴くのを耳にしました。天津橋上杜鵑はとときすの声を聞いて、天下これより大いに乱れん、と詠じた人の言葉を思い出し、思わず肅然としました。

私は支那がアビシニア然と、日本に食いつくときが、日一日と近付きつつあると感じます。日本を仮設敵としての支那の軍備配備は、着、と用意されつつあることを感じます。そんなことを考えないで、目下の日本人あんまり無鉄砲にやり過ぎています。

いま北支で行われつつある自治運動の如きは、あれはなんということです。東京の新聞に打たれる電報はことごとく、口言半句残らずあれば嘘です。支那の新聞のいうところは、全く反対です。北京の英字新聞に報ぜられるところと、全くあべこべです。私は北京に戻つたら、相賀主筆に北京の英字紙ペキン・クロニクルを送つてあげようと思います。

● 目下の蒋介石は、日本に和戦二つの構えで対しています。今度の行政院（内閣）は九名のうち五名まで、日本留学生出身の日本通で固めています。日本としても、この内閣とうまく日支問題をまとめるのでなければ、もはやチャンスを失う。廣田外相もこの際、緊権一番を要しましょうよ。

しかし支那はもう八分、一度は日本と戦わねば、日本人の対支政策は進歩的になるまいと観念

しているようです。要路の人、ばかりではなく、國民も皆そう考えています。

戦う場合、この洛陽が多分、中心地となるでしょう。洛陽には昔、吳佩孚がいましたが、その頃の兵營がすっかり改造されて、北方に向かって防備されています。立派な十二間道路が洛陽へ洛陽へと、河南、山東、直隸の平野に作られています。

蒋介石の作戦は、洛陽の次に西安を足止まりにするつもり、そこで西安へは山西、綏遠、河南などからのハイウェイが集められています。もうすでに太原からの風陵渡への汽車もできましたから、太原から潼関への兵力集中が容易です。多分、西安の次の、最後の足止まりは成都でしょう。成都まで西安からの道路が今、昼夜兼行で作られています。成都で頑張るうちには、英米仏独露などごとく勢揃いして、日本に対抗するであろうと考えているものらしい。

私のこの予言は、必ず的中するとはいわぬが、支那のインテリ民衆の何人もがひそかに抱くプログラムですよ。

支那の新聞には、日本の〇〇が一弗十五仙ずつで、支那の苦力を狩り集めて、自治運動をやつたとかなんとか、毎日報じている。北京の学生がこれに憤慨して、自治運動反対のデモンストレーションをやり、巡査に切りまくられて、手を切られ耳をそがれても、男女の学生が血みどろになつてデモンストレーションをやつている。

天津橋上、杜鵑を聞き、東亜の今年は決して尋常の年でないと思われてなりませんわ。昨夜は、

まんじりともしなかった。あの杜鵑の声から、それからそれへと考えて、日支の将来を思うて、日本のために心から憂えたからです。

●洛陽から鄭州に出て、十一月十四日漢口（現在の武漢）に到着、久しぶり日本人宿に泊まりほつとしました。やつぱり畳のお部屋で、ドテラを着て、火鉢に手をあぶって原稿を書くのは、実に何ともいえぬ味があるものですね。日本風呂に入つて、日本乙女の女中にお給仕してもらう。刺身も蒸し菓子もここにはある。日本人の居留民が二千五百と聞きます。

こうした日本人宿が、天津にも北京にも、濟南にも、南京にも、どこにもある。ですから日本から支那視察に来られる官吏、会社員らは、さつぱり支那人に触れず、皆目支那を知らずに旅行してしまうことになる。十中八九の漫遊客は、一度も支那旅館に泊まらず、一夜も南京虫に悩まされずに支那を一巡するのが常です。それじゃ支那もわかりませんね

●漢口で支那を大いに論じました。やつぱり支那にいる日本人は、大抵大陸主義、帝国主義ですね。私は各国の対支政策の中で、最も聰明なものは、米国であると、人、にいいました。米国はNOとYESをはつきりして、この国になすべきは、どしどし為し、為すべからずはなにもせずいるのです。

例えれば石油、ガソリン、その他なんでも、この国に売りつけると同時に、この国のために病院を建ててやつたり、到る処に学校を設立してやつています。一方に於いては、この国から儲け、

一方に於いてはこの国の文化のために貢献しようとしています。

しかるに日本や英國の政策はどうです。欲に目がくれて、損ばかりしています。日本のあの西原借款というのは、段祺瑞に対する懷柔政策のあらわれでしょう。段祺瑞に手兵を作つてやるのに二億円も貸したでしょう。今に一文も半文も返つてこないでしょう。あの二億円かあつてご覧なさい。北京にあるロックフェラーの世界最大級の病院、燕京大学という世界で最も美しい大学を、支那の主要都市に残らず、少なくとも十箇所に建てられたでしょうよ。今、北支自治運動のために、○○の○○がまいているお金も大したものでしょう。あ、惜し、と嗟嘆せないでは居られませぬ。清水安三に支那を聞く会で、こういう風に議論をして語り合いました。

●十一月十五日、船で宜昌に向かいました。漢口から宜昌まで五日間、宜昌から重慶まではさらに五日間かかります。つまり北京から重慶まで行くには、東京からサンフランシスコまで行くほどの日時を要します。夏の水の多いときですと、十日も宜昌、重慶間にかかるのですからね。支那は大きな国です。十一月二十三日重慶にやつと着きました。まるでサンフランシスコのようです。こんな立派な貿易の都が、こんな奥地にあるかと驚きました。なんでも貴州、四川には六千万の人間がいるのに、この重慶が物資輸出入の唯一の商市です。自動車がひつきりなしに走っている。特に驚いたのはタクシーの流し、何時でもつかまえられるのです。北京にすら、まだ辻待ちのタクシーありませんからね。

四川は亞熱帶に屬しているので、恵まれしところです。麥や米、麻や桑など、何でも人間の必需するものは、大抵は產するのですよ。まさに一國を成せる觀ありで、物価が安い。峽を出るには、高い運賃の船で行かねばならないから、四川ではただのように安価でも、漢口まで出ると、もう相当高いものとなるのです。

今や、支那は疲弊のどん底です。北京も、天津も、上海も、漢口も、げつそり貧乏している。二十年前、私が支那に来たころは、道行く紳士、淑女の八分、九分は綿にあらざれば罐子の着物でしたのに、今は、大抵のレディも綿服で平氣。貧乏になりました。本当に。

しかるに重慶に來ると、外國に大量流出したはずの銀貨が、まだザクザク市中に闊歩していく、人、は豊かに暮らしているようです。もつとも今は、共産軍征伐で兵隊が集結している戦時景気かもしませんが。

●重慶の山の上に塗山廟があります。塗山で禹がワifixをもらつたというのです。塗山から重慶を見ると、實に風景がよろしい。日本が日清戰役で得た租界は、この塗山の麓、長江に沿う所にあります。だが今や草茫、です。支那中に各国の租界が到る処にありますが、重慶の日本租界ほどむさ苦しい居留地はありません。恥ずかしいですね。アスファルトの道路どころか、砂利の道路すらない。

邦人經營の生糸工場、製粉工場、醤油製造工場、いろいろありますが、みな停弁（休業中）で

機械が赤鏑でした。満州事変の結果です。満州事変のために、南支那の日本人事業は大打撃を受けましたが、特に致命傷を受けたのは重慶の邦人經營の事業でした。中には二十年、三十年の辛苦を水泡にせしものもありし由。

●重慶から成都までは、十八間道路がでけています。蒋介石は共産党や土匪を征討する際、まず自動車道路を兵を用いて作ります。堅いやり方ですね。その（イウェイにはむさ苦しいが、乗り合い自動車が通っています。二十五弗の運賃で、二昼夜で着きます。途中の支那宿で、自動車ぐるみ客も運転手も泊まるのです。米支合弁の飛行機もあり、百弗だせば四時間かかりませぬ。

成都は北京を除いたら、最も雄大にして典雅な都です。さすがに蜀の国は自給自足の国であり、地勢はよし、ここに諸葛孔明か都を定めただけあります。

●ハワイの人、にいうべきは、米国の教会が成都に、北京の燕京大学と同じ大きさの立派な大學を建ててていることです。日本人は大アジア主義だの、西洋文明が崩壊したら、東洋に次の文明が出来上がる、それを使、がやるんだ、などと大きな事をいつていますが、日本人は支那に来て何をしていますかい。

日本の軍閥の勢力の後に来るものは、いわくサロン、いわく賭博場、いわく烟館（阿片を吸わせるところ）でしょう。熱河の承德には二十何軒のサロンができまして、娘子軍が慟いていますとさ。しかるにこの成都の米国人の建つる大学は、何と立派なこと。

私はこのごろ、つくづく考えなければならぬと思うのですよ。昔、唐人が東方君子国といったころの、文字もなかりし日本がなつかしいです。文字はなくとも、人間は正直でしたのでしようね。今の支那人は東洋鬼といつても、東方君子国とは呼んでくれません。

（昭和 11 年 1 月 31 日～2 月 20 日『日布時事』）

その後の西安事件

さる一月、易の大家が、蒋介石は今秋死生の危地に陥るであろうと予言した。さよう聞いていたから、こつそり太原や綏遠に飛んでる蒋は大丈夫かなあと思つていたところ、十二月十二日の西安事件だ。八卦も当ることがあるから、支那の多くの要人が易者を顧間に雇うのも、あながち無駄ではなかろうとの評判である。

今日は一月一日だが、またしても蒋介石は生きていない、替え玉を使つてゐるらしい、というデマが飛んでいる。ほんに支那は誣言の国であり、嘘の国である。張作霖の死の如きは、三週間もかくまえられたから、易者ではない私は、あえて予言はせぬつもりだ。

ところで蒋介石が生きているにせよ、死んでいるにせよ、支那は十年前の支那とはよほど違う。

国民が国家危機を感じているから、極度に内戦を忌避する。そのようにしからしめたのは、あるいは日本であるかも知れぬ。試みに映画館に行く。支那人のワッサワッサでなだれこむ活動写真は、いざれも愛国的で、國家を思うもののみだ。この危機感が横溢せるところ、内乱は容易に勃発しない、蒋介石の統率は容易に崩壊すまい、たとえ何応欽でも十分に支那の統一を継続せしめ得るだろう。

（昭和12年2月号『中央公論』）

事件当時はもちろんのこと、事件後においても、つい半月ばかり前までは、その実相がさっぱりわからなかつた。

なぜ張学良は蒋介石を殺さなかつたか。日本人の人は、蒋が南京に帰つたと聞いて、谷うも支那人のやることはさっぱり訳がわからぬ」と評したものだ。日本人の常識としては、あの場合、殺し、殺されるのが、当然の筋書きと見える。

張学良が蒋介石をやつつけなかつた最大の理由は、共産党の差し金であつた。知名な反対党の頭目を殺すことは、最も損なことである。毛沢東が直ちに人を派して、「決して蒋介石を殺してはならぬ」と指令したということは、必ずしも信じられぬことではない。

西安事件を支那国民党は大変重要視している。それはエポックメイキング、民国支那が内争時代を完了して統一時代に入った、ということを意味するからだ。共産軍と国民党がお互い内争を

止め、妥協することに話が進んだからである。ここ数年来、「我らの鉄砲は、自国民に向ける鉄砲ではない」という言葉が、よく要人等の演説で用いられていたが、それがこの度の西安事件でも物言つたのである。

支那を群雄割拠の内争から、統一、中央支持の時代に入れるために、大きい役割を果たしたのは、隣邦日本であった。満州事変以来、支那全体に国家危機の觀念を洪水の如くみなぎらしめた。この国家危機の実感こそ、支那の内争時代を打ち切らせた最も重要な精神的衝動であつた。その他にいくつかの理由があるかも知れないが、ともかくも四半世紀にわたりて民衆を苦しめた内争時代は、ようやく終わりを告げ、支那は遅まきながら上り坂になってきた。

西安事件は支那の知日内閣を消し飛ばしてしまつた。張群ら五名もの過半数が、知日派であつたにもかかわらず、彼らと何事をも談合しないうちに、あたら好機を逸してしまつた。しかし知日要人は、なにしろ実力を持つてるのであるから、また次のチャンスを待つがよい。支那を動かそうと思うならば、機をつかむことが大切である。

およそ対支政策を論ずるものは、必ず必ず次の四項を忘却してはなるまい。

第一、日本国民はまだ支那語をマスターしておらない。日本人にして支那語に熟達せるものは、わずかに十指を屈しうるに過ぎない。

第二、日本人は支那人を動かすコツを体得しておらぬ。支那には支那流があり、ペルはボタン

を押さねば鳴るものではない。

第二、日本人は移りゆく支那を認識することが、實に不得手である。大衆の動きを見きわむことが下手である。

第四、日本には信念が足らぬ。進歩的な文化政策をやつてみるかと思うと、強硬な鐵血政策にも出てみる。かようぐらでは、賽の河原ではないか。金石も通れかしといつた貫徹の信念がない。

なんといつても蒋介石は、現代支那をしょつて立つ英傑である。他の人物では到底歯も立たず、また段も違う。

（昭和12年4月号『中央公論』）

支那事変はどうなるか

現地はようやく落ち着きを取り戻しつつある。もう一度、事変の発端から回顧し、真相をつかみ、客観視しつつ判断し得るようになった。

今度の事変の発端はいうまでもなく、七月七日の蘆溝橋に於ける日支両軍の衝突である。その

蘆溝橋事件は、誰も知るごとく、再度までも妥協協定ができたのであつた。そしてその協定が保持されたならば、事変は拡大せずに済んだのであつた。

今日に及んではつきりしてきたのは、学連の暗躍があつたことである。学連とは学生連合会のことで、諸大学の教授をシンパとせる共帝王義の秘密結社である。今から五年前、すなわち滿州事変前後に根城を北支に築き上げしもので、いずれの大学にも相当力強い細胞を作っていた。この学連こそは、此次の日支那事変を拡大せしめたる眞の責任者であつた。

この学連の連中は、蘆溝橋事件を日支大戦にまで拡大せしめようと思つて、協定が成立すると爆竹を持ち出し砲声とも聞こえるような爆音を鳴らして、日支那両軍をして発砲せしめた。出先の日本の軍部も、支那側・二十九軍の軍人も、上下共に、事件を拡大せしめようと欲する意志は毛頭なかつたらしい。それが証拠に皇軍の方は、大隊長にして馬を携えていなかつたり、食物も用意していなかつたのであつた。他方、二十九軍も北京城を去りし時に、その兵営内に服も武器も整然と整頓したるまま、少しもこれが運搬の用意をしていなかつた。

かく考えてみると、今度の事変は、よほど共産主義者の活躍に真相を求め得る。上海および南京を中心としての容共派の活動は、実に大したものである。目下の支那は容共派の天下だ。西安事件以来、徐々に拍車をかけ、ついに大勢を制してしまつた。

現地に在りて事変に見透しをつける際、見落としてはならない大切な事実が二つ、三つある。

そのひとつは、だれしもいうが如く、支那の兵隊が強いことである。二日の兵とは格段の違いだと、傷病兵の口から異口同音に聞ける。

次は支那が苟も変らず、諸外国から力を借りようとする古来特有の以夷制夷の観念を持つていることである。胡適は米国にいつたが、英國通は英國へ、フランス通はフランスへ、それぞれ派遣して、なんとかして以夷制夷に成功しようと考えている。一体、日本人は何と思っているか知らんが、支那をいくらどやしても、ぶつても、その背後に控えているものがある限り、いく度やつづけても、賽の川原の石積みと同じである。

九月に入つたら、南京政府はもう財政的にくたばつてしまふであろう、といった見方もあるが、そんな予言は当らぬ。なんとなれば、支那は外國より借款で武器を買い入れてゐる。借款が多額になればなるほど、貸しすぎている債権者が、債務者の破産を恐れて、もう少しもう少しと深入りして貸す。支那は借款の額に比例して、諸外国の同情を濃厚にするばかりである。

また支那は自分の家の座敷でけんかしているのであるから、自家の家具や骨董品を破損するが、同時に日本の軍用金が支那に落ちる。それが故に支那の紙幣はさほど下落しない。とにかくこういう国は、まるでミニマムなみ、どこをぶち切つてもしばらくは生きている。死にはせぬ。経済組織が近代化していないから、一つや二つ歯車が止まつても、ぴたつと全体が止まるようなわけでない。

十月になつたら、南京の支那政府は内輪もめでパサリとひっくり返るであろう、と予言せし支那通もあつ罵しかし日本の支那通の予言は、かつて当つたことがないつ今日、もし予一言めいたことをいうならば、必ず頭を抱えなければなるまい。

日本人はむしろ、支那を予測することを止めて、日本として如何に処すべきかを考慮すべきだ。まだ太原も帰化城も陥落していないのであるから、今すぐというわけにはいくまいが、まあ適当なところでけりをつけることが最も賢明であろう。あつさり見透しをつけるなら、北支五省を攻略して、日本と提携する自治政府を建設し、攻略から防御に移る、そこらで事変を終結したいのではないか。

（昭和12年1月号『中央公論』）

支那事変問答 ——日本軍の南京入城——

昭和十四年十二月二十八日、募金のため横浜から出帆、單身渡米の途についた。（ワイに滯留中、支那事変をめぐる時局論で舌禍・筆禍を招いてしまった。とりわけ「日布時事」紙に長期連載した「日支事変問答」が、日本軍を侮辱するものとして外務省から追及され、北京帰着後も長く憲兵隊から迫害された。いわゆる「南京事件」とは、昭和一二年一月、日本軍が首都南京を占領したさい誘發したという大規模虐殺／暴行事件。

編集者

去年の十月ごろ、上海でリタラリイーダイゼスト誌を読んだ。その中に「日本人は日本の島ではあるように親切で、そして謙遜であるのに、一度海を渡つて支那に来ると、どうしてこうまでラフになるのか……」。米国人、も、いろんなくだらぬ醜い恥ずかしい話を聞いたことであろう。そしてそれに対する相当憤慨しているでしよう。多分。

特に南京入城の際には、外国人の記者を共に入城せしめたので、いろんな醜報が世界各国に伝わつたのである。支那の婦女が、狂犬にかまれしがごとくに遭難したといううわさは、本当に我

らといえども、切歎せねば居れぬ報告である。それがジャパニーズ・テロル（恐怖の日本人）と題する本にまでなっている・私はそれを英文でも支那文でも読んだ・その挿絵さしゑに至つては、見るに忍びぬ恥ずかしいものであつた。

特に遺憾であつたのは、宣教師の保護している学校の避難所に集まる婦女が、遭難せしことだつた。ただせめてものことは、女性宣教師に手をかけなかつたこと、彼女らは全く安全だつた。

一九二七年二月の南京事件に在りては、それが内戦であつたにもかかわらず、支那兵は各国の領事館やミッショーンースクールにも乱入して、日本の婦女はことごとく、米国の女性宣教師も遭難した。無論その時は、支那人の女学生は一人も恥ずかしめられなかつたのである。

私のよく知れる米国の宣教医にHという人がある。何でも公平に、そしてザックバラツにいう犬だ。この犬にいつか、支那の女性が可哀想だということを、しみじみと語つたところ、Hドクトルは案外冷静だつた。

「君、自分は前の歐州大戦に参加したが、戦争というものは、みなそういうものだよ。ただ日本の兵隊は軍規がやかましいので、それが絶無と聞いていたが、まあやつぱりやるなと思うだけのことだ」といつていた。

支那には治外法権があつて、長く西洋人の家は安全であるという観念がある。民国以来、内戦が起ると、西洋人の家屋の中に避難したものだ。だからこそ宣教師の家は大丈夫、日本の兵隊

さんもここばかりは、よう侵入せぬであろうと考えて、無数の避難民が我れも我れもと、金陵大學その他に避難したのである。

ところがその頼みに頼んだ宣教師たちは、兵隊さんを拒むだけの力量がなかつた。そこに悲劇が起つたのである。私だつたら引き受けし以上は、死をもつて保護し、たとえ一対万の微力であつても、戦つて死んだろう。それくらいの意氣込みさえあれば、必ずや、喰い止めえたに相違ない。

しかるにそれを傍観してなすがままに任せておきながら、それを本国の人、に宣伝して得意になつてゐるようでは、恥ずかしいではないか。なぜ「私はお前たちを保護できない。力もない。どうか戦場を避けて田舎に行け。山の中にも逃げよ」とてもいつて聞かせなかつたか。

そうしたら、ああいう事件は起つらなかつたろう。日本の兵隊さんも誘惑に陥ることなく、國際關係に暗い影を射すこと少なかつたに相違ない。

（昭和15年1月22日『日布時事』）

回憶魯迅

魯迅先生の日記の中には数多くの日本人の名前が出ている。私の名前もしばしば出て来る。それらの日本人の名前の中に昏迷という名前がある。それは丸山昏迷君のことである。同君の実名は丸山幸一郎であつて、長野県北安曇郡八坂村の人である。北京ではかの安藤萬吉氏の日刊新聞『新支那』の記者であつた。

彼は、極めて進歩的な思想の持ち主でもあつて、当時の北京では、阪西公館で小山貞知氏と共に働いていた早大出の鈴木長次郎君、『新支那』の丸山昏迷君、それから私自身らが何を隠そラディカルの三羽鳥であつた。その頃中江丑吉氏はまだ勉学などそつちのけの一遊客に過ぎず、鈴江言一氏や村上知行氏等と共に、北京日本人村においてすらまだ名を出してはいない人、であつた。北京の思想家や文士たちに最初に近づいた者は實に丸山昏迷君であつて、實を言うと、かく言う私自身も同君の同道で周作人や李大釗を訪ねたのであつた。

丸山に負けず、私はしげしげと八道湾の米糧庫の胡適公館、旧刑部街の李大釗宅を訪れた。私がどうして中国の思想家や文士たちをそんなにしげしげと訪問したかというと、またなぜ彼らが

「没在家」（居留守）を使いもせずに会つてくれたかというと、実は私は自分一人の訪問などは滅多にせず必らず、日本からの知名な来遊客のお伴を承つて彼らの門をたたいたからであつた。例えば田山花袋、芥川龍之介、林茉美子、片上伸等という人が来遊された時は、八道湾の周宅を訪れたり、福田徳三、服部宇之吉、鶴見祐輔、長谷川如是閑、賀川豊彦、サンガード夫人等という人が来遊されると胡適宅を訪れ、佐野学、中江丑吉等という人を案内しては李大釗を訪れたものだ。

また今でもおぼえていることは、私が最初に魯迅を訪れた時は、実を言うと魯迅を訪ねたのではなく、周作人を訪ねたのであつた。ところがその時は私が誰の同道役も承らずに単独で行つたためであろうか、それとも本当にお留守だったのか、例のシナー流の「没在家」を食つてしまつた。八道湾は北京の西端に近いところに位置していたので、一時間もごろごろ洋車を転がせて行つたこととて、実にがつかりしたので、没在家を宣言されたにも拘らず、なおも執拗に聴差的にほんの五分間でよいからとねばつて食い下つたのであつた。すると西廂房から鼻の下に濃い髭を生やした中年の男が、簾垂れのドアを開いて首を出し、「僕でよかつたらいらっしゃいよ、話しましよう」と呼ばれたので、部屋に入つて談じたのだが、なんとそれが魯迅だったのであつた。そしてそれより後といふ私の八道湾詣では、いつの間にか周作人伺候から魯迅訪問へと次第に移り変わつて行つたものだ。この一事をもつても魯迅さんは本当に心根の実にあたたかい人で

あることがわかつた。

日本からの漫遊客で、上海から北上して北京を訪れる人、の中には、内山完造の名刺を持参して私を訪れる人、が少なくなかった。その代り私もまた北京から南下して上海に赴く漫遊客には内山完造宛てに紹介の名刺を書くのを常とした。魯迅が上海に移られる時に、私は内山書店、内山完造のことを詳しく申し上げ、紹介したことをおぼえている。魯迅が上海で内山書店を訪れることを好んだのはまことにいわれることであつた。なぜならば内山書店には日本の書籍がそれこそギッシリ陳列されてあつて、中国広しといえども、また日本の書店が各地に数多くあつたが、内山書店に及ぶものは一つもなかつたからである。

しかしながら魯迅が内山書店に毎日のように通つたわけは、ただ書籍がうんとこさと陳列されているばかりではなく、内山夫人のみき子さんが実にあいそのよい行き届いたもてなしをなす女性であつたからでもあつた。内山みき子さんは京都の宇治に近い村落の出身であつて、常に宇治茶を取り寄せておいて、それを急須で煎じて魯迅をもてなされるのであつた。本棚と本棚との間に、藤の椅子を置き、それに魯迅をかけさせて宇治の玉露を入れるのであつた。知識人にとつては本に囲まれているくらい気持ちのよいものはないのであるが、本の中に埋まつて打茶圍たあぢやうゑいであるから、魯迅にとつてはこの上もない楽しみだつたに相違ない。

魯迅は若年の頃、日本へ留学する前に親に結婚させられて朱氏を娶つてゐる。八道湾の周宅で

はその朱氏は、魯迅、周作大の母堂と共に正房に住んで、魯迅は西廂房に寝起きしていた。

當時、中國では親の娶らせた妻は眞の妻ではないというので、新たに恋愛で結ばれた妻を持つ新風俗が流行していた。しかしそういう場合にはその最初の夫人に、月、仕送りをするなり生活費を給与していれば、それでもう世人も許容してかれこれと惡様あしさまに批判しないことになっていた。そしてその愛によつて結ばれた夫人が第二夫人（二号）と称せられるのを嫌う場合には、相手の男性をして新聞紙上にその最初の夫人と離婚したという広告を出させて後に、結婚式を挙げるのが常であつた。當時毎日のように新聞紙上には離婚宣言の小さな五行広告が、紙面一杯に掲載されていたものだ。しかしながら生来狷介けんかいな性質の持ち主だった魯迅はそういうことはあえて行なわず、新たに夫人も娶らずに、ただその最初の夫人、朱氏に母堂の世話をしてもらつて、あえて同居をせず、西廂房で一人寂しく独身生活を営んでいた。

さて魯迅を最初に日本へ紹介した者は不肖私である。すなわち私が大正十三年に大阪屋号書店（その當時中国に関する書籍を専ら出版していた書店）から『支那当代新人物』と称する本を上梓じょうししている。その本の中に「周三人」と称する一節を設けている。周三人とは周樹大（魯迅）、周作大、周建人の三兄弟のことをユーモラスに称呼したのに他ならない。その文章の中に、「盲詩人エロ・シエンコは周樹大を支那創作家の第一人者であると推称した。私もそう思うものの一人である」と評してあるこ東京の雑誌『我等』（長谷川如是閑、大山郁夫、櫛田民藏等の同人誌）

の記者福岡誠一氏（日文リーダーズ・ダイジェストの前編集長、その当時は未だ角帽の東大学生）が、日本から国外へ追放されたエロシェンコさんを伴つて北京へ来られたつ雑誌『我等』には私も一時殆んど毎月のように中国に關する論文隨筆を寄稿していたので、福岡誠一氏はあらかじめ私とも連絡をお取りになつた。私はエロシェンコ、周作人も共に、エスペランティストであることに思いついて、さつそく交渉したところが、オーケーだつたので、エロシェンコは直ちに八道湾の周宅に落ち着かれることになつた。

福岡誠一氏が辞去された後も、私は殆んどいりびたりにエロシェンコの許に行つて、求められるままに魯迅の小説を誤りだらけの無茶苦茶の訳ではあつただろうが、訳して聞かせたものだ。するとエロシェンコは、

「魯迅のような小説家は日本にはいなかつたですよ」

と、読んでさし上げる度に、極めてほめちぎつた。今もしも、ありていに言うことが許されるならば、その頃までは魯迅よりもはるかに周作人の方が有名であつて、魯迅の原稿は弟、周作人の斡旋によつてようやく『新青年』や『晨報』の副刊に載せて貰えるといったような境遇にあつたものだが、エロシェンコの口を極めての推称によつて、魯迅の原稿を東京の一流どころの綜合雑誌が競つて載せるようになり、やがては中国においても魯迅の小説が単行本にもなり、俄然認められるようになつた。いずれの国においても、それが外国人によつて認められるならば、自国民

は遅まきながらも大いに認めるものであるが、魯迅の場合もその一例であった。そうしたことを考える時に、八道湾の周宅が日本が国外に追放したエロシエンコを喜んで自家に迎えて、その隅の三間房をあけて居候に置いたことは、弟の周作人のエスペラント語の語学の上にも、また、魯迅をして日本に、それから中国に認識せしめたのにも大いに役立つたと言うことができる。周宅が異国の憐れな盲詩人のために親切をもつて遇したことは決して無駄なことではなかつた。

ついでに少、語ることが許されるならば、私はエロシエンコから電話がかかって来ると、一時間以上も洋車（人力車）を走らせてたどり着いて、彼のために魯迅やその他の人の創作を訳し、かつ音読して差し上げた。そしてまた時には彼が口述する童話を筆記してあげた。筆記し終えると、それを東京の雑誌社に送付して原稿料を稼いでさし上げたものだ。エロシエンコのためにそうした書記の仕事を奉仕したのみでなく、時には東廂房の魯迅の口述をも筆記させて頂いた。それ故にもしもその当時のエロシエンコの童話や、魯迅先生の文章に仮名づかいの間違があるならば、それは彼らの責めではない。

魯迅の值打を最初に認識したのは何といつても彼の弟の周作人で、その次に彼を世に知らしめた者はエロシエンコであつた。そして彼のことを最初に日本の読書界に紹介した者は、はばかりながら不肖私であつたことをここに明記しておく。周作人は魯迅に関して實に面白いことを彼の著書の中で述べている。

「同じ魯迅が、ある時代にはブルジョア作家として批難され、またある時代には今度はプロレタリア作家としてもてはやされる。まことにおかしいことではないか」と。これはかの周作人獨特の皮肉な言葉である。

私の見たところでは魯迅という人が、實に進歩的な思想の持ち主であったことに相違はない。そしていかなる社会的現象にも、また政策、主義にもこつびどく鋭い批判を加えて容赦しない人であつたことも確かである。従つて何につけ、かににつけ看破し見通す鋭い深い識見を持つている人であつたことも本当だ。

シガレットを忍竹の口にさし込んで、尻から煙が出るほどにすぱりすぱり吹かせながら、語り喋り、のべつ幕無しに論ずる人であつたから、それは全のことハツ当りで、社会批判、文学批評、博学多識でなんでも来いであつたから、自然に世の魯迅人物觀が多種多様になつたのも無理がらぬことではあるが、私が直接私淑して得た魯迅觀なるものは、まあ、一人の文明批評家に過ぎなかつたのではなかつたかというに止まる。

魯迅という人はすごく心根のあたたかい人であつた。しかし實にズケズケと齒に衣を着せずに語る人で、私か漢詩を作つて持参して添削を請うと、一字も残さぬほどに添削した後に、「よしなさいよ。無韻詩を作ることはよいが、日本人には無理だ」と言つて理屈っぽい日本人の漢詩をぼろかすに嘲笑して止まなかつた。私は魯迅の親筆を幾枚も貰つて持つていたが、魯迅の

書には三種類あつて、實にカタクルシイ楷書、ややくだけた行書、それからまた円転滑脱な草書がある。その筆跡が示すように、魯迅は官吏としても事務の取れる几張面な四角四面の性格も持つていたし、小説を書いたり、年若いじやじや馬娘と恋愛することも出来る文士肌をもつていたし、そしてまた小説史研究のリサーチーワークにたずさわる学者氣質をも持ち合わせていた。とにかくまことにつかしい、まことに敬慕にたえぬ人格者だつた。

（昭和43年3月発行桜美林大学『中國文学論叢』第一号）

李大釗先生の思い出

「李大釗の死—彼の人物と思想」参照。

以下は清水安三先生の生前、編集者が直接聞くことのできた聞き書き内容である。

編集者

私が初めて李大釗先生に出会つだのは、東京は早稲田の山吹町、丸山伝太郎牧師の学寮においてであります。丸山牧師は同志社神学部を出た私の大先輩、私とは年齢が親子ほど違う。

夫人も同志社女学校出身でありました。〔編集者注：元山牧師の同志社神学部卒業は明治二六年〕。

彼は中国の天津で伝道し、天津教会を創立しました。私はこの人が日本に帰国してから面識を得ましたが、まあ仙人みたいな非常に変わった人で、いつもフロックコートを着ていました。

とにかく中国人の面倒をよく見る人で、下宿を世話したり、保証人になつたり、日本人とのゴタゴタを調停してやつたり、そんな人でしたから、早稲田山吹町で中国人留学生を多数下宿させていたわけです。

李大釗は天津の北洋法政専門学校で学び、吉野作造や今井嘉幸から教えを受けました。この時代、いつ李大釗が丸山牧師と知り合いになつたかどうかはわかりませんが、とにかく日本留学後、いつごろか丸山牧師の学寮に住むようになったわけです。早稲田大学に在学していましたから、山吹町なら近くて便利かよいはずです。〔編集者注：李大釗は一九一三年冬＝日本に留学、一九一四年九月＝早稲田大学に入学、一九一六年五月＝帰国〕

私もしばしばこの丸山学寮に泊めてもらいました。かなり大きい二階家で、約四〇坪ぐらいでしようか、数人の中国人留学生が下宿していて、詰えり学生服姿の李大釗もそのひとりでした。彼について、はつきり記憶していることは、丸山学寮で日曜学校が開かれるさい、彼がオルガンをひき、賛美歌の伴奏をしている姿です。この日曜学校は六畳の二間続きぐらいの部屋で行われ、日本人の子供が十数人ばかり集まっていました。後年の大物共産主義者が、日曜学校で賛美歌を

ひいていたとは、なかなか面白い光景かもしません。しかし昔は、キリスト教に入った者が、社会主義者に転向したものです。「編集者注：李大釗は早稲田時代、クリスチャン教授・阿部磧男の社会政策を聽講している」。

さてそれから数年後、北京にて李大釗と久し振り再会しました。陳啓修という北京大学の有力教授が、日本からきたお客のため請客した宴席においてであります。陳教授は日本の東大で学び、北京大学では法律のたぐいを教えていた知日派の学者で、そのころ陳獨秀に非常に用いられていました。七、八人ぐらいの人数だったか、日本人相手ですから、日本語がわかる北京大学の人、がなん人か相伴、李大釗もそのひとりがありました。

そこでお互「やあ再会できましたな……」というようなわけで、以来極めて親密になれたのも、かつての面識があつたからです。李大釗は一八八九年生まれ、私はて（九一年生まれですから、彼の方がいささか年長です。

李大釗の家を何度も訪問しました。二十回ぐらいか、十四、五回ぐらいでしたか。彼の家は西單から少し北、最初の胡同か二番目の胡同を西へ入ったところ、たしか北向きの家でした。『魯迅日記』によく出てくる山本病院もこの付近でした。家は中流並みの中国家屋で、陳啓修や胡適の家と比べるなら、ごく質素な生活振りでした。思い出すのは、門の柱の上に穴があり、そこから針金がたれていて、その先端の札を引っ張るとチャリンチャリンと呼び鈴が鳴る仕掛けになつ

ていたことです。

李大釗としやべる時はいつも日本語で、魯迅みたいな達者な日本語ではありませんが、まあわからない日本語ではありませんでした。中国語を用いるのは挨拶のときぐらい、もつとも夫人とは中国語でしゃべりました。夫人は李大釗が十歳のとき、いわば子守りを兼ねて結婚させられた六歳年上の女性で、きわめて平凡な人でした。小さな子供さんがいたようでしたが、その後どうなったことやら……。

さて小さな書斎兼用みたいな応接間で、お茶でも飲みながら話をするわけですが、彼はまるで田舎の村長みたいな人で、静かにしやべる、目を輝やかして激しく論ずるようなタイプではない。左翼的な内容でも、決して過激な調子でもない。こちらが緊張して話をしなければならない相手ではなく、心を許してなんでも仲良く話せる人柄でした。

彼は日本の食べ物が好きで、東单でよく仕入れていました。日本の点心（お菓子）マンジュウみたいなものも好きで、こちらが持参すると喜んでくれたものです。

そういえば鶴見祐輔を案内して李大釗家を訪問したことを思い出します。鶴見は「中国は共産化しない」としきりに主張し、議論になっていましたつけ。一橋の教授の福田徳三を案内したこともあります。

李大釗との付き合いでは、私がはつきりおぼえていることが三つばかりあります。その第一は彼

の依頼で日本から堺利彦の『平民新聞』を取り寄せてあげたこと、この時私が力ネを払つてあげたことをおぼえています。彼は東單三条胡同付近の東亞公司で、よく日本の本を仕入れていましたが、なにしろ小さな店ですから、いろいろの本があるわけではない。そこで私が頼まれ、東京の本屋から取り寄せたり、私自身が読んだ本を貸したりしたものです。

はつきりおぼえている第二番目のことは、日本から共産主義者の佐野学が北京に逃げてきた時のこと、中江丑吉にも世話してもらつたが、ついにかくまいきれず、私が李大釗に頼んで助けてもらいました。天津経由でソ連へ亡命させる手はずをつけてくれたわけですが、佐野が北京駅から出発する日、李大釗は天津までひとりの青年を付けてくれました。背が高い、ごつい、ブクブクの服を着た青年でしたが、後年ひよつとしたらその青年が毛沢東ではなかつたかと想像力を働かせました。毛沢東が李大釗の世話を北京大学の図書館で働いていたことを知つてからのことですが、やはり時期的に無理でしようか……。

第三、私は一九二四年から二年間、米国に留学しました。出発前あいさつに行つたところ、米国で共産主義関係の宣伝用パンフレットが手に入つたら、送つてもらえないか、と頼まれました。本なら注文できるが、この種のパンフレットは商品ではないから、なかなか手に入らないからでしょう。これが彼と会えた最後でもあります。米国で私はこの約束をはたしたつもりです。そのころ京都の西陣教会から二人の牧師が米国に留学しておりまして、そのうちのひとりで浅野とい

う人物が、シカゴで共産主義者に転向しておりました。そこでこの人物を通じて注文通り薄いパンフレット類を数多く収集したものです。神学を学ぶため留学していた私にとって、まあお門違いの手伝いをしたことになります。

私は一九二六年米国からもどりましたが、国民革命の北伐が開始され、新聞特派員として南方へ出かけたりしました。そのためついに李大釗と再会することはできませんでした。彼は一九二七年の四月六日、張作霖の軍曹が北京市内東交民巷のソ連大使館に押し入ったさい逮捕され、四月二十八日に同志十九人と共に死刑に処せられました。私は三月十九日、南方の九江で蒋介石とインタビューしたのち北京にもどり、この悲報に接したわけですが、国民革命を右旋回させた蒋介石の上海クーデターが四月十二日、中国の近代史にとってまさに重大な転回点のときでした。

「李大釗の死——彼の思想と人物」と題する私のいわば追悼文が五月八日付の『北京週報』に掲載されております。私の強い悲しみの感情がこめられているのは、悲業の死であつたからでもあります。私が彼に心からの親しい感情を抱いていたからです。

私は魯迅や胡適にも親愛感を持つていますが、もつとも親しい感じは李大釗に對してです。もつとも先方側として私に最も親愛感を持ってくれたのは、どうやら胡適かもしません。一九三五年、支那事変の前でしたが、胡適が北京を離れるからやつて來いという。出かけて行くと、日中關係の前途からみて、もしあんたがいよいよ困るときがきたなら、もしその時私が生きていた

ら、遠慮なくやつて来なさい Iといつた様なことをいいました。そして彼は南方へ去り、北京は間もなく支那事変の舞台となりました。私が胡適に再会したのは、戦後、私がはじめて米国へ行つたとき、わざわざプリンストンからニューヨークまで訪ねて来てくれました。

以上のような思い出をたぐり出したわけですが、もう少し語らせてもらいましょう。さつきもいいましたが、李大釗はとにかく田舎の村長みたいな人、非常に親切でおだやかな人、いつも興奮せず静かにしゃべる人でした。中国で出版されている李大釗伝に、死刑前に写された中国服姿の写真が掲載されていますが、まったくこの感じ、中国服をもつさり着て、ひげをはやして……。当時の私にとっては、さっぱり大物の感じがしなかつた。従つて李大釗に関する後年の高い歴史的評価については、どうも意外な感じさせられます。むしろ毛沢東の先生格であつたから、いわば毛沢東の冠として偉くなつてしまつたのではないか。どうも私にはわかりかねる点です。彼の伝記を読んだり、中国共産党史を読んだりすると、もちろんまったく違つた戦闘的で英雄的な人物像が描かれているでしょうが……。

当時の私にとって大物に見えていたのは、北京大学の文学部長であつた陳獨秀です。かなり年長者であつたかもしれません、寄りつきがたく立派な人、覇氣満、で見かけも堂々、うやうやしく礼儀正しくなければならない感じでした。なれなれしく友人付き合いができる李大釗と比べるなら、当時の印象に関する限りどうも格が違う大物の感じでした。この陳獨秀はのち中国共産

党の初代書記長となり、国民革命の右傾後は、共産党から批判され追放されてしまいました。共産党の英雄になつた李大釗とは、まったく異なる運命を歩いたことになります。

私の思い出の本当の大物といえば、なんといってもやはり魯迅でしょう。のように偉い人物は、日本からは出ないと私は、日本からは出ないと思います。会つたことはないにせよ、毛沢東もそうでしょう。しかし李大釗級なら、日本にもかなりいるのではないか。

もう一点補足するなら、彼は日本語の本を通じていろいろの思想を吸収しました。英語も読みましたがなんといつても日本語が主であったと思います。死刑になつたときが三十八歳とのことですですが、本当につかしい、いい人でした。

（昭和26年3月1日号『復活の丘』）

周恩来の師・張伯苓先生

中国の周恩来は天津南開中学校の卒業生であるが、南開中学校はかのキリスト者として有名な張伯苓博士の創立した学校である。なんでも、蒋介石が台湾に移動を開始した時に、周恩来は張伯苓博士に、四川から北京へと飛来されよ、顧間に迎えたいと打電したそうであるが、张先生は

主義を異にするから、と称して辞退されたそうである。あの時張伯苓博士が来ていたら、中国のキリスト教はあるいは今日のように衰微しなかつたかも知れぬ。まことに惜しいことであった。

それは日清戦争よりも少し前のことであった。清国が鋼鉄の軍艦を所有したので、それを日本に見せびらかすためであつたろう。日本へやつて来て大阪湾に停泊している間、水兵や士官たちはぞろぞろと市内見物を行なつた。その時海軍中尉として乗艦していた張伯苓も、二、三の部下水兵を伴つてぶらぶらと町を歩き回つたのだそうである。すると路傍に「北野中学校開校式」という立看板が出ていたというのである。これを見た張中尉がこのこと中に入つたところが、校長は珍客として来賓席に迎えた。通訳を伴つていなかつたので、ただじつと見たり聞いたりするにとどまつたが、その来賓席で脳裏にきらめいたことは、「日本は中学校を建ててゐる。中国たるもの中学校を建てずば……」であった。張氏は帰国してただちに海軍をやめ、天津に南開中学校を創立したというのである。

太平洋戦争の勃発した頃には、全中国各地の大学の総長中十六名は、天津の南開中学出であつた。張伯苓博士が大阪から帰つて後、海軍をやめず軍艦に搭乗しておられたら、到底かくも多くの人材を中国にささげることは出来なかつたことであろう。

不肖私は大正九年（民国九年）に北京朝陽門外に崇貞学園を創立したが、創立以来、張伯苓博士を崇貞学園の董事長（理事長）に仰いできましたが、日支事変中、日本軍が南開中学校のキャンパ

スに空から爆弾を投下し、同校の図書館を全焼させた。張先生は重慶に行つてしまわれたので、以後終戦に至るまで私は北京大学長の錢稻孫先生に理事長になつてもらつた。

過日、『基督教世界』の人物欄に、「清水安三」という一文が載つた。私の邸宅を「二LDKぐらいの小屋」だと形容し、「学長住居としては日本一小さいだろう」と書いてあつた。

私がなぜこのようないい邸宅に住むかというと、その理由は南開中学校の張伯苓博士の邸宅サンチエンファンズが実に三間房子で、間口六メートル、奥行四メートルの家屋だつたからである。私は中国で多くの人、に逢つた。吳佩孚、馮玉祥、張作霖、宋哲元、葵元培、陳獨秀、胡適、魯迅、康有為、梁啓超等、いろんな人物に逢つた。それも遠くから眺めたのではなく、彼らと握手談合する機会を得たのであつた。それらの人、の中で最も印象の深かつた人は、なんといつても張伯苓その人であつた。

(一九七一年)

第四部

桜美林物語

桜美林学園の略史

- 第四部 桜美林物語
- | | |
|---|------------------------------------|
| 昭和二一年 | 桜美林学園（学校法人）創立（五月二九日、高等女学校、英文専攻科設立） |
| 昭和二二年 | 新制中学校設立 |
| 昭和二三年 | 短期大学英語英文科設立 |
| 昭和二五年 | 短期大学に家政科増設 |
| 昭和三〇年 | 復活の丘に校地（サレン・バーガー・ランド）を取得 |
| 昭和三一年 | 生徒学生数（中学＝五三、高校＝一〇二、短英＝三二、短家＝一八） |
| 昭和三五年 | 初代理事長・賀川豊彦先生召天 |
| 昭和三九年 | 学園長・清水郁子先生召天 |
| 昭和四一年 | 大学文学部設立 |
| 昭和四三年 | 幼稚園設立、大学経済学部増設 |
| 昭和四八年 | 第二代理事長・小崎道雄先生召天 |
| 昭和五一年 | 高校野球部、夏の甲子園大会で優勝 |
| 創立三十周年を祝賀、生徒学生数（幼稚園一九七、中学＝二七二、高校＝一、二五四、短大＝一、三六三、大学＝三、一八六） | |

桜美林学園設立

焼原に祈る

昭和二十一年三月十九日朝、私どもは山口県仙崎港に着いた。中国から引き揚げてきて見る美しい日本の山河、思わず「国亡んで山河あり」と幾度か口の中で叫んだ。三月二十二日五時半、東京に着いた。見渡す限り焼野原であって、ところどころに不燃焼の建物が立っている。終戦後既に半年余りを過ぎてしているのに、跡片づけも掃除もせず、まるで廃墟である。焼跡にリュツクサックをおろして、跪いて神に祈りをささげた。

「神よ、日本再建のために私たちをお用い下さい。神がもし用い給うならば、中国ですりへらした残滓さんしのごとき体ではありますが、身を粉にして働きます」

涙を両頬にぼろぼろと伝えながら、家内も長い長いお祈りをささげた。

「おお、Y M C Aはあるぞ」

私はほつとした。私は上京の時はいつもY M C Aのホステルに泊るのを常としていた。私はY

MCAの中へ元気よく入つて、ロビーのソファの上にどかっと腰をおろしたら、手に箸を持った従業員らしい娘がやつて来て、

「あの、ここは米国の婦人方のアパートになつてゐるのですが」と言うではないか。私たちはそれからというもの神田の旅館や下宿屋を七軒も訪れて、一泊を請うたのであつたが、いざれも引揚げ人ならお泊めできないという挨拶であつた。

「まあ、もう一軒訪れてみようではないか」

そう言つて行つたのが、第八軒目の旅館、昇龍館たつた。中央大学の後門前的小さい八幡宮の前にある大きい旅館である。女中さんがとりなしてくれて、一晩だけという約束で靴を脱ぐことを許された。

私たちは昇龍館で朝食を食べて、それから二人別れ別れに家探しに歩いた。私はまず姉の家を捗しに下落合に行つたが、姉は家を売つて田舎へ引っ込んでいた。それから知人を二、三捗してみたが、石の門に表札がかかっているだけで、いざれも家屋は残つていなかつた。焼けなかつた家は売られているし、やつとたどり着けば門と屏だけしかない。私が昇龍館へもどつた時には、もう日はとつぱりと暮れていた。しばらくすると家内が帰つて來た。

「部屋はあつたかね」

「ありましたよ。でも私一人だけならばというのでしたよ」

「そうか、僕は行けないのか」

「そう……」

女高師の先輩、山崎女史の屋敷が大塚窪町にあつたが、四畳間のスマーキング・ルームがあり、いるから貸して下さると言うのである。しかし二人は困る、家内だけなら泊めてやろうというのだそうだ。

その夜、私はなかなか眠れなかつた。ためいきをつきつき、「神よ、我にも宿を与えて」と切なる祈りをささげたものだ。

翌日私たちは七時に宿をせきたてられて、リュックを背負い、重い鞄をさげて、神保町から大塚へ行こうと考え、駿河台をのそりのそりと下つて行つた。私は思わず立ち止つて、

「あ、^{よしこ}美子さんの家が焼けていない」

と叫んだ。美子さんというのは、神田神保町一ノ一の古本屋、林彰文堂の娘さんで、北京崇貞学園の卒業生である。美子さんの父親は東京に数多くの学校があるので、わざわざ北京の崇貞学園へ娘を留学させたのであつた。林彰文堂はまだ硝子戸を閉ざしていて、白いカーテンをおろしていた。ノックすると美子さんが出て来て、

「あら先生、崇貞はどうなりましたか」

「崇貞は日本と共に亡んだよ」

美子さんは柱に額をあてて泣きじやくつている。

「あら、清水先生ではありますか」

美子さんの母親はティピカルな下町風の美人である。

「で、先生はどちらに御滞在ですか」

「家内はこれから大塚の先輩の家へ行くのです。僕は上野のガード下を宿にするつもりですよ」

「あら、御冗談でしよう。よかつたらあたくしのところに御滞在遊ばせ」

家内は林彰文堂の店を見回した。小さい店である。

「このお店にお泊め申し上げようとは申しませんが、実は片瀬に別荘というほどのものではありませんが、五室ばかりの小さい家がありまして、母一人で住んでいますから、どうか美子を炊事軍曹にお使い遊ばしたら、遠慮なくてよろしいでしよう。いかがですか」

私がどんなに喜んだか読者諸君は想像できるであろう。私はさつそく片瀬の浜の窓に富士山の見られる家へ行つた。そして私は片瀬に七月二日まで逗留して、そこから再起再出発をしたのであつた。あまつさえ林彰文堂の主人は、毎月五百円のお小遣を私のポケットの中へねじこんでくれたのであつた。いかなる大事業もほんのちよつとしたことで、ただの片手をさしのべてくれる人があつたがために成就し、またなかつたがために失敗に終わることもあるものである。林彰文堂の愛の手がなかつたならば、引揚げ者清水安三は、東京にも留り得なかつたであろう。従つて

桜美林学園は世に生まれ出なかつたであろう。

私は七月二日、片瀬の宿を去る時に一枚の短冊と、一枚の半折の軸とを置き土産として残した。

それには、桜美林学園を創立したのが春の五月であつたから、

春風を帆一ぱいに舟出かな

残し行く杉戸に松はえがかねどとわに忘れじ君がなさけを

と腰折二首を認めて置いたのであつた。

賀川先生に会う

私は林彰文堂の片瀬の別荘へ行く前に、荷物を皆店に置いて神田錦町の錦湯へ朝風呂を浴びに行つた。ゆでダコになつて私が風呂屋から出てY M C A の前まで来ると、ひよっこり賀川豊彦先生が小川町の方から歩いて来られるではないか。

「やあ、いつ帰つて来たんだね」

「十九日の朝、仙崎へ着いたんです」

はんせつ

「何もかも失いました。アンタが去年の正月お泊り下さった家も」

「でも命を持つて帰つて来てよかつたではないか。君一体これから何をするつもり？」

「僕は農村に入りたいのです。農村に学校と教会を建てたいのです」

「よからう。僕のオフィスまできたまえ」

賀川先生のオフィスはY M C A の前の日本基督教団のビルの一階にあつた。ちょうど来ておられた秘書、小川清澄氏と共に祈つた。

「僕は君に大きい建物を紹介する。それは学校にあつらえ向きの建物だ。行つて見たまえ」

三人は首を垂れて祈つた。實にその祈りこそは、わが桜美林学園の発足そのものであつた。桜美林学園はその日の祈りから誕生したのである。

片倉組の寄宿舎を校舎に

昭和二十一年三月二十四日、私たちは片倉組の庶務課長酒井氏、賀川先生の秘書小川氏と東神奈川駅ぞう へい しうで落ち合い、相携えて横浜線に乗り、淵野辺駅に下車した。淵野辺は戦争中に建設された造兵廠跡のあるところである。陸軍は相模原に一大都市を建設する計画を立てていた。座間には士官学校、大野には軍病院、淵野辺には製鋼会社と造兵廠を建てて、相模原の平地森林の中に縦

横に走る街路を作つて、諸所の四つ辻にはロー・タリーを設けて着々と計画を進めつつあつた。もし戦争が続いたならば、このあたりは日本のクルップ、またはデトロイトになつてゐたであらう。

造兵廠の煙突から黒煙が天空を黒くし、小倉製鋼のかまどが火を吹いて、夜の大空をまつかに染めていた頃は、淵野辺の町には真夜中でも、ガヤガヤと男女が町を通る足音が絶えなかつたそうな。幸か不幸か私の訪れた淵野辺は、そういうにぎやかな町ではなかつた。さしも広大な造兵廠は、今はすでに廃墟そのもので、省線の電車の中から見える工場は、硝子は破れ、屋根は落ち、煙突は折れて半壊というさまであつた。平地林の中に十間二十間の大道路をコックリートで築いたのはよいが、通路の傍には戦車や砲車が雨ざらしになつて捨てられている。淵野辺の町といつたら、ぬかるみで靴が泥の中に埋つて抜きさしきれない。淵野辺の町を通りぬけて二キロ行くと八幡様の森があつて、その森の中に片倉組所有の建物があつた。

「何というひどいあばら屋でしょ」

これは家内が最初に叫んだ言葉であつた。硝子がこわれているくらいならば、はめればよいのだが、窓わくもなければ戸もない。およそはぜせるもの、運び出し得るものは何一つとして残されていない。

「この建物は何に用いたのですか」

「これは寄宿舎でした。陸軍が片倉組にこれを建てさせて、それを月二千円で借家して、兵器廠

の技手階級の寄宿舎に用いたのだそうです。一時は千人も収容されていたらしくです

「清水君、どうするかね。こんなに荒れていては学校には到底できまい」

「いや、けつこう学校になります」

これは私と小川君との会話であった。

「どういうわけで片倉組は、賀川さんに貸与する気になったのだろう」

「それは片倉組の社長の邸宅が、米国の弁護士の住宅として接収にならうとしたのを、賀川先生の尽力で、同居、相すまいということになり、社長は非常に賀川さんを徳として、一夕その弁護士と賀川先生とを招いて宴会を開かれたのですよ。その宴会がちょうどあなたが賀川さんに神田でお会いになつた日の前夜のことだつたのです。その宴会がはねて賀川さんがお帰りになる時、玄関で「賀川さん、私は東京の郊外の農村にこういう大きい建物を持っていますが、何かお役に立ちませんか」と社長が言われたのだそうです」

「するともう一日早く、あるいは一日遅く、私が賀川さんに会っていたら、賀川さんも私に建物を紹介して下さることはできなかつたのですね」

「美しい景色だね。僕はこの地が気に入つた」

と言つて二階の窓から眺めると、相模連山の遥か彼方に富士山がほんの頂だけではあるが、白扇かなたをさかさにしてのぞいていた。

「何というかわいらしい小さい富士山だこと、背伸びして丹沢の峰間からこちらをのぞいているようだわ」

建物の修繕はおいおいできよう。新たに建てるることもできぬことはあるまい。しかしこの風景この教育の環境は人工では得られぬもの。本当によい建物が与えられたものだ』

「よし、ここに学園を建てることに決めた」

日本の土を踏んでまだ一週間もしないうちに、東京に着いてやつと三日目なのに建坪一千六百坪もある建物が手に入ろうとは、これが神の仕業でなくて何であろう。

さあ校舎はできた。次はお金だ。お金は仙崎上陸の時、私たち二人は一千円ずつ貰つたから、それをちびりちびり用いて野紙けいしを買って設立願いの願書を認めたり、ザラ半紙を買って生徒募集のポスターを書いてたりして、学園設立の最初の元手とした。

およそ学園を設立するには基本金を積まねば認可というものがおりない。かねて私は第一信託銀行に十二、三万円の預金をしていた。先年『朝陽門外』を朝日新聞社から、『姑娘の父母』を改造社からそれぞれ出版した。その印税が事変中、為替管理にひつかかって、北京に送れず長い間第一信託銀行に凍結したままになつていたのであつた。

私たちが東京に放置してあつた貯金が、日本で学園を創立するためになくてはならぬお金にならうとは夢にも思わぬところだった。

生徒募集のポスター

次の心配は果たして生徒がくるかどうかである。私はザラ半紙一千枚、一枚四十円也で教団で分けてもらつて、それに黒と赤インキで、生徒募集のポスターを自ら書き、自らはり歩いた。毎夜片瀬の宿で私がポスターを書くと、宿の美子さんは、赤インキで丸を書いてお手伝いしてくれた。私は四、五十枚書き終えると、それを机の上に載せて右手を紙の上に置いて、眼を閉じ、おごそかに祈り、よき生徒の与えられんことを神に訴えた。

翌日は朝から小田急、横浜線の駅々で下車してはり歩いた。そして私は辻々にはるごとに、黙祷して一枚一枚に心をこめることを忘れなかつた。生徒募集のポスターをはり終わつたのが四月二十日であつたが、その日までに応募の生徒は二百名を突破、私たちは今更のように神のみめぐみに驚かされたのである。どうしてこうも沢山生徒が集まつたのであろうか。河井道女史が恵泉女学園をお創めはじめになつた時には、たつた九名しか生徒が来なかつたということである。羽仁もと子夫人が自由学園をお立てになつた時でも、二十四名しか集まらなかつたと聞いている。

桜美林と命名

私たちは文部省への申請書を片瀬の宿で書いた。

「一体、何という名の学校にしようか」

崇貞学園と名づけたいのは山々であるが、接收された北京の崇貞学園と何らかの関係があるものとされて、賠償金の取り立てがここまでやつて来ては困るから、崇貞学園とは呼ぶまいと思つた。

私たちが創立事務に奔走する頃は、四月の春まさに酣たけなわの頃であった。学園には多くの桜の木があつて、吉野と八重の二種が最も多い。吉野桜が吹雪のように軽く散る頃には、八重桜が紅梅ではないかと思われるような大きいっぽみを結んでいる。建物と建物との間に桜の木が植わつてゐるというよりは、桜の林の中に校舎が立つてているといった方が本当であると思われるほどに、桜の木が植えられている。

その日の夕暮れ、家内が片瀬の宿のお風呂の中から、

「よい校名を思いつきましたよ。桜美林としましよう」

私たちが米国オハイオ州、オベリン大学の出身である上に、ジョン・フレッドリッヒ・オペリ

ンこそは、私たちが今より後生きんと欲する生涯を、みごとに生き貫いた人物であったから、

「おべりん」という名称を用いようと言うのである。

ジョン・フレツドリッヒ・オベリンは普仏戦争の直後、戦禍の中心地であった故郷アルザスに帰つて、学校を建て教会を設け、夫人は手芸学校を設立して農村教化のために尽くした人である。オベリンは、巡錫の杖を米国に曳きしがあつた。そして彼の提唱する教育の理想に共鳴してオハイオ州のドイツ系の移民たちがオベリン大学を立てたのであつた。

私は日本へ帰つて、日本の農村に入り、日本再建は農村の教化よりという標語を掲げて、学園を設立しようと考へてゐるのであるから、全くオベリンの生涯と同一であつた。以上のことを考へて「おべりん」という名を校名とすることは最も適當であると思つた。

中国には山西オベリンというのがある。これは米国のオベリン大学が、年一回、シルバー・コレクションを行なつて、それを資金にしてスチューデント・プロフェッサーを、山西省太谷の銘賢学校へ送るのである。私は山西オベリンと同じように、オハイオのオベリン大学と桜美林学園とが、何らかの友誼的な関係を結んで日米親善のために貢献したいものだと考へた。

私たちが校名を「桜美林」と名づけたことを、老宣教師タッピング夫人は非常に喜んで下さつて、フランスから持ち帰られた、J・F・オベリンの石膏像を、私たちにお贈り下さつた。

五月五日の開校式

桜美林の名にふさわしく、萬朵の八重桜が今を盛りと咲き乱れている中で開校の日は近づきつ
つあつた。私たちは昭和二十一年五月五日、理事長賀川豊彦氏を迎えて、学園の開校式を挙行し
た。開校の前々日までは学園には椅子、机、黒板、腰掛なに一つとしてなかつた。

以前に東京の家具統制会へ、およそ七、八回妻は足を運んで、軍の机や椅子、腰掛の払い下げ
を願い出ておいたが、何分遠隔の地から行くのであるから、品物が入る後から後から、都の戦災
校や役所の人々に先手を打たれて、私たちの手にはなかなか入らなかつた。

ある日のこと机が入つたという内報を受けて、今度は私自らが取るものも取りあえず、家具統
制組合の倉庫のある荒川区の三河島まで馳せ参じた。倉庫は荒川小学校にあつたが、すでにもう
どこかの学校だつたか、役所だつたかが運び去つたあの祭りで何もなかつた。ところがその家
具統制事務所に一人の門番をしている青年雇員^{やとい}がいた。その青年は北京にいたことがある復員兵
士であつた。私たちのこともよく知つていた。私はその青年をとらえ、数万言を用いて桜美林學
園設立の計画と理想を語つた。語るうちに言葉は熱して涙まで流し、
「どうか再起再出発させて下さい。これ、このとおりにお願い申す」

と歎願哀願したものだ。その青年は五月四日の電報で、「イス ツクエ ハイル キカイ ニガスナ」という至急報を打つてくれた・すわとばかりに私たちは未明に出てトラックを三台率いてかけつけた。私たちが現場に到着すると海軍の砲術学校のものだという家具が、幾台ものトラックに満載して来た直後であった。それを特別の計らいで倉庫の前で待ち伏せて、机だろうが、腰掛けだろうが、椅子だろうが、黒板だろうが、寝台であろうが、山と積み重ねて運んで来た。その家具はちょうど二百十四名の生徒を容れるのに不足でもなく、また余りもせず必要なだけのものであつた。その時の嬉しかったことといつたらなかつた。

もう夜の九時過ぎだつた。トラックから机、椅子、腰掛けをおろして、「ああ、これで明日の開校式は立派にやれる」と叫んだ。

明くれば、五月五日、朝早くから昨夜到着したばかりの腰掛けを講堂に並べて、理事長賀川豊彦、監事小川清澄の両氏を迎えて、十名の教員と、二百十四名の生徒、百数十名の父兄、母姉と共にめでたく開校式を挙げた。

式は讃美歌三七〇番で開会。讃美歌三七〇番は「螢の光」の譜であるから、創立直後の学園ではあるが、生徒も父兄も皆、唱えてよかつた。次は聖書朗読であったが、教員尾崎すが子女史が、箴言第三一章第一〇節以下をお読み下さつた。この聖句はかつて崇貞学園が選び定めた学園精神を表わすところのテキストであつた。

小川監事がおごそかな祈祷を獻げられ、次いで参会者一同に校歌を唱つて頂いた。校歌もまた日本人の誰でもが知つてゐる譜を用いてあるから、一同声高らかに唱うことができた。校歌齊唱の後に私は壇に登つて、学園創立の経過報告をしたのであつたが、まず校歌の説明から始めた。

校 歌

(清水安三作詞)

『美わしの 桜花咲く 林ぬち

養はむかな 萬世に 太平拓く 大和心を

二、村里の 土に親しみ 新しく

養はむかな 日の本を 再び建つる 大き力を

三、空遠く 富士の高嶺を 仰ぎつゝ

養はむかな 人の子の 示し給へる 高き理想を

「従来桜花といえば、パツと咲きパツと散る桜かな、身をこう毛の軽きに比し、戦場の露と惜氣なく消える、日本武士道の魂を象徴する花と言われてきたが、そういう精神を象徴する桜花は、もはや永遠に日本国土に咲き匂わないことになりました。この時において私は桜花の象徴する新

しい精神を提唱する。桜花が爛漫と咲き乱れるところ、何となく天下太平、のどけさを感じずるではありますか。今後といえども平和の花として、桜花は引き続いて日本国民にも、また外国の人々にもめでられるに相違ない。換言すれば古い桜花は追放されて、新しい桜花が匂うのであります。

校歌の第二節には、地に落ちている日本の道徳を、まず農村から上り坂にしようという精神が歌われています。古来いづれの敗戦国も農村の再建から復興しているのです。

第三節には富士山が歌われています。学園のグランドから相模連山の峰間に、小さい扇のようなほんのわずかな額だけを出して見ている、今朝も富士は背伸びして遙かに学園を見ている、ちょうどそのように神様はこの学園を天からじっと眺めていらっしゃる。この学園は神様の目の届くところで、経営されているのであります。私たちは学園設立の資金を持つていません。けれども神はなくてはならぬ物を与えることを信じています。御覽のとおりきのうまでこの講堂にベンチ一脚なかつたのに、今日はこのとおり、皆様に一人一人掛けて頂くことができました」

次いで賀川先生の講演、忠生村長の祝辞などがあつて、開校式は非常な感激のうちに無事終了した。式後、壇を降りると、私の手を握つて泣く母姉も少なくなかつた。

「清水安三、ここに見事に立ち上りました。どうかよろしく」と言つて人々に握手して歩いた。

生徒たち、父兄、お客様を送り出してから後、私たちは顔に両手の掌を当ててよよと泣いた。

レコード破りの認可

もう書類が文部省に届いたであろうというので、私たちは文部省の中等教育課をお訪ねした。文部省の役人の方々は口に微笑を含めながら言われた。

「きのう書類が届いたことは届いたが、そうあなたがたのように性急なことを言つても困りますよ。御覧なさい、あの老教育家は十年間も文部省へ毎年毎年通つて、ようやく今年認可を得られたのですよ」

と言つて、指さされた方をふと見るとゴマ塩の頭髪の老婦人教育家が部屋を出て行かれる姿をちらつと見届けた。まず各種学校として、「高等」女学校の二字を用いることを許されないから、何女学校として経営するか、まず裁縫女学校として建て、それを五年十年、時には二十年もの間育て上げて、ようやく認可を受けて高等女学校とするのが、経営の順序であつて、その間上級の学校へ入学したい者には四年生なり、三年生の時に他の認可を受けた学校へ転校をさせて、生徒にも不便をさせながら肩身の狭い学校を経営して行くのが、ほとんど学校創立の定石となつているのである。

それなのに三月二十日頃帰国して、四月から学校を建て認可を得ようというのは、少々虫のよすぎる計画であつた。しかしながら私はそう五年も十年も、文部省へ日参するには年老い過ぎている。私の相手をしていて下さる文部省の事務官は年若い青年官吏であつたから、私はむしろその青年事務官の背後におられるところの課長さんのお耳に届くよう、特に大きい声で訴えた。

「ただ今の老教育家は十年、草履すり減らして、文部省にお通いになつたか知りませんが、その体験は、私はとつともう中国でやつてまいりましたので、どうか北京の崇貞学園の続きと思召して認可をして下さるわけには行きますまい。聞けば東京の中等学校にして、校舎を焼きしものは二十幾校あるそうでございますが、それらの学校は校舎すらもなく、他校の校舎を借り受け続けて続いているそうです。しかるに桜美林学園は校舎だけは五棟もあるのです。接收されたものと焼かれたものと、それは差別待遇されるべきものではございまい。どうかぜひともに認可して頂けますように、私たちは引揚げ者の教員を用い、引揚げの生徒を集めて、共に再起再出発するのであります。何卒ご認可をお願い申し上げます」

私は言ゝ句ゝ、額にあぶら汗かきつつ申し上げたのである。時折息や喉がつまつて、言葉が切れ切れにつかえたが、やつとこれだけとぎれとぎれに申し上げた。すると課長さん——今はすでにそのお名前も忘れましたが——言われるに、

「私は実は来週、何何県の何某専門学校長となつて赴任することになつてゐるのです。もうこの

椅子に坐るのも今週限りです。一つ私の課長時代のお土産の事務として、あなた方の学校を認可して差し上げましよう。どうかしつかりやつて下さい。ご成功を祈ります」

と言つて、長い長い私の口上に対して極めて短い返答をなし、あたふたと忙しげに席を立つて出て行かれた。私は席を立つて課長の後姿に思わず合掌した。私はもう息苦しくなり口中がひからびて、舌が動かぬような感じがした。文部省の出口の石段を私は転ぶように、夢中になつて下つたが、涙がさんさんと止めどもなく下るのをどうすることもできなかつた。

「Everything Okayだ」

私が妻にこの報告をした時は、さすがの家内も眼鏡をはずして泣いていた（正式の設立認可は五月一十九日）。

（昭和23年9月1日発行『希望を失わず』）

希望を失わず

のぞみ

「われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、責められども棄てられず、倒されども亡びず、常にイエスの死を我らの身に負ふ」

(コリンント後書四・八)

この「希望を失わず」の一篇を、私はなおも希望を失わずという心持ちで世に送り出す。表紙に掲げた絵は、英國の画家ワツツの名画「希望」の模写である。眼は隠され、足は鎖でしばられた乙女が、豎琴の残るただ一筋の糸を奏でている。そして天上にはただ一つの星が見えずとも輝いている。私の目下の心持ちは、この乙女の心持ちである。

この頃の私は、真夜中ふと目覚めて褥へその上に端座し、神に祈ることしばしばである。学園にせんぐりせんぐり試みが襲うてきて、私といえどもヘドヘドにならざるを得ないからだ。

私は憂鬱ゆううつである。何となればこの校舎を買い取るために、三百二十五万円を作らねばならぬ。この校舎は建坪で一千七百三十二坪、坪二千円足らずであるから実に安いものである。

しかし如何なれば神は学園にお金を下さるであろうか。何よりも先ず、神の国と神の義とを求むべきである。もしも学園が神の国と神の義を求めているならば、なくてはならぬもの皆加えられるであろう。反省こそは寄付金募集の第一歩であらねばならぬ。

私は寄付募集の一手段として、この「希望を失わず」を書いた。この本が十万冊売れたならば、この校舎は完全に学園のものとなるであろう。十万冊というと仰山に聞こえるが、「朝陽門外」は十万冊、「姑娘の父母」は五万冊、「支那の人々」は三万冊売れた。この本も売つて売れぬことはあるまい。

私は日本全国無錢旅行して売り歩くつもりだ。町の教会を借りて講演し、この本を売る計画である。私の商法は古い。行商、押し売りこそは私の理想である。教会堂の隅に眠らして頂き、禅僧の如く托鉢する。乞食こそは私の理想である。

そもそも行けたらアメリカに渡る心算だ。各地に散在する一世、二世に一冊ニドルで買つてもらうつもりだが、たとえ行けなくとも希望を失わずだ。

私はもはや若くない。血圧がなかなか高い。座骨神経痛という持病も持つてゐる。胃けいれんという病気もちよいちよい起こる。身体が無理できぬ。

私は水杯みずさかずきはして出ぬつもりであるが、生徒たちにはお別れの言葉を告げて出発するつもりだ。出発の日、復活の丘に登つて祈るはずだ。神の不思議なみ助けなくしては、とても三百二十五万

円もの大金は与えられはせぬから。

(昭和23年9月出版『希望を失わず』)

男女共学論

学園の校長清水郁子は昭和六年に男女共学論を著わしている。あの日のこと、郁子が所用でG HQの教育課に行つたら、ホームズ博士が「この『男女共学論』はあんたの著書ですか。この国にも男女共学を早くから唱えていた人がいたことを知つて、驚きました。私はあなたの本を英訳させて、詳しく読みました」といわれ、大いに面白を施したそうな。

そういう共学論者であるから、学園を創立する以上、どうしても共学でやらねばならぬ。そこで私共は中学とも呼ばず、高等女学校とも称せず、桜美林中等学校と名付けて学園を創立することに決意し、寄付行為や学則などを作成し、当局にご相談申し上げたのであつたが、「もう一、三年もせば、そういう学校が認可になるかも知れん。しかしながら尚早です」といられた。そこで止むを得ず高等女学校設立の願い出をしたのであつた。

ところが一、三年を待たずして、昭和二十二年度から男女共学の新学制実施の予告が発せられた。学園も高等女学校の看板を下して、共学の新制中学校、新制高等学校に移行できることとなつた。だがいよいよとなつて、桜美林学園理事長の賀川豊彦先生が、共学に大反対であつたのに

は、驚きもしました閉口した。

「君、共学は止めたまえ。駄目駄目、僕は不賛成だ」といわれたので、私も極力共学中止を提案してみた。実際、私立学園の経営面から見て、女子校を継続する方が有利に決まっている。気楽でもあろう。しかし校長清水郁子は頑として応じなかつた。

（『希望を失わず』）

七十七歳までに大学建設

天もし私に七十七歳の長命を給うならば、私はきっと桜美林の英文専攻科を理想の大学にまで育て上げてお見せする。今日では英文専攻科は中学部の寄生的存在であつて、中学校は五〇三名、新制高等学校は九三名、そして英文専攻科は四三名に過ぎない。

けれども中学部は付近町村の初級中学が向上するにつれ、入学志願者が少なくなり、学園はただ一クラスか、多くて二クラスぐらい設けて、特に熱心な親の子だけを教育するに至るだろう。今に英文専攻科が大学に移行され、その代り日本全国から学生が雲霞のごとく集まり来たり、学園を支える時代が来るであろう。

（『希望を失わず』）

学園の特長

桜美林の特長を強いていうならば、学校が整然としておらぬ。一色で塗りつぶしたようなところがない。兵隊のオンパレードのようなところがどこにもない。整える庭園ではなく、まるで雑木林のようである。巨木も雑木も盛んに枝を張っている。

ずるけられるだけずるけるものも居れば、几帳面に隅から隅まで気を付けてやっている人々もある。怠け者のもたらす不評判を、眞面目な人々が補うて行く。命令一下で動かぬが、思い思いやつてている。ばらばらである。しかしこの学園を悪いようにいふものは、ありふれた凡百の学校しか学校と思っていないからである。

桜美林のユニークな特長として、学園はひとつの大家庭である。先生たちは学生を呼び捨てにしない。学生同士はみな平等であつて、上級生であるからとて、下級生に忠告がましいことをいつたり、敬礼を要求することはできぬ。敬礼は会釈だけ、先生に対しても唇を少々ほころばして、ごく少し首を下げ氣味にせばよいのである。ただ絶対にしてならぬことは、顔をそむけて知らぬ振りをして行き違うことである。いかなる必要があろうとも、なぐることは許されない。いかなる場合といえども、互いに愛しあうこと、親切は桜美林の学風である。

（『希望を失わぬ』）

今だから言うが

この五月二十九日は学園創立十五周年である。この十五年を顧りみて、本当にいろんなことをしたものであると思わざるを得ない。

私は学園の経費を生み出すために、ビスケット売りをしたことがあった。それは学園を創立したばかりの頃であった。日本基督教団社会部は進駐軍のメリケン粉をもらってビスケットを作り、それに砂糖を塗つて販売していた。なんでも米軍の倉庫で、袋がやぶけているとそれを運ぶうちに粉がみな出てしまうので、まだ半分ぐらい残っているメリケン粉の袋を捨ててしまうものであつたそうな。それを社会部がロハでもらい受けたのだそうだ。また倉庫の中でこぼれたキューバの砂糖をもらつて、土ぼこりから糖分をよりわけて再生しビスケットに塗つた。

教団の社会部はそのビスケットを、各教会の牧師に一貫目ずつ実費で販売していた。牧師はこれをS・Sの生徒にこれまた実費で分けていたのである。私は神田の社会部へ毎日行つて四貫目を売つていただいた。一貫目という制限があるのに社会部の幹事であつた山口牧師が、特に四貫目を売つてくれたのであつた。

リュツクの中に四貫目入れて背負うと、聖橋のブリッジを前向きに降りることが出来なかつたことをおぼえている。故に後向きに手すりを右手に持つてヒヨロヒヨロした足どりで降りるのを常とした。そのビスケットを私は生徒に二割高い値段で配給した。生徒はお茶のカンを持って来てそれを家へ持つて帰つた。生徒の家ではそれを自家用のおやつにしたり、また町内の家庭に分け与えたりしていたようである。町内の家々から発注さえ受けるくらいだつたそうである。

しかし生徒たちは、僕がリュツクを背負つてカツギ屋のような姿で電車に乗ることをたいそいやがつた。僕といえどもカツギ屋に思われるのはイヤであつた。しかしこのビスケットの利益は、学園の雑費を貯うのに十分であつた。

学園創立の頃最もつらかつたことは、食うものが乏しかつたことである。特に蛋白質の食物が得難かつた。先生はイモムシを掘つたり、大の幼虫を昭り焼きにして食べておられた。その頃私はよくカエルのスキ焼を食べたことをおぼえている。そのカエルは小山田の貯水池でとつた食用ガエルだとのことであつたが、果たして食用ガエルであつたかどうかは疑問であつた。

この私たちの食生活を見て、見るに見かねた田崎花馬氏が、座間の米軍基地の残飯をただでもらつて下さつた。事務の高橋君が石油のカン箱を背負つて座間へもらいに行つた。特にサンデーのディナーには、手のつけていないおかげが沢山あつた。それは多分将兵が日曜のこととて、外で日本のスキ焼でも食べて帰るから手をつけなかつたのである。

私が人の食いかけを食うのを嫌うので、妻は私にその残飯を見せないで、皿にのせる時はすっかり整理して、あたかも新しいおかずであるかのようにして食べさせてくれたものである。ある日高橋君がもらつて來たばかりの残飯を見たところ、実にそれは汚ならしいものであった。

創業当時一番われわれの困ったのはお風呂である。学園にお風呂が出来るまでに三年かかった。その三年間夏は復活の丘の麓の小川で行水をしたものである。小川を少しせきとめて水たまりを作つたのであつた。月夜の晩に、女の先生の白いヌードが、道から見えるくらいであつた。寒くなると生徒さんの家でもらい風呂をした。私たちは復活の丘を越えて細野さんの家へ行つたものである。この家が一番われわれを暖かくむかえてくれたからであつた。特にいろいろのそばでおモチや、サツマイモを焼いてくださつたのは、何よりのご馳走ちそうであつた。時として生牛乳を飲ませていただいた。その当時においては牛乳屋というものがなかつたから、とても美味しかつた。生牛乳の味は今もなお忘れられぬ。

その当時の教職員は、みんな引揚げ者であつたから、衣料にも事かかざるを得なかつた。蚊に食われてもだれ一人として蚊帳かやをもつていなかつた。カヤは十二月になつてから配給された。私たちは十二月になつてからカヤを配給する馬鹿があるかと、フンガイしたもの、そのカヤのために大いに助かつたことをおぼえている。その年の冬、私たちはカヤを張つて寝ることにしたら、とても暖かいことを体験したのである。何しろあばら家のようになつていた寄宿舎であつたから、

すきま風がビュウビュウ入つて来たのである。それでカヤを張つたところ、大そう暖かいことを発見したのである。

また配給の布団は大そう薄いセンペイであったので、私たちは新聞紙を何枚も貼つて、紙の毛布を作つて敷布とフトンの間にさしはさんで眠つたところ、ガサガサするが、大そう暖かかつた。紙というものは暖かいものであることを知つた。

（昭和36年5月15日号『復活の丘』）

修繕と改築 —校舎の歴史—

落壁破窓任風雨 三年嘗々注心血
誰說此校是破家 不知邦家又如此

この詩は創立三年目の正月にものした試筆である。なお壁は落ち、窓は破れ、風雨に任しているとうたつてあるが、三年たつてもまだそんなだつたのである。私個人としては、校舎がボロであつても内容さえよければ恥かしく思いはしないが、校舎が破屋であつたために、実にくやしい

目に逢つたことはしばしばあつた。英文科へ入学した女学生が、たつた一時間だけ出席して、解いた行李をもう一度荷造りして、さつさと去つて行つた。それが何人も何人もあつた。

床板が折れて、足がゴボリゴボリと中へ入つてけがをした学生もあつたし、雨が降ると傘をささねば身のおきどころのない教室もあつた。冬、窓硝子のない教室で外套にくるまつて、火の氣のない教室で授業したこと也有つた。風呂桶が買えないので、夏は田圃の小川で行水し、冬は付近の農家へ行つて風呂へ入れてもらつた。

内外講演旅行

私はなんとかして修繕改築しようという悲願を立てて、まず京都に持つっていた家を十三万円で売つた。この家は私の伯父が四千円を出費して建ててくれたものであるが、私はそれを売つて、印刷費として一冊の本を書いた。拙著『のぞみを失わず』こそはその本である。それから私は福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、山梨、長野の各県を講演して歩いて、講演後にちよつと一言と断わつて本の宣伝をし、一冊二冊と買つてもらつた。関東八州を一巡するうちに、私のガマグチには二十余万の大金がたまつた。これを旅費として渡米しようともくろんでいると、桜美林短大は理科実験室の不備のために、審査パスさせ兼ねるという。そこで私は島津から器具を購入するた

め、まずその中の二十三万円を投することにした。幸い短大昇格は実現したのであつたが、そのため渡米はもう出来ぬことになった。

翌年再び『のぞみを失わず』三千冊、『中江藤樹の研究』一千冊を印刷して、今度は近江、和泉、摂津、紀伊、阿波、土佐、讃岐、伊予の各地を講演し歩いて十七万円を作り得た。こんどこそはと思い、一九五一年三月に渡米、半年ホノルルに滞在、それより加州、オレゴン、ワシントン州、ユタ、ネブラスカ、コロラド、イリノイと北米カナダを巡錫じゅんせきした。

ホノルルへ上陸した時には1セントの米貨もふところにしていなかつた。誰も迎えに来て下さらなかつたら、トランクをかついでヌアヌまで歩くつもりで上陸したものだ。にぎり飯を三つ十セントで買って、それで腹を作りながら一万枚の手紙を郵送したこともあつた。切手をはるだけでも大へんだった。厚かましくも講演させて頂き、実にお世話になつたものだ。今から回顧しても額から冷汗三斗の感なきを得ぬ。

私は北米から南米、ブラジルに渡つたが、ブラジルの講演旅行は、勝つた組の人々に殺される覚悟で、一命を賭ける覚悟で旅行をしていたせいか、北米の講演旅行の場合ほどに厚顔無恥の乞食感を抱くこともなく楽しく旅行もし、またお金も集まつた。ブラジルには私の竹馬の友のおとくさんというのがいた。ただしブラジルにおける成功は、私が勇敢に眞実を語つたからではなく、小野、弓場の二人の仁侠の牧師がいられたがためであつた。桜美林学園の続く限り、彼ら二人の

牧師のことは語り伝えられねばならぬ。

北米で与えられた一部のお金を旅費として郁子を呼び出したことはよかつた。彼女は特にオベリン大学、またモンタナ、テキサスその他の州を巡り、白人教会との連絡の糸口をつけることに成功した。今日、経営費の赤字補てんをしてくれているのはその結果である。

寄付金の使途

二年間の留守中の赤字をささえるために送金しながら、南北米の講演旅行によつて、十分な修繕改築費を持ち帰えることを得た。

帰校第一に着手したのは、便所の改築である。次は第二棟と第三棟の改築を断行した。天井も床板もはりかえ、屋根も瓦を一枚一枚めくつて、腐っている所を皆取りかえて、徹底的根本的に改築した。かくして、一棟一棟と修築して遂に講堂をのみ残して全部完了したのが去年の冬だつた。特に第四棟の家政科教室のためには完備を尽くして改築した。

今年の三月、講堂の改築を断行した。講堂の内も外もペンキで塗られて見違えるように改築成つた後に、最後に私は門に木を植え、庭を作り、これにて二年間にわたる改築工事を終わることにした。

この改築に要したお金は八百三十三万六千九百五十二円であつて、備品には二百二十二万七千五百五十円八十錢を要した。そのほかに学園の前の小山に四千二百九十坪の土地を買収した。それには百七万九千八十六円を用いた。合計一千一百六十四万三千五百八十六円のお金を使用したわけである。

ここで改めて関東八州の諸教会、諸牧師、四国、近畿の各地教会各牧師諸先生、ハワイ、北米、南米、ブラジルの在留同胞の皆様に頓首再拝、改めて感謝申し上げる次第である。学園が今日のごとくに整備するに至ったのは、皆これ皆様のおかげでなくて何でありましょう。神よ、願わくば彼らのささげしものを、ことごとく二倍、十倍、百倍にして彼らに還えし給わんことを……。

（昭和 30 年 8 月 1 日号『復活の丘』）

祈りし甲斐もあらざればこそ

昭和三十一年一月十四、十五日の両日にはわたつて、オベリン大学で去年の九月に来日して桜美林学園を視察された、フェアフィールド博士の報告を聴く会が開かれた。それはインド、台湾、日

本のいづれの学園を集中的に助成すべきかについて、シャンシー・オベリン財団理事が鳩首協議する会合であった。

昨夏フェアフィールド博士は、来日に先立つて、加州から前ぶれ的に、「この度、シャンシー・オベリン財団から派遣されて、桜美林学園を訪問する。その目的は、従来あちこちの国々の学園を応援して來たが、今後は集中的にいづれかの一校を、ぐいと力を打ち込んで応援したいから、いづれの学園が援助に値するか視察に行く」という書状を寄せられたので、私たちは緊張をもつて同博士をお迎えすることにした。

私は一九三五年から六年にかけて、オベリン大学で机を並べて同博士と共に、ヴォズウォース教授の講義を聞いた仲であるから、これはシメタと、たかをくくるような気持ちになりましたが、中国に四十年もいたフェアフィールド博士であり、その上に日支事変中、同博士の經營する山西オベリン銘賢学校（中国名）は、教員も生徒も逃れて、インドで学校をようやく続けたくらいであったから、多分日本にはフェーバーではあるまいと想像していた。

生徒教職員たちは隅の隅までもキヤンバスを清掃し、一片の紙屑も地に落ちていはず、一枚の木の葉も散らばらぬほどに掃除した。生徒たちは杉葉を用いて緑のアーチを築いて、凱旋將軍でも迎えるがごとくにして歓迎した。

博士はその全校の歓迎会の席上でも、「インド、台湾、日本のいづれかの一校を集中的に応援

したいと思うので視察に来た」と声明された。

歓迎会の後に、教室を一室一室廻り、五分ずつ諸教員の教え振りを見て頂いた。それがすむと、家政科学生のお料理で昼食をとつて頂いた後、学校、評議員会、理事会、組織、会計などを逐一報告して差し上げ、理事長、評議会会长、P.T.A会長などを紹介申し上げた。

その折り、かねて私どもが書状をもつて、集中的助成を受ける場合のプロジェクトをあらかじめ報告しておいたから、「もしもオベリン・カレッジが若い教員でなく、年長の教員を遣わした場合、それと協力するとあつたが、その点いかに協力するか」との質問があつた。

私どもはそのシニア代表を園長、学長、チヤンセラーにでも、プレジデントにでも仰いで、その傘下にあつて、欣然と協力する用意のあることを披瀝し、特にミセス・シミズはそのシニア代表の語学の欠を補うために完全なる奉仕をして差し上げること、また会計監査在京の米国人に委託される場合、すべて英文で会計報告もすると申し上げた。私どもはこの質問のあつたが故に、しめた、手応えは確かにあると思つた。

午後は生徒たちの部活動を見て頂いた。かくて一日の日程を終了して、すでに暮色せまる中を博士は東京へお帰りになつた。寮生たちは門まで見送つて“テイル・ウイ・ミート・アゲイン”を唱つてオベリン・カレッジと桜美林学園のペナントを左右の手に振つてお見送りした。

フェア博士はその後、東京であちこちの英語を話せる名士を訪れて、清水安三はいかなる人物

であるか、桜美林学園はいかなる学園であるかを、あたかも行司が四本柱にデンと座つてゐる審査役に訊くがごとくお歩きになつた。私はそうと聞いて、シマツタと直観した。

聖書の中にも、悲しむ者と共に悲しむのは易いが、喜ぶ者と共に喜ぶことは最も難いとある。特に日本人は島国根性の持ち主である。頭角を出せる釘は、こぐちから打たれるにきまつてゐる。もしも提灯ちょうちんをいささかでも持つてくれるものがあれば、小崎道雄氏くらいなものである。特に世界的知名の某教界名士の批判は、私どものあらゆる努力をも水泡に帰せしめるだけの威力があつたということである。

ドルの援助がもらえたたら

シャンシー・オベリン財団が集中的に助成金をくれるならば、私の計画は、第一に教職員の給料を公立学校なみまたはそれに近い程度に引上げること、第二に十年計画で、校舎をコンクリート化することであった。まず短大校舎、次は高校、次は中学部、それよりジムナジアム、ライブラリー、チャペル、プール、次から次へと建築し得る計画であつた。年五万ドルの助成があれば、十年後の桜美林は、すばらしい学園になるプロジェクトであつた。

それでも私は奇跡の行なわることを祈つて、一月九日から十日まで学園の小チャペルにおいて

て早天祈祷会を秘かに開いた。太陽の出る時刻に、聖壇にローソクを点じて跪いて祈った。そして私は十四、十五日には断食を敢行した。この類のことは祈りと断食とによらねばと考えたからである。実は私は生まれて初めて断食なるものを行なつたが、なるほど意義深いことであると思われてならなかつた。一日中断食しているために、「今ごろは定めしオベリンの町で、会議が行なわれているであろうぞ」という想いが、心から一瞬といえども離れなかつた。

その答えはノー

一月二十七日、一通の航空便がオベリン財団の書記から来た。そしてその答えは「ノー」であった。私はそれはシャンシー・オベリン財団の回答であるばかりでなく、神さまの私たちの祈りに対する答えがノーであつたことをはつきりと知つた。おつて二月二日にはもう一通オベリン大学の他の書記から手紙が来て、それには、「桜美林学園のごときものを援助したからとて、日米親善を増進することにならぬ」という結論に達したという。

事のここに至りし理由の中には、不肖私の不徳の致せるところもあつた。今ここに改めておわび申し上げる。私の不徳のために、同労教職員に引き続いて貧乏をおさせ申し上げねばならぬことを思うと、うたた汗顏の至りである。

さりながら、この度神の御答えがノーでありしことは、人はいざ知らず、神はなおも私を信頼し給う証拠であると、私自身は信じている。

「米国人などにやつてもらわづ、汝自ら成せ、われは汝自身にやらせたいから、この度は汝の祈りを斥けたのであるぞよ」と神語り給うごとくに、私は確かに神のみこえを聞いたのである。
「でもすでに僕は、歯は遂に義歯、齢は七十になんなんとしています。誰にも頼まずただ神にのみ頼つて、十年計画で、この度フェア博士に提出したプロジェクトをそのとおり、実行しましよう」

と決意のほどを神に囁いたのである。そして“よし、やるぞ”と足をもつて床板を強く踏み鳴らし、手を撫して叫んだのであつた。ああ、誰かこれを近來の快事とせざるものがあらうか。顧みれば、すでに身は老いて昔日のごとき元気はない。願わくば読者諸君の御加祷を祈るや切である。

（昭和31年3月1日号『復活の丘』）

校地五千坪

一番最初に与えられた土地は五千坪であった。それは今から七、八年も前のことであった。ある日のこと、見も知らぬ一人の米軍チャップレンが学園の前にカーを止めて問うた。

「この学校はクリスチヤン・スクールですか」

そこで私は、

「どうしてそれがわかりますか」

と問うと、

「十字架が立っているから」

と言つて、学園の玄関の屋根の上に立つすばらしい塔を指した。その米軍チャップレツは、ざつと校舎を一巡して後に、

「寄宿舎ばかりで、クラス・ルームは一つだつてないではないか」

と言つた。もともどうちの学園は兵器廠の寄宿舎だったのであるから、天井がかさなつて低く、各棟の階上も階下も皆寄宿舎にしか見えなかつたのであろう。そこで私が、

「校舎はある丘の上にあります」

と言つたら、チャップレンは復活の丘の上をあちこち眺めた後に、

「何もないじやないかね」

と言つて私を顧みたから、私はすかさず、

「貴君には見えませんかね、僕の眼には、鉄筋コンクリートの校舎がずらりと並んでいるのが見えるのだが……」

と言うと、さすがにチャップレンだ。にっこりほほえんで、

「ハツハツハツ……」

と馬鹿に声を高くして笑うのであつた。そこで私も、

「ハツハツハツ……ユウ・シイ」

と叫んで笑つた。二、三日後、そのチャップレンは再び訪れて、

「あの丘の上の土地はもう買つてあるか」

と聞くと、

「僕が土地を買つて上げよう」

と約束して帰つて行つた。そのチャップレンこそは、厚木ベースにいたチャップレン・サレンバーガーである。

彼はそれより後、毎日曜日の献金をことごとく、うちの学園のために貯金しておいて、帰国する時に、土地購入費をたんまり残して行ってくれた。今学園が復活の丘の中腹に所有する土地こそは、そのお金で買った土地なのである。その上に鉄筋コンクリートの三階の教室とチャペルが建つてているのである。

五千坪の敷地と九千坪の借地、私が生きている間はそれでもいいかも知れないが、他日、学園が発展した時には、狭くて狭くてどうにも仕様がなからう。そこでこの度、もう五千坪購入しておくことにした。すなわち復活の丘をタテに切る道路の左側と右側に、殆んど同面積の校地がこの度学園の所有に帰したわけである。

これだけあれば、短大、高校、中学の各部校舎、体育館、図書館等全部建て並べ得る。この敷地の拡大、どうか皆様喜んでください。

（昭和33年12月15日号『復活の丘』）

チヤ・プレン・サレンバーガー

〔清水郁子記〕

チヤ・プレン・サレンバーガーは厚木チヤ・ペルのチヤ・プレンであった。本国ではモンタナ州ビュート市の組合教会の牧師であった。氏は私より新校舎建築のプランのあることを聞いて、「その地代はいくらか」と問うた。私は当時の相場で「約二万坪で二千ドルぐらい」と答えた。

すると氏は、「地代は私が何とかしましよう。一時には無理だが一、二年の間、自分の在任中に何とかしよう」という思いがけない言葉であった。

その約束が遂に実つて、校地の登録が終わつたのは一昨年の夏、氏が帰米された翌年であった。土地購入の交渉は難航を極めた。足かけ五年かかつて初めて成就したが、もとの小作人の離作にはさらに三年、やつと本年度秋をもつて終止符をうつというじれつたい仕事であった。

その間の五年の歳月は、地代を暴騰させた上に、予定面積の約四分の一の五千坪ほどしか入手できなくなつたことは遺憾千万であるが、しかし、我らの復活の丘は氏の親切な申し入れなくしては、購入の機縁がなかつたかも知れないと思うと、感激が潮のごとく胸に充ちてくる。

チャプレッジは忙しい公務の中を縫うようにして、五分、十分の訪問をして下さつた。またそれ以来、わが校の聖歌隊は厚木のチャペルにしばしば歌いに行つた。クリスマス、イースターは特に楽しい日米親善の機会となつた。

昭和二十七年正月、私は新年最初の礼拝の説教を頼まれた。大雪の日であったが、東京から司令官等も来駕された。礼拝後、皆と午餐を共にして幸福な一時を過ごしたが、その時から礼拝ごとに献金の一部が二千ドルに達するまで、復活の丘の校地サレンバーガー・ランドのために積まることになつたのである。

(昭和33年12月15日号『復活の丘』)

校舎建築費募集

厚木ペースの前チャップレン・サレンバーガー牧師は、在任中サンデーごとにささげられた賽銭を、桜美林のために寄付して行かれました。私どもはその献金をもつて、復活の丘に五千坪の校地を運輸省から買い入れ、サレンバーガー・ランドと名づけました。そして去る三月二十五日、その土地を耕作されている農民諸氏も学園の願望を容れ、いさぎよく来る六月限り離耕して下さることになりました。

ここにおいて、私どもはいよいよ校舎建築を決意致しました。その建築貴金を専ら米国オベリン大学におおぐことを得ませんでしたが、幸いにその資金募集費を与えられましたから、本月からばつぼつそのキャンペイーンを開始することに致しました。

建築を五期に分けて、第一期高校校舎、第二期中学校校舎、第三期短大校舎、第四期ブールとジムナジアム（雨天運動場）、第五期チャペルと図書館、各期いずれも一千五百万円を要する予算であります。

つきましては、今年から来年にかけて、まず一千五百万円を募金致します。その建てんと欲す

る設計図を本号第一面に掲げましたが、左の方は教室であつて、右の方は図書館であります。ブロツク煉瓦で建てるならば千五百万円で図書館も建つであろうとのことであります。屋根はこの図には付してありませんが、ぐるりが緑の地帶でありますから、赤きいらかとするやも知れません。いづれ狸を獲て後にどんな皮細工にするかはユックリ考えるつもりであります。

(昭和31年4月1日号『復活の丘』)

ぎょうきく
行乞への出立

近く帰国する瀬谷のチャップレンに、「」の秋からは私も不在勝ちになります。「」によると来年あたりは、渡米するかも知れません」と言うと、チャップレンは、「合衆国の私学の校長や総長には殆んど在校する暇はない。年がら年中、募金に奔走しているようです」と言われた。
去年オベリン派遣の代表フェアフィールド博士が、「アナタは一時間でも教えていますか」と質問されたから、「私は教える」とが好きで」と言つて答えたものだ。

北京でも私は、中国人の子女を喜んで教えたものだ。私の授業は六時間田としておいて、日が

暮れるまで、何時間でも教えてやつたものである。桜美林ではその反対に一時間目に授業することにし、いずれの級の生徒も少なくとも卒業までには一年間は私から直接教えられるように仕組んでいる。私も楽しんで教え、生徒も喜んで教えを受けてくれた。

しかるにこの秋からは殆んど、学園のキヤンバスから、私の姿は消えるに至ろう。せめて一週一日だけ姿をあらわしたく思つてはいるが、それもあるいはむずかしいかも知れぬ。教えて倦まずという言葉もあるが、世に教えることほど楽しいことが他にあろうか。

ところが世の事、みな表と裏とがある。生あれば死あり、春夏あれば秋冬があり、楽しみのあるところ、苦しみもまた伴うものである。楽しい楽しい教育を行なわんためには、苦しい苦しい募金をせにやならぬ。

友に顔をしかめられ、軽蔑され、門前払いを食らい、面皮を百枚張りにし靴の裏皮をすりへらさなければ、到底、桜美林学園を完成することはできない。

もつとも乞食を三日すれば止められぬという諺すらあるように、腐つた臭い飯を投げ棄てるようになれる人々もあるが、また法事や葬儀の施物にありつける日があつて、白飯の山盛りのご馳走になることもあるものであるから、乞食も止められないのであろう。私の募金運動の滑り出しはなかなかお臂が重く人一倍おつくうがりであるが、やり出したら最後、遮二無二やることにならう。

近頃、暑中見舞いの葉書を何十枚か受け取つたが、中には「御老体如何」などと認めてあるのである。私はもう老人なのか。それにつけても北京朝陽門外の学園が接收されなかつたら今頃は魚でも釣るか盆裁でもいじるか悠々花鳥風月を友として、しゃあしゃあしておられたであろうが、この齢になつて、再び托鉢の難行苦行に出て行かねばならぬとは。

この頃有名無名の人々の死が報ぜられるが、いずれも六十三、四である。私は六十五、倒れて後に止むあるのみである。

(昭和31年9月1日号『復活の丘』)

「復活の丘」にくわ入れ

昭和三十一年八月一日、真夏の太陽が燃えるようにかがやく復活の丘に、にわかに異様な響きがおこつた。道行く人は皆足を止め、手をかぎして凝視したので、学園前は見る見る人垣を作つた。ブルドーザーの動く響きである。

濃緑で四輪を備えた大きな団体、前面についたこれも馬鹿でつかい鍬の刃を地面に切り込ませながら、掘りおこされた土を丘のスロープの低い所に向かつて運び入れる地ならし工事である。

八十馬力のブルが二台、それに操縦者が一名ずつ、約十分で交代する。

丘の一隅に天幕を張つて、夜は夜な夜な一名の監視員がつく。この物々しい作業は完全に一週間、中にはさまれた土、日曜日を入れると前後九日にわたる重労働であつた。駐留軍の厚意によつて貸与されたブルドーザーによる学園グラウンドの新設工事である。面積約一千坪、深い所では約一メートルの土が掘り起こされねばならなかつた。

創立以来学園の聖所であった復活の丘に、いよいよ近代科学の鍼（ハ）が入れられたのである。将来のニュー・キャンパス計画実施の第一歩である。

（昭和31年9月1日号『復活の丘』）

校債募集趣意書

本学園の校舎がバラックの古手であつて、以前兵器廠の寄宿舎に用いられたものでありますから、天井は低く柱は細く、まことに校舎としては不適当なものであります。

創立当時は何しろ、都下の緒学校は戦火のために、あるいは焼失し、あるいは破壊された直後のことで、本学園がこうした校舎でも所有していることは、大いなる強味でありましたが、近

来、他の諸学校が年一年と整備され、ぱりつとしたコンクリート、またはモルタルの校舎が新築されたので、本学園はひどく見劣りがするようになりました。何時までも私たちの学園だけがモンペ姿の校舎で満足すべきではないと存じます。

こうした理由から私たちは年来鉄筋コンクリートの校舎の新築を企画しまして、まず、一昨年学園の門前を走る八王子県道をさしはさんで、現学園の向かい側なる「復活の丘」の中腹に、約五千坪の土地を運輸省から買い取り、完全に学園の所有地と致しました。そして昨年はYEDの好意により、ブルドーザーを借り受け、地均しを行ない、今や建築を待つばかりの敷地になつております。

もつとも五千坪ばかりの土地では当分は十分ですが、学園の遠い将来を考えますと狭小ですから、目下更に近接五千坪の土地の払い下げ方を運輸省に運動中であります。

このように敷地の用意はまず出来上りましたが、一方、校舎建築の資金は、皆目持ち合わせないのあります。ただ全校生徒のお子様が毎月納入して下さる月額二百円の建築費が、月額約十三万円あるのみであります。

ただし数は力でありまして、この零細なる建築費だけをもつてしても、鉄筋コンクリートの教室が、毎年一教室だけは建築することが出来るわけであります。

幅四間長さ五間、廊下一間余りの教室は約二十五坪の面積であります、坪六万円の建築費を

もつてすれば、約百五十万円で出来上るのであります。

毎年一教室を建築するとすれば約十五年にして、学園の要する教室は完成し、約三十年の後には、教室、図書館、ジムナジアム、チャペルの諸建築物がことごとく完成するわけであります。

しかしつらつら考えますに、あるいは十五年、あるいは三十年かかつて建設するのでは、現在の生徒の時代には全く間に合わず、ただ彼等の後輩の使用に供せられるのみであります。それは毎月二百円出資して頂くことが全くお気の毒でなりません。そこで私たちはこの際思い切って、一挙にまず九教室より成る校舎を建築し終え、現在の生徒たち自身も使用できるようにしようともくろんだのであります。幸い、私学振興会からも、低利資金を貸与してもらえるようになりますから、この際広く御父兄一般に訴えて校債を募集して建築資金となそようと存じます。

校債は年六分、三年期限、担保は不動産なる桜美林学園現校舎「復活の丘」の土地をもつてして、その形式は、借用証書によるものと致そうと存じます。

私どもは五百万円は少なくとも集まらねば起工はむずかしいと考えております。すなわち建築費一千五百万円のうち約五百万円は私学振興会より、約五百万円は父兄より借り受けて、残る五百万円は建築業者の好意により、イージー・ペイメント的に寄付金を集め得て後に支払うことくに考えております。

(昭和32年5月1日号『復活の丘』)

勧進の記

昭和三十二年六月十五日、宗像先生にスクーターを運転してもらつて、僕はその後に乗り、朝十時に学園を立ち、托鉢の行に立ち出でた。

「どこへ参りましょう」

と言われたので、目標は南林間の高橋幸枝ドクトルと申し上げたところ、「それがいいでしよう」と相槌を打つて車をドンドン走らせられたが、スクーターが相模大野を過ぎる頃、

「どうですか、井上房次郎さんを訪問しては」

と思いつかれた。そこでお宅をお訪ねしたところ、ちょうど大学在学中の息子さんの一幸君が在宅していた。聞けば井上さんのところの息子さんは、一人ながら宗像先生担任のクラスだった由。

おもむろに奉加帳を出すと、一万円と書いて、井上さんは、

「これで勘弁してくれるかね。少ないかね」

と言つて私どもの顔を眺めながら書き、書き終わるとお迎えの自動車が来て、あたふたと出て行かれた。

井上さんのところを出て、南林間へ走つたが、鉄道を横切る坂を上る時、エンジンが止つてしまつた。油が切れたのである。

ようやく高橋医院に着く。新病棟がずらりと建つて、実に堂々たるものである。

高橋女医は北京以来の因縁もあるので、何分に一つこの際にお頼み申し上げると言つたところ、ちらと奉加帳をひらき、井上さんの一萬円か目に入るや、「またあとでお届けしますわ」と言われる。

「いや、二千円か三千円で結構なのですよ」

と申し上げたが、さすがは女性である。遠慮してお書き下さらぬので、アキラメてまたドンドン走り、今度は淵野辺に向かつて前進した。

かくて第一日はただの一筆ではあつたが、實に暖かく迎えてくれ、送られたのでうれしかつた。

翌日は八王子方面に向かうことにした。きょうはスクーターは實に調子がよいとのことである。橋本で竹内自転車店を訪れた。竹内悦子さんの実家である。竹内自転車店では、僕が「三千円一つ申し込んで下さいませんか」と小さい声でささやいたところ、お父様がさつそくペンを取られた。われらのスクーターは御殿崎を左に見て、八王子街道をドンドンすんで八王子を通り過ぎ、元八へと前進した。元八には小島正明君の家がある。二百年、それとも五百年の大木のブナが門に茂つている。

「父は不在です」とのこと、困ったなどささやきつつ、招かれるままにお座敷に上った。
「御主人が御不在ではどうかと思いますが、実は新校舎建築の資金を集めるために、卒業生の家
を訪問しているのですけれど……」

と口を切つたら、お祖母さまとお母さまが、

「それでは五千円だけ寄付させて頂きましょう」

と、さつそく正明君のお母様が出してこられた。正明君は今年の春休みには、見習いのため親戚
の瀬戸物のお店へ働きに行かれた由、そして給料千五百円をもらわれたとのことであつた。

それより学園へ運動具を売つて頂く丸善を訪れ、一万円と書いてもらい、そして、宮川和英君
のお家を訪れた。宮川君のお家は町角についた。

「和英君が中一に入学した時に一万円寄付して下さったことを覚えてています。あの頃はうちの学
校の先生の給料は五百円均一だった頃でしたから、一万円は実に大金でした。今もなお感謝して
いますよ。でも今度も少々……」

と言うと、五千円と記して下さつた。和英君は今、東邦医大の学生であるが、学校に行つてお留
守だつた。

それより、スクーターは佐藤ふみさんの医院へ行つた。お父様のドクトルに托鉢の行脚をして
いる旨を申し上げると、「私もそれでは」と言つて一筆書いて下さつた。

かくして日も暮れはじめたので、我らのスクーターは再び、八王子街道をバク進し帰途に着いた。まあスベリダシとしてはこれにて上々というところで、帰宅し、まずひざまづいて感謝の祈りをささげたのであつた。

（昭和32年7月1日号『復活の丘』）

着々進む我らの計画

「復活の丘」の上に、鉄筋コンクリートの校舎を建てるために、私学振興会から五百万円を借り入れ、父兄から校債を募つて五百万円をつくり、残り五百万円は業者にイージー・ペイメントで成しくずしにて支払うことにしようと計画を立てて、校舎建築をはじめたが、どうやら思う壺にはまるらしい。

六月の初め、私学振興会は四百万円は貸そと内示してくれた。それでは百万円不足するではないかと、読者諸君は思われるだろうが、少なくとも百万円は設備費として貸してもらえる由。父兄に校債を依頼したところ、十万円を引き受けた人が二名、七万円が二名、五万円が五名、三万円が十二名、二万円が二十名、一万五千円が二名、一万円が十四名など六十四名で合計三百

五十余万円に達した。

業者の方も、「やらせてもらいます」と、はつきりと引き受けてくれていてから、まづ今とのところトントン拍子ひょうしである。建築の方は目下、ヴォーリズ建築事務所において設計中である。七月にはその設計図が出来上るであろうから、それから都庁の建築課に申請して、認可があり次第直ちに起工する段取りになつていて。

先年、学園の生徒が運動会の仮装行列で、プラカードに、“安サンの大風呂敷”とでかでか書いて、鉄筋コックリートの紙製模型を運ぶ光景を演じたことがある。問題は私のからだである。「神もしわたくしめに、八十八の米寿を賦与せられんか、必ずや『復活の丘』の上にチャペル、ジムナジアム、ライブラリー、校舎をずらりと山の上のキヤツスルの」とくに建てて見せます」

（昭和32年7月1日号『復活の丘』）

新しい校歌

従来は歌詞こそ違え、大伴家持の歌「海行かば」の譜で校歌を唱つていた。あれでは他日、学

園の野球チームが甲子園へ行つた場合、全国民がびっくり仰天するだろう。あの譜は実に立派な樂譜であるから校歌として用いる時に、後の世に遺るとまで考えたが、やつぱりもう一つ別な校歌を作ることにした。今度の歌詞は次のようにある。

(一)

大空遙か はる 跣かかとをあげて

富士の高嶺たかねは のぞいてる

桜の園そのの若人達わかなは (女声)

桜の園そのの若人達わかなは (男声)

健かに (女声) 邇ましく (男声)

育つかと

(折り返し)

あゝ オペリンナー

もろ手てをあげて

イエス イエス

イエス イエス

叫ぼうよ

(二)

大空高く 十字架の立てる

復活の丘は 聞いている

桜の園の若人達は (女声)

桜の園の若人達は (男声)

清らかに (女声)

勇ましく (男声)

生けるかと

この歌詞の意味はこうである。一番の富士の高嶺たかねが踵かかとをあげてのぞいているというは、学園から遙かに仰ぎ見る富士山は、丹沢の山々に隠れて九合目しか見えないので、さながら踵をあげてのぞいているように見えるからである。これは富士の高嶺といつても、神様を象徴したもので、神様が、「今朝も桜美林学園はうまく運ばれているかなー」とのぞいておられる、ということを歌つたものである。

二番、十字架の建てる復活の丘が聞いているというのは、イエス様が聞いておられるというところを象徴したのである。現にこの度建てられたチャペルの高い塔には、十字架が立てられてい

る。この十字架は銅であるから、一、三年もすれば緑鏽があいて必ずやねば）そがな滋味のある色に変わるであろう。ああ、オベリンナーといふのは Oberliner 「オベリン人」という意味である。この校歌の特徴は、第一に歌詞が現代語である」とだ。「叫ばなむ」とでも言へば趣を感じもするが、もう昔の語調にのみ詩の趣を持つべきではないから、すつかりモダンな日語にした。
第二の特徴は男女共学であるから、女声男声が交々に特色のある高低の音色で唱えるようにしておいた。第三の特徴はオベリンナーとか、イエス、イエス、イエスというように、横文字を混ぜて、いつそモダン・モードにした。

（昭和 33 年 12 月 15 日号『復活の丘』）

火事の経過

昭和三十三年三月八日、学園の卒業式が行なわれていた。卒業証書の授与も訓辞も来賓の祝辭もとどりおりなく終了、高一の岸間正君が在校生を代表して送辞を読み上げ降壇した。

その時、

「火事デス 火事」

という叫び声がした。司会者の宗像先生は外に出て、炊事場の方角をちょっと眺めて後、「皆さん、大したこともないようですからあわてないように願います。高二の男子は皆出て消防の部署に着け」

と叫んだ。私はガウンのまま壇を降り、同じく外に出て、ただちに、

「女学生は図書館の本を運び出しなさい」

と叫んだ後、

「誰か電話局へ火事だとかけるように」

と指示した。

学園のポンプが動き出した時には、もう赤い焰ほのおは炊事場の屋根をなめ始めていた。

チャペルのベルは乱打され、村々のサイレンもうなり出した。約十五分ばかり学園のポンプが働いた頃、下矢部の消防団が来着、ついで一台また一台と消防自動車が到着、計二十二台の大小ポンプが來てくれた。

この間、志村牧師、宗像先生、泰先生は浴室の屋根の上に立つて、火の粉を浴びつつ一棟目の寮舎の二階に延焼せぬよう必死の努力をしておられた。

当日は無風であったが、炊事室が燃える頃には火炎が風を巻き起こし、まさに一棟目に燃え移ろうとしている。

私は、

「一棟目への延焼を救うてください」

と言つて哀願した。

講堂一杯の生徒、卒業生、来賓父兄は、あわてる事もなく、小走りに駆ける者すらもなく、平常よりもかえつてオシアイ、ヘシアイすることなく、列を成して三つの入口から講堂を退出した。飛び越えてよい三方になつてゐる低い窓ではあるが、誰一人盜人のように窓から飛び出する者もなく、整然として外に出た。

それはそれでよかつたが、そのためにベンチを一つとして持ち出そうとする者がいないのを見て、卒業生の父兄、多摩少年院の徳院長は自ら男生徒にベンチを運び出す指揮をされた。窓のガラス戸をはずし、リレーでベンチを外に運び出し、たちまちに庭に積み上げられた。

そこへ志村牧師はもう一棟目への延焼はないと見て、浴室の屋根から下りて来て、講堂のピアノ二個、オルガン一個、講壇上の重い椅子、テーブルを自ら指揮してことごとく外に運び去らせた。

間もなく米軍の巨大なポンプが來着、遂にさしもの焰も下火とならざるを得ず、午後三時十五分に鎮火した。

そこで私は門に立つて、帰り行く消防団に腰を曲げ、首を垂れて謝意を表した。その間郁子園

長は田中 P.T.A 前会長に伴われて、地元消防団へ挨拶にまかり出て、根岸の魚儀サンにニギリ飯の焚き出しを乞うた。

午後四時半から卒業生と生徒、教職員は相集つて、卒業式の続きを挙行した。

短大の代表、鈴木和子さんの英語演説、高三の代表、佐藤菊代さんの答辞、中三の代表、鈴木杉子さんの答辭などがあつて後に、「見よ、復活の丘の上、十字架高く立たざるや、富士の高嶺と呼応せり」の校謡と、「むかし小山田太郎、高家は不利のいくさと知りながら、大義のために馳せ行けり、桜美林健児に似たらずや」の野球の応援歌を唱つて式を閉じ、卒業生は、私や郁子園長や、川上先生に列を成していちいち握手して散会した。　（昭和 33 年 3 月 15 日号『復活の丘』）

再建へのゲキ

炊事場、食堂が焼失しては肉の糧かてを食べさせることができぬ。講堂を焼失しては魂の糧を供することができぬ。

私たちの学園は三分の一の生徒が寮生である。彼らは殆んど全国から来ている。北は北海道、

南は沖縄から来学しているのであるから、食堂が焼失しては飯を食うところがない。現に八日の夕食、九日の朝食は寮生は皆ニギリ飯の立食をしていた。また火災の翌日二十五日まで平常のように授業を続けると言明したにもかかわらず、寮生の食事がどうも差し支えそうで、遂に春の休みを繰り上げざるを得なくなつてしまつたのであつた。

さて炊事場や食堂が必須で、一日といえども欠くべからざるものであることは世の何人にもわかることがあるが、魂の糧を供するところの講堂は、なくてもあつても後回わしてよいかのごとくにとにかく思われがちである。けれども魂の糧の大切なことは肉の糧以上であつても以下のものではないのである。

わけても本学園においては特にそうである。現に火事以後にグラウンドで二回朝拝を守つたけれども、お祈りは叫ぶがごとくに祈つたのでは、宗教的空気がどうもみなぎつて来ぬ。クワイアも低い音は聞こえぬから問題にならぬ。また聖書朗読も奨励も、グラウンドではからきし心の琴線に触れるようにやり得ない。

うちの学園から講堂の行事を除去したら、それこそ殆んど特長を失つただの学校になつてしまふであろう。

そこで私ども教職員は結束して立ち上り、全世界にゲキを飛ばして、内外の兄弟姉妹の同情に訴えて募金することにした。そのため一万本の書状を送り出すことにした。

実のところ私は三月八日の火事以後は呆然として虚脱心理にあつた。私は眠る前には必ず床の上に端座して神に祈るのが、五十年來の習性なのであるが、三月八日の夜も、九日の夜も祈らないで横たわつてしまつたのである。「これはもう夜ヌケするより仕様がないぞ」と考えたりもした。

ところが夜半に「清水先生」と呼ばれる声がしたので、ガバッと起きて廊下に出て、「誰か、どなた」と叫んで外を眺めたが、何の返事もなく、窓の外はただシーンとしていて鳳もなく猫の子一匹おらぬ。

さては夢であつたのかと思い直して横たわると、またしても「清水先生」と呼ばれる声がする。神様のお呼び出しにしては「センセイ」の称号がおかしいというものだ。眠れないままに床の中で瞑想に入り、それから、「ソウダ、火事見舞いにもらつたお金を用いて、それを資金にして
蹶起しよう」と決意したのであつた。それから祈り始め、夜の明けるのを待つた。

三月十日、私は起床して、皮のバンドをズボンから取り去つて、ワラ繩をもつて帶として、ネクタイをつけず非常時の服装をなして学園に登校し、職員諸君とともに朝挙を守り、一大決心を披露して、講堂建築の提案をなした。

新築すべき講堂は一千名の座席を有するものにする。鉄筋ブロック煉瓦建てとする。建築資金は約一千万円とする。

一方、さつそく、ヴォーリズ建築事務所の東京支店に設計を請い、他方、教職員総掛りで、寄付募集のゲキを送り出すことにした。謄写印刷をするもの、封筒を書くもの、切手を貼るものそれぞれの部署で決行することにした。

日本内地の邦人キリスト教徒へ六千本、在米知人キリスト教徒へ二千本、在日米人へ二千本、まず一万本を送ることにしたところ、教員室はたちまちにして戦場のごとくに働き出した。

（昭和33年3月15日号『復活の丘』）

賀川先生の思い出

賀川豊彦先生は、長い間病床に横たわっておられたが、去る昭和三十五年四月十三日、遂にご召天あそばせられた。

確か大正八、九年の頃であった。賀川豊彦氏が北京へ来遊せられたのは、私とはその時以前には一面識もない間柄であった。多分天津もしくは、上海のキリスト教会に頼まれたのだつたろう。私が駅へ迎えに行つて、北京見物の案内をせねばならぬことになった。当時すでに賀川さんは名

だたる名士だったから、北京飯店に一室をリザーヴしておいた。駅でそう言うと、

「君のところに泊めてもらいたい」

とのことだった。無論私はザアカイのように喜びはしたのだが、実は私たち夫婦は、中国の電話局に招かれた一日本人の技師の家庭で食客をしていったのであるから、お泊めし難いとわけを言つて断わつたところ、

「じゃ、僕も二、三日一緒に食客になろう」

とのこと、致し方なく、私ども夫婦と枕を並べて寝ることにした。

私は万寿山だの大和殿だの、それから天壇に案内したり、中国の学者、社会主義者にお引き合わせしたりした。そしてまた、ご希望で中国のスラムと共に視察した。その折り、たしか天橋の泥棒市場を見物している時だった。

「僕が君だったら、シナの貧民窟に飛び込むがネ」

と言われた。当時は私はまだ何の事業をも開始せず、専らシナ語を勉強していたのだが、私が後年貧しい人々の住む朝陽門外に学校をたて、天橋のスラム街に愛隣館を建設したのも、もとをただせばその折りの賀川さんの示唆によるところが多かつた。

私は私を支えていてくれた組合教会派の年会に出席するため、毎年秋十月に京阪地方へ、時には東京へ帰朝した。それがために新川時代の賀川さんを二、三度訪れることができた。亡妻清

水美穂は、賀川さんのお宿をしてからというもの、崇拜者となつて、賀川さんの著書蒐集家となつた。

彼女はその後十年ばかり後に京都の府立病院で死んだのであるが、もう一度賀川先生にお目にかかりたいと言い出したので、ご迷惑だとは思いもしたが、お頼みしたところ、親しく病床をおたずね下さつた。そして枕邊でお祈りして下さつた。彼女は翌日遂に召されたのであるが、彼女の臨終がとてもすばらしい信仰的なものであつたのは、賀川さんがお見舞い下さつたためでもあつたろう。

昭和十九年の十二月に賀川さんは北京へ来られた。そして崇貞学園の寮の構内にあつた拙宅へお泊り下さつた。確かクリスマス・イヴを拙宅で過ごされたかに覚えていた。私は賀川さんの泊られた部屋を「賀川屋子」と名づけ、永く記念することにした。

昭和二十一年三月二十二日、私どもは背に大きいリュックを背負つて、午前五時に東京に着いた。

翌二十三日、私は一ヶ月もお湯に入つていなかつたので、江戸の名物、朝風呂へ行くことにした。Y M C A の前の錦湯へ行き、ゆでダコになつてぬれタオルをさげて、ひょくりひょくり歩いて、明治書院という出版屋の前まで来ると、小川町の方から賀川さんがやつて来られるではないか。

「やあ、賀川先生」

「おお、何時帰ってきたか、生きて帰れてよかつたネ」

（中略（焼原に祈る） 239頁参照。）

こうして私は賀川さんを学校法人桜美林学園理事長と仰いで、わが桜美林学園は創立したのであつた。

賀川さんは昭和二十一年五月五日、桜美林学園の開校式に来校された。またその後何度か来校して、生徒に講話を試みられた。

後、賀川さんに、片倉組がどうしても建物を買ってくれと言つてきかなかつたので、遂に賀川さんは三百万円のお金を作つてこの建物を買い取つてくださつたのである。

また、賀川さんは『銀色の泥濘』^{でいねい}という短歌集の出版を学園に託して、その利益をことゞとく桜美林学園に寄付された。

私どもは、賀川さんから受けた恩義をいつまでも忘れないだろう。

（昭和35年5月15日号『復活の丘』）

白話詩

老 桜

前年移植一老桜
去年出葉不開花
今年三月果如何
期待而迎此新春

これは昭和三十六年元日の試筆であつた。おとし一本の老いた桜を移植したが、昨年は葉は出たが、花はよく開かなかつた。今年の三月はどうだらうか。大いに期待してこの正月を迎えた、という意。言うまでもなく、これは北京の崇貞学園をここへ移したことの述懐したものである。

破 家

落壁破窓任風雨
三年嘗々注心血
誰說此校是破家
不知邦家又如此

これは昭和二十五年の試筆だ。壁は落ち窓は破れ、風雨のなすままに荒れでいる。この三年間
というものは心血を注いでここまできばつてやつて來た。誰がこの学校はあばら屋だといふのか。
日本の國そのものが破れかぶれになつてゐるのを知らんのか、といふ意。その頃は国鉄の駅でさ
えも壁は破れ、天井は抜けていたものだ。

桃栗三年柿八年 酸梅得等十三年
別説此林長的慢 学校總要五十年

桃栗三年柿八年、梅は十三年だ。この林の木々の成長は遅いといわんといておくれ。学校には
どうしても五十年の歳月をかけねばならんものだ。

幼木成叢老桜蔭 何時出芽如此繁
新陳代謝是世常 祈求此枝永遠存

これは昭和三十六年六月一日、古稀生日の述懐である。古木の桜の樹の陰に若木のサクラがク
サムラをなして繁茂している。いつの間にこんなに芽を出したのかしら。新陳代謝は世のならい

であるが、どうかこの学園がどこしえに永く存続するように、という意。

(昭和 36 年 6 月 15 日号『復活の丘』)

清水郁子の死

何しろ私の不在中に倒れたのであつたから、倒れた時の情況は全く不明である。多分六月十三日の午後三時少し過ぎだつたろう。キッチンで卒倒したものらしい。

ちょうど私は越後長岡教会の牧師館で、夕食を数名の新潟大学の学生と共にとつていた。するとお向かいの弁護士の女中さんが来られて、「清水先生の奥様が脳溢血で卒倒され、意識不明です。直ぐ帰宅されるように」との電話が、柏崎の宣教師ミス・ヘレホードからかかつて来たとのことであつた。金槌で頭をガンとやられたかの感なきを得なかつた。

新潟市におけるプログラムをことごとくお断わりして、越後長岡を発つた。夜汽車のこととて窓外の風景は少しも見えず、また一睡もできず、祈りに祈り続けるのみであつた。

翌朝六時すぎ上野駅に着いた。通りつけているいつもの道ではあるが、あの時ぐらい甲州街道

が長く思われたことはなかつた。

彼女は十日間死線をさまよつた。私はその間、

「神さま、しもべは向こう何年間でも、喜んで妻のオムツ、オシメ取りをすることを誓います。よつてどうかもう一度なおしてやつてくださいませ。しもべが八十まで生き得るならば、七十七でもよろしいから、しもべは命を半分彼女に与えます。どうか助けてやつてくださいませ」とちようどその日から彼女はオムツを用いて看護してもらつていたから、私はこのように神に願を立てて祈つた。

十日間酸素吸入を続け死闘したが、六月二十四日午前八時半、ついに最後の息を引き取つた。私は遺体に着せる洋服を取るために、つと立つて郁子のベッドルームの二階へ上つて行つた。私は滅多に彼女の寝室へ入つたことがなかつたので、物珍しく部屋を見回わすと、壁に丸い壁掛けがかかつていて、赤いバラの色紙が入つていた。机の向こうの柱に掛つている短冊には、私の字で書かれた狂歌が書かれていた。

これやこの 禿^{はげ}と白髪の二人連れ お前百まで わしは九十九まで
あつた。

それからまた彼女の座右の銘となつた女高師の大先輩、山崎光子女史がお書きになつたものが

凡事包容 凡事相信 凡事盼望 凡事忍耐（コリント前書十三章七節 光書）

実際に立派な筆蹟である。山崎女史は山崎直方博士の未亡人で桜蔭同窓会会長だった方で、お茶の水女子大の学長に郁子を推せんして大いに奔走された方である。

私は今春新調した服と、それとツイのブラウスと、それからその服を着る時にさげた（ハンド・バッグ）に小さなポケット・バイブルを入れて、座敷へ行くと、なんと不思議、十日間にわたつて死闘したために、目玉は飛び出て、鼻柱も口もひん曲つていた郁子の顔が、わずか数分の間に知識美と教養美の豊かな美しい顔に変わつてゐるではないか。

郁^しどのは醜女^{こじめ}に生まれ美女として天に昇れりくしきことかな

と即詠であつたが、腰折^{こし}を得た。

私はほれぼれとしばし眺めていたが、人前をも憚りもせで、まだ少しく温い唇に口づけした。

彼女のお気に入りだった鈴木夫人、阪口さんに服を着せて頂き、お化粧して頂いたら、更にいつそう美しく今にも歩き出しそうにさえ見えた。六月二十四日はお通夜だった。お座敷一杯、知己友人が集まつてくださつた。

（昭和 39 年 8 月 24 日号『復活の丘』）

清水郁子先生略歴

- 一八九二年（明治二十五年）九月一三日 || 島根県松江市生まれ。本名・小泉イク。
- 一九一一年四月（一九歳）|| 県立松江高等女学校を経て東京女子高等師範学校文科第二部入学。
- 一九一五年一月 || 富士見町教会・植村正久牧師より受洗。
- 一九一五年三月 || 東京女高師卒業。
- 一九一六年一月（十八年三月）|| 長崎県立高女教諭、
- 一九一八年四月（二十一年三月）|| 兵庫県明石女子師範教諭。
- 一九二二年四月 || 東京女高師研究科入学（教育学専攻）、同時に東京帝国大学文学部聴講（社会心理学研究）。
- 一九二三年十月（三十歳）|| 米国留学のため横浜出航。
- 一九二三年六月 || 救世軍士官学校（シカゴ）卒業、見習大尉。
- 一九二四年二月（二七年五月）|| オベリン大学神学部にて宗教教育専攻、B. D. 学位取得。
- 一九二七年六月（二八年六月）|| ミシガン大学大学院にて教育学専攻、M. A. 学位取得。
- 一九二八年六月（三〇年三月）|| 同大学院にて教育学研究継続、Ph. D. 学科課程終了。
- 四月 || 論文資料収集のため帰国（その後、再渡米を断念）。
- 一九三一年四月（三五年三月）|| 青山学院女子専門部教授兼教頭、同時に実践女子専門学校講師。

「彗星の如く日本教育評論界に現われた」オピニオンリーダーとして活躍。

一九三三年六月～九月||汎太平洋婦人會議（於ホノルル）に日本代表として出席／巡回講演。

一九三五年四～六月||外務省後援により、滿州國・中華民国を視察旅行、北京・燕京大学、天津・南開大学、南京・金陵大学などにて講演。その間、崇貞学園をも訪問。

一九三五年七月～四五年八月||崇貞学園園長。

一九三六年六月（四四歳）||清水安三と天津教会にて結婚式。

一九四一年四月～四五年八月||崇貞高等女学校長（日本人子弟対象）。

一九四六年五月||桜美林学園創立、学園長／中学・高校校長／短大教授など歴任。

一九六四年六月二十四日（七一歳）||脳溢血により召天。

著作目録

『男女共学論』（一九三一年：東京・新教育協会）『明日の女性』（一九三三年：東京・南光社）

『女性は動く』（一九三五年：南光社）。

参考文献：博松かほる著『小泉郁子の研究』（桜美林大学国際学研究所シリーズ：学友社）

郁子と私

先年、私が漢口に行つた時、一夕講演を頼まれたが、司会者は私を会衆に紹介して、

「小泉郁子女史のご主人、清水安三先生をご紹介申し上げます。小泉郁子女史は皆様もご存じのようすに、東京日日新聞の女性相談欄を担当しておられた方で、青山学院の教授であります。清水安三先生はその小泉女史のご主人であります。ただ今から先生にご講演をお願いします：」

さすがの私も、まったく面くらつてしまつた。いかに私が博士の肩書も官職官位もないからといつて、「小泉郁子の夫」というタイトルをもつて紹介されようとは、まことに思いがけぬことだつた。

私が彼女を知つたのは大正十三年の秋九月であつた。当時、私たちは米国オハイオ州オベリン大学で勉学していた。彼女は私よりも半年早く行つていたので、私よりもオベリンの生活に慣れていった。

ある日、宗教教育学の時間に、私はレポートを当てられた。レポートというのは、教授の与え

た題目に応じて、図書館でリサーチ・ワークをやつて、その研究の結果を教室で報告するのである。宗教教育学の教授はフイスク博士という人であった。その日の私のレポートは、渡米最初の英語による報告であったから、いささかあがつていたかと思う。私がしやべり出すと、学生の人、二人がくすくす笑い出す。誰が笑うのかと見ると日本人学生である。私が“メサイア”を“メシヤ、メシヤ”と発音したからだ。まず笑つたのがミス小泉であった。「メシヤ、飯屋、うどんや」などとささやくのを聞いた。ことわっておくが、「メシヤ」というのは「救い主」という意である。「キリスト」はギリシア語で、「メシヤ」とはヘブライ語である。

そこでレポートをちょっと中止して、日本語で、

「黙れ、なんだ、笑つたりして……メサイアというのは英語でのみそう発音するんだよ。メシヤが本来の発音だよ、失礼な」

とやつつけたものだ。フイスク教授は何事が起こったのかという顔をしておろおろしている。そして日本人学生は皆赤い顔をして静まつてしまつた。ミス小泉と会つたのはその時が最初であつた。まだ初対面のあいさつもせぬ前に、ガミガミとやつつけたわけだ。

二度目にミス小泉に会つたのは、その教室事件があつてから数日後に開催されたJ S C A (日本人学生会) の席上で、そこにはオベリン在住の邦人学生が全部集まつていた。合計二十五名もいたろうか。夜九時半に閉会したが、米国の習慣で女性の夜道の一人歩きは恥しいことになつ

ている。そこでミス小泉をその宿まで見送る役が私に当たったのだ。エルムの街路樹茂る小道を月影を踏みながら歩いた。

「いい月ですね」

と言つたら、

「すばらしいですね」

と答えたきりである。たつたそれだけ口をきいただけで、オーケー・ストリートに来てしまつた。

「私の家はあれですの、ありがとうございます」

「グッド・ナイト、ミスター・シミズ」

「グッド・ナイト、ミス・コイズミ」

そして別れて帰つた。

彼女と私が一緒にとつた課程は、フイスタ教授の宗教教育学とヴォズウォース教授の新約の講義との二種であつた。ヴォズウォース教授はオベリン第一の人物であつて、私はつとめて彼に私は淑し、彼の講義には残らず出席した。しかし何分にも英語で聞くのであるから、聞いてみるとぐ眠くなる。私は時折いびきをかくことさえあつた。そうした場合、ミス小泉の任務は、鉛筆で私の背中をぐつと強く突くことであつた。別に頼んだわけではなかつたが、彼女はそうしてくれたのである。私はその鉛筆の一撃を受けると、こつぜんとして冷汗をかい、よだれを拭い、眼

につばをつけ、仁丹をかみ、威儀を整えるのを常とした。

私はほとんどノートをとることができなかつたが、ミス小泉は英文でノートをとつていた。ヴォズウォース教授は試験を課さないで、隔週に一つの論文を書かせた。その最初の論文は、「イエスの父は誰であつたか」というリサーチ・ワークであった。私は三十五枚の論文を提出した。その論文が返却されて来た時に、私のには大きい文字で「A十」と書いてあつた。

その日、私の隣りの椅子にかけていたのはミス小泉と某君だつたが、ミス小泉はちらつとその大きな「A十」を見て、小首を四十五度ばかりかしげて、「不思議ね」と言つて口角をとがらせた。すると某君は私のペーパーをいきなり奪つて中をあけ、

「ユ一は自分でこれを書いたかね」と言つた。

私は憤然として紙片の上に字を書きまくつて、「どうだい」と言わんばかりに筆跡を見せてやつた。私は幼少からヴォーリズ氏に接近していたから、ちよつと毛唐まがいの運筆ができるのである。

「僕はね、ヴォズウォース氏の知つてゐるくらいのことは、皆知つてゐるよ。だからノートなどとらんでもできるんだよ」と言つてたんかをきつた。

第二回目の論文は「イエスは紀元何年に生まれたか」という問題であった。それについても私は三十枚ばかりの論文を綴った。そして「A十」を取つた。「A十」を取り得たのはそうたくさんはなかつた。こうして第何回目であつたか忘れたが、ミス小泉は、ある日図書館で、小さな声でこう言つた。

「どんなふうに書いたらA十が取れるの、秘訣を伝授してくれないこと」

そこで私は「A十」を取る秘訣を伝授してやつた。

「そこにはね、まずヴォズウォース教授の幾つかの著書をあさつて、その題目につき、先生がどう考えているかを研究するのです。そして先生の考えがわかつたら、その考え方と反対の論を唱えた多くの学者の説をずらつとら列し、そしてかたづぱしからそれを反論し、結論にはヴォズウォース教授の説をもつてくるのですよ。そうするとA十だ」

その後彼女が「A十」を果たして取つたかどうかは聞かなかつた。とにかく、彼女は何分にも女高師出身であるから、宗教に縁遠い学問ばかりしていたため、私のいたころは、中ぐらいの成績の学生であつた。しかしその後聞くところによると、二年目には優等生、卒業の年は平均Aを取つて、七百ドルのモンロー・スカラシップという奨学金をもらい受け、卒業バンケットでは代表演説をするという栄を得たそうである。

私は一九二六年五月、卒業式の翌朝オベリンを去つた。卒業式の夜ふけまでミス小泉と語つた。

そして夜遅く氷る雪道を、最後の見送りだといって、彼女の住む家まで共に歩いた。

「あんまりがんばりすぎて、からだをこわさぬようになさいね」

「いつ帰ることやら、私も帰りたくないなつたわ」

「何を言つてるので、ばかな」

「ぢや、もうしばらくがんばるわ」

「グッド・ナイト、ミス・コイズミ」

「グッド・ナイト、ミスター・シミズ」

その時すでにミス小泉は涙ぐんでいたようだつた。私がもう一度、

「身体を大切にね」

と言つてやつたら、わっと声をあげて泣いた。

ミス小泉は、別れて相見ざること六年の後、帰国したが、当とう時私が京都の同志社で講師稼ぎをしているのを聞いて、相国寺畔の陋屋ろうやに訪ねて来られた。

「おやおや、ミス小泉ではないか、ずいぶん長い間お目にかかりませんでしたね」

「きょうは驚かせてあげようと思つて出し抜けに来ちやつたの」

約三十分ばかり語つたとき、私の授業時間が來たので、

「ほんとうにすまないが、ちょっと講義してくるから待つていてくれない。三十分ばかりで出て

来るから、ね。きょうは一つ(一)駆走しましよう、久し振りだから」

私はそう言つて、あたふたと学校に出かけた。そして五十分の講義を二十分ばかりで切り上げ、自宅へ帰つてみると、もうすでにミス小泉はいない。変だな、と思つて、私はもう一度玄関に行くと、紙片に、「時間がありませんから駅にてて、”つばめ”で東上します。いづれまた改めて」としたためてあつた。

それから数日後、東京から、ごつつい手紙が来た。一枚の写真と共に、履歴書が二枚封入してあつた。このまま日本にとどまつて働いてみたいから、適当な仕事があつたら紹介してほしいという申し越しであつた。

ミス小泉はオベリンでB・Dの学位を得て後、ミシガン大学の大学院に行き、バーバー奨学金の最高、年八百ドルをもらつて教育学の研究に没頭した。

バーバー・スカラシップというのは、ミシガン大学の理事バー氏が欧州大戦後に世界を旅行して、何か一番必要な事業であるかを視察したが、その結果は東洋の婦女を教育啓発することが最も必要なることであると考え、一千万ドルの財産を投げ出し、東洋から女学生をミシガン大学に留学せしめ、その学資金を施与するという奨学金制度を設けた。ミス小泉はそのバーバー・スカラシップの奨学金を得て勉強したのであつた。

いよいよPH・Dのコースを終了したので、論文を提出せねばならぬことになつた。指導教授

が彼女に課した論文は、「留米女学生が日本文化に何を貢献したか」という題目だった。こういふ論文を書くには一度日本に帰らねばならぬというので、彼女は旅費の支給を受けて、いつたん帰国することにしたのである。

ところがその調査研究がさっぱりはかどらないうちに、大学から支給された研究費はなくなるし、松江の実家からは送金を断わられる。ついに一まず、何か職にありついて徐々に論文を起稿することに決めた。ところが、そのころ日本は浜口内閣時代で経済界はパニック、失業者は続出、就職難の最もはなはだしいときだった。

そこでミス小泉は、ちょっとでも知合いの人々にはことごとく履歴書を託し、私にまで二枚の履歴書を送り届けたわけである。

文部省の督学官をねらつたがつぶされ、母校の女高師にも入れてもらえず、やつと安井哲子女史の紹介で青山学院の専門部に地位を得、ようやく落ち着くことができたのである。

彼女の得た地位は、彼女を満足させるものではなかつたが、東京に住むということが彼女を大いに飛躍せしめる素地をつくつた。もしも何かの雑誌に書かれていたとおりであるならば、彼女は一年を出ないで青山学院女学生の人気を一身に集め、二年目には東京の婦人界に存在を認められ、続いて女子教育界に知られ、女教員界を牛耳ることを許され、雑誌、新聞、ラジオを通じて全国の女性に呼びかけ得るに至つた。やっぱり在米九年間の学問、研究が物を言つて、女流番付

には、まず幕の内に入れてもらえるところまでこぎつけたのであつた。

それに引きかえ私は、京都で左向きのろくろく気焰の上らない生活、私の性分として手紙など出す気持にもなろうはずがなかつた。

しかし、年賀状だけはやりとりしたものらしい。その証拠に来ねた年賀状によつて亡妻美穂死去の通知を、お通夜に来た友人たちに書いてもらつたのであるが、ミス小泉からは長い弔電と金十円也の香典が来ていた。さすが東都で今売り出しの女性評論家だけに、香典十円もはり込んだわいと思って、私はほくそ笑んだことをおぼえている。

彼女は十円の香典を贈つて来ただけでなく、亡妻美穂逝つてちょうど七日目、京都に来て、花ノ坊町の仮寓を訪れてくれた。冬休みに彼女の郷里松江に帰る途中、京都駅に下車して、タクシーを飛ばして来てくれたのである。しかし、あいにく私は眼医者に行つていて会うことはできなかつた。

明けて三月、私は京都の家を引き払つて北京に帰つた。

それから数年後の九月、私は遂にふらふらとミス小泉のところへプロポーズの手紙を書いてしまつた。この手紙を出すと、ミス小泉はハワイにおける汎太平洋婦人会議に出席した際、何とかしてもらつと支那について認識を深めたいと考えさせられたから、申し越しの問題はともかくとして、何分よろしくご指導を願いたい、と言つてよこした。何でも汎太平洋婦人会議の席上、日本

代表ガントレット恒子女史を、次年度会長にする、しないの問題で、排日感情が強い支那代表が硬化したそうである。その時、ミス小泉は支那代表と会見して、その心を碎くのにずいぶん骨を折つたそうである。そうした体験から、彼女はちょうど心を支那に向ければはじめ、あちこちで、「われわれは、もつともつと支那人に近づかねばならぬ」と講演して回っているところへ、ちょうど私の手紙が届いたのであるという。ほんとうに神の摂理は不可思議である。

数日たつて、彼女から第二信が届いた。それには外務省へ行つて、民間の邦人で何か支那の文化に寄与しているものがありましようか、あつたら教えていただきたい、諸外国の婦人たちに紹介するからと申し込んだ。ところが、「たつた一つある。まだ小さい事業であるが、清水という人が北京で崇貞学園を経営している。詳しい材料が必要なら取り寄せてあげましようか」ということだつた。「あなたのことを外務省のお役人がちゃんと知つていましたよ。心中ひそかに私も嬉しうございました」。そんなことが彼女の手紙に書いてあつた。

すると、ちょうど折よくも挙行されたのが彼女の働いている青山学院の創立六十年のページェントであった。それは青山学院創立当時の有様を演出したもので、米国の宣教師が明治初年の東京に来て、築地貧民街に小塾を開いて教育している光景であつた。

ミス小泉は、そのページェントを見終るや、青山学院の事務所を訪れて金百円也をポンと寄付した。学院では、創立六十年記念寄付を募集しはじめたばかりのところであつた。そしてその足

で彼女は渋谷の郵便局から、北京の私のもとへ電報を打つたのであつた。

「フツツカナルモノナレドモ カミユケトメイジタマフガコエニ キカラタスケ トホトキゴ
シメイヲ トモニハタシモオサン イクコ」

私はこの電報のあまりに早く、予想外に速くきたのに、かえつて面くらつてしまつた。

さて彼女が結婚することをもらすと、さあ大変である。なにしろ名もなき北京貧民街の一支那人教育者に嫁ぐのであるから、物好きにもほどがある、気が狂つたのではないかと評する者もあつた。かねてから彼女を何くれとなく後押ししてくれた桜蔭の丙先輩、斯波安子、^{しは}山崎光子両女史は、弁当持ちで膝詰め談判さえされたそうな。

「今の仕事で満足できぬのであれば、何としても力いっぱい働くお仕事を見つけて差し上げましよう」

「もう数年過ぎれば、あなたを迎える女性教育の最高学府もあるでしょうから、今ひと息の辛抱よ」

わけても山崎女史は、私財を投げ打つて女性教育研究所を設立し、その主任にしようとまで言われた。彼女も食指動き、行くかどまるか、大いに迷つたらしいが、しかし彼女は中央の檜舞台を思い切つて捨てた。事変前のそのころ、誰一人彼女の支那落ちを祝福する者はなかつた。

かくて彼女は、昭和十一年五月二十九日、天津に着き、六月一日、天津教会の一小室で結婚式

を挙げた。私は数え年四十三、彼女は四十二であった。

『朝陽門外』

彼女は何しろ米人の家庭で働いた経験の持ち主であつたから、結婚後、毎日のように洋食の料理に腕を振つた。私は一ヶ月間は彼女の作るご馳走に舌鼓を打つた。しかしちょうど一ヶ月を経た後に、私は夕食の折、エリを正して、

「僕は牧師なんですよ、牧師という者は人々の献げたお金で生活している者です。だから明日からは、一汁または一菜で生活しましよう。僕はご馳走を食わん、よろしいか」

と宣言した。以後彼女は死に至るまで実に粗食で満足してくれた。私の子供は、「パパの子に生まれたことは不幸だ」などとよくほざきもするが、郁子はその後美食しようなどとは言わなかつた。

(昭和40年6月20日号『復活の丘』)

桜美林学園を創立して間もないころであつた。彼女はマッカーサー司令官G H Qから呼び出しへを受けたので出頭した。すると教育部長カールス女史が引見された。女史はテーブルの上にうず高く積まれているタイプライター紙を指さして、

「これはアナタの著『男女共学論』の英訳です。あなたのこの本を英訳させて、司令部の幹部に回覧させました。その結果、この国でも男女共学は実施されしかるべきであるという結論に達しました。ついてはアナタに教育部の顧問になつてもらいたい」と言われ、高給のサラリーをオファーされた。

しかし彼女は一日だけ熟考の猶予を願い、辞去した。そして翌日再び司令部を訪れて就任を辞退した。創立したばかりの学園のために、あえて二兎を追わないことを決意したためであつた。

私の香典頂戴

ちょうだい

私は明年（昭和四十年）四月を期して、いよいよ四年制の大学を設立しようと企てております。

文部省の大学設置要項には、校地五、五一〇坪、校舎九二〇建坪、図書一四、三〇〇冊を用意することを要求しております。ところが学園はすでに校地を六、一八〇坪、校舎を九二〇建坪、図書を二五、八五〇冊用意いたしました。しかるについ最近のこと、前記の大学設置要項には指示していなけれども、金五千万円の基金を貯えておかなければ認可してくれぬと、知らされました。さすがの私もそれには困りはて、もう大学の設立は断念すべきかと一時は甚だ迷いましたが、幸いなことには大学設立の申請書を文部省に提出するのが、今秋九月であります故に、まだ半年のタイムがありますから、私は今より必死でカネ集めのキャンペインを行なうことに踏み切りました。

私はこの頃毎朝、「この戦いに勝たざれば、祖国の行末いかならん」という軍歌を唱いつつ、洗面し、下着を着、靴下をはき、服をまとうのを常としているのです。私はその「祖国」という歌に「母校」という語を置き代えて、「母校の行末いかならむ」と唱うのです。

それから私のベッドルームの壁には、「背水の陣」と書いた色紙の額がかかつてあります。また今年の卒業生のために染筆を求められた時、やはり「背水の陣」と書きました。今年の卒業生の方はアルバムを見てごらん、私の写真と郁子先生の写真の間に印刷されています。

四年制大学の申請は九月一日ですが、その申請書たるや実にボウ大な書類です。多分審査は翌十月から十一月頃に行なわれるでしょう。そして認可不認可の内示は十二月十七、八日頃でしようから、その日の新聞をどうか忘れないでご覧ください。

私はもしかして不認可の極印が押されたら、直ちにハタを巻いて郷里の江州高島郡に帰ります。そして再び校務を顧りみぬつもりです。

皆さん、私が死んでも香典、花料、花輪、なんにもいりません。その代わりに今、どうか金一封をください。「御靈前に」よりも、「御眠前に」の方がうれしいのです。思えばこの四年制大学の設立は、私にとって人生掉尾とうびの事業であつて、実に乗るかそるかの挙であります。何卒皆さま、ご同情下さい。今一文もくれないで死後香典をくれても絶対受付けませんからネ。受けねばかりか、あらウラメシヤと枕許に立つてくれるからおぼえていらっしゃい。思えば大学設立の

ことは、私の五十年来一日も忘れたことのないユメ、まぼろしです。

昨年六月一日（私の誕生日）、私は今日より四年制大学の設立にいよいよ取りかかりますと宣言しましたが、私の片腕、私のブレイン・トラスト、私の良き半分の郁子先生は、突如死んじました。

ツレからというもの、サア今月から募金だというと、自動車がこっぱみじんになるやら、運転手が逃げるやら、実に一難忍べば一難来るです。

これでもへこたれんのか、これでもまいらんかと言わんばかりの出来事が相次いで来るのです。しかし私は、せん方尽くれども望みを失わずの信条ただ一筋に、倒れるまでやるつもりです。

何卒諸君、私をヘルプしてください。これこのとおりお願い申し上げるのですから。

（昭和40年4月20日号『復活の丘』）

四年制大学設立趣意書

つくづく思い考えるに、私学は特長あるものは栄える。また日本にはすでに三百有余の大学が

あるそうである。それにもう一校を加えようとするのはどういうわけであるか。

そこで私どもは一種独自の特長ある大学を建てたいと考えている。わが国の多くの大学はマンモス大学である。もしも未だそうでなければ、マンモス大学への途上にある。少なくともいずれの日にか、マンモス大学たらんと志している。わが国の大學生が皆こうした傾向にあるのを見て、私どもはむしろ小規模のカレッジを設立しようと考へる。今日の日本にあつては、小規模であるということだけにでも、一つの特長となり得るようだ。

最近ウイツグという人の書いた『教会と関係あるカレッジ』という本を読んだところ、その序文にバークレイの加州大学マコーネル教授が、「アメリカの長い歴史において、教会の大学はただ伝道に大いなる奉仕をしたばかりでなく、民主的な社会を作ることにも貢献した」と書いていた。私どもは日本国民をして、もっと民主的にするために、一種特長ある教育を日本の男女に施そうと考えている。日本国民は戦後といえども依然として東洋的な性格を持つてゐる。多分に官僚臭のある人、圧し脅迫するような氣質、もしそうでなければ侠客みたいな粗野な人々がまだまだ多い。家庭においては亭主閥白、長幼の序ありで、妻は座を無視され、弟妹はいつも小さくなつてゐる。

こうした日本社会を改変するためにはどうしたらよいか。私は他にも手段があろうが、まず大學において上級生が下級生をうるさいほどに愛し、教師が生徒の人格を重んじ、目の中に入れん

ばかりに可愛がり、デモクラティックな教育を行なうならば、人は皆、二十前後で得た性格を大体において一生持ち続けるものだというから、大いに日本の社会はデモクラティックになると考える。

日本の大学のキャンパスには寒風りんれつ、肌を刺すような鬪志ばかり溢れていて、まことにギスギスであるが、春風たいとう和氣あいあいたるニコニコの空気がちつともただよつておらぬ。私どもは大学は一つのホームライク・コミュニティーとなしたいものだと考える。

終わりに桜美林学園は、明年五月をもつて創立二十周年を迎えるけれども、この学園の前身ともいうべき北京朝陽門外の崇貞学園のことを考えると、創立五十周年を迎えるわけである。

またこの学園は校庭に桜樹が繁茂しているからでもあるが、「桜美林」をもつて校名としている。この名称は実に“オベリン”をもじつたものにほかならない。これらの二つのことを考えても、この学園が国際的な学園であることがわかる。

この度、大学を設立するに当たり、まず中国語中文科と英語英文科とを併設したことは、創立者の私どもの経歴から考へても、またこの学園の歴史から考へても、まことに自然であると思う。

そもそもわが国は人口は多いのに国土は小さいのである。どうして日本国民は食つていくか。それには外国から資材を輸入して、それに知的加工を行なつて全世界に輸出して儲けるより他に道はないのである。このことを考えて政府は理工科系の大学に援助を与えて、人材育成を始めた

のであるが、肝心の語学の技術者の養成は忘れてしまつている。

貿易は売るにも買うにも語学が最も大切である。またわが国は武力ゼロの国である。しかば
何をもつて国家を護らうとするのであるか。私どもは世界各国民に対し、常に意志疎通を図ること
より他に方法はないのではないかと考える。しかばどうして意志疎通を図るか。これもまた
語学による他に道はないと考える。

しかし、ただ語学の達人を養成するだけでは駄目である。いくらくら喋れても、相手国民
に好愛される人間でなければ、かえつて先方の感情を害し、ただ嫌悪されるのみである。それで
はいくら語学に長じっていても何にもならぬ。そこで本学園は大いに愛人如己の精神を、生徒の魂
の奥底に吹き込みつつ語学を研究せしめようと企ててるのである。

以上をもつてまことに口はばつたい言説ではあるが、本学園の大学設立の趣意とさせて頂く。

(昭和 40 年 6 月 20 日号『復活の丘』)

桜美林大学誕生——生涯最良の日——

昭和四十一年十二月二十七日は大学認可の内示がある日である。その内示を承るために、中学校長の宗像氏に文部省へ行つてもらつた。多分午後三時半—五時半頃に、宗像氏から内示が電話で伝えられるであろうと私たちは予期していた。

ところが十二時すぎに電話がりんりん鳴り、電話に出た者が、「大野先生……宗像先生からお電話」と言つたので、大野一男氏がちよこちよこ走つて電話に出られた。暫くすると大野氏が再び駆けて来て、私に抱き着いて泣くではないか。

「どうした、どうした」
と私が言うと、

「先生、大学が認可されました」

と言つてよよとただ泣くのみであった。学長秘書室の女性事務員たちは皆貴い泣きもらしている。

学長秘書室の中村春美さんは、さつく校内電話を用いて、高校、中学校、短大の教員室に通知した。

それよりチャイムは引つきりなしに鳴り響き、ベルは乱打され、中学、高校の生徒、教職員はことごとくグラウンドに集合した。

爆竹がパンパン鳴り響く中に、畳二枚の大看板五枚に「桜美林大学」と書かれて明々館のルーフに掲げられた。そこで校歌がブラスバンドに合わせて合唱された。ちょうどこの日は丹沢山脈の彼方に、富士の高嶺が白妙の綿帽子を着て頭をのぞかせているではないか。合唱の後に高校長の橋本英雄氏は、私が即興的に詠んだ漢詩を音吐朗々朗吟された。

藏何我有一野心 刻苦精励五十年

挫折蹉跌不一再 今日得成其宿願

「何をかくさんわれに一野心有り、刻苦精励五十年、挫折蹉跌一再ならず、今ここに成し得たりその宿願」

次いで私が登壇、腰折を朗読させていただいた。
今日の日を共にことほぐ人やなし

草葉の蔭にほほえむや妹いも
「なぜ死んだ」 「あづまはや」の縁言はくりごと

昔も今もかわらざりき

北畠の見世の安さん大学を

遂に建てたり遂に建てたり

大学の設立こそは少わかき日に

新島裏に享けし夢かも

と、声をはりあげて詠んだ。

それから私が壇を降りると、各組のクラス委員（級長、副級長）が私たちを胴上げしてくれた。すなわち男の生徒が私を胴上げして、故郁子の人形を女生徒たちが胴上げした。女生徒たちが胴上げした故郁子の等身大人形は、彼女が生前に用いた一張羅の外套、洋服を着ていた。そして私も郁子の人形も共に千羽鶴のレイを首に飾つた。その千羽鶴こそは私が腎孟炎を病んで国立相模原病院に入院した折り、高一のI組の女生徒たちが手折つたものである。

それから大学設立に文字通り寝食を忘れた大野一男氏と、図書館長の今井慶蔵氏も胴上げされた。

それから桜美林大学万歳、万歳をとなえ、一同は復活の丘の上に上り、例の丸木の十字架の下で、川村牧師のリードで感謝祈祷会を開いた。

かくて桜美林大学はみごと誕生したのであつた。（正式認可は一月三十日）

十二月二十七日は私にとって、生涯最好の日だつた。短からざりし七十五年の生涯において、この日ほどうれしい日はなかつた。

二十七日の夜、私は今夜我輩は狂うのではないかと思われてならなかつた。といふといふやり遂げた。五十年間執拗に持ち続けた夢だつた。とうとう成し遂げ得た。

しつこく寝ても覚めても夢み続けると、夢というものは、必ずリアライズされるものである。

昔、新島先生は、明治二十二年大学設立の趣意書を懐にして東上、東奔西走の余り、遂に病を得て大磯湾頭の逆旅ムカデ屋で翌年一月忽焉として召天遊ばされた。

私は新島先生の靴のひもを解くにも足らぬ器ではあるが、今日自らの鼻の穴からイキが出入りしている間に、桜美林を大学とはなし得た。なんという幸運であろう。

私はひたむきに神に祈り、ただもう神をパトロンとして、神の銀行と取引きして大学を設立したのである。神こそはこの桜美林大学のいしづえにましまし、神こそば桜美林大学の大黒柱である。

(昭和41年1月20日号『復活の丘』)

甲子園初出場に思う

昭和四十二年三月、桜美林高校は甲子園に初出場した。毎日新聞社主催、選抜高校野球大会の関東代表に選ばれたからである。

編集者

学園は近来全くのことツイでいる。アンマリついているので、うす気味わるいくらいである。

従来、今年こそは甲子園へ行くぞ、と想うたことは幾度かあつた。だがまだ校旗が調製されていなかつたり、プラスバンドが組織されてなかつたり、会計に一文だに余裕がなかつたりで、万一東京予選で優勝しよつたらどないしようと心中ひそかに憂えたものだ。

ところがようやくこれらの物が十分にことごとく用意された時も時、優勝したのであるから、実に愉快である。

さてひとたび出場と決まると、日刊新聞、スポーツ新聞、週刊雑誌が大きく取材して、デカデカと書いてくれたので、たちまちにして桜美林の名は全日本に知れわたつてしまつた。もう「サクラビリン学園」と読む者はなくなつた。「桜美林って清酒の名ですか」などと聞く者もなくな

つたろう。

あるスポーツ紙とある週刊誌に、バッケネットすらないと書いてあつたが、近來高校野球が次第にプロ化しつつある折柄、部費に大金をかけておらぬことが世に知られたことが、一つのお手本ともなつてよかつた。

実は木骨のバッケネットではあつたが、あることはあつたのである。しかし去年の大風で倒壊したのである。方々から五百円札、千円札封入の手紙が来るのには恐縮千万だつた。

「野球の名門」はやがて、必ず「野球も名門」となるであろう。「桜美林は野球は強い」と言わるとシヤクであるから、「桜美林は野球も強い」と言われる時が来るに相違ない。

私の中学時代、膳中は全国野球大会で優勝した。

甲子園の前が鳴尾、その前が豊中、そのもう一つ前が京都の神楽岡の三高グラウンド、そこが。全国野球大会の球場だつた。その神楽岡の球場で、愛知一中をまかして優勝したのであつた。

ところがその野球の名門はやがて、学問の方も、その進学率において関西の名門とはなつたのである。我輩は何につけても、桜美林が名門となることを期待して止まぬのである。

従来、桜美林の野球チームといえ、フェアプレーで負けて称賛されるチームとして有名であつた。この度は甲子園でどうかそのお家芸のフェアプレーを、全国のテレビ観衆の前で、演出してもらいたいものだ。

また桜美林の応援団は極めて女性的で、おとなしい一方であると称せられてきた。どうか甲子園でもその垢ぬけのしたジェントルマン風の応援ぶりを見せてもらいたいものだ。

全日本の観衆は桜美林健児の行動を眼を皿にして見ているのである。なにぞ自重自愛して、桜美林スピリットでもつてあくまで正々堂々と戦つてもらいたいものだ。

万一優勝するようがあつても決して有頂天になつてはならぬ。ハメをはずしてはならぬ。また不幸にも破れたからとて、べソなぞかくものではない。夕力が知れた野球ではないか。負けても泣いて涙を流すには及ばぬ。ただし勝った時には、流涙、満場の観衆の前でもよいから、涙を流してもらおう。

桜美林側のスタンンドは断じて、相手のエラーに拍手、歓声をあげてはならぬ。こちらのフェアプレーにのみ万雷の拍手を送るがよい。

ともかくにも、この度こそは平素の桜美林スピリットが、選手にも、応援団にも、はたまた観衆にも遺憾なく表現されることを望んで止まない。

実を言うと我輩は、甲子園へは黒枠の額の中に入つて行くのであろうと思つていた。しかるにこの度生身を携えて甲子園に行くことが出来、もうこれでいつ死んでもよいとまで思つてゐるのであるが、人間という動物はまことに欲の深いもので、何とかして七月の朝日新聞社主催の予選でも東京でみごと優勝して、八月にも甲子園へ再度行こうと存ずる。選手諸君は負けても勝つて

も、更に奮闘して、今夏再出場されるように祈つて止まない。

（昭和42年3月5日号『復活の丘』）

野球の思い出話

楠時代

学園の創立間もなく数学の教師に楠正義氏が京都から来任された。氏は京都一中および広島高師時代に投手だったとのこと。この楠氏こそは学園の野球の産みの親であった。

終戦後最初の三多摩中学校野球大会は、豊田と八王子の中間に横たわる川原で開かれたが、その時桜美林が優勝した。木曾の石川幸光君がヒーローであった。その試合を応援するため、楠氏に頼まれて私が作詩したのが、今もなお愛唱されている応援歌だ。

応 援 歌

一、相模連山こだまする

桜美林チームの応援歌

今日の試合の奮戦に

見よ富獄も驚けり

一、むかし小山田高家は

不利の戦と知りながら

大義のために馳せ行けり

桜美林健児に似たらずや

二、弓矢にかけて八幡宮

今日の試合の必勝を

箭柄の森に隣せる

桜美林チームに賜えかし

学園の所在地は明治以前にあつては小山田村と称したが、この村こそは平清盛の大番小山田有重が開発したもので、小山田村の大泉寺こそは彼の館やかただった。有重の末裔小山田太郎高家は、新田義貞が芦屋の野で高師直を迎えて、合戦していると聞き伝えて、十六騎の手兵を率いて馳せ参じた。あたかも義貞が芦屋の石屋川の畔なる求女塚あせぐじょづかで敵兵に囲まれ、馬は倒れ矢もつきて、まさに討死せんとする寸前に到着した。高家はさっそく自分の馬を提供して、「急ぎ落ちのぼせたまえ」と言つた。今でも求女塚の頂には、彼らの墓石なる小さな五重塔がずらりと並んでいる。

昔のスポーツはイクサ。今のイクサはスポーツである。私はよく、うちの野球チームが甲子園へ出場するその時は、鎧カブトに身を固め、馬に跨またがつて、求女塚で勢揃いさせ、バトンガールとプラスバッドを先頭に、賑やかなパレードを行なつて球場に乗り込むツモリだ、とホラを吹き聞かせたものだ。

宗像時代

楠君が京都へ帰ると、その後へ来られたのが宗像先生である。宗像先生は相撲、柔道、水泳、テニス何でも来いの万能選手であるが、野球もまた台北中学時代は四番バッターの捕手だつた。宗像時代における戦績をたどるならば、町田高校には常勝、相原高校には勝つたり負けたりといふところだつた。町田高校の狭いグラウンドで、校舎に届く大ヒットを放つて快勝した時のごときは、鐘を乱打して学校の内外に勝報を報じたものだ。

八王子工高にはどうしても勝てなかつた。ある時のごときは堤上に選手たちを集め、どなり散らして叱つてくれたものだ。

菅野、丸山時代

桐生高校の軟球部ではあつたが、名投手として知られた菅野君が、短大へ入学したので、さつそくコーチに採用した。ところがさすがに名門桐生出身であるから、その激烈な練習には、うちの選手はついて行けなかつた。そうしてボイコットしてしまつた。そこで竜野高校出身の丸山君

を採用した。同君は三年連続甲子園の土を踏んだ男であったこととて、その練習の強制振りは、到底菅野君どころではなかつた。キヤツチヤーも用いず、バツクネットに向かつて、力一杯投げさせぬくのであつた。

案の定、選手たちは猛然として丸山君の練習方法に抵抗を示した。

「君らも甲子園に出場したいんだろう。それならば丸山君が高校時代にやらされた練習方法に耐えねばならないんだよ」

と言って、ようやくのこと慰撫したにもかかわらず、同君は神奈川大学にスカウトされて、うちの短大を去つてしまつた。

そこで今度は母校膳中のマネージャーをしたという井串君をコーチに用いた。さすが膳中のやり方だけあって、練習量を半減してしまつて、そのかわりに短時間ヘトヘトになるまで練習するというやり方を用いた。我輩もその練習方法が合理的であるとは思ったが、悲しいかな、力量は下る一方で、遂には玉川学園にすら勝てなくなつてしまつた。そこへ来任されたのがわが佐藤保先生である。

佐藤保時代

世人がよく語る言葉に「野球の虫」というのがあるが、もし本当に存在するならば、わが佐藤保先生こそは実にそれなのである。来任された頃、木村という朝鮮人の生徒がいた。佐藤先生は手拭で両眼の上に鉢巻させて、二墨を守らせて、フライだのゴロを打つておやりになつた。そうすることによつて、音でもつてボールがどの辺に落ちるか、またどの辺をころげるかわかるようになるというのであつた。それにしても実に危ない練習方法ではあつた。

佐藤先生の猛練習にも、うちの生徒はようついて行けなかつた。その証拠にある時のこと、二、三年生の部員の代表が私の部屋を訪れて、

「佐藤先生の下では、野球をやりたくありません」

と申し出た。そこで私は二、三年の部員を、二棟目の寮のチャペルに集めて、

「諸君の中に、もしも佐藤先生の監督の下では野球をするのが嫌になつた者があるなら、この部屋を出て、私の事務室へ行つて待つていて下さい」

と言つたところが、一人去り二人去り、ことごとく去つて、ただ一人投手の金井君が残留するのみだつた。そこで私は金井君を促して、一年生の入学したばかりの部員を集めて、

「君らは佐藤先生の監督の下で、野球をやるか」

と問うたところ、さすが佐藤先生が各中学校を親しく訪れて、勧誘して来た生徒であつたから、口を揃えて「やります」と言うではないか。そこで私は金井投手と一年生部員をもつて、野球部を編成して、二、三年を除名することにした。

さあ大変である。詫びるやら、仲裁を他の先生方にお頼みするやら、てんやわんやの末、私は二、三年生たちにボイコットを取り消させ、また我輩も彼らの除名処分を解除して、それでようやくけりが着いた。佐藤先生の時代になつても、容易に八王子工高には勝てなかつたものだ。今から思うと隔世の思いがする。

再々逸機

桜美林高校が今年こそはと優勝をねらおうとしたことは、一再ならずであつた。高校の黄金時代は何といつても氏井、勅使河原、関田、竹内の諸君が、打ち連れてはいつて來た年であつた。今年こそはやるぞというので、みな期待したのであつたが、神宮球場に出場することすら出来なかつた。なぜ出来なかつたかというに、この地域の予選が早大の球場で行なわれた際に、惜敗したからであつた。相手校は五商であつたが、メンバーを提出して、いよいよプレイボールという手段取りとなつたところ、サウスポウの内田君と四番打者の竹内君とは、軟球試合に出場している

から高校野球連盟の規約によつて出場が許されぬという抗議が、相手校の監督さんから提案された。佐藤監督は四番バッターに補欠選手を出しておやりになつたが、やっぱり四番がブレーキとなつてまんまと敗けてしまつた。

そこで私は竹内、内田両君を野球部から除名処分にし、学校からは停学処分に付してしまつた。するとさあ大変である。竹内君の出身校の校長さん、八王子警察署長も桜美林学園PTA会長の多摩少年院長徳武義先生を同伴、竹内君のためにわざわざ命乞いに来校された。そこでわが輩といえども、今はこれまでとカンネンして、両選手の処分を取り消すことに手を打つた。

その次の逸機は長谷川君の投手時代であつた。長谷川君は東京都中学野球大会で優勝した東都ナンバーワンのピッチャーだつた。神宮における準々決勝戦は午前九時からであつた。うちの学園は都心から四十キロも離れていることとて、前日から神宮の青年会館に泊めて頂くことにした。ところが当日、青年会の小母さんがよく眠らせてやろうと考えて、八時半までも眠らせて起こして下さらなかつたのであつた。そこであわてふためいて出場し、ウォーミングーアップもせんで、寝ぼけつらして投げたところが、ボール、ボールで四球の連発、遂に初回に二点も入れられてつぶれてしまつた。

三度目の逸機は浜口先生の部長時代だつた。東長崎の立大のグラウンドで、午前十一時から試合が行なわれた。十三回の延長戦だつたのに、昼飯を食つていなかつたので腹がペコペコに減つ

たために負けてしまった。その時、浜口先生が、

「腹が減つて、もうどうにでもなれという気になつたのですわ」

と言われたので、

「ベンチで、アッパンをぱくつかせたらよかつたじやありませんか」

と言うと、

「ベンチでは許されません」

と答えられた。そこで、

「そんならトイレに行くことは許されたでしょう。打順を待つ間にトイレに行つて食つたらよかつた」

と言つて憤然として食つてかかり口論しているうちに、

「そんな野球部長は辞めてしまえ」

とタンカを切つたところ、

「はい、辞めます」

と言つて辞めておしまいになつた。その後私が何とあやまつても再び帰任しようとはして下さらなかつた。

町田時代

保先生が来る日も来る日も指導されたにもかかわらず、どうしても今一息という壁が破れなかつた。そこでもう根気が尽きたものか、教え子の東京経済大学生、町田君を監督に採用して、自らは顧問という地位に退かれることになった。さて町田君が監督に就任するに先立つて言うことには、

「ボクがやる以上は、打たせましようかとか、もう一球待たした方がよいでしょうかななどと保先生にきいたり、グラウンド顧問の秋山さんに伺いを立てるようなことはいたしませんよ。よろしいですか」

と駄目押しがあつた。ところが実に不覚にも、まさかその条件が、清水安三の言葉をも絶対に聞かぬがよろしいかという意味をも含んでいようとは、夢にも知らなかつたのである。

さて神宮予選の準々決勝戦で、日大三高とまみえることになつたが、一点の勝ち越しで日没に至つたものだ。もうボールは透かさねば見えぬほどに夕闇は迫つていた。その時ネット裏に観戦していた野球部長清水安三は、折りしもフレー、フレーをどなつていた応援団長を呼び出して、「ピッチャーを即刻交替するよう町田君に伝えよ」と命令した。ところがいつこうに交替せしめないので、今度はちょうどボールを拾いにバックネ

ツトに近づいたベンチの選手に、

「すぐピッチャーチャーを交替させよ」

と監督に伝えるよう申しつけた。しかし代えようとはしない。

そして四球を投げて二人もランナーを出墨せしめた投手は、マウンドからベンチの方ばかり眺めて交替を嘆願するようなゼスチャーをしきりにしている。多分もう一人アウトにすれば試合終了であつたから、エース投手は高三の生徒であることとて、完投の栄誉を担わせたかつたのである。

ところが日大三高のバッターたる者、何を遠慮すべき、カーンと大きいフライをレフトに打つた。しかもうちのレフトと来たら、暗くて見えなかつたのだろう、ただもうジットたたずんでいるではないか。かくて二塁ランナーも一塁ランナーもホームインして試合は終了、逆転負けとなつてしまつた。

さつきからネット裏で幾度か、「もうボールが見えませんと申し出よ」と叫んでいた顧問秋山氏は、カンカンに怒るのみだつた。我輩は我輩で、「わしが命じたように投手を交替せば、ウオーミングアップをする権利があるから、日はんぶりと暮れたことであつたろうに、惜しいことをしたものだ」と言つて嘆いた。年若い者を監督に用いたのが悪かつたのだ。責めは当然野球部長にあると言つて、みんなに深く罪を謝したものだ。

しかし翌朝の新聞はいっせいに桜美林チームを筆を極めてはめたたえてくれた。そしてなんと皮肉なことにも、和歌山市では審判が日没コールドゲームを宣したので、負けていたチームの応援団が承服せず、なぐり込みをしたという記事が、同じ新聞面にデカデカと報じられているではないか。

まあ過ぎこし方を顧りみれば、いろいろのことがあつた。思い出の話はいくらでもある。

部長の任務

私がなぜ野球部長をやつたかというに、それはもっぱら予算を獲得してやるためにやつた。創立当時は生徒会の会費をことごとく野球部費に取つてやつたものだ。そのために他の部には対外試合を許さなかつた。

大江、中島、武田等の優等生たちが、テニス部を設立して大野一男氏を部長に仰ぎ、宗像夫人のコーチを受けて、町田高校と試合することになつた。その時私が、

「それは相ならぬ、対校マッチすると、自然とその部が盛んになる。そして予算を多く要求するに決まっているから許さぬ」

などと頑張つた。そのため大野君が憤然として部長を辞してしまつたことがある。また生徒の

代表者が我輩のオフィスを訪れて、

「なぜ野球部にのみ、多くの予算を割愛せねばならぬのですか」

と言つてよく抗議に来た。そうだ、殆んど毎年やつて來たものだ。

それから部長としてのもう一つの任務があつた。それはどんな練習試合でも校務をほっぽらかしても観戦に行くことだ。オートバイやスクーターの後に乗せてもらつて、飯能や武藏関町、武藏小杉までも出かけたものだ。静岡、浦和、甲府、京都までも見に行つたが、今これを回想して、私は決していらざることに時間を用いたなどとは決して思つていない。なんとなれば、野球は技術の上手なプロ野球を見るよりも、自分のチームがやるのを見るのが最も面白く、また野球試合を見た夜は、よくぐっすり眠れて健康によかつたからである。まさにこれを称して役得とはいうのである。

（昭和42年3月5日号『復活の丘』）

昭和四十三年二月九日、さしもの難産の経済学部もようやくにして認可されることとはなつた。人間というものはまことにおかしいもので、物を落としてそれを路傍で見つけると、かえつてとても喜ぶものである。ちょうどそのようにこの度の経済学部のバスは、まことに例えようのないほど私たちを喜ばせた。

その歓喜を表わすために、私たちはこの二月九日の夕には花火をあげた。したれ枝垂柳の花火が暗黒の寒い空高くパーン、パンと打ち上げられた。

そればかりか提灯行列が行なわれた。幾百もの桜花を画いた提灯が、エンエンとして列をなしで丘を登り行く光景は、実に明治情緒を久方ぶりに發揮してまことに余すところがなかつた。

丘の上の頂きの納骨堂の入口にたたずんで提灯行列を迎えた郁子先生の等身大のお人形は、女学生たちによつてまたもや胴上げしてもらつた。そして“桜美林学園園長清水郁子先生万歳”の喚声が高く高く叫ばれた。

それからグラウンドではキャンプ・ファイアーザ左義長（火祭り）が行なわれ、火の回りでフさぎちょう

オーケ・ダンスが踊られ、経済学部長高谷道男先生の胴上げが、わっしょい、わっしょいの掛け声勇ましく行なわれた。そして生徒たちには今川焼の鯛やキが一、二尾ずつ配給された。めで鯛からである。それはちょうどこの正月にタイヤキを開業された伊勢屋からのものであつた。

それから教職員を文哉館に招宴して、赤飯のおにぎりに煮染めでコーラとジュースで乾杯していただいた。我輩は私費を投じて一メートルの鯛を数尾買つて来て、塩焼にして箸でつついていただいた。いかに喜んだかもつて知るべしである。

翌夕、椿山荘に新任の経済学部の教授、助教授、専任講師をお招きして旧任の英文科、中文科、家政科の教授たちとの初顔合わせの祝宴を張つた。席上、私が提灯行列、花火打ち上げの祝賀会の実況を報告したところが、「そんなに喜んでくれたか」と言つて、新任の経済学部の先生たち皆、大いに気をよくしてくだされた。

さあ、これより学園は破竹の勢いで大きくなるものぞなもしと、私は会う人々に語り、学園の絵葉書三百枚に自筆で祝賀行列花火打ち上げの実況を書き綴つて、江湖の知己友人に発送することを怠らなかつた。

(昭和43年4月10日号『復活の丘』)

オベリン大学名誉神学博士

私は来る（昭和四十三年）六月十日、母校米国オハイオ州のオベリン大学の卒業式において、名誉神学博士号を受ける。

私の渡米は大正十三年、その時私は同志社大学神学部の推薦状はもちろんのこと、内申書などいつきいもらわずに行つた。

忘れもせぬが、教頭のヴォズウォース教授が、

「成績証明書がなければ果たして同志社大学を卒業した者であるかどうかが不明ではないか」と言つて、入学願書を受けつけてはくれなかつた。

私は生まれつきウイットのある男であるから、その時廊下を通り過ぎた日本人青年を呼びとめた。そして『日本組合教会年鑑』を取り出し、「教職人名欄」に記載されている私の行を指さして、「この行をヴォズウォース先生に英語で訳してあげてくれたまえ」と頼んだ。そうすることによつて、私が大正四年三月に同志社大学部を卒業していることがちゃんとわかつたので、ヴォズウォース教授はオーケーと叫んできつそく入学を許可してくれた。

私は一九二四年（大正十三年）九月に入学して、翌二五年一月には最初のセメスターを修了したが、その時の成績は「B十」であつて、七十五ドルのメリット・スカラシップを頂戴した。

米国の大学ではお金で褒美が支払われるので、「A十」は幾ら、「A」は幾ら、「A-I」は幾ら、そして「B十」は幾らというような差別段階を付して支払われるのである。しかもこのメリット・スカラシップとは一般的のスカラーシップ以外で、その上に加算して付与されるものである。渡米して最初の学期からしてメリット・スカラシップをもらえた日本人学生は、極めて稀であった。そして私は後学期からは「A-I」で百ドル頂戴したことをおぼえている。

これまでにオベリン大学から博士の学位をもらったものは、明治時代の日本最高の大牧師、宮川経輝先生、それから小崎道雄、島中博（神戸女学院院長）の三氏だけである。

名誉学位授与の理由

一、彼（清水安三）は、オベリン大学並びに神学部の精神を体得し、その理想とするところを使命とし、これが助長に全生涯を捧げた。一九二〇年代におけるオベリン神学部卒業生中の稀に見る秀れた模範である。

二、またその目的とするところに献身し、持てる才を最大限に活用した人間の注目すべき手本である。彼の才能から見て、その業績を考える時、彼こそは、その生涯を精一杯に活用した人物と結論せざるを得ない。彼は献身的であり、努力家であり、豪胆であり、不屈の精神の持ち主で

ある。

三、終戦により中国における事業が鳥有に帰したが、彼は再度立ち上り、無に等しい資金のもとにジョン・フレデリック・オベリンの名を取つた学園を設立、日本における重要な教育事業に貢献している。この学園こそは、挫けることを知らぬ一オベリン卒業生の労苦を讃える金字塔といわねばならない。

〔この文面はオベリン大学史学科教授E・Cカールソン博士が作成されたもの。〕

（昭和43年4月10日号『復活の丘』）

昭和四十三年六月八日、私はシアトル経由でオベリンに到着した。

翌々日の卒業式当日、式は露天で行なわれた。うつそと茂る大樹の下の芝生の上に、椅子を並べて式をあげるのである。

臨時に設けられた講壇は、桜美林の運動場に設ける演壇と同型であるが、生花が美しく飾られてあつた。

午前九時きっかりに、ラッパがブラスバンドによつて吹きならされると、それから総長を先頭に行列が行なわれた。すべての教授助教授が皆赤や黒のガウンの上に、色とりどりのフード（頭巾）を首から背にかけて、あたかも日本の僧侶が美しい色彩の衣や袈裟を着用に及んで行列するのと全く同じである。そしてその行列は卒業生が左右に並んでいる中央を通りぬける。卒業生は

うちの卒業式と同じ角帽とガウンとを着て、その教授たちの行列を送迎する。その時に女学生は角帽を脱がずに会釈をし、男学生は脱帽して見送る。そしてキャンパスを一巡した行列は壇の上に皆腰かける。

式は短いオーケストラの後に牧師祈祷が行なわれて始まつた。そしてウェスレー大学の学長（女性）が講演した。それが済むと、まず私に学位が授けられ、続いて五名に授けられた。その推薦の理由を一人一人陳べた後に、総長が証書とフードを授けるのであつた。

本年私と共にもらつた人は、米国的第一流の政治家、教育家、実業家、学者であつた。それにもかかわらず、私に第一位で授与されたことは、いかに目下米国に日本ブームが吹き流れているとはいえ、それはまことに分に過ぎることだつた。ことに私を実にほめちぎつて推奨されたのは、穴あらば入りたく思うばかりだつた。

学位の授与が終わると五百名の卒業生が、一列に壇の右の階段から登り、中央の学長から卒業証書を受け取つて、左の階段から降りるのであつた。

私のごときが今日の名誉を得たのは、若き日より神を信仰して來たからだと思う。私は幼少にして父を失つたために、大学に入つても働いてばかりいて、勉強もろくろくできなかつた。ほんとうに悲しい悲しい境遇の男だつたのに、今日このような榮誉を勝ち得たのはまことに不思議である。

（昭和43年7月10日号『復活の丘』）

敬弔小崎道雄先生

昭和四八年六月一八日、第二代理事長である小崎道雄氏（靈南坂教会牧師）が召天された。

編集者

昭和四八年六月十七日、静子夫人からご危篤の電話があつたので、茅ヶ崎へ急行して、長年にわたるご協力を感謝して、ひそかに今生の別離を惜しみ得た。ご召天は翌朝四時二十分であつた。

小崎先生は昭和二十一年四月、すなわち学園創立この方、ずっと評議員と理事だつた。

何しろリュックを背負つて尾羽うちからせて帰国した私めが、学園を打ち建てようと企てるのであつたから、「理事になつては下さるまいか」と、親しく訪ねてお願ひすると、「学園の設立、それは神を試みることになりはせぬか」とか、「山師的行為ではないかね」などと、あからさまに言つてくれる人はまだよい方で、首を左右にして婉曲に断わる人ばかりであつた。

しかるに小崎先生は、ためらうけぶらいもなく、「よろしい。協力してあげよう」と欣然快諾

してください。実は私は、北京で松山常次郎氏に、「東亜伝道に参加し、一役買つて出るよう」勧められた時、小崎先生もご一緒におすすめ下さったのであつたが、私は少々考えるところもあって、断わつて参加しなかつたことも過去にあつたので、その報復に小崎先生は理事ごときを快諾しては下さらぬであろう、と案じていたのであつた。しかるに唯々諾々承諾してくださつた。まことに偉いお方であつた。

その当時、小崎先生は日本基督教団議長、日本基督教協議会議長で、日本キリスト教界の最高の地位にあられたのである。私はそうしたポストにあられることがよりも、何よりも理事にぜひとも小崎先生になつてもらいたかったわけは、小崎先生が米国オベリン大学の卒業生で、しかも日本における校友の代表者であつたからであつた。

小崎先生はただに、創立以来ずっと理事と評議員をしてくださられたのみではなく、理事や評議員に就任してくれた人々でも、一度として出席してくだされなかつた人々もあるのに、小崎先生は一回として欠席されたことなく、皆出席してくださつたのであつた。そして死に至るまでずっと続けて奉仕してくださられたのであつた。

文部省は院長だとか、園長だとかいうものは、全然認めず、何もかも理事長に通知もし、相手にするのである。それ故に学校の全責任は理事長の双肩にかかっているのである。また私学振興会も、理事長に力ネを貸与してくれるるのである。

そうした重大な責任を伴う理事長として、しかも理事長の印鑑をずっと私どもにあずけ持たせたまま万事を委せ、百パーセント信任して学園を経営させてくださつたのである。

私どもは小崎先生を天上におくるに当たつて、ご生前蒙つた恩義を、学園の歴史に書き記しておくであろう。

小崎道雄先生は稀に見る常識に富んだ、実に円満な人物であつた。ヤコブ書一の四に「なんら欠点のない完全な、でき上がつた人となるように」とあるが、小崎先生は本当に「でき上がつた人」であつた。どうしてあのような人におなりになつたのだろう。それは第一にやつぱり、生まれつきの為人ひととなりであつたろう。

お父さまは日本一大牧師、お母さまは日本婦人矯風会の会頭、すなわち毛なみがよかつたのである。第二に青少年時代に、十年も米国で学生生活をしておられる。しかもオベリン・カレッジや、エール・ユニバーシティのような、米国切つての良家の子女の集まつている大学で勉学しておられる。

もし人あつて、我輩に、「君は一体どのような人物を、桜美林から出したいかね?」と問うたならば、「そうだネ、小崎道雄サンのような日本人を一人でも多く出したいたいネ!」と答えるであろう。

本当に常識が豊かにあつて、円満でリフAINされたジェントルマンであり、インターナショ

ナル・キャラクターで、タッチがすごぶるソフトなピース・メーカー、角のない、ふくぶくしい感じの人であった。

しかし我輩がかく答えたならば、人は皆、

「でも、君はそんなら、自らをどう思うかネ、小崎サンと似ても似つかぬ野人ではないかネ！」
と言つて、カラカラと咲笑するであろうが……。しかし、

「我輩はもと百姓の子で田舎者である。一代では到底リファインド・ジエットルマンにはなれないよ」

と答えるであろう。そしてさればこそ我輩は、小崎先生みたいな人を一人でも多く養成しようと
心ひそかに思うのだ。

（昭和48年7月15日号『復活の丘』）

われほまれを郷党に得たり

昭和五十年一月十四日、生村近江国高島郡新旭町は、この度新しく建てた町会館の公会堂で、
町制二十周年の記念式を挙行した。

私は会館の玄関で、真紅の大きな紙花を、胸間にかざしてもらい、壇場に座らせられた。式上私は町長桑原隆次氏から褒状と、それを入れて壁間に掲げるための扁額、「名誉町民」のバッジ等を受領した。

さんぬる正月	十四日	われふるさとに	迎へられ
名譽町民の	褒状を	町のおさより	賜はりぬ
金色輝く	三かさねの	大きな酒盃	受けにけり
式後褒状を	携へて	丈余の雪を	踏み分けつ
直に村の	三昧へ	わしり到つて	亡き母の
墓を展じて	おもむろに	胸の花をば	抜き取りて
墓前に捧げ	褒状を	声高らかに	読みあげて
地下に眠れる	母よ聞け	土蔵も門も	離れ屋も
幼き時に	米倉も		
庭木も石も	皆売られ		
家が半ばに			
なりし時		おつかあ泣かんすな	きっとわい

第四部 桜美林物語

元の弥七に	して見せる	泣くな泣くなと	語りしに
後にそむきて	われ遂に	家運の挽回は	せざりしが
これにて許せ	母者人 <small>ははじやびと</small>		
かく語りつつ	褒状を	声高らかに	読みにけり
越えて一月	一八日		
武州熊谷の	郊外に		
金の酒盃	褒状を		
老いの涙を	拭ひつつ		
共に喜び	給ひたり		
われ遂に元の弥七にせざりしが		生き長らえる	
われ如き者にほまれを与へたる		出して示せば	
村人をこそたたえざらぬや		母いましなば	
		九十の	
		と声あげて	
		姉を訪ひ	

(昭和50年1月25日号『復活の丘』)

同志社大学名誉学位

去る（昭和五十年）五月二日、私は同志社大学から、名誉学位神学博士の称号を授かった。

それより前、実は去年の十二月、住谷総長から、「名誉学位をおあげするが、もらってくれるか」とおたずねがあった。私はさつそく、「ありかたく頂戴申し上げます」とお返事したことはしたが、多分そのうちに水をさす者が現われて、恐らく饅香に終わるであろうと思つていた。

二月二十二日に、「同志社から電報が来ました」と秘書が報じたので、そらやつぱりと思わず叫んだが、案外にも電文は。

「ホンニチノ リジカイニオイテ メイヨガクイ ゾウテイノケン マンジョウイツチ
ニテ カケツシタ オメデトウ スミヤ」

という電報だった。

去る五月一日、私は車で京都へ行つた。五月二日、私は早朝に若王子山に登つたが、急坂であつて息が切れたので、休み休み登つたが、遂に流汗滝のごとくシャツがずぶ濡れに濡れた。そこで八合目から下つて、麓の石鹼の文字で有名な荒尾東方斎の石碑の台石に、シャツを乾かして

休憩していると、たくさんの少年が三々五々登り行くので訊くと、皆同志社ボーアだつたではないか。

遅れるといかんと考えて、墓参りを見合させて、相国寺門前町アムハースト館に向かつた。そして午前十一時から、松下幸之助氏、井深八重子姉、中村遙氏と共に名誉学位を頂戴した。

いただく前に、住谷総長は短かく四人の者についてお述べになつた。私のことについては、「桜美林学園のキャンパスの真中には、『夢、大学の設立こそは少わかき日に新島襄に享けし夢かも』と刻んだ碑が立つてゐる。新島精神は遂に東京にまで進出するに至つた」と言つて、うれし涙に咽びつづき紹介くださつた。

正午からミヤコ・ホテルで招宴があつた。

明ければ五月三日、私は再び若王子山に登り、新島先生の墓前に瞑想して後、川中勘之助先生の墓を清掃して、墓石のぐるりに、さつきの挿芽をして下山し、そのまま東名神の高速道路をまつすぐ走りに走つて帰校した。

帰宅して、真先にしたことは、亡妻美穂の墓前に、「おい、美穂！同志社でこれもろうて來た」と言つて、名誉学位の巻物と紫白赤のフードを供えた。

（昭和50年6月1日号『復活の丘』）

甲子園で見事優勝

昭和五十一年夏、桜美林高校は朝日新聞社主催の第五十八回全国高校野球選手権大会に西東京代表として出場し、日大山形、市神港、銚子商、星陵、P.L.学園の五校を連破して深紅の大優勝旗を勝ち取った。夏の甲子園大会に初出場、初優勝したわけである。東京勢の優勝は大正五年いらい六十年振りであった。

編集者

この八月の甲子園の野球大会で、桜美林高校は見事優勝した。

夢を見よ夢は必ず成るものぞ

うそと思はば甲子園にきけ

この三十一文字は、私がこの度得た腰折の一首である。去る日ある教育雑誌社から電話がかかり、「あなたの教育を一言でもつて尽くせば?」と訊かれたので、一言ではなく一二言で言うと、

「生徒に夢を抱かせよ、教育とは結局、愛である」

とお答えした。私は、「今にうちの高校のチームは、甲子園で優勝する！」と、言い言い来たが、どうどう夢はうつつとなつたではないか。しかし、夢がうつつとなるまでには、長い長い年月を要した。

(昭和 51 年 12 月 6 日記)

三十周年記念日を迎えて

三十周年記念日を迎えて、さすがに感慨無量である。

鳥兎勿々三十年

このかんいらじをまなぶいわくにん

此間学一字曰忍

窓外老松抜林聳

せんなんろうそうにたえてたいせんたり

千年耐風雪泰然

日月は早いものでもう三十年になつた。この間に忍の一字を学んだ。

矢柄神社の老松は林から抜け出して一本そびえている。千年、鎌倉時代からずっと風や雪に耐

えて平氣でいる。

(昭和 51 年 12 月発行『桜美林大学だより』)

校恩人社 — 桜美林学園恩人録 —

清水安三先生は晩年、桜美林教会が所在する〈復活の丘〉にて居住、教会堂の隣接地に先生個人用“祠”（いわば大型の木造神棚）を設け、《校恩人社》と呼称されていた。召天後、開扉すると、風雨に耐えてきた『恩人録』と題する和風ノート一冊が出てきた。以下はその内容要旨である。

編集者

■賀川豊彦牧師（300ページ参照）

賀川先生の斡旋^{あっせん}がなかりせば、桜美林学園は恐らく創立され得なかつたであろう。先生は理事長として学園経営の顧問役を果たしてくだされたが、学園が創立翌年の昭和二二一年四月から男女共学に踏み切つたために、先生は憤然理事長を辞してしまわれた。

（その経緯……）。賀川先生が院長をしておられた日米学院にてストライキが起こつたため、私は賀川先生から電話で頼まれるままに、そのストライキの中心人物の一教授と一一名の学生を、桜

美林短大に編入学せしめることに同意してしまった。ところがやつてきた学生は、うち一名のみが女子学生にて、残り十名は男子学生であった。

先生がかねてから男女共学を不可としておられることは千万承知していたが、あたかもその年度から日本の教育制度が男女共学を建前とすることに変わったこととて、私共は賀川先生のお考えも一変したものと考えて、男女共学に踏み切つたのであった。

学園は先生の晩年に至つて、少し距離を生じるに至つたが、学園が今、鴻恩を受けた人々の靈を恭しく祀る場合、何れの人々にも増して、先ず賀川先生の鴻恩を思わねばならぬ。

■小崎道雄牧師（354ページ参照）

桜美林学園を創立した当時、理事になつてくれる人がないので実に困難した。しかるに小崎先生は喜んで理事就任を承諾して、理事会には皆出席であった。

特に今回想して感激おく能わざるエピソードは、賀川先生が「わしはもう辞める」と言つて、席を立つて立ち去られた時に、小崎先生は「ボクで良ければ理事長になつてあげようか」と言つて、直ぐに理事会の議長席にお就き下された。

◎〔以下は桜美林学園創立当時の地元恩人〕

■細野甚太郎氏

忠生村小山田の人。私がこの地へ来て、一人の知人もなかつたのに、よく協力して下されたの

みならず、子女を率先入学せしめられた。

また私共は散歩がてらお風呂をもらいに赴いた。おもむ他家では、しまい風呂のみであつたが、細野家ではいつも一番風呂だった。

■今岡七五郎氏

町田の日活館々主であつた。学園創立の初めに、お金を百円借りに行つたら、躊躇することなく貸して下された。後、返金に行くと、十円紙幣三枚を寄付された。知人無しのこの地に来たばかりのこととて、借りた百円が非常な援助になつた。

■篠崎源兵衛氏

田名の人。鎌倉の師範学校を卒業、神奈川県下の小学校校長を歴任。上溝の中学校P.T.A会長だつた時に、桜美林創立と聞いて、その生徒集に協力し、自らのお嬢さんを、その親戚をも入学校勧誘してくれし人。温厚な実に親切な人物であつた。

◎[以下は創立当初、学園に貢献された米国人]

■チャップレン・サレンバーガー（280ページ参照）

■ヘレン・タッピング女史（日本在住の晩年、桜美林で教鞭を取られた）

学園が片倉組から旧木造校舎を購入したさい、カリフオルニア州にて召天された伯父さまの遺産約八十万ドルをそつくりご寄付された。また、桜上水の邸宅を処分して、その売上げ金の半ば

をば寄付せられた。

■ジョンズ夫人

お嬢様が厚木米軍基地における将校夫人であつた。アトランタ市に帰国後、市図書館の廃本を大量送り届けて下された。

■スカッダー少佐

立川基地にて勤務していた米軍隊長。大量の洋書集めに貢献して下さった。「自分の母親は平和主義のクエーカー教徒であるので、私が軍人になることに反対した。しかし今日、日本の一クリスチヤン・スクールを援助できて実に嬉しい」との手紙をもらつた。

◎〔昭和23年9月、著書『希望を失わず』を出版、それを携えて国内各地を回り、”寄附募集講演”を行つた。昭和26年3月からは2年間、北米および南米にて募金旅行。269ページ参照〕

■吉田政治郎牧師

近江兄弟社の牧師。私が『希望を失わず』をしこたまかついで近江八幡を訪れ、兄弟社の朝挙^{にが}で語つたところ、本はさっぱりはけなかつた。

苦い思いで祈つていると、吉田牧師がやつて来られて、「一気に読了しました。これから滋賀県中の教会、高等学校に電話して、講演会開催を頼んであげます」。

■菊地猶之助牧師

私が『希望を失わず』を背負つて深谷市を訪れたとき、教会と婦人会が合同後援会を開催して下された。開会に当り、私を壇上のソファに座させて、会衆に起立を促して自ら会衆の前に立て、「日本の歴史を按するに、中国人にして日本の文化建設のため大いなる貢献をした宗教家学者らが数多くありますに、日本人にして、中国に赴き中国のために一臂の力を尽くした者がないません。かかるに貴方は三十年間、中国民のためにお尽くしになりました。よつて私は日本国民の一人として厚く感謝致します」と叫んで着席された。

行商の講演旅行ぐらい、肩身の狭い思いをするものはあるまい。いかばかり肩身を広くしたことを。

■ 中村清治牧師

福島県平の牧師。私が日立市からリュックを背負つてこの平の町に乗り込んだところ、駅に数名の年若い女性が出迎えに来てくれていた。どうして、私が乗る汽車が分かつたのか。さらに驚いたことには、私の首や腕の寸法を計るといわれる。

翌朝、礼拝前、新しく縫われたYシャツを私に示して着替えさせられた。講演後、「桜美林から送られてきた本は、皆売り切れましたよ。まだ有つたら、ましたお出しなさい」といわれる。日立から携えてきた売れ残りの本をリュックから取り出したら、瞬く間に皆売れてしまった。

■ 田村貞一牧師

京都洛西教会牧師。京都には元組合教会も多くあり、また同志社神学部卒業生も少なくないのに、私の行商講演旅行を迎えてくれた教会も牧師も皆無であった。

然るに元同胞教会の田村牧師は、同志社神学部出身であるにもかかわらず、大講演会を開いて下された。誠に異例の親切であつた。

■橋本千二牧師

京都聚楽教会の牧師。私がリュツクサツクに『希望を失わず』を詰めて堀川の同教会を訪れたところ、重箱に入れたおはぎの山盛りをお出しになつた。終戦直後においては、砂糖が貴重品であつたにもかかわらず、實に甘いおはぎであつた。

夕方の集会が始まると、橋本牧師が自己紹介を来会者に一人一人おさせになつた。妙な司会だわいとは思つたが、どなたも聞き覚えのあるお名前、いずれも月に一円ずつ北京朝陽門外の崇貞学園へ献金して下された人々であつた。

本は一冊残らず完売。橋本牧師は組合教会派ではなく、植村正久先生直系の日基（長老派・日本基督教会）であるのに、かくも親切に迎えて下されたのであつた。

■斎藤敏夫牧師

堺教会牧師。堺、浜寺、岸和田などにおける行商講演旅行を企画、連れ歩かれた。刑務所における講演も。

■佐藤与次郎氏

ハワイ、マウイ島にて、独身の生涯をお生きになつた方。書籍収集のマニアにて家屋の壁という壁は、トイレにまで本棚が造られてあつた。紛失を恐れて、だれにも本を貸与されない。

しかるに、私が訪問して大学設立には先ず本を集めなければならぬと申し上げたところ、

「皆あげる。持つて行きなさい」と言われた。

■渡辺次郎氏

ハワイの教員（広島県福山市出身。桜美林にアロハ寮を寄付された。ハワイにおける私のカネ集めには、自ら私を車に乗せつれ歩いて下された。

■相賀安太郎氏

ハワイ・タイムス社長。ハワイにおける図書およびカネ集めに一方ならぬご尽力。

■小野賢藏牧師

ブラジル、ゴヤンベの牧師。私がサンパウロ州にて寄付集めしたさい、「よろしい。向う半年間のタイムを、貴方に捧げましよう」と誓つて下され、小型トラックに『希望を失わず』と私を載せて州内の町々を行商して下された。

■ヴァン・シイルズ夫妻

米国人シイルズ氏は、コロンビアレコード会社の弁護士であった。私が同志社の学生時代、ヴ

オーリズ先生が私のことを近江ミッショングの機関紙「マスター・シード・イン・ジャパン」に記載されたため、シイルズ氏は月々八円に相当するお金を送金して、私の学資に当てられた。

桜美林学園のため、米国へカネ集めに赴いた時には、夫人生家（コネチカット州リツジフィルドの旧家）の大きな屋敷に住居しておられた。ご夫妻は桜美林に三万ドルを献金して下された。書斎の壁には、紺かすりの着物、小倉の袴を着た私の、同志社時代の写真が懸けられていた。

■ 大原総一郎氏

岡山県倉敷の実業家。先代・大原孫三郎氏は、私を二年間にわたって米国オベリン大学に留学せしめるために出資せられ、その後、崇貞学園のために多額の寄付をせられた。

その令息大原総一郎博士は、桜美林短大を設置するときに、金三十万円を貸与せられた。文部省が設置審査に来られた時、理化学実験室が不備であると指摘されたからである。

私は一週間の猶予を請うて京都の島津製作所に至り、器具薬品一式を注文した。そしてその支払いのため大阪梅田駅前の倉紡本社を訪れて、同博士に面会、嘆願したところ、「三十万円だけで足りますか」と反問して、直ぐに貸して下された。

■ 成田順女史

文化服装学院学長、清水郁子の女高師後輩。

夫君も同学園教授。桜美林短大設立の際に、夫君およびご自身の蔵書を全て寄付して下さった。

清水郁子研究

近年、清水郁子研究が進行、樋松かほる著『小泉郁子の研究』が出版されたほか、（ワークシヨツプー清水郁子の思想と教育実践）では、郁子先生の本質・全体像が多角的に検討された。その重要論点：なぜ郁子先生が著名言論人の前途を投げ捨て、あえて結婚、苦難を伴う私学経営の道に転身したのか。以下、それに関連する郁子語録から…。

● 郁子先生は自叙伝（満六十九歳誕生日から執筆、召天により中断）の中で：、「私の生涯は常に多忙、ひたすら刻苦奮闘を続けてきた。だから未だかつて、いわゆるレジャー（閑暇）を心からエンジョイしたという記憶がない」。「私は子供の時から大の勉強好きで、今日まで一貫している。また先生になることをあこがれだ。要するに〈学ぶこと〉と〈教えること〉が一体化、これが私の凡てであるといってよい」「私はクリスチヤンとして、自分を神の前に〈生ける供え物〉として捧げることを誓い、〈世のため、人のため〉というモットーをかざして、約五十年の教職生涯を歩んできた。自分の生涯が幸福であつたと

断言できる」。

〔一九六一年十一月一日号『復活の丘』〕

●郁子先生はオベリン大学にあてたミシガン大学院出願理由書の中で、「帰国後の仕事として、カレッジ（高等教育）水準のクリスチヤン学校を開設したい。状況如何により、中等学校から発足するかもしだい」と記述。

〔樺松かほる著『小泉郁子の研究』〕

●都子先生は桜美林中学・高校の教育理念として…、

「眞の私学は本質的に公立に勝つてゐる。わが学園の良さは、〈創業の精神〉—すなわち育英の業を神より享けた最高の天職とする使命感—に基づき発生するのである」「私学の良さは、良心の自由と行動の自由、規則や前例に縛られない。私学の良さは封建的役人臭さがない人間味、師弟間の温かさ、生徒間においても…」「わが学園教育の目標は二つ。ひとつは個人の成長発展、もうひとつは社会の改造、理想社会の建設である。人種民族の別、男女の別を超えた愛と正義と協力の世界を夢みたい」。

〔一九六〇年十一月十五日号『復活の丘』〕

編集者

第四部 桜美林物語

第五部

牧師・教育者として

黙々として祈れ

日本のキリスト教会は、なぜきばつている割合に振わないか。いろいろの理由があろうが、その不振の理由の一つをなすものは、教会生活なるものが日本人にぴったりせぬことが多いからである。

第一、日本のキリスト教会は何を中心としているか。説教を中心にして、会衆となるべくたくさん集めようとしていることは、隠れもない事実である。牧師は説教を大いに勉強して人々を引きつけようと努めている。しかし黎明期の日本ならばいざ知らず、雄弁や思想でもって、大衆を集めることは至難である。

私は支那へ渡航する時、しばしば長崎で下船する。船がたいてい四時間停船するので、私は浦上村のカトリックの会堂を訪れる。^{がらん}訪れるのが楽しみなのである。会堂を訪れるといつも伽藍の隅のここかしこに、三々五々善男善女がいとも厳かに祈っているのを見受ける。見るからに敬虔そのものである。

思議である。試みに朝露をふんで神社宮祠に参詣して見るがよい。

日本のキリスト教会が、日本人にぴったりと触れて行きたいならば、静肅なる時を愛する風俗を作らねば、いくらあせつても法統は守り得ぬ。教会の大门は閉ざすとも、小門はウイーク・デーもずっとあけておいて、教員は胸に痛みある時、心の空虚を感じる折り、会堂の小門をくぐり片隅に跪いて祈り、祈つてはまた聖書を読み、また祈るというような風俗を作るべきである。

日本人にはあの祈祷会は、どうしてもぴったりと来ぬ。そのためか、いくら力説しても祈祷会には人々が来ぬ。ああいう声をたて美辞をもつてする祈祷会は振わぬのである。それよりも黙々として祈るのが日本人に向く。わけてもウイーク・デーのがらりんとした会堂の片隅、森の木陰の苔むす石の上、木の下、山の端、水の渚、いざれも寂しい処にあって、黙々として祈ることが日本人の気分にそぐうのである。

この黙々として祈ることは、別に異教的でもなく、またキリスト教の日本負けでも何でもない。イエスの宗教生活は、「寂しき處」に至つて祈り給うところにあつたのではないか。イエスは追いすがる群衆を逃れて、寂寥に黙し給うたのである。彼は声高らかに祈るのを戒め給うた。げに黙祷は、神の声に耳をたて、聖旨を模索することができる。私は日本の教会生活が、黙々として礼拝することに重きをおくべきであると思う。

(昭和9年3月号『湖畔の声』)

寂しき処

第五部 牧師・教育者として

「イエス御靈によりて荒野に導かれ給う」（マタイ四・一）。

「イエスこれを聞きて人を避け、そこより舟に乗りて寂しき処に行き給ひし」（マタイ一四・一三）

「人を避けて高き山に登り給う」（マタイ一七・一）。

「イエス彼等と共にゲッセマネという処にいたりて……」（マタイ二六・三六）。

「朝まだ暗き程に、イエス起き出で、寂しき処にゆき、そこにて祈り給う」（マルコ一・三五）。

「イエス言い給う、なんじら人を避け、寂しき処にいざ來りて暫く憩へ」（マルコ六・三一）。

「イエスただペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、人を避けて高き山に登り給う」（マルコ九・一）。

四福音書には、到る所に「イエス寂しき処に行き給う」という言葉が書がれている。よほど寂しき処がお好きであつたと見える。

イエスはまず寂しい処に行き、それからいろいろなことに出会い、いろいろのことを行ない、それからいろいろのことを語り、そしてまた再び寂しき処に行き給う、というぐあいに繰り返し

繰り返し、寂しき処から出発して寂しき処へ向かう、という生活を繰り返されたようだ。その寂しき処の中に荒野があつた。荒野はユダヤ人にとって悪魔の住む所とされていた。イエスもそういう考えがあつたか、時折り荒野に至つて悪魔と相撲をとることに努められたようである。ことに自分の心の中に悪魔的なる野心が勃々として現われる時には、イエスは荒野に至つて思索瞑想されたようである。

またイエスは寂しき処を山に求め給うた。イエスは山がよっぽどお好きであったと見える。しばしば登つておられる。イエスは山の中で祈り、山の中で語り給うた。山上の垂訓はその一つであるけれども、山上の変貌、その他山の中での集会はしばしば行なわれたようである。

またイエスは寂しき処を海辺や河畔に求め給うた。イエスは夕暮れの湖畔、静かな河辺に寂しき処を求め給うた。またイエスはエルサレムで活躍された時には、城内の便利な所に宿をとらず、毎夜郊外の村里に憩い給うた。そしてその郊外にある夕暮れの寂しい園の中で祈り給うのが常であつた。

イエスは何故に寂しき処に行き給うたかというに、第一に人を避けるためであつた。それ故に人を避けて寂しき処に行き給うとある。イエスは人によつて自らを誤られざるよう警戒したもうたのであつた。

人々の評判に対しても、イエスは寂しき処に退いてもう一度、自己を省み自己を吟味しておられ

る。人々がヨハネの生まれ代りと言つたりする時には、かのバブテスマのヨハネと自分の行くべき道の違い、とるべき生活の型の違いなどについて、寂しき処に至つて考え、自分自らの何者であるかをもう一度考えて見られたのである。

そして最後に、寂しき処の一つなるゲッセマネの園に行かれた時には、自分のメシアとしてのプログラムの一つとして、十字架上に死すべきか否かについて祈り考えられたのであつた。それは血の出るような祈りであつた。人々はゴルゴタ山上の十字架を仰ぎ見るけれども、実はゲッセマネの園において、すでに彼は十字架を負つておられるのである。もしも何かの番狂わせ的変化があつて、ゴルゴタの十字架事件が取りやめになつてしまつたとしても、ゲッセマネの園におけるあの祈りがある限りは、イエスの十字架はすでにあつたも同然である。

今日の教会が不振である所以は、思うにいろいろの理由があろうが、一つはクリスチヤンに寂しき処に行く習慣がいつの間にかなくなつたからではありますまい。私どもの先輩は、牧師の最も大切な修養のために読書することをすすめた。彼らはすすめるだけでなく、自らの貧しい財布をはたいて洋書を買ったものである。故に牧師の書斎といえば、いつでも横文字の書物が壁が見えぬほどにギッシリ積まれてゐることになつてゐる。そうせぬと偉い牧師になれないもののごとく思われて來たのである。私などもそういう伝統を破り切れずして、赤貧の中を四千冊にならんとするばかりに和漢洋書をあつめたものである。一足の靴下を買うのにすら思案して買い、

一枚のシャツを求めるのにすら二、三回店を訪れないと手が出なかつたのにもかかわらず、書物のためには躊躇逡巡することなく買つたものである。

しかし、私はむしろ書物を読むよりも、寂しき処に行かねばならぬと思う。独り山の中に入るが良い。森の中に入るがよい。また海辺に行くがよい。

今日の牧師に欠けているところは、知識の貧弱ではなくて思索の欠乏である。瞑想の欠如である。悪魔と相撲をとらぬこと、神に肉迫せぬこと等々ではありはすまいか。されば私は現代の牧師といえども、説教すること、訪問すること、寂しい処にゆくこと、この三つを三等分に繰り返すべきであると思う。

今日の世相は余りにも突進的である。我武者羅に進み過ぎる。がむしゃら一歩一歩ということを知らない。無鉄砲だ。國民としての前進の仕方も余りに賭博的である。イチかバチかである。乗るか背るかである。かかる時代において我らは、時々グイッと退いて寂しき処に出てゆかねばならぬ。前進の途上、パツと立ち止まって人を避けねばならぬ。かのトルストイは、「立ち止れ、そして回れ右してもう一度来た道を帰つて來い。そうするならば、前に見えしものは後になり、右にあつたものは左側に見え、世界はすっかり変わつている」と言つた。我らはしばし退いて立ち止つて人を避けて考えて見る必要がありはせぬか。

昔、ナタナエルは木の下で祈る習慣があつた。ペテロは屋根の上で祈つた。諸君の静かなる処

は密室であるか、それとも人なき郊外であるか。

朝陽門外の東方にある小さな森、そこが私の祈りの場所である。その森は清朝のあるプリンスの墓場であった。そして楓の木があるので日本人は楓寺と言っている。北京から通州にゆく運河に近い。そこにゆくと寂として人の声がなく、いること数分にして心が静まるのが常である。

学園の先生たちは、私がその小さい森に行くのを見つけた時、「ああ、学校はもう一文もお金がなくなつたのかも知れぬ。それとも何か重要な事が起こつたのではない」と心配する。けれども私がその小さい森にゆくのは、そうした困難、憂いのある時ばかりではない。心の中が浮々とするほど喜びに満ちた時にもゆくのである。調子に乗つて自らを忘れる事のないよう、寂しき処に行かねばならぬのを知つてゐるからである。そこばかりは全然世の毀譽褒貶のない所であつて、私にとつてはことに聖なる所である。

諸君はどこに行つて祈り給うか、諸君、自分が今どこに立つてゐるか、日本民族全体としては今何をなしつつあるか、どんな方向を走りつつあるか、今日のごとき時代において祈りの時ほど自由なものは他にないのである。神に何を告げようと何を訴えようと、黙々として祈るところ全く自由である。我らは誰に制限を加えられることなく寂しき処において、本当の世相を神に申告し、眞実の時代苦を愚痴り、そして神の指導を受けることが出来るのである。

昭和十四年十二月、近江八幡教会にて

(昭和15年5月発行『開拓者の精神』)

人生は冒険

人生はそれがどんな人生であっても相当冒険である。

百姓の子に生まれて百姓の一生を過ごすとしても、それは相当冒険である。向こうが見えて、死ぬ時の自分の境遇がはつきりと想像出来るほどに坦々たる人生であっても、それ相当に冒険である。雨の降らぬ年もあるうし、風の吹く年もあるうし、それから水のあふれる年もあるであろうから相当な冒険である。いわんや商人の生涯、事業家の生涯は冒険なしには生き得られないであろう。小さい商売であればそれだけに資本も少ないのであるから、一つの荷物を他人に渡す時にも非常な冒険を感じずしては出来ない。

人生の冒険はイチかバチかの場合が多い。人生は本当に転変である。一人の女性が夫を選ぶ時に一生一代の賭博をなすのである。自分の生涯の伴侶たる夫を選ぶ時に、たいした調査もしないで思い切って取り決めてしまう。そして一生涯の間その夫に頼り、その夫で満足し辛苦を共にしようというのであるから、それはとみくじのごとき冒険である。

織田信長は戦国時代の日本を統一したる英雄であつたが、かの桶狭間の合戦において、人生五

十年夢のごとし、幻のごとしと一詩を詠じて、単身敵陣に突入して死生を賭したところに成功の運が開かれたのであつた。

紀国屋文左衛門は、白装束の経帷きょうかたびらを着て江戸へ蜜柑船みかんぶねを積み出したと言われている。板子一枚へだてて地獄なる冒險を成してこそ紀文大尽と唄われ得たのである。

冒險なくしては偉大なる人生はあり得ない。日本人は男は度胸みだらだというが、度胸とは信念と闘志をでつち上げたものにほかならないのである。何故キリスト者は地の極、海の向こう毒蛇のいる人食い人種の島、土賊の巣食う大陸、どこへでもどしどし行けるのであろうか。それは経帷こそ着ていなが、十字架を負い、死を賭して、命を捨ててかかっているからではありますまいか。全て宗教ほど冒險的な、そして男性的なものはない。実に宗教は冒險そのものである。何となれば神に一切をまかせ、自分の生涯を打ち込んでゆくのであるから、これほど賭博的な冒險はない。自分ばかりでなく自分の財産も自分の妻子も一切をぶちこむのであるから、これほど冒險なことはない。目に見えない、手にも触れない神に一切を打ち込んでかかるのであるから、これほど思い切ったことはないのである。神にかけたる生涯、それをクリスチヤンの生涯ということが出来る。かりに我々が小さなカヌーに身をたくして大海に乗り出したならば、人は何という冒險であるかというかもしれない。しかし、我々は手にも触れたことのない神に身をたくして、人生を開拓して行くのであるから、これはどの冒險はない。

「聖者」と「戦う使徒」

旧約聖書にはエフタという男が聖者と称せられている。彼はならず者だった。またダビデも聖者の称を得た。彼はお祭りに御輿をかつぐ群れに入り、よいやさ、よいやさを叫んでいる。すると皇后様が、「王たるもののが何ですか。威厳も何もあつたものではない」と言つて戒めていらっしゃる。

エフタやダビデの悪い面のみを持ち合わせている私奴を人々は“朝陽門外の聖者”と呼ぶのである。

それでは、君は聖者になりたくないかというお尋ねもあるうかと思う。しかり、私は毛頭聖者になりたくない。なぜかという自分ひとりを有徳の君子に育て上げるよりも、低級な衆生のうちに踏み止ることの方が貴いことだと信ずるからである。故にそんな名称よりも私に好きな、またふさわしい名称がある。それはパール・バッカが彼女の父親をモデルとする小説につけられたタイトル“戦う使徒”という名称だ。

私は鬪志満々の男なのである。「なあに、今に見ろ」という言葉は私の独語である。それは自

分の事業のために奮闘する掛け声であるが、他人のために闘うのが好きだ。支那良民のために一肌脱いで、ことによつたらその必要な場合には彼らのために死にたいのである。

有体にいうならば“聖者”というがごとき、静的な名称は真平である。今日のような時代において必要なものは気高い鶴のごとき聖者ではなくして、勇敢なる闘鶏のごとき闘士である。無論ただに外なる敵と闘うばかりでなく、内なる敵をねじ伏せねばならぬことを承知している。そして私は死ぬまで闘いぬきたいのである。

昭和十五年一月一日、太平洋上にて

（『開拓者の精神』）

ヘブル書第十一章

ヘブル書第十一章は、私の最も愛読する聖句である。私が死んだならば葬式にはこここの所を朗読してもらいたいと思つてゐる。

この章は旧約新約の初めから終わりまでを縮図のように圧搾して述べ尽くしたものである。

その中でも、私の最も愛誦する聖句は、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬものを眞実とするなり」 （一節）

「信仰によりてアブラハムは召されし時、行く処を知らずして出でゆけり」 （八節）

「彼等は皆信仰を懷きて死にたり、未だ約束のものをうけざりしが遙かにこれを見て迎へ」

（一三節）

「己が故郷を求むることを表せり」 （一四節）

「彼等は信仰によりて、國々を従へ」 （三三三節）

「嘲笑あざけりと鞭こころみとの試練こうりんをうけ」 （三六節）

「荒野と山と、洞と地の穴とにさまよい」 （三八節）

などの節である。

ヘブル書十一章によると、開拓者、新建設者、先駆者に最も必要なるものは信仰である。開拓者、新建設者、先駆者はいつも独創に生き、先人未踏の道をたどり、そして果たしてこうすれば、こうなるものやら、あなるものやらわからぬままに種を蒔かねばならぬのである。

しかしそこに未だ見ざるものを見実とする所に信仰がいるのである。信仰なくしては、決して開拓者たり得るものではないのである。それが故にいづれの民族にありても、創世期において最も信仰的にして冒險的である。夢見る人々、出でゆくところを知らずして行く人々によつて建設されている。中でもかのメイフラワー号の清教徒たちは最も信仰的であった。

（『開拓者の精神』）

中国の教会

第五部 牧師・教育者として

私はこの頃、時折り支那の教会へ行くのであるが、去年（昭和十三年）十月頃、こういうお祈りを聞いた。

「神よ、日本民族の罪を赦し給え。どうか、日本国民を罰し給うなれ」というのであつた。年が明けてこの正月、また一段と進んだお祈りを耳にした。

「神よ、われら中國民の罪を赦し給え。われらの国は今神の審判を受けつつあります。町々は焼かれ、村々は毀され、子は親を見失い、親は子を守る術もなく逃げ回っています。これは皆、わかれら中國民の罪のためであります。どうかわれらを赦し給え」

という祈りである。こうした祈りは、爆撃下の重慶において守られたところのラジオによる日曜夕挙の祈りにも献げられたのを聞いた。

多くの日本のクリスチヤンたちが、「どうか東亜の天地から、そのおおつている暗雲を取り除き給え」とか、「日支は兄弟であります。どうかもう一度兄と呼び弟と答えて、堅く手を握らしめ給え」とか、「日支が協力せば、東洋は決して復興しません」とか、国際的、そして政治的

なお祈りをする時に、支那国民の中には本当の良心的な祈りが、捧げられ始めていたのである。すなわちいさぎよくすべての時代苦を己が罪として、懺悔さんげに生きようとする者の心は、この上なく貴い。

国際間のトラブルに限らず、家庭における紛争でも、学校の騒動でも、すべて自分が悪かつたのであって、他の誰もが悪いのではないと思うところに解決の鍵があると思う。実際自分が悪いのではなく、相手が悪い場合であっても、自分に罪を帰するところに美しく貴いものがある。

イエス先生も、すべての罪を誰にも負わさずして、自分がひつかぶり、極刑を受けんとして十字架にかかり給うたのである。彼は罪もなき子羊がほふられたるごとくに、敢然とほふられ給うたのである。そこに十字架の精神が存在するのである。

互いに罪を他人になすりつけ、互いに責任を相手に負わせ合っている間は、解決は断じてないのである。

多くの日本人、すべての学者、政治家、軍人は、支那が悪いから、こういうことになつたのであるというであろう。それは、そうであるかも知れぬ。けれどもわれわれ宗教者は、自分たちが悪いのであると、きっぱり言い切つて、彼らの罪の赦されんことを祈らねばならぬ。それでこそ、クリスチヤンであると思う。

（『開拓者の精神』）

歐州動乱に思う

星はいと小さいものであるが、暗い大空に輝いて、砂漠に路を迷う旅人に、はつきりと方角をさすことができる。かくのごとくに小さいものでありながらも、力以上の輝きを見せるのは、暗い真暗の世界においてである。

燈台の光を船人が最も心して見つめるときは、嵐の夜の闇の航海においてである。千歳にその名を垂れしところの忠臣烈士は、国の乱れし時に出る。永く人を泣かしめるところの孝子節婦は、家破れ果てし時に出る。人情美もまたそうである。よっぽど世が乱れ狂わぬと、容易に人は一花咲かせ得ぬものようである。

さて諸君、歐州はついに戦争になつた。独軍はワルシャワまで一気に迫つている。そうかと思うとベルリンの爆撃も伝えられる。商船アセニアというのが撃沈されたそうな。そのうちには、ロンドン空襲も伝えられるであろう。

今度の戦争では、白人は相当死傷するであろう。いろんな毒ガスも発明されているであろうから、ことによると二、三百万どころの死傷では止らぬかも知れぬ。

ロンドン、パリ、ベルリンも廃虚と化して、あちらに柱の折れたる、こちらに礎石の転べるを見出す残骸の都にならぬとも限らぬ。

キリスト教国といいながら、どうして、ここまで醜い闘争を繰り返さねばならぬのであろう。今度という今度は、あきれ返らざるを得ぬ。私は悲観せざるを得ない。今日の世界には正義とうものがない。強いためが正しいのである。勝てば正義とたんで、負ければ不義である。

東洋といい、西洋といいどうだ？ 支那の人民は塗炭とたんの苦しみだ。ここまで女や子供を泣かせてまで、戦わねばならぬことはあるまい。

世界中暗雲が垂れている。もうこうなつたら、少々よい説教をしても何にもならぬ。教会の叫びなど、蚊の鳴くようなものである。全く滅茶苦茶である。神の国の建設など思いもよらぬ。かく思うとき、私たちは砂漠をうろついているかのごとくに思う。冬の荒野を行くがごとくに思える。見渡す限り草も木もない、砂また砂である。實に寂しい。ところで――

よく見れば菜づな花咲く垣根かな

という句がある。私の大好きな句である。冬の終わり、まだ春来ぬ頃に詠んだのであろう。何一つ青きものない垣根に、よく見れば菜づなの花が小さく咲いている。決して美しい花ではない。大きい花でもない。しかし粗末な花であっても、花は花だもの何とも言い得ぬ喜びを感じる。

砂漠を行く旅人も、時として砂原の中に、小さい緑の草むらを見出すであろう。オアシスであ

る。何もそのオアシスが一里四方もなければならぬことはない。小さい一間四方、一坪、半坪でもよい。ちょうどそのように、私たちはこの滅茶苦茶な世界に、小さいながらも美しい一坪二坪のオアシスを打ち建てたい。

イエスは、「神の国はどこにあるか、いつ来るか」という問い合わせて、「神の国は汝等の裡にあり、汝等二、三人の居るところに神の国はある」と言われた。また、「小さき群よ、恐るる勿れ、神の国は汝等に与えらるべし」と宣し給うた。

一体イエスは、「小さきもの」がお好きであった。「わがためにいと小さきものを」「大ならんとするものは、最も小なるものとなり」「小さき一人をひざまずかすもの」等と、小さいものに目をとめられたようである。

イエスの十字架もまた、極めて小さいユダヤにおける一つの美談ではなかつたか。それは帝国主義の桎梏に喘ぎしユダヤ民族が、民族の悩みの中から咲かせた一輪の花であつた。しかるにその花は血染めの貴い実を結んだのである。

もしもユダヤ民族が、何一つ不自由なく、祖先にカインも出ず、何一つ屈託なき解放されたる罪なき純潔の血潮の民族だつたとしたら、キリストの十字架はなかつた。十字架なかりせば、キリスト教も発生しなかつたろう。しよせん、十字架愛もまた闇に咲ける花であつた。

砂漠なきところ、オアシスはない。闇を得てはじめて星はその輝きを加える。十字架の教えは

明るい世界の教えではない。教会は平和な時代の高尚なる道楽を満足せしむる俱楽部ではない。それは血の出るような悩ましい、道義のすたれたる世界のただ中で祈る祈祷の家である、十字架は人間不義のただ中にしょんぼり立つ輝かしい存在でしかない。

キリストを中心にして、二、三人の集まるところ、そこに神の国がある。イエスはそれだけの建設で満足されたかのようである。

神の国は小さい結合一致により、もう一度建て直されるべきであろう。十字架の御旗は決して大きくななくてもよい。一尺四方で沢山である。小さい旗でもよいから、はつきり吹く風にひるがえしたい。

アリの巣に水をぶっかけて壊すと、アリはもう一度、初めからやり直す。クモの巣を破るとクモはまた初めから綴り直すのである。懲りもせずに。大木を伐り焼いて灰にすることは、一日を要せぬであろうが、もう一度大木を育てるためには、小さい種を土に埋めるほかに方法はない。

あたかもそのように、私たちも小さいところに建設を始めるよりほかはない。

新東亜の建設とはいうものの、やっぱり一人の支那人と、一人の日本人の協力握手から始めるほか、どうにも致し方あるまい。

〔『開拓者の精神』〕

熱の人ペテロ

わが輩はペテロが好きである。聖書中人物多しといえども、最も元気者は彼である。^{ありてい}有体に言えば、わが輩は自らを彼の中に見出すが故に、彼を最も好くのである。

人あるいは言うのである。伝道者、宗教家というほどのものは、何をやらせても、やれる人でなければならぬと。果たしてそうであろうか。

わがペテロは決して成功せる漁夫ではなかつた。夜を徹しても一尾も漁り得なかつたところの漁夫であつた。

魚をすら漁り得ざるほどの者が、果たして人を漁り得るだろうか。だがイエスは、「恐れるな、汝今より人を漁らん」（ルカ五・一〇）と言つて、大漁などやり切れぬ人物を抜擢ばつてきし給うたのである。さすれば漁業に手腕のない人物でも、大伝道者となり得るものと見える。

人あるいは言うのである。伝道者、牧師は学問ある人格者でなければならぬと。わが輩もまたしかと思う。しかるにわがペテロは、無学なる凡人（使徒行伝四・一三）であった。世には無学なれども人格の凡ならざる者がある。あるいはまた人格の低きを補うに足るだけの学問を究めて

いる者もあるう。ところがペテロにおいては、無学にして凡人であるというのであるからさつぱりである。

実に神は無学、平凡の人物をして、よくぞキリスト教史上最初のしかも最大の伝道者たらしめ給うた。

初代教会における中堅人物を求むれば、ペテロ、ヨハネ、主の弟ヤコブ、パウロであつて、彼らは四天王として光つてゐる。キリストご存世の折り、イエス門下の三羽鳥さんばがらすとして帷帳いあくのうちに参加して、他の使徒の行けない所にも侍つていた者はペテロ、ヨハネ、ヤコブである。就中、ペテロは新イスラエル建設の礎いしづえともなるべき巖いわおとして目せられた。實にその隅の頭石おやであった。

パウロには学問があつた。イエスの言説を神学として体系づけ得るだけの学問があつた。主の弟ヤコブには人格があつた。教会の柱となり得るには人格が必要であつた。

ヨハネは優美なる徳の人である。キリスト教が愛の宗教たる限り、どうしてもヨハネを要したのである。しかも、しかもである。なんとしても学者、人物、徳の人だけでは、キリスト教は生まれて來はしなかつたのである。

キリスト教が生まれ出ずるには、ペテロのような人物が絶対的に根本的に必要であつたのである。そのことを主は夙つとに思い給うてか、“変貌の山”にも、ゲッセマネの園にも、死人の甦りしつりにも、ペテロを伴うことを忘れ給わなかつた。他の門弟には見せ給わなかつた所をも、ペテ

口には見せておかれたのである。

しかばべテロの優越せしはいかなる点にあつたろうか。主の眼鏡に適うほどの、見込まれるほどの、なんらかの特長があつたに相違ない。

パウロの教養、学問に比して、なるほど彼は無学であった。パウロはタルソにおいてギリシア哲学を学び、エルサレムにありてはガブリエル門下としての正統的な教養を積んでいる。しかるにペテロは無学である。

けれどもここにただ一つ、彼の持てる学問があった。それはイエスに関する学問である。イエス伝に関する知識において、彼はいずれの使徒にもひけを取らない。もつともさすがのペテロも、イエスの公生涯前の生活は知らなかつたと見えて、主の兄弟ヤコブを訪ねることを怠つてはおらぬ。

イエスの公生涯における言説、行動を一点一画も洩らさずに知れるものはペテロであつた。ペテロくらい、イエスに関する明確なる知識の所有者はないわけである。さればこそ彼は、

「我ら見し所、聞きし所は、言わざるを得ざるなり」（使徒行伝四・二〇）と語り得るのである。ここに彼の強味があつた。これにはさすがのパウロもかなわなかつたであろう。これさえあれば哲学はなくとも、科学は知らなくとも、己れはイエスをよく知つとるという一点において、最も優越せる伝道者たり得るのである。

ことに彼はさきにバブテスマのヨハネの弟子であつたので、イエスについてはバブテスマ以来知り合える関係である（使徒行伝一・二二、一〇・三七）。そういう深い関係であつたればこそ、「汝は神の神、活けるキリストなり」（マタイ六・一六）と、イエスの真相を喝破出来得たのであろう。

イエス伝をよく知り、イエスの真相を知る、これこそペテロをして、キリスト教の礎石たり得る第一の資格者たらしめたものであると信ずる。

（昭和6年8月号『湖畔の声』）

復活の信仰

キリスト教に復活の信仰があることは、どのくらい挫折、破産、失敗に遭遇した者を再起、再出発せしめる大いなる力であるか知れない。

世界には少なくとも三つないし四つの復活の文学がある。その一つはビクトル・ユーゴーの小説『レ・ミゼラブル』である。殺人強盗の大罪人ジヤン・バルジヤンがその後どのような人生を生きたか。トルストイのカチューシャとそのボーイフレンドは、シベリアに流されて人生の新生

涯に入っている。トルストイはそうしたことをほのめかして『復活』の筆を擱^おいている。

ホーソンの『スカーレット・レター』、Aの字を入墨いれずみされた女性は固く口を閉ざして告白しなかつたけれども、罪を犯した青年牧師が大衆の前に罪を告白して、二人で罪を背負つている。また菊池寛作『恩讐の彼方に』の市九郎は、罪をあがなわんとて青の洞門をくりぬいて、トンネル建設の悲願を達成している。

このようにキリスト教の復活の信仰は、人生に再出発のできることを教える宗教である。

桜美林学園の立つている丘を以前は「並びが丘」と称したのだそうな。「復活の丘」の名称は、故郁子が名づけたものである。学園は創立以来、復活祭の早曉、この丘の頂にある丸木の十字架の下で早天祈祷会を持つのを年中行事のひとつとなしている。

何故この丘を「復活の丘」と名づけたかというに、それは桜美林学園そのものが北京崇貞学園の復活したものであるからである。

終戦三ヵ月後の昭和二十年十一月八日、北京市政府から四名の公吏が来て、校門にも、校舎のドアにも、大きい朱印を捺^おした「接收」の張り紙をべつたりと糊^{のり}で張つた。

私はその接收の時の光景を、中国人の私たちの子飼いの教員から聞いたが、清水郁子は体育館の煉瓦壁に額をあてて、よよと泣いたとのことだつた。頭髪というものは不思議なもので、彼女の頭髪は一夜のうちに白くなつてしまつた。しかし私は若い頃、村上太五平牧師から丹波ヨブの

話をよく聞かされたもので、「エホバ与え、エホバ取り給う。エホバの聖名はほむべきかな」の聖句をいやというほど聞いた。北京崇貞学園の接收の時に、私の口から出た言葉は実にその聖句だつたのである。

「わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に遭つても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負うてている」

(第一コリント四・八一一〇)。

「この神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた」 (ロマ四・一七一一八)。

ああ、聖書にこれらの句節のあること感謝なるかな。もし私が崇貞学園を接收された時に、気が狂っていたなら、到底今日の桜美林学園はありはせんのである。

再起再出発を私は身をもつて諸君に教えるのである。諸君が将来世に出て、事業に挫折しても商売に失敗しても、自殺などするではないぞ。家族心中なんてもつてのほかだ。挫折したならばもう一度立ち上ればよいのである。

またわが輩の死後、長い歴史において桜美林学園そのものが難関にぶつかり、大いなる危機に立つこともあるであろう。その時諸君に復活の信仰があるかないかによつて、学園はペチャンコになるか、それとも試練によつていつそう躍進するかが決まるであろう。

男の花道、ヴィア・ドロローサ

去年の夏、フランスへ行つた時に、オルレアンの少女ジャンヌ・ダルクの古蹟を訪れるなどを得た。パリから汽車でセーヌ川を下つてルーアンの町に下車した。駅のすぐ側に彼女の投ぜられた牢獄のタワーがあつた。

ジャンヌはこの町の広場で火刑に処せられたのである。今日では名所旧蹟となつていて、ジャンヌ・ダルクの小ミュージアムもあつた。そこにはジャンヌの用いたバイブルだの、小道具などが十数点陳列してあつたが、とりわけ私の興味を引いたものは、人形で製作されたいわば立体画であつた。その立体圓は、ジャンヌが火刑に処せられる直前の光景を描いたものであつた。広場の一隅には、柴割木がうずたかく積まれていて、その傍には火をつけたたいまつを持つてゐる看守が一人立つてゐた。物見の群衆の顔が、広場の周囲の家々の窓をいっぱいに埋めている。ジャンヌは、うずたかく積める柴割木を背にして、すつと立つてゐる。かかとも隠れるほどに、長い白衣のワンピースを着ながしてゐる。そして眼は天の一方を見詰めている。その姿はうなだれてもいなければ、無論ベソをかいてもいない。

私はヨーロッパ各地で、努めて聖画を見て歩いた。とくにアルザスの古都コルマルのミュージアムは、全館ことごとく聖画の蒐集でさえあつた。またカトリック伽藍がらんの壁には、彫刻、もしくは油画の聖画がほとんど例外なく十四枚掲げられている。中には取りはずしのできぬ壁面もある。なぜこのように聖画をあさり歩くのであるか、それはどこかに一枚でもよいから、ヴィア・ドローサ（十字架の道行）において、あるいは十字架上において、イエスがアゴニイ（苦惱）を色にあらわしておられない聖画がないものか。もしあるならぜひ拝観したいと願つたからである。

なぜ人々はイエスの死をば、どのように悲痛きわまるものと考えねばならぬのであるか。カトリック教会堂の左右の壁間に描かれている彫刻あるいは油画は、いかにも重たそうに十字架をかついで血の汗を額や頬に滴しつたらせながら、あえぎあえぎ歩き給うイエスである。しかし私は、イエスが聖画に見るようないとも哀れな死相をさらされるはずがないと思う。読者の皆様はいかに思うであろう。

エルサレムを訪れた。ピラトの邸から、ゴルゴタの丘までのヴィア・ドローサは、上つたり下つたりの坂ではあるが、そう距離は遠くはない。私も歩いてみたが、二十分足らずしか要しなかつた。当年取つて七十八歳の私でさえも楽々と歩けた。

従つて私は、イエスが軽々と十字架をかついで行かれたであろうと想像する。十字架はボプラの木で作られたというから、そう重くはなかつたであろう、何しろイエス・キリストはまさに男

盛りの、しかも大工さんなのであるから、軽々とかついで胸を張つて、足取り確かに行かれたであろう。多くの聖画に表現されているようなみじめな道中ではなく、少なくとも喪家の犬のことく、あえぎあえぎ歩かれたとは考えたくない。

ヴィア・ドロローサには十四のお札所がある。ここでこけて倒れ給うた所、ここで女がハンカチーフでお顔をお拭き申し上げた所などあって、札所札所には会堂が建てられている。私はそうした伝説は信じることはできなかつた。

(昭和44年6月号『湖畔の声』)

イエス先生の習性

イエス先生の習性は、「寂しい所」に行き給う習性であつた。

そのイエス先生が、最後に行き給うた寂しい所は、かのゲッセマネの園だつたのである。その時は、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三弟子を伴い行き給うたのであつたが、いつもと違つてとくに彼らを近づけず、石を投げて届くほどの距離に彼らを待機せしめ給うて、やつぱりひとり祈り給うた。

私は去年の七月、巡礼の旅を聖地エルサレムに試みて、滯在一週間の毎夕ゲッセマネの園を訪れて、祈ることを怠らなかつたが、オリーブの古木の茂る園はさほど広くはなかつた。よつてたぶんホーム・ベースとセカンド・ベースぐらいの距離ではなかつたかと考へる。

ゲッセマネの真下には、エリコへの道が横たわつてゐる。ダマスコ門も近いから、北上してガリラヤ地方に夜陰に乗じて走ることも容易であつたろう。

折柄、門弟らはこくりこくりと居眠りしているではないか。エルサレムを脱出するのは今だというお考えもさぞ脳裏をかすめたであろうが、しかし先生は今さら逃げようとも隠れようともあえてし給わぬ、毅然として十字架への道をただ一途に邁進する臍を決め給うたのであつた。

To be or not to be, that is the question. とは、ハムレットが人生の岐路に立つて叫んだ有名なセリフである。」の場合 to be 生きながらえるべきかという意だそうな。イエス先生もまたまさにその断末魔にお立ち遊ばしたのであつた。「どうぞ」の苦い杯をわたしから取りのぞいてください。しかしみこころのなるようにしてください」とは、實に血の汗のしたたるようなお祈りであつた。イエス先生はどうして、あくまで小憎らしいほどにピラトの法廷で泰然とした態度を、また十字架上で、いささかも取り乱すこともなく毅然とした態度を保持遊ばし得たのであらうか。それは取りもなおさず、前夜ゲッセマネの園において、若干取り乱し給うたようではあつたが、腹がさだまり、心が落ち着くまで思索、瞑想、祈祷を行ない給うたからであつた。

マリア崇拜——わが子を追え——

クリスマスの日、たいていの人々はイエスさまのご誕生を祝うのであるが、この日、私は御母マリアをお慕い申し上げるのである。それは実を言うと、私はいまなおこの歳になつても、必ず自分の母を思い出すからだろう。

カトリックの教会では、聖母マリアの御像が、正面に安置されている。先年ブラジルに旅した折り、タクシーの運転手が、会堂の前で前方注視を一瞬怠つてまでも首を会堂の方に向け一礼するので、思わずビクッとしたものだ。会堂の壇の中央にマリアさまが立つていらっしやるからである。

キリスト教が地中海に進出した頃、地中海の沿岸の諸地方到る所に女神像が立つていたのである。パウロの書簡にも女神がしばしば現われている。

元来キリスト教伝道の秘策は、いずれの国に行つても、異教徒らの宗教を自家薬籠の中におさめることにあるから、キリスト教は真先に、地中海沿岸の女神を取り入れて土着化してしまつた。その結果、キリスト教に聖母崇拜なるものがおのずから発生するに至つたのである。

しかしそれはそうであるとしても、聖母マリア崇拜が行なわれるに至った理由は、やっぱり私は聖母マリアが、実に母としての模範であつたからであろうと考える。

胎 教

ルカ福音書一章には、イエスさまが母君の胎内にいらつしやつた時のことのが書かれている。このルカ福音書の第一章によると、聖母マリアさまは、腹の中にイエスさまがいらつしやるところからして、自分の子が世の救い主になるような胎児である、という意識を持つていられたことがわかる。何卒、一般のご婦人の皆さまも、日々大きくなるおなかをさすりながらも、やがて生まれて来るわが子は、きっと世のため人のためになるであろう、確かになるであろうと、念じ祈りながら精進されるべきである。

宗教教育

ルカ福音書二章によると、イエスさまはご両親に伴われてエルサレム詣でをしておられる。わが国の伊勢神宮は男女が別処にて参拝することになつていて、エルサレムのお宮でも、男女は

それぞれ別な所で参拝するようになつてゐる。それがためにか、イエスさまはつきり父君とご一緒しているものと、母君は思われ、父君は父君で、多分イエスは母君と共にお参りしているものとのみ考えておられた。イエスさまにはぐれてしまわれたご両親は、迷い子さがしをされたところ、何のことかイエスさまは学者と問答をしておられたというのである。

私は日本の教会も、米国の教会のように子供を伴つて教会に来て、家族が席をつらねて礼拝するのがよいと考える。

私はキリスト教徒の神棚は食卓であると考える。夕食を家族団らんの中にいただく時に主婦が食前の感謝をする。その食前の感謝に加えて、不在の父や、兄や姉のために一言ずつ祈る。それはまことによい宗教教育であると考える。また息子や娘が、大学に進学したり、海外に出張した場合、夕食ごとに、今ごろ母はおれのために祈つとるだろうなあ、かあちゃんは私のために祈つていてくださるだろうなあと思い出す。若い者にとつて母を思い出すことぐらい大切なことはないと思うがどうであろう。

わが子を追え

マタイ福音書十二章には、イエスさまが教えを説いていらっしゃると、母マリアは、屋外に立

聞きしておられることが記されている。

「汝の母、戸の外に立てり」と人々が申し上げると、「母とは何んぞ、神のみこころに従う者こそ母である。父母よりも、われを愛せぬ者はわれにかなわざる者なり」と喝破していらっしゃるが、私はそんなことを言われながらも、わが子を追いたもうたマリアさまは、実にエライと思う。

エジソンの母は高校の先生に来校を促されたことがある。

「アンタの息子は、高校教育を受ける力がない。引き取るように」と宣告された。しかしエジソンの母はそんなはずはないと考え、誰がなんと言つても、わが子から夢を消さなかつた。そうして試みに医者に見てもらつたところが、エジソンは難聴であることがわかつた。そこで聴音機を買い求めて用いさせたところが級の一番を取るようにならなかつた。

誰が棄てても、母はわが子から夢を失つてばならない。いずこまでもいずこへなりとも、母はわが子を追うべきである。マリアさまのごとくに……。

ゴルゴタまでも

ヨハネ福音書十九章にはイエスさまの十字架の下に、母マリアがたたずんでいらっしゃるところがある。

「私は絶対ゴルゴタの丘なんかへはついて行かんぞ」などという態度をおとりにならずに、まがあたりにわが子のはりつけを、十字架の極刑を見守つておる、何という気丈夫な女性であろう！世の人が悪くわが子を棄て去つても、母たる者は決して捨ててはならぬ、マリアさまの「とくに。

使徒行伝第一章には、イエスさまの栄光の光景が書かれている。その時にも母マリアは群衆の中に立つておられる。

ゴルゴタの丘の上で、慘たるわが子のおしおきを見せつけられたのにこりて、もう行くまいぞと言つて行かなかつたならば、栄光のキリストを拝むことはできなかつたであろう。

私の母は、死期の近いのを予期して、

「八幡から牧師さんに来てもらつて、洗礼というものを授けてもらつておくれ。わしはおとつあん（夫）の行つておられる極楽浄土へ行くよりも、安が行く天国へ行つて、安の来るのを待つとるよつて」

といつてきかなかつた。そこで八幡から牧師さんに来ていただきて、横たわつたままでバブテスマを受けたそうである。本当に世に母君にまさる者がまたとあろうか。

（昭和48年1月20日号『復活の丘』）

理想の国

第五部 牧師・教育者として

イエス先生の説教題は、千篇一律「神の国」の一点張りだった。先生の「神の国」も、また一種の理想国であつた。

古来、いろんなユートピアが構想されている。エデンの園、高天原、極楽淨土、桃源境、蓬萊島、浦安の国、プラトンの共和国など。シナの孔丘もまた、まことに夢見る人であつた。

『書經』には「堯舜の世」、『春秋公羊伝』には昇平世、大平世、『礼記』には礼運篇のごとき理想国が描かれている。

近くはトマス・モアの『ユートピア』、H・G・ウェルズの『近代のユートピア』、カンパネラの『太陽の都』など、実に多くの著作、創作が書かれたが、近來筆をもつてせず実行をもつて書かれつつあるものもある。

かのイスラエルのキブツの共働体のごときは、その最たるものである。キブツ運動はオッペン

「きよい人には、すべてのものがきよい」（テトス一・一五）。

ハイムが富豪ロスチャイルド家の出資を得て、築いたもので、ガリラヤから水を引いたり、井戸をうがつて砂漠に緑地帯を作っている。そこへ全世界からユダヤ人が帰り集まっている。私は先年イスラエルへ行つて、滞在中昼食をキブツでとつたが、清潔であるから安心して新鮮なサラダをいただきることができた。

わが国にも武者小路氏の「続新しき村」^{（くつぎのむら）}が、八高線沿線の武藏野の櫟林の中に存在しておるそ
うであるが、伊賀の上野の山岸会はすでに三万、四万人の共働体をなしているとのこと。

二十年前ブラジルに行つた折り、アリアンサには弓場勇氏の共働体があつたが、その後どうな
つたか。

これらの共働体は皆、持ち物を共にして、私産を蓄えず互いに助け合つて、全然別世界を成
している。また近頃那須の原にもクリスチヤンの共働体の村が始まられたようである。私は、こ
の共働体のコミュニティこそは、あるいは理想郷建設への試みではありはせぬかと考えている。

ところで、イエス先生の「神の国」だが、古来いくつも構想されたユートピアの中で、先生の
「神の国」くらい卓越したユートピアとてはあるまい。先生提唱の「神の国」は、つまるところ、
神を統帥者とする理想国であつて、その憲法は二カ条から成つていたようである。「心をつくし、
精神をつくし、思いをつくして神を愛する」、これが第一条であつて、

第二条は「自分を愛するように隣人を愛すること」である（マタイ二二・三七、三九）。

すなわち、ただ一人の神を父とし、その下に全人類が兄弟姉妹として相睦み、相愛して生活する。それが「神の国」なのである。

イエス先生は、「神の国は汝らの中に (among you) ある」と仰せになつた。すなわち十二名の使徒たちが、持ち物を同じうして（使徒行伝四・三一）、キリストを中心として相愛して生活していた。それを見て、神の国は汝らの中にあると仰せになつたのである。

私はイエス先生の真似をして、神の国は汝らの中にある。汝らの家庭は神の国である、と指摘するであろう。

明治時代には亭主関白もあり、また意地悪のしゅうとめもいたが、ようやく今日にあつては、たいていホーム・スイート・ホームになつてきたようだ。

私はうちの卒業生が、結婚の披露宴に私を招いてくれると、いつも色紙に、

「誰是此家之主　主是神」

と書いて雲版に入れて贈呈することにしている。「誰がこの家の主人であるか、神さまが主人だ」という意である。たとえ女房の発言であつても、道理にかなつていたら、夫も姑も皆それに従うべきである。

昔ビスマルクは、「英語にあつてドイツ語にならやましい語がある。それはホームとジエントルマンである」と言つたそうだが、ホームという語は、決してハウスではない。況んや家の

庭でもない。一種言うに言えぬものである。

夫の物はあたしの物、女房の物はおれの物で、家の隅のゴミまでも共有物である。

私は、理想の学校はホームライク・スクールで、理想の社会は実にホームライク・コミュニティーであると考えている。

(昭和49年8月25日号『復活の丘』)

小さいもの

ただ今聖歌隊が合唱してくださいました讃美歌四六三番、

ささやかなる	しずくすら
ながれゆけば	海となる
こまやかなる	まさごすら
つもりぬれば	山となる

「私は聖徒たちのうちで最も小さい者である」(エペソ三・八)。

は今日の私のお話とぴったりしている。別に打ち合せたわけでもなかつたのに、まことに不思議である。

イエス先生は実に大きいことを言うお方であつた。「われはこの宮をこぼち、三日で再建してみせる」だとか、「天地は過ぎ行かん、されどわが言は万代までも不易である」とか、とてつもない大言壯語を吐かれた。

けれどもまた、イエス先生は好んで小さいことを口にされた。マタイ福音書をひもとくと、「最も小さいいましめの一つでも破り……」（五・一九）、「小さい者の一人に冷たい水一杯でも飲ませてくれる者は、よく言つておくが、決してその報いからもれることはない」（一〇・四二）、「それ（からし種）はどんな種よりも小さいが」（一三・三二）、「小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる」（一八・六）、「小さい者のひとりをも軽んじないように」（一八・一〇）、「これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」（一八・一四）等々、まるで口癖のようにイエス先生は「小さい」という言葉をお語りになつてゐる。

イエス先生はパラブル（たとえ）をもつて深遠な真理をお説きになつたが、ここにもまたカラシ種の例を用いて、神の国をお説きになつてゐる。

「神の国を何に比べようか……それは一粒のからし種のようなものである。地にまかれる時に

は、地上のどんな種よりも小さいが、まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどである」（マルコ四・三〇—三二）。

日本人にカラシの種といつてもピンと来ないが、ごま 胡麻や油菜の種とでも言えばよくわかるかと思う。

このたとえ話で、イエス先生の「神の国」は、小さいところから大きく成長し、ひろがり、進展するものであることがようくわかる。現にイエス先生には、十二人しか使徒はいなかつたが、今日にあつては全世界に無数の使徒が活躍している。よくもここまで教えがひろがつたものである！

ルカ福音書の一七章には、「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に、『抜け出して海に植われ』と言つたとしても、その言葉どおりになるであろう」とある。私は昭和二十年三月、三十年住み慣れた中国を去つて、引揚げて、日本へ帰り来つた者だが、その時、万年筆や手帳すらも持ち帰ることが許されなかつた。しかし、大切に胸中に抱いていた一粒のカラシ種ほどの信仰は、取り上げられることもなく、まんまと持ち帰ることができたのである。そのカラシ種の信仰とはとりもなおさず「信じて求めるものは、みな与えられる」という一片の信念にほかならぬ。

皆さん、わが桜美林学園はこのカラシ種の上に打ち建てられたものなのである。

本田路津子という歌手は、桜美林大学出身であり、プロの歌手ではあるが、教養あるごくしろうと風のいでたちで、実に美しい声でうたっている。彼女のヒットソングに、

一、ひとりの小さな手 何もできないけど

それでも みんなの手と手をあわせれば

何かできる 何かできる

二、ひとりの人間は とても弱いけど

それでも みんながみんな集れば

強くなれる 強くなれる

というのがあります。彼女が桜美林大学在学中、英語を訳してふしをつけた歌だそうである。
なんとよい歌ではないか。

姫路に白鷺城というお城がある。その城壁に「姥ヶ石」^{うばがいし}という石がはさまっており、金網で囲われている。これについて次のような話がある。

何でも築城の時に、人々は競つて大きい石を寄進したのだそうである。四畳半大、八畳大といつて、一つの部屋のようなどつかい岩石が積まれている。しかし、お殿様の幼い頃の乳母は、貧

しいこととて、ただ自ら転ろがせば動くようなちっぽけな一石を寄進したんだそうである。ところが地震があつて、城壁がくずれかけた時に、なんとその乳母のさきげた石が、少しも動搖しなかつたので、城壁はあやうく崩壊を免れたとのことである。このことは物理学的にもあり得ることで、小さな石はかえつて動かぬものだそうである。

四月二十一日の日曜日には、学園の丘の上の教会堂で、クリスチャン大会を開いた。大風雨の日であつたからでもあるが、集まつた者は少なかつた。聖書には、

「恐れるな、小さい群よ」（ルカ一二・三二）とあるから、決して歎くべきではない。ヤコブ書には、「ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか」（三・五）、「小さな大事」（ルカ一六・一〇）とある。塩はごく少量にても、大きい鍋いっぱいのステップに味をつけることができるのであるから、本当に小さき群れでも卑下することも、心細く思うこともないであろう。

（昭和46年5月15日号『復活の丘』）

キリストへの成長

マルコ福音書はイエス先生の生誕記事だの、少年時代の物語など、さっぱり書いて伝えようとはしていない。ただイエス先生がヨルダン川で洗礼をお受けになると、聖靈が鳩のように降つて、「あなたは私の愛する子」であると宣せられたということから書き始めているすなわちマルコはその時その瞬間に、イエスの中に聖靈がはいり込んで、イエス先生はキリストにおなりになつたのであるから、それ以前の伝記など少しも書き記す必要がないと考えたのでろう。

ところがマタイやルカは、イエス先生が、母マリアのおなかにお宿りになつた時から書き出して、イエス先生の成長のプロセスをくわしく書き記している。実は私もイエス先生は、成長、発育、進歩してキリストにお成りになつたと考える者の一人である。

ルカ福音書四章の一六、一七節を見ると、イエス先生は若き日より、お生まれになつたナザレの会堂シナゴーグにお通いになつたことがわかる。当時にあつては、聖書の各書がことごとく一つの会堂にあつたわけではなく、ある書はカペナウムにあつたのであるが、幸いにもナザレの会堂にはイザヤ書があつたのである。

かの賀川豊彦氏は、イエスの愛読書はイザヤ書であると言つておられる。そういうえばイエス先生の思想といい、ご行動といい、イザヤ書の愛読者ならではと思われるふしぶしがある。「心をつくし心ばせをつくし、主なる汝の神を愛すべし、またおのれを愛するがごとく神を愛すべし」という聖句は、ナザレの会堂で、今日の教会で主の祈りが合唱されるように、合唱されていたのであるそうな。

旧約聖書のごつい大冊の中から、あの一句を選び出すことは容易ではないだろうに、イエス先生はよくもあの一句を選び出されたものだと、従来まことに驚いていたのであつたが、ナザレの会堂では、あの聖句が暗誦句だつたと聞かされでは、なるほどと思わざるを得ない。

イエス先生がナザレの会堂へ通われたことは、イエス先生をキリストにまで育て上げたといつても大いなる間違いではない。ことにナザレの会堂には、「係りの者」がいたのである。係りの者は今日でいうと、長老執事みたいなものであつたろうか。その係りの者こそは少年イエスの日曜学校の先生だつたと言つてよからう。

（昭和39年2月1日号『復活の丘』）

プロビデンス

あらうみをも うちひらき
すなはらにも マナをふらせ
主はみこころ なしたまわん
そなえたもう 主のみちを
ふみてゆかん ひとつじに

讃美歌四九四番

プロビデンスを摂理と中国人は訳した。「摂」という語は助けという意ではあるが、プロビデンスなる語の訳語としては、むしろ「先見」という語の方がベターかと考える。

人間が悲運に出くわした時には、困惑もし、悲歎に暮れ、絶望もするものであるが、その悲運を、ずっと後年に至つて回顧する時に、「ああ、あの時の悲運！」あれはあれでかえつてよかつたのだつた。あの時にあのことがあつたればこそ、自分の今日があるのである」と言つて、神の摂理を今更のように神に感謝することが、往々あるものである。それをすなわちプロビデンスの

信仰とは言うのである。

シェークスピアのセリフには、「一羽の雀といえども摂理の御手によらずしては落ちはせぬ」という名句がある。ミルトンの『失樂園』には、「世界は何処に行かんとするか、摂理のみ手こそその導き手たれ」という言葉で結ばれている。

（昭和50年6月1日号『復活の丘』）

ミッショントスクールとクリスチヤン・スクール

ミッショントスクールとクリスチヤン・スクールとは同意語であろうか。私は少しく違うと考える。

いわゆるミッショントスクールとは何であるか。ミッショナリー（外国宣教師）が創立したものをミッショントスクールと呼ぶのか。もしそうなら私たちの桜美林学園はミッショントスクールではない。

次に、創立者がミッショナリーでなくとも、外国のミッショントスクールから助成金をもらって経営している学校は、ミッショントスクールであるのか。もしそうなら私たちの学園はびた一文、外国の

ミッショングから助成金を受けていないのであるから、この意味においてもミッショング・スクールではない。（もつとも断つておくが、ミッショングから助成金をもらっていないのは、何も私たちが外国の援助など受けるものかと言つて、かたくなに頑張つているのでは決してなく、未だに彼らがくれぬだけのことである。）

さてなぜミッショナリリーは学校を建てるのであろうか、すなわちミッショング・スクールの建学の精神、動機は何であろうか。それは外国人であるため、異邦に来て伝道しようにも、パーソナル・コンタクトを得ることがなかなか容易でないため、そこで学校を建てたのである。表向きはどう言つっていても、本当のところはそこにあるのである。

特にコンバーショング適齢期の青年男女を多く捕えるためには、学校を持つことは極めて賢明なことである。もしミッショング・スクールがそのような意味であるならば、わが桜美林学園もミッショング・スクールと呼び得る。なぜならば、私たちは中国から引揚げ帰つて農村に入り、農村教化をもくろんだのであつたからである。

村というものは町と違つて、伝道の鋤は容易に入るものではない。そこで私たちは学校をまず建てるにしたのである・学校であると、村々の旧家の子女が争つて入つてくるのである。私たちが桜美林学園をここに建てて以来、付近の村々へ福音は入り込んでいる。今ではいずれの村で伝道集会を開いても、讃美歌は座敷もわれんばかりに響くし、司会できる娘たちがいくらでも

いる。日本歴史はじまつて以来、この村で洗礼を受けた者は、僕だ、私ですと言う者が、村々の青年男女の中に存在している。このように一つの使命を抱いて建てられた学校がミッショն・スクールである。

私たちの桜美林学園は、かくのごとくにミッショն・スクールとしての使命を果たしつつあるが、さらにクリスチヤン・スクールの使命も果たしつつある。

日本のキリスト教はまさに百年の歴史を持つとしているのであるから、ただミッショն・スクールだけでなく、クリスチヤン・スクールなるものが出現すべきでありはせぬかと思う。すなわちクリスチヤンの子女のみが集合して、クリスチヤン・ライフを学校生活に生かしめるところの学校があつてよいと思う。

異教徒の子女を入学せしめて、それを捕えてクリスチヤンとしようとするミッショն・スクールでなく、クリスチヤンの子女を集めて学校内に濃厚な宗教的雰囲気をみなぎらせて、クリスチヤン・ライフを営ましめる学校が一つや二つあつてよいと思う。こういう意味で私たちの学園はまさしくクリスチヤン・スクールである。現に牧師の家庭から来ている生徒が四十数名ある。ここには全国三十四県からクリスチヤンの子女が集まっている。三十四県だから、あともう十県から生徒が来学するならば、文字通り全国的であることになるわけである。

このようなキリスト教的雰囲気の中で、しかも広く全国から来ている生徒と共に、地元の農村

の未信者子女が仲間に入って勉学する場合、おのずからこの地方は強化されるだろう。かくて本学園建立のミッション（使命）も容易に達成され得るのである。

（昭和32年2月1日号『復活の丘』）

桜美林学園の特徴

近年この地方にあっては、各中学校が中二三の生徒さんたちの父母を集合し、この付近の公私立の高校の責任者を招待してそれぞれ自校の特長を一席演述せしめる、いわゆる説明会なるものが開かれる。このことは、学園経営者にとってはむしろこちらが願つて作っていただきたい機会であるので、私はありかたく思つて、川上高校長に伴われて、機を逸せず必ず出かけて行くことにしている。ある中学校では十分、ある学校では二十分の自校宣伝が許される。そこで私が手短く常に語ることにしているスピーチはI

「皆さん、私は桜美林学園の設立者清水安三)であります。

人々は桜美林のことを“オービリン”と呼ばないで“オベリン”と呼びますが、ジャン・フレツドリッヒ・オベリンは、いわゆるアルザスのプロテスタント文化の建設者として有名な宗教家

であつて、同時に教育者だった人物でありまして、わが國の中江藤樹と實によく似た人物であります。そのオベリンの名を冠した学園は世界のあちこちにあります。ブラジルにも、中国にも、そしてアメリカにもありますが、私ども夫婦は米國オハイオ州のオベリン大学を卒えたものであり、かつ学園に美しい桜の林がありますから、こうした名称を用いたのであります。

学園の講堂には右にジャン・フレッドリッヒ・オベリン、左には中江藤樹の額が掲げられています。不肖私は中江藤樹と故郷を同じくする者であります。

さて隕られた時間をもつて桜美林学園の特長を申し上げまするならば、本学園の教員はとつても生徒をかわいがります。それこそ目の中に入れんばかりであります。男の生徒にはクンを付し女生徒にはきんをもつて呼びます。その一事をもつてしても生徒の人格を尊重することがおわかりであります。

また上級生か下級生を愛することも一つの特長であつて、それは全くうるさいくらいであります。従つてお説教したり吊るし上げたりなど致しません。

次に本学園は生徒に猛勉をせしめます。教育の原理がどうのこうのといつても、入学試験の難関を突破せしめなければ子供たちの前途は開かれないのであります。したがつていやが上にも好学の精神を燃やしめるのが私の教育方針であります。

次にいくら学問がよく出来ても、体が弱かつたらそれは駄目であります。大学入学の合格通知

を受けたはよいが休学届を出さねばならんようでは駄目であります。とくに女性のごときはどんな賢母でも死んでしまつては駄目で、いかに良妻でも病弱では夫にとつては最も不幸であります。学園は何しろ郊外にあります。したがつて新鮮な空気を吸つて勉強できますから、桜美林へ空気を吸いに来るだけでも値打ちがあります。

終わりに学園はお子様の頭やからだを作つて差し上げるばかりではなく、精神を教育するのであります。親馬鹿チヤンリンといつて、わが子に対して種々なる夢をお抱きになるでありますようが、最終的には結局やはり「わが子がどうかグレないよう、堕落しないよう」念じられるでありますよう。学園の生徒は未だかつて町田警察署の補導を受けたことがありません。私たちの学園は生徒さんたちに靈の糧をお上げいたします。聖書こそはそれであります。

祈りと讃美をもつて、まずその日その日の出発といたしております。私たちの学園は知育、体育、靈育の三育を並び行なうのであります。どうか皆さん、私たちの学園へお子様をおよこしください。私どもは誓つてご期待にそういう教育をいたしますから……」。

これだけ私が述べると、川上先生が入学に関する事務的な説明をされるのであつた。どうかして来春は続続として入学願書が来るようになると祈るのみである。

(昭和34年12月15日号『復活の丘』)

学園はどうしたら発展するか

ある私立学校の校長さんが私に、「どうしたら学校を発展せしめ得ますか」と問われた時に、私は、「まず生徒募集のキャンペインに成功せねばあきませんね」と申し上げ、「代議士が選挙運動に心血を尽くすように、生徒募集に熱狂するがよろしい」と申し上げた。

生徒募集のシーズンに入つたら、教員も生徒も卒業生も、挙げて生徒募集に努力すべきである。しかし生徒募集をいくらやつても、学園の教育そのものが充実していなければ、決して発展するものではない。

では桜美林がどういう学園になつたら、世の人は子女を学園によこすであろうか。

まず第一は、生徒が学園在学中において、教養を高め得るかどうかが、最も大切な問題である。「悪しき木は悪しき実を結ぶ」のであるから、卒業後において良い成績をあらわして貰わぬと、学園は発展しない。差し当たり中学部や高校部は、卒業生がむずかしい高校や大学へ入学してくれば、学園は向上せぬのである。

高校の生徒にとつては、受験勉強というものが、日本の時代苦となつてゐる。本当に気の毒で

あるが、日本の教育が改変せられざる間は、この時代苦を忌避する者は落伍せざるを得ないのであるから、本当にしようがない。

学園はこの時代苦から生徒たちを回避せしめようとはせず、かえつてこれにぶつかって行くように指導しているのであるが、このことはどうも一朝一夕では成し遂げ得るものではない。少しづつ、去年よりは今年、今年よりは来年というふうに、卒業生の学力を増進して行くよりほかに方法はないと考える。

学園の宗教教育

特長のない私学は決して栄えない。では桜美林の特長は何であろうか。宗教教育によつて生徒の品性を向上せしめることも、特長の一つである。

ミッショニ・スクールであるからといって、抹香臭いのが何も能ではない。味噌の味噌臭いのは腐敗がひどい味噌である。宗教もあんまり抹香臭いファンタカルでは駄目である。

学園の雰囲気がリリジアスであればそれでよいのである。キリスト教を馬鹿にしたり、クリスチヤンを迫害したり、クリスチヤンの教員を軽んじたりせねばならぬ。あんまり説教ばかり聞かせようものなら、必ず食傷してしまうものである。アペタイトがないのに、食わせられること、これほど腹によくないものはない。うまい物もまずくなる。

終わりにもう一項だけ加えることを忘れてはならぬ。学園を発展せしめる第一の秘策は、神に学園のために祈ることである。元来われらの学園は、ゴールドの上に建てられたものではなく、ゴッドの上に建てられたものである。祈りこそは学園のファウンデーションである。この建学の精神さえあれば、時を得るも得ざるも、人材でも資金でも生徒でも必ず与えられるに決まつてゐる。またこの信念あるが故に、われらは常に安んじて、希望に満ちて、この学園を発展的に運営して行けるのである。

（昭和35年11月5日号『復活の丘』）

キリスト教主義の学校

隣人を愛せよという戒こそは、キリスト教の第一の主義であるが、私たちの学園は学校の隣家や町内のお子さまを特にお入れしている。

八王子の視力薄弱の少女に入学を許して卒業後は音楽学校にまで進学できるよう育てておあげした。その視力薄弱の少女の手を取つて毎日通学し、教室では隣席に座つてずっと在学中ヘルプした女生徒、これも特記に値する。

また盲目の青年に短大入学を許したことがある。その青年のために教授たちは毎学期口答で試験を受けることを許された。彼は卒業後明治学院大学に入学したが、この度同大学を卒えて米国へ留学する。

イエスは足なえを憐み給うた。滝の沢のTさんはお顔は美人であるが、ビドイ小児マヒで、踊るがごとくに歩いている。Tさんが高校の入試を受けた時、桜美林高校は不合格にしたけれども、私はお氣の毒に思つて、「ではボクのオフィスで、個人教授して差し上げましょう」と言つて、Tさんは高校教育を私のオフィスで受けた。Tさんは路上で倒れたら、誰かが手を貸してくれねば起き上れぬ不自由なカラダではあるが、私の個人教育の後短大の英文科に入り、卒業後は塾を開いている。

またある年は、強度の小児マヒで足の不自由な青年を入れた。彼はいざりながら、谷川岳の頂を極めもしたし、スクーター通学すらもやり遂げた。猿のような声であるが、性質は実に明朗で、誰にでも愛せられる青年とはなつた。この頃は自動車を乗り回している。

今年も難聴の少年を特に入学許可したが、ずっと前にもひどい難聴の女性を短大に入れて差し上げた。彼女は幼い頃聾啞扱いされていたので、余りにも早口に喋るのでそれには閉口したが、どうにか講義を聞いて卒業された。今ではお母さまで、銀行の支店長夫人になっている。

(昭和39年4月号『復活の丘』)

汝等今知らず、後知るべし　——大学の入学式で——

皆さん、ようこそおいで下さいました。皆さまの中には、他のいずれの大学にも目をくれず、桜美林大一本でもつてご入学された方もありましよう。中にはスキーの選手のように、あちらの谷でも、こちらの谷でも滑った後にご来学下さった方々も少なくないであります。

皆さんはプロビデンスという言葉を知っていますか。シェークスピアは二羽の鳥といえども、摂理なくしては落ちはせぬ」と言つております。

聖書には、「汝等、今知らず、後知るべし」というお言葉があります。皆さまが自分の目指した大学を落ちたことは、その時はがっかりであつたであります。が、後年必ずあの大学を落ちて、桜美林に入つたことは、プロビデンシヤルだつたと思われるであります。また私どもはぜひ、皆さまをそう思わせるように仕向ければなりません。

私は昭和二十年の八月、日本が戦争に敗けたばかりに、私が北京朝陽門外で経営していた崇貞学園を失いました。そしてただリュックサック一個を背負つて、引揚げて、翌昭和二十一年三月日本に帰りました。あの時私が北京から引揚げて日本へ帰つたお陰で、このように大きな学校を

建てることができました。

今となつてはすべては感謝であります。あなた方も他校をおつこちたことが後年感謝となりますように……。

よその嫁は美しく見える

あなた方には、他の大学がうちの大学よりも、より優れた大学であるかのように見えるときがあるかもしれません。とかく他人の女房が美しく見えるのと同じであります。うちの大学を比較するためには、それらの大学へ入つて見ねばわかりません。そしてそれらの大学へ入るためには、うちの大学を中退して転校せねばなりません。そしてそれらの大学へ行つて、やつぱり桜美林の方がましであると考えても、もううちの大学へはもどつては来られません。

それ故に、学校というものは比較することがむずかしいのであります。よくうちの短大を卒業して、他の大学の三年に編入した卒業生が、桜美林の方がよかつたと、お世辞かも知れませんが言います。

皆さんも迷いますか？

むかし徳富蘇峰は東大の前身だった開成校を中退して同志社へ転学しました。同志社へ入つて

一年も経ないのに、再び同志社を去つて東京へ上京いたしました。

新島先生は言葉を尽くして、止まつて去らぬようにおすすめになりましたが、それでも同志社を去つて行きました。その折り新島先生は、自らの甥なる少年に錢を手渡して、「これでうぶんを一碗、くわしてやれ」と命ぜられたので、その少年は徳富蘇峰を追いかけて、ようやく七条の大福寺で追いついて、うどんをふるまうことができたそうであります。私もこれに似たようなことをしたことがあります。

ここに実に不思議なことがあります。年賀状をくれる多くの人々が、学園を中退した人々であることです。一昨年、私が歐米に行つた時にシアトルで私にご馳走してくれた女性も、ロンドンの空港で私を迎えてくれた女性も皆、中退して他校へ入つた人たちであったことです。

私は皆さまから、年賀状を頂かなくともよいし、慕つてくださらなくてもよいから、どうか中退はせずに、どうか一九七四年の三月には、袖をつらねて、共にご卒業くださいませ。米国の大학なら皆さまを一九七〇年クラスと呼びず、一九七四年クラスと呼んで、一九七四と染め抜いたジャケツのそろえを着るのであります。どうか一人も落伍せずに一緒にご卒業下さいますように……。

本学園の特徴

私たちの学園には土壙もなければ柵もない、全く無柵教育であります。無柵は無策に相通じましようか、柵がないために泥棒が入るのかも知れません。すでに二回泥棒が入りました。

またぐるりに土壙がありませんから、火事が出るかも知れません。路傍の枯れ草に道行く人がたばこの吸いガラを投げても、土壙さえあれば、火事の被害はなかつたやも知れません。火事をすでに二度出しました。

それにもかかわらず、私は学園には柵を設けないであります。垣がないから門がありません。門がないから門番もおりません。新島先生といえども、ごつい土壙を寮のぐるりに設け、キヤンパスの周囲にとげのあるキコクの生け垣をめぐらされましたが、私は幼稚園のぐるり以外には、いっさい柵を設けないのであります。学校は監獄ではないのでありますから、垣を設けずに学生めいめいが自分を護るよう指導すべきであります。

次にうちの中學、高校には、教室に教壇がありません。これは教育哲学者ジョン・デューアイの主張であります。教師と学生とが同じフロアに立つのであります。学生を見おろすことに反対なのであります。大学の方は、一人の女性の教授がたつて頼まれたので、教壇を設けてもみま

したが、二教室を一教室に貫いた大教室を使用せんでもよい時の到来するまでは、教壇を設けることにいたしました。そう幾年も待たずして遠からず、大教室を廃除して、教壇を取り除きたいものと考えております。

古人は師の影を踏まずと教えましたが、私は師の影を踏め、先生生肩を組んで歩いたらよいと申しております。

うちの学園では、さんもクンもつけずに、学生を呼ぶことは絶対に許されぬことになつています。従つて上級生も下級生も同権で、全く長幼序無しであります。

終わりに私のオフィスは、学生には全く無関門です。ノックせずにいつでも入つて来てよろしい。ただし私の宅へは、のつびきならぬ相談の他は平におゆるし願いたい。その代りのつびきならぬ相談ならば、真夜中でも戸をとんとんたたいてください。必ずはね起きてお迎えいたしますから。

それではご起立ください。ひとこと皆さまのために祈りますから。

「神さま、しもべはあなたに、どうか生徒を送つて下さいませ、神もし与え給うなれば、必ず愛と熱とをもつて誠心誠意、導き育てますからとお約束をしました。今、かくも大勢、實にたくさんい、また清らかな男女の兄弟姉妹を与えてくださいまして、ありがとうございました。どうかこれらの学生兄弟姉妹が、向こう四カ年間何よりも、健康に病氣することなく、またすべての

誘惑危険から逃れて楽しく勉学できるようにどうかお導きくださいませ。そうして父上母上の期待に答えることができますように。どうか、これらの学生たちを教え導く先生方に愛と忍耐とを与えて、この切なる祈りをイエス・キリストの名によつて願い奉る、アーメン」

（昭和45年4月20日『復活の丘』）

地の塩・味の素・石けん——短大の卒業式で——

イエス・キリストは、「汝等は地の塩なり、世の光なり」と仰せになりました。この学校の本当の校長はイエス・キリストであつて、私は実は校長代行なのでありますから、イエス・キリストがもしも本日、この壇上にお立ちになりましたならば、必ずや、「汝等は地の塩なり、世の光なり」と仰せになることありますよう。

皆さまは塩の効用については、よくご存じであると存じます。今日では塩をば、種々化学的に用いているようであります。そうした効用は、何分、イエス・キリストはご存じではなかつたでありますよう。ただ味をつける効用と、腐敗を防ぐ効用とだけをお考えになつたことであり

ましよう。

主婦が極めてわずかの塩を、おつゆだのおかずの中に入れますと、おつゆもおかずもとつてもおいしくなります。そのようにあなた方が一人二人おれば、あなたがたの働く会社、役所、お店、それからあなたがたの巣組むところの家庭は、なんとなく味わいのあるものとなるべきであります。

他日あなたがたの多くは、お嫁さんになられるのであります。うちの嫁が来てからというものの、うちの家には春風が吹くようになった。食卓でも笑いが湧き、一家団らん、実に楽しうなつた、と言われるようにならねばなりません。

それから塩には、今一つの効用があります。それは、腐敗を防ぐにあります。魚に塩しておくと、いつまでも保存し得るであります。桜美林の卒業生が一人二人コミュニティーにおると、何も別に人をとがめたり批判したりせんでも、黙っているにもかかわらず、そのコミュニティーが堕落せずに腐敗を免れるようになるべきであります。

次にイエス・キリストは、「汝等は世の光なり」と仰せになりました。光というものは、たとえいと小さい光でも、暗黒を破つて人々に方向を示し得るものであります。

皆さんが何れのコミュニティーに入つていても、いよいよという時には、たとえ低い小さい地位にあつても、一つの光として存在して、社員や町民や家族が方向を失つて途方に暮れるような

場合には、黙つてもただ光っているだけで、貴い存在の意義を發揮することができるでしょう。

以上は校長イエス・キリストの訓辞ですが、これより後に述べることは、校長代行の訓辞であります。

私は皆さんに、「あなたがたは、世の味の素たれ」と申し上げたい。味の素は、明治時代に池田菊苗氏によって発見されたものであります。今では日本ではもちろん英米仏どこでも、レストラン、ホテルなどで用いられています。中国料理でさえも味の素を用いているそうであります。極めてわずかな味の素をふりかけるならば、おつゆもおかずも実においしくなる。皆さんはよろしく味の素たれであります。

あなたがたが一人おると、なんとなく、味のあるふんいきを会社に家庭にかもし出す。それはわがオベリンナーの使命であります。

それからもう一つ、私は皆さんに、「あなたがたは世の石鹼であれ」と申し上げたい。むかし荒尾東方斎という人が、京都の若王寺山の麓に隠棲していました。その先生は本名を荒尾精と称して、上海の東亞同文書院を近衛篤麿公と共に創立した志士であります。

ある時、牧野虎次という十五、六歳の少年が、同志社普通学校の一生徒でありましたが、多分新島先生のお墓にお参りしての帰りでもあつたでしょうか、荒尾先生を訪れて、一筆お願ひされ

たところ、「石鹼」と大きく半折りの紙一杯に書いて与えられました。今その「石鹼」の額は東京の霞山会館に保存されています。

石鹼というものは世の垢をおとすものであります。それも人の垢をおとすためには、自分の身を水泡にして省みぬものであります。

イエス・キリストにとつては、石鹼、シャボンなんか見たことも、聞いたこともない物であつたでしよう。私の幼少の時にも、片田舎のこととてシャボンはありませんでした。石鹼がないとまことに不便なものです。

皆さま、石鹼こそは皆さまの模範、お手本であります。どうか桜美林ボーイ、桜美林ガールは、社会に打って出て、わが身を水泡に帰しつつ世の垢をおとしてください。

終わりに、日本では塩をまき散らして、潔める風俗があります。私は今こうして、塩をまきます。そして桜美林をば、潔める儀式となしましよう。「潔め給え、払い給え」。これですっかり潔まりました。

(昭和45年4月20日号『復活の丘』)

クリスチヤン・スクールのあり方

かつて小崎弘道先生が言われた。「同志社はクリスチヤン・スクールであるが、ミッショニ・スクールではない」と。察するに同志社はミッショナリー（外国宣教師）が創建した学校ではなく、日本人の新島襄が創立した学校であるからであろう。ところが新島先生は、なるほど外国人ではないが、先生はアメリカン・ボードからサラリーをもらつて同志社を建てもし、経営もされたのであるから、私はやはり同志社も他のミッショニ・スクールと五十歩百歩の相違でありはせぬかと考へる。

ミッショニ・スクールとは、宣教師が教会のみでは日本の青年男女に接触することがむずかしいから、容易にパーソナル・コンタクトを保ち得るために建てた学校なのである。それ故にミッショニ・スクールの建学の動機、精神は、一つは伝道にあつたことは、欺くことのできぬところである。

日本には新教（プロテスタント）だけでも、八十有余のキリスト教の学校があるが、その大部分はミッショニ・スクールで、ある学校は八十年、ある学校は五十年にわたつて、ミッショニ・

ボーデから年々歳々助成金を受けている。そしてごく少数の学園が、ミッショントボードから何らの援助も受けていないのである。

そしてわが桜美林学園は実にその一校なのである。それ故に本学園こそは、ミッショントスクールではなくして、全くクリスチヤン・スクールなのである。私たちはいずれのミッショントボードからもびた一文援助を受けたことはないが、学園をここまで育て上げるために内外のクリスチヤンの援助を受けている。特に米国、ブラジルに在住するキリスト教徒から特別な援助を蒙っている。それ故にいつまでも、本学園はクリスチヤン・スクールとして經營して行かねばならぬのである。それ故に本学園は八十有余の学校の交わりの場である基督教学校教育同盟に加盟しているのである。

さてクリスチヤン・スクールは、一般の私立学校とどう違うのか。私はクリスチヤン・スクールにはクリスチヤン・アトモスフェアがただよつておれば、それでよいと考える。

そこで、クリスチヤン・アトモスフェアを学園内にみなぎらすために、私は次のようなことを行なつていて。

まず入学式、卒業式、始業式、終業式、創立記念式典などでは、必ず讃美歌、聖書朗読、祈祷をもつて開会して、信仰的な訓辞演説を行なつて後に、頌栄を合唱、祝祷をもつて閉会している。

教員会、教授会も、祈祷をもつて開会し、会食の際には食前の感謝を行なつていている。それから

学園には計十三名の正牧師が働いていて下さって、特に学生との接触の多いポストの担任をしていて下さるのである。

それから学園のキャンパスの中央には、青銅の十字架のある塔が立っている。チャペルの壁には高く、青銅のスリー・ネイル・クラウンが吊るされている。そして学園には校旗掲揚のポールがずらり立ち並んでおり、校旗の色は、幼稚園はだいだい色、中学校は菜種色、高校はえんじ色、短大は紫、大学は青色ではあるが、紋様はみな等しくスリー・ネイル・クラウンである。このスリー・ネイル・クラウンは、「苦難を通じて栄光に入る」ことを象徴した徽章である。(このスリー・ネイル・クラウンを女子学生はブローチとして胸に、男子学生はバッジとして襟に用いている。

これだけのことをやっておれば、おのづから学園にはクリスチヤン・アトモスフェアがただようであろうと、私は考へているのである。

さらに学園では、中学、高校は週一時間のバイブル、短大、大学は週一コマのキリスト教学が課せられている。また学園には二種の礼拝が行なわれている。すなわちサンデーは丘の上の会堂でいともおごそかに行なわれている。もう一つの礼拝としては、中学は火曜に、高校は土曜に、短大は木曜に、大学は水曜にそれぞれ一時間を用いて行なわれている。この礼拝をジュニア・チャーチと称している。

このたび三、四名のクリスチヤンの学生が、このジュニアーチャーチの礼拝に出席簿をつけることに抗議してハンストを行なつた。一理あることである故、学園は出席簿をつけぬことにしてしまつた。そうしたところが、果たせるかなそれまで満堂たつた会衆が、パラパラの寂しい集会になつてしまつた。

次にクリスチヤン・スクールの経営方針の特長は、一体どこにあるのかと考えてみると、私は、経営者が事に直面した時に、まず祈つて、キリスト・イエスが校長だったならば、いかに処理し給うであろうかと考えて、自分はこうしたいと願う意志をかなぐり捨てて、キリスト・イエスの指示し給うとおりに、^{だんこ}断乎行なつて行く、そこにクリスチヤン・スクールのまさに真髓があるのであるまいかと考へる。それ故にクリスチヤン・スクールは、本当はキリスト・イエスご自身を校長としているもので、我々は皆その僕にすぎないのである。

さて以上のように、能う限り、何とかしてクリスチヤン・スクールらしく学園を運営して行こうと考え、一人でも多くの学生をキリストに導こうとしているのであるが、学校は教会と異なり、伝道はそう容易ではない。

けれども在学中は、「なあにキリスト教か、フン」といったような態度を取つた学生でも、さて校門を出て、卒業後、人生の荒波にもまれもまれてゆくうちに、あるいは大問題にぶつかり、あるいは右せんか左せんかの人生の岐路に立つに及んで、必らずやかつての母校桜美林で耳には

さんだキリスト・イエスを思い出してくれるであろう。私たちはそれを待ち望んで、もつて満足しようとしているのである。

（昭和48年7月15日号『復活の丘』）

愛の学園をめざして　——中高の入学式で——

ご父兄の皆様、ようこそおいでくださいました。誠にありがとうございます。これから後も始終何かにつけて学校においてくださいますようお願い致します。

ともかく向こう三カ年、皆様の大切なお子様をお預り致します。

初めにここに座つておられる諸先生方によく聞いていただきたいことは、この講堂のまわりには額がかかるります。まず右側の額はペスタロツチです。イスが生んだ偉大な教育家ペスタロツチは、ジュネーブの湖畔に学校を建てました。私はそのイヨルデンの学校に行つたことがあります、そこは今でも名所として残されています。

ペスタロツチの服はいつでもピカピカに光っていました。ズボンもピカピカに光っていました。その頃のことですから、モーニングコートやフロックコートみたいなものを着とつたでしょうが、

それがピカピカ、ズボンも前の方がピカピカでした。

どうしてかというと、朝生徒が来ると、ペスタロツチの学校は小学校でしたから、「先生ー」と言つて抱きついて、その時に鼻を拭く。それでペスタロツチの服はピカピカに光つとつた。だから今でもペスタロツチは愛の教育家として知られておるのであります。

どうぞ先生方、この度新しく入つて来た生徒たちをペスタロツチのように可愛がつてやつてください。この学校は愛の教育をする所で、それを建学の精神としておるのでありますから、どうぞこの生徒さんたちをわが子のように可愛がつてください。お願いしておきます。

その次の額は中江藤樹です。琵琶湖の湖畔に生まれて、湖畔で教育をした人で、私の故郷の人です。私の最も崇拜するところの一人です。

その中江藤樹の所に大野丁佐という生徒がいました。伊予の宇和島から来ておつた生徒です。

この大野丁佐が医者になりたいというので、藤樹さんが医学を教えなすつた。藤樹先生は医者としても有名な人です。藤樹先生の本の半分は医学の本です。そこで医者になりたいという大野丁佐を毎日教えなさつた。

ところが弟子の伝記の中に、「先生大野丁佐を教えて精魂を尽くしたまう。弟子これを喜ばず」とある。あんな者のために精魂を尽くし給うことはないというので、「弟子これを喜ばず」と書いてある。要するに大野丁佐は劣等生で、すこぶる頭が悪かつた。けれども藤樹先生は一つ所を

二百回も読んでやりなすつた。ところが明くる日一晩寝るとケロツと忘れていた。しかしその大野了佐を教えて、とうとう自立できる医者にしてやつた。

私、清水安三も、大野了佐ほどではないにせよ、まあ大野了佐みたいなものでした。何とならば清水安三という人は、中学校を卒業する時に五十四人卒業した中で五十二番でした。

同志社大学を卒業する時は七番で卒業しました。けれども同級生は八人しかおりませんでした。皆さんにはみなかしこそうな顔をしているけれども、中には出来ん者もきっとおるじやろう。だからこの中に出来ん者がおつたら、そいつは将来清水安三になるかもわからん、と思つて教育してもらいたい。先生方によくたのんでおきます。

その次は同志社の創立者新島襄先生、新島先生はある時にか悪いことをした学生を退校処分にした。その明くる日の礼拝で、新島先生は自分の桑の木のステッキで左の手をビュツビュツと打つた。ステッキが折れて、血が流れる。それで一番前に座っていた堀という学生が、

「先生、何するんですか」と言つて桑のステッキを取り上げた。すると新島先生は、「そういう師悪い生徒が出たのは私が悪いんです。私は神様に代わつて新島襄を打つたのです」と言つて、泣きなすつた。それですから先生がたも、どうぞ悪い生徒が出たら自分自身を責めるよう、どうぞ愛の学園ですから、そのつもりで教育してください。

さて今度はお父さんお母さんたちに申し上げます。中学校から高校にかけての子供の教育はむ

ずかしい。お父さんお母さんも定めし親になるもんじやないわ、とつくづく思つていなさるだろ
うと思います。けれども、この世でお父さんやお母さんの楽しみは何かと云うと、わが子の成人
の他はありますまい。その大切なわが子を教育することは容易でない。ことにこの年頃になると
反抗期といいまして、何か言うと、「うるさいお母さん、黙つといてよ、分つている」と言われ
る。お母さんも悲しいわなあ、今まで可愛がつて来たのに黙つとれと抜かす。うるさいと抜かす。
ウウウウと言つて泣く。けれども年相応にはしかもやり、百日ぜきもやりして立派な大人になる
んだから、子供がそういう態度をとつたからといって、親は腹を立ててはいかん。人は捨てても
親はわが子を捨ててはいけません。ことにお母さんは捨ててはいけませんよ。わが子の後からつ
いて行かなければいけませんよ。わが子の教育をあきらめてはいかん。それがお母さんです。

それからお母さんたちに言いますが、中学校へ入つてからは、家に帰つたら二時間は勉強せに
やいかん。高等学校は家に帰つて三時間は勉強せにやいかん。そうしないとダメです。その二時
間のうち、あるいは三時間のうち一時間は予習、力に応じて予習主義でいくのです。力のない子
は、はじめの間は復習主義でいきなさい。慣れて来たら予習主義に切り替えなさい・予習すると
学校へ來るのがたのしみになるでしょう。

よく教育評論家やマスコミや学校の教育家が、詰め込み教育はだめだと言うけれども、私はそ
うは思いません。英語の単語や国語の漢字を憶えるのには、詰め込まなくては憶えられようはず

がありません。何も理屈はない。

ドッグという字は、犬の形をしていない。だから理屈抜きで憶えるよりほかしようがないでしょう。日本人は漢字をたくさん憶えなければならない。それに英語もやる必要がある。それは米国人がフランス語やドイツ語を憶えるのより、はるかにむずかしいことです。

フランス語やドイツ語は、英語に似た言葉だが、日本人にとつて英語はまるで違う言葉です。

だからぎっしり詰め込まなければならない。中学、高校の間にうんと詰め込んでください。

だいたい中学、高校の時分には、とがく時間が足りないものです。だがよく寝ること、寝ないと体が丈夫になりません。また寝るだけでは丈夫になりませんから、なんでもよいからスボーツをやつてほしい。それに歩くこと。この学園にはスクールバスがあるけれども、渕野辺から学校まで、この程度の距離は歩くことです。歩く人は偉い。これくらいは毎日歩いたらよいと思います。とにかく諸君は丈夫で長生きすること。私みたいに八十まで生きることです。それが第一です。

寝て、運動して、体を丈夫にしておいて、そして勉強せにやならん。勉強しとらんときは、寝るか運動をする。寝とらんときは、勉強するか運動する。そのほかのことにつ使つ時間は、向こう三年、あるいは六年間、ないと合点するんです。ほかになんにも時間がない、そういうふうに一生懸命にやつてもらいたいものです。

(昭和51年4月10日、入学式式辞)

賢い親——新入生を迎えて——

むかし私が米国の大大学へ留学した時、最初の一年間は、私は求めて大学生の寮に入れてもらいました。私の隣室のジャック君は、実に妙な性質で、ルームの壁を女の絵で飾つておりました。中には裸体の絵もあれば、美しい乳房が二つ並べて画かれている絵もありました。そうですね、三十枚も貼られていましたでしょうか。

やがて学期の半ばともなつたら、学校へは年中行事のマザー・アンド・ファザー・カミングデーがやって来ました。この日には学校のすべてのスポーツの試合が行われ、コンサートや演劇も行われました。我輩はもともと全く芸なし猿ですから、自らの住む寮で紅茶、コーヒーの接待をする役に回してもらいました。

ところが例のジャックのパパとママがやって来ました。ジャックが末っ子だつたものですから、すでに五十過ぎたママ、六十近いパパでありました。我輩がジャックのルームへ案内したところ、ジャックの奴、まだベッドの中に横たわっていました。そのことよりも我輩を驚かしたことは、ジャックのお母さんが、その壁に貼られている女の絵を、柄のついた眼鏡を用いて眺め、「おお、

ビューティフル、おおプレティ、キュウト」等々言つて嘆称されるではありませんか。私は思わず日本語で、「この親にしてこの子ありかい。親が助兵衛なら子もまた助兵衛だなあ」と、口ずさんだものでした。

ところがその年のクリスマスの前日、ジャック君のところへ母親から小包でクリスマス・プレゼントが届けられました。その小包には、ゲツセマネの園でイエスさまが石の上に手をついて、夕日を拝んでいらっしゃる一枚の油絵が、ジャックの大好きなホームメイドのケーキと共に入っていました。ジャックはさっそくその油絵を部屋の壁中央にかけました。そしてこのマザーから送ってきた絵と従来の淫猥な女の絵とはどうもマッチせぬと言つて、従来の絵をことごとくはいでしまって、その代りに自分が幼少から住んだ「我が家」の写真だの、自分が日曜日ごとに通つた教会堂の写真等をピンで壁に貼りつけました。

同じ寮に住む学生たちは、口を揃えてみな、「ジャックのルームは變つた、變つた……」と言つて半ば称嘆し、半ば弥次つて批評しました。

それから冬が去つて春が来ると、大学にはマザー・アンド・ファザー・カミングデーが来ました。日本の大学でいう大学祭のことです。そしてジャックのお父さん、お母さんもてくてく再び田舎からやつてこられました。そしてお茶のサービスをしている我輩など見向きもせず、まっしぐらに階段を上つて、ジャックのルームへ向かわれました。ジャックはバスケットボールの遊び

に行つていて不在だったのですが、ゲツセマネの園にひざまずくイエスさまの聖画を中心に清く美しく飾られた璧を眺めて、ジャックのお母さんは両手を合わせてたたずみ、ただもうよよと泣いてうれし涙にくれておられました。

お父さま、お母さま、気短かでは駄目ですよ、ぐんと遠回りにお子さまを導いてください。反抗期にある息子、娘を、このジャックのお母さんのごとく、根気よく指導してください。そして立派に教育の仕上げにご成功ください。

（昭和56年5月「桜美林大学だより」）

巣立ちゆく皆さまへ

月日のたつのは早いものだね。早やもう卒業して、母校桜美林高校を後にして、出て行くんだつてね。

さて別れに臨んで、今更ながら言つてきかせておきたいことは、冗談はさておいて、うんとこさあります。けれども、あんまり沢山羅列して言つては、反つて効果が少ないのであろうから、たんだけ言いきかせて置くとしよう。

利人不利己

これを支那風に読めば「りれん、ぶりちい」であつて、これはかの毛沢東さんの言である。日本流に読むと「人を利して己を利せず」である。

諸君、皆さんが何の職業にたずさわられるとも、また何處へ行つてお暮しになろうとも、たとえ自分には損になろうとも、隣人のためを常にはかつておあげなさいませ。
ねえ、わかった。

(昭和57年卒業文集より)

清水安三先生略歴

第五部 牧師・教育者として

- 一八九一年（明治二十四年）六月一日＝滋賀県高島郡新儀村字北畑（現・新旭町）にて出生。
- 一九一〇年四月（一八歳）＝安井川尋常小学校、安曇川高等小学校、滋賀県立第一中学校（のち膳所中学校）を経て、同志社大学神学部に入学。
- 一九一五年（大正四年）三月＝同志社大学神学部本科卒業。卒論文「トルストイの内面生活」。
- 一二月＝歩兵第九聯隊に一年志願兵として入営。
- 一九一七年（二十五歳）五月＝少尉任官／除隊。神戸出帆、日本組合基督教会宣教師として中国へ。
- 六月＝大連経由、奉天（現・瀋陽）到着
- 一九一八年＝横田美穂（二十四歳）と大連教会にて結婚。
- 一九一九年三月＝北京に移住。大日本支那語同学会に入学。五月り被災児童収容所設置（翌年五月＝解散。一〇月＝その功労に対して、中華民国大統領より受勲）。
- 一九二一年五月二八日（二九歳）＝北京市朝陽門外にて「宗貞平民女子工読学校」を設立（生徒数二四名で発足。二年後、学制改革に基づく私立小学校として政府に登録）。
- 一九二四年七月（三三歳）＝北京出発、大阪教会にて按手礼を受け正牧師となる。
- 八月＝妻と共に横浜出帆、アメリカへ留学。九月＝オベリン大学神学部大学院に入学。
- 一九二六年五月＝オベリン大学卒業、B・D・学位取得。帰国。
- 一九二七年夏＝『基督教世界』誌編集主任
- 一九二八年（昭和三年）二月＝同志社にて大学・予科・女子専門学校講師、中国政治思想史／東洋史／中国史／中国哲学史など担当。野球部長兼任。

第五部 牧師・教育者として

- 一九三二年三月（四〇歳）一同志社大学講師辞職。近江兄弟社北京駐在員に就任。
- 一九三三年一二月妻・美穂（三八歳）召天。
- 一九三六年六月（四五歳）小泉郁子（四三歳）と天津教会にて結婚。
- 一九三七年九月崇貞女子中学（三・三制）を正式設立。
- 一九三七年（昭和一二年）七月七日蘆溝橋事件突発、日中戦争に拡大。
- 一九三九年一月社会事業「愛隣館」開設、館長として運営。三月「崇貞学園」と改称。
- 一九四〇年一月北京発、募金講演旅行へ。南京・上海・台湾を巡遊。
- 一二月末横浜出帆、ハワイ経由アメリカへ（翌年七月北京帰着）。
- 一九四一年（昭和一六年）一二月八日太平洋戦争突発。
- 一九四五年（昭和二〇年）八月一五日日本降伏。一一月中国政府、崇貞学園を接收。
- 一九四六年三月一九日中国から引き揚げ、山口県仙崎港に上陸。三月二二日日東京着。
- 五月五日桜美林学園開校式（高等女学校／英文専攻科として正式認可五月二九日。
- 学園長・清水安三、校長・清水郁子）。
- 一九四七年三月桜美林中学校設立認可。
- 一九四八年三月桜美林高等学校設立認可。
- 一九五〇年三月桜美林短期大学設立認可。学長・清水安三。
- 一九五一年三月北米・南米へ募金講演旅行（一九五三年三月帰国）
- 一九六四年六月二十四日清水郁子、脳溢血により召天（七一歳）。
- 一九六六年一月（七四歳）桜美林大学設立認可。学長・清水安三。
- 一九六八年三月桜美林幼稚園設立。園長・清水安三。六月米国オベリン大学より名誉博士号を授与される。
- 一九七五年五月同志社大学より名誉神学博士号を授与される。
- 一九七八年（昭和六三年）一月一七日急性心不全により召天（九六歳）。

第五部 牧師・教育者として

▽著作目録『支那人と黎明運動』（一九二四年、大阪・大阪屋書店）、『支那当代新人物』（一九二四年、大阪屋書店）、『支那革命史論』（一九二九年、旅順・南滿州教育会）、『支那の人々』（一九三八年、東京・隣友社）、『姑娘の父母』（一九三九年、東京・改造社）、『朝陽門外』（一九三九年、大阪・朝日新聞）、『開拓者の精神』（一九四〇年、隣友社）、『支那の心』（一九四二年、隣友社）、『支那人の魂を掴む』（一九四三年、東京・創造社）、『希望を失わず』（一九四八年、桜美林出版部）、『中江藤樹の研究』（一九四八年、桜美林出版部）、『史料的中江藤樹』（一九六二年、桜美林出版部）、『中江藤樹はキリンタンであった』（一九五九年、桜美林出版部）、『中江藤樹』（一九六七年、東京・東出版K・K）、『桜美林物語』（一九七一年、桜美林出版部）、『北京清譚』（一九七五年、東京・教育出版社）。

参考文献

山崎朋子著『朝陽門外の虹』（二〇〇三年岩波書店）